明治三十七年八月五日發行 毎月一回五日發行
明治三十三年十二月廿五日 第三種郵便物認可

女學世界

第四巻第十號





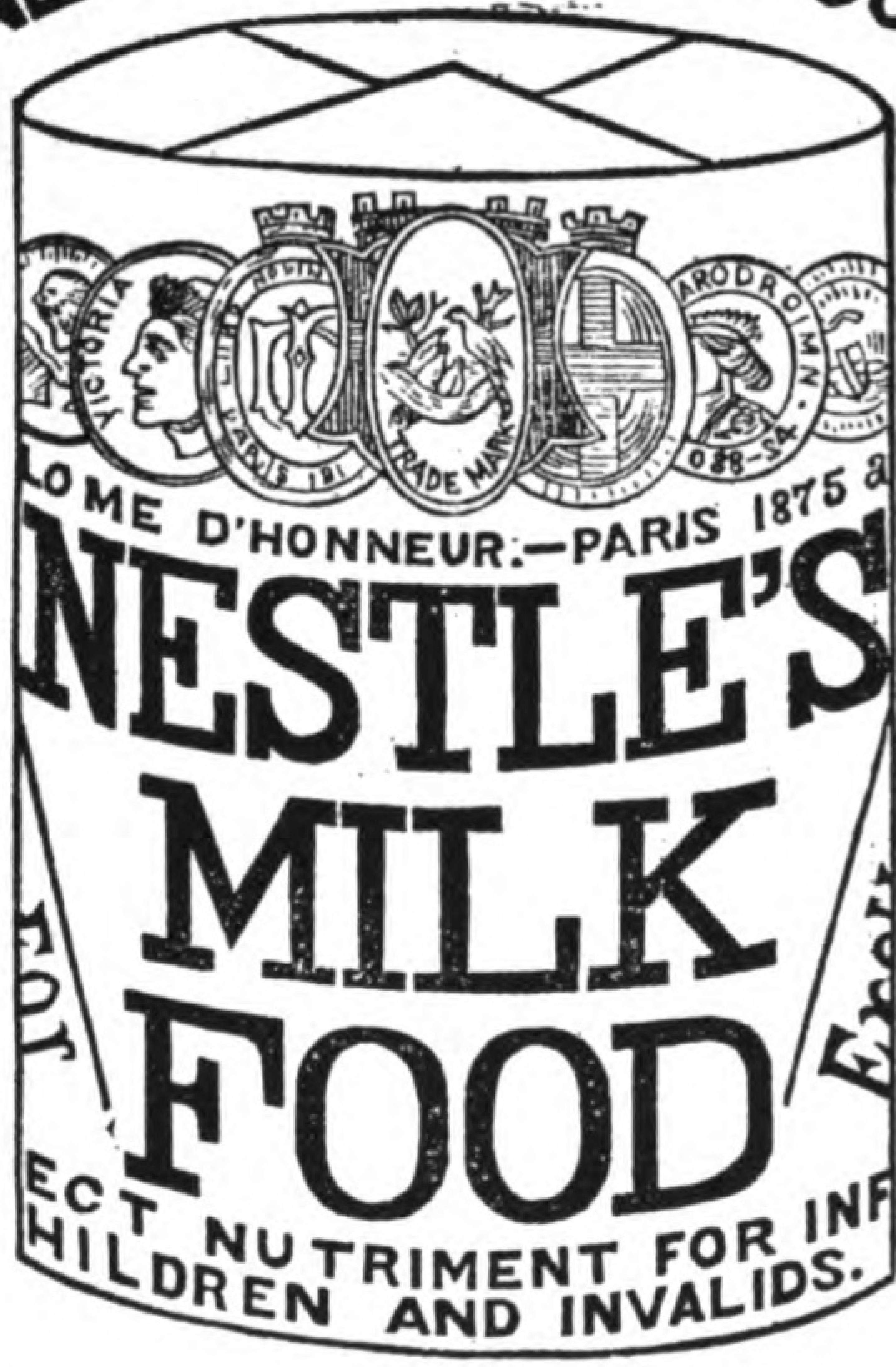
東京日本橋駿河町
三井呉服店
大坂高麗橋三丁目
中元及び暑中の御贈答用
に適當の品々取揃へ申
候外據て御高評を蒙
り候弊店新案の職
捷摸様入手拭、ハン
カチーフ、帛紗、中形
類等續々賣出し申
候間多少に拘はら
ず御用被仰付度
奉願上候

女學世界 第四巻 第拾號 目次

瑞西國ヘンリーネッスル氏製

ミルクフウド

NESTLE'S MILKFOOD



各國帝室御用品

各國醫科大學、大病院、

醫學博士ノ賞讃ヲ忝フス

（全國洋食品店及藥舖にて販賣す）

ミルクフウドは麥精と牛乳との調合になり小兒の骨、筋肉を形成するに欠くべからざる蛋白質、炭化水素を含蓄するが故に營養品として尤も消化し易き完美なる食物なり

ミルクフウドは小兒の生育、病者、虛弱者、老人の食物として他に比類なき良品なり

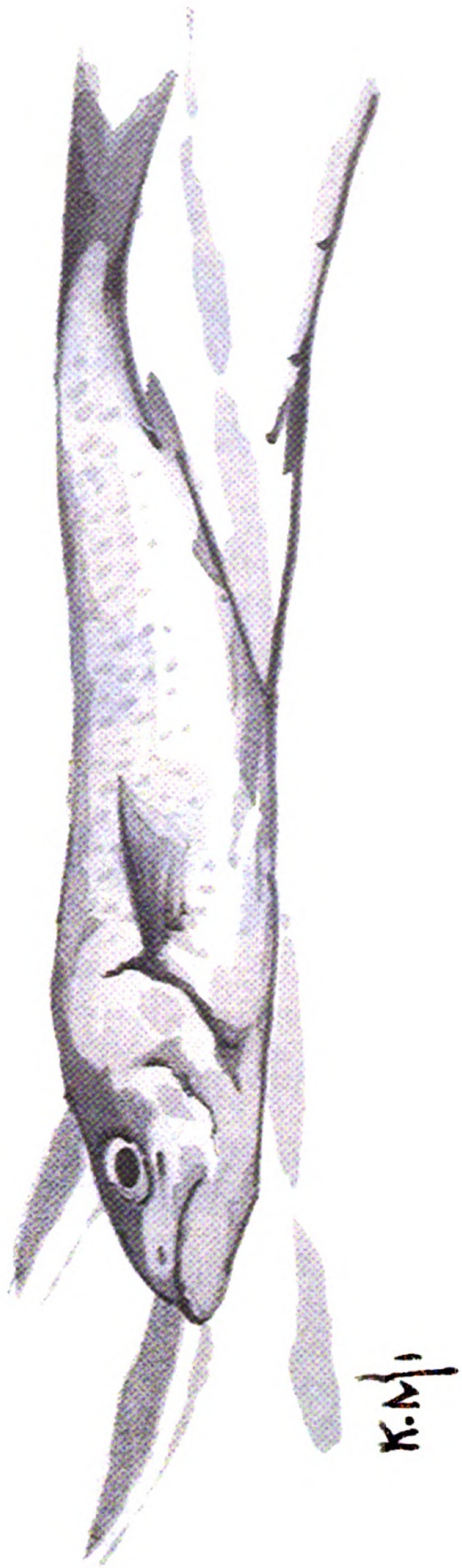
ミルクフウドは完全なる母乳の代用として著名なるものなり殊に母乳の欠乏若くは乳離れの場合に於ては尤も小兒の嗜好に適する最良品なり

湖上の新月

三宅克己氏筆



せいご



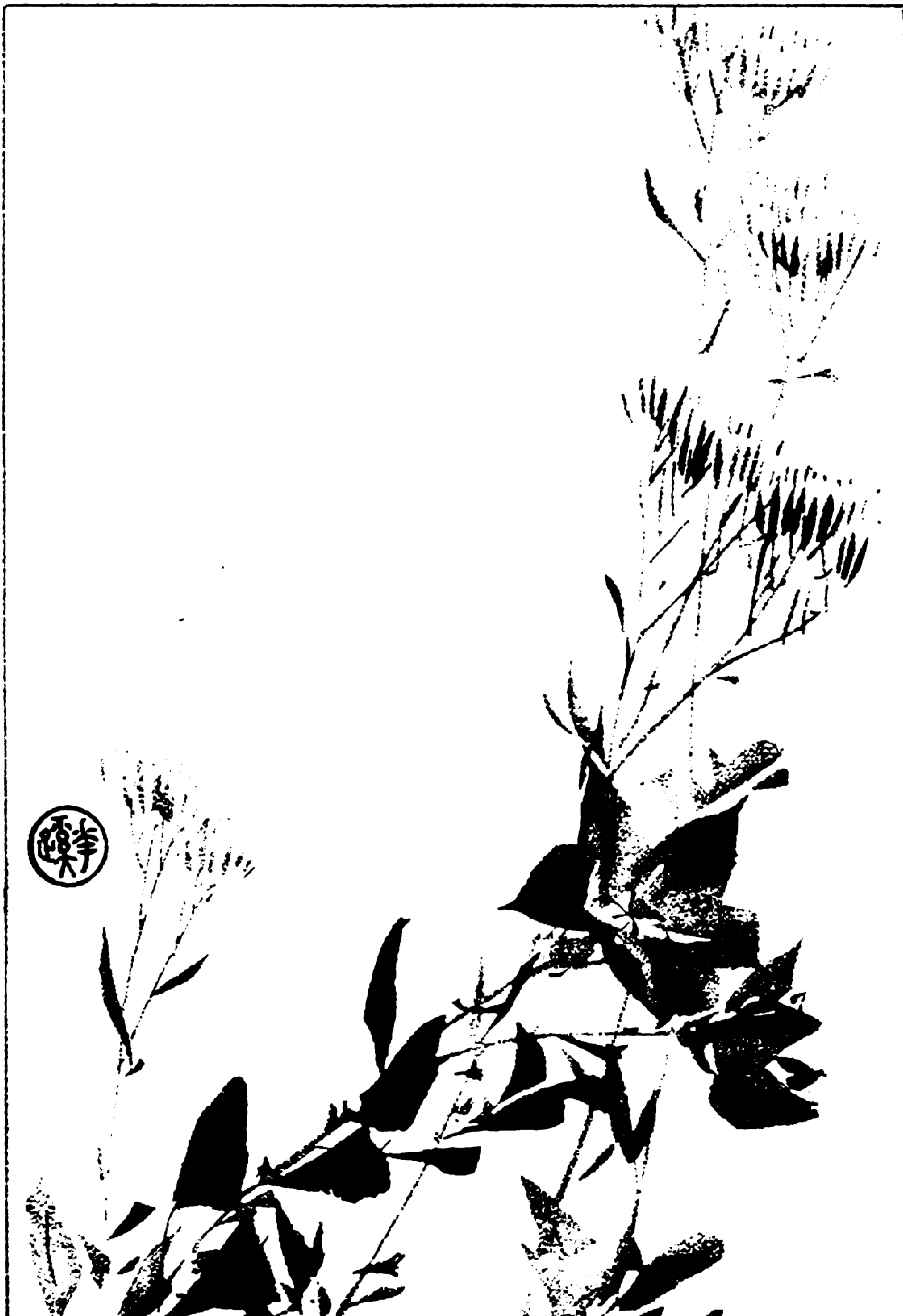
三宅克己氏筆

田家の月

跡見花蹊女史筆



桔梗をみなへし



跡見花蹊女史筆

三宅花圃女史筆

海のよ浦山よりあつさ
たえさけるなかのもしまれいそ
きもあれ金中みちちちる
風さそふ氏路えしそよく
竹思ふ人もり思ひさとるかな

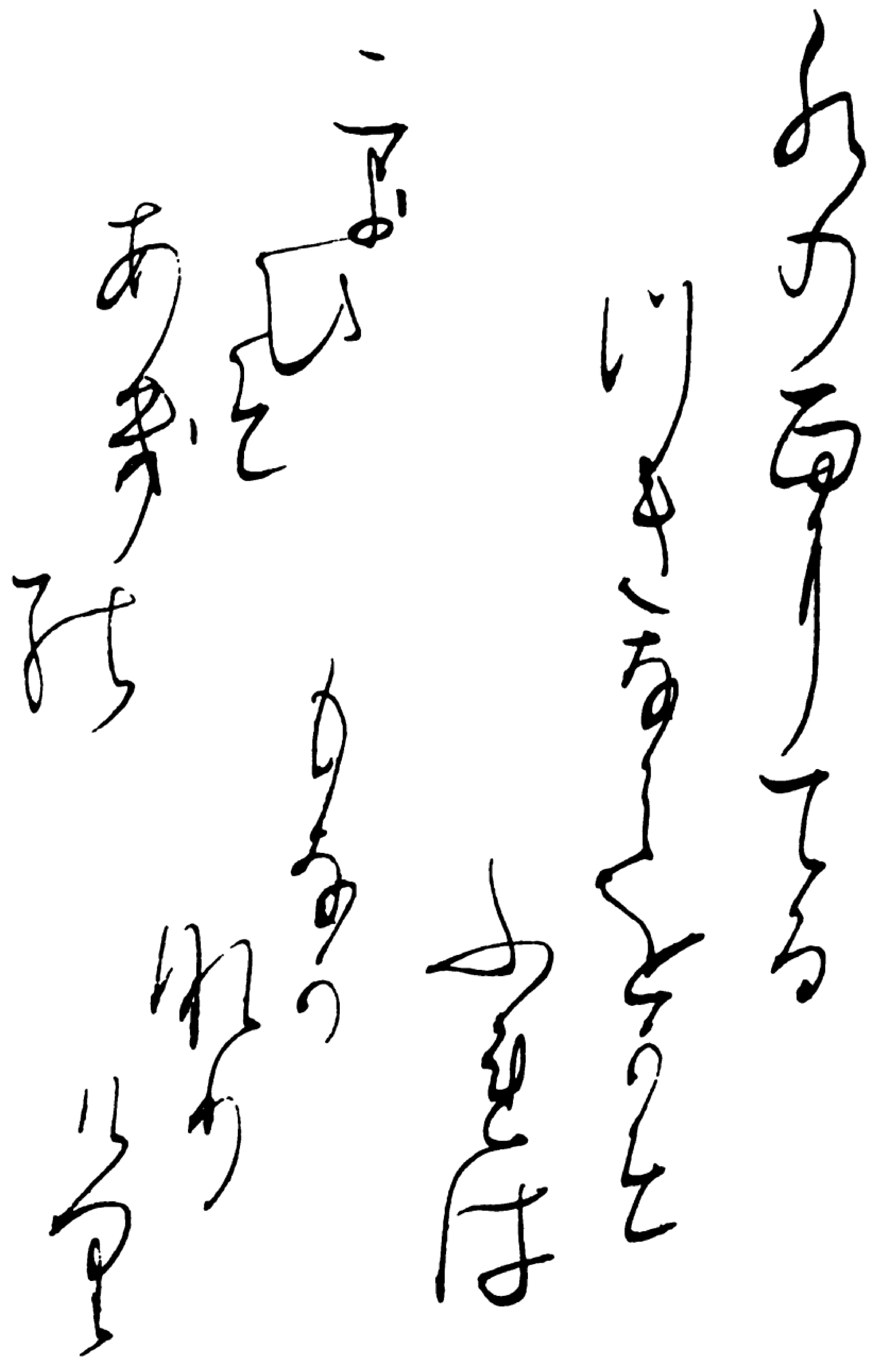
古のひと延不流さとをすてゝなく
こやせぬ葉をしつけれ
あふれ子系ふまのあをさみ
みそらに流れゆくしかれ能
哀敬の教へり　ゝのしこ

跡見花蹊女史筆

鄉淚數行征戍客棹歌一曲釣漁翁

花蹊

跡見花蹊女史筆



文學士大町桂月 文學士久保天隨 大田淳軒 三先生共修

新式いろは引節用辭典

全壹册

洋裝上製美文字入
長方形金本紙數
約千二百ページ
正價 郵稅……未定

字書の讀書家に於るは猶諸器械の工匠に於けるが如く蓋し一日として無かるべからざるものなり是を以て古來學者の良好なる字書を編して世の便益を圖らんとするもの甚だ多し、されど今日に至るまで世に流布せる字書は其數こそ多けれ内容に至りては大同小異にして特に出色のものを見ず、某々の字書出づるに至りて始めて完璧と稱せられき。然ども其書古言を解するもの半に居り且卷册尨大にして携帶に不便なるの憂あり、是に於て本館一種出色の實用的辭書を編纂せんと欲し大町久保大田の三文士に請ひ力を該編纂に專らにせしめ數閲月の後始めて完成を告くるに至る、本書乃ち是なり、書中收むる所は更に數萬言の多きに上り現今社會の普通語として人々の口頭より發するものは邦語と漢語とに論なく、殆んと網羅して遺す所なしといふべし、又其搜索の方も尤も簡便にして字書は總て文部省規定の假名遣ひに倣ひ、覽者をして容易に搜索し得る樣にしたり、蓋し字書中語數最も夥多にして實用に適し携帶に便なるものは本書の右に出つるものなかるべし、且つ本書が實に一の特色とすべきものは欄上に和漢古今の名數を擧けたるにあり、名數の書は世に流布するもの數多ありと雖、完全のもの一もなし本書は實に千餘頁に渉りて東洋西洋の名數に關するものを遺憾なきまでに網羅し盡くしたれば讀者に便益を與ふること實に多大なるべし乞ふ速に一本を座右に備へて眞價のある所を知り給はんことを

類書

青蓋居士編 ●歷史文章皇國字典（全一册和裝）正價金二十二錢 郵稅金四錢

棚橋廣君著 ●新撰漢語字引（全一册和裝）正價金二十五錢 郵稅金二錢

大田淳軒君著 ●新撰歷史字典（全一册和裝）正價金六十錢 郵稅金六錢

大田淳軒君著 ●新撰明治字典（全一册和裝）正價金三十八錢 郵稅金四錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（甲の一）

高等化粧品案内

本品には内務省東京衛生試験所の無鉛無害報告書を貼附せり

佛國製バラ香水入

衛生無鉛 雪おしろい

- 煉おしろい（大金五拾錢 小金拾五錢）
- 水おしろい（大金五拾五錢 小金三拾五錢）
- 玉おしろい 金拾錢
- 粉おしろい（大金参拾錢 小金拾貳錢）

●現任警視廳第三部長栗本氏の試驗成蹟に依れば我國無鉛「おしろい」中の優勝者は本品にして大方貴婦人令孃の御定用たる光榮を蒙る。

無鉛 御顔直し雪

美麗なるたとう紙包 金五錢

●本品は四季共に輕便なる「打おしろい」にして懐中用化粧品として欠くべからず夏季には、「汗どめ」「あせをさへ」として頗る好評を得たり

高等化粧水 花

長壜 金三拾五錢
小壜 金拾五錢

●本品は肌を濃かに色を白くし日に焼くるを防ぎ、にきび、ひゞ、あせもを治す其他「おしろい下」としては勿論皮膚病豫防劑として効あり。

束髪用 香油 松風

長壜 金三拾五錢
小壜 金拾五錢

●本品はふけ及垢を去り優美なる艶を生ず且つ毛生液を配劑しあれば拔毛を止め毛髪を養成す日本髪には御くせ直しとして頗る妙なり

（甲の二）

（電話端書の御注文に應し迅速に配達す）

（本品は各地有名な小間物店にあり）

本舗 東京麻布材木町（電新二四一四番） 寶商會

特約大卸賣店 日本橋區通鹽町（電浪二三〇二番） 西澤喜右衛門

●大橋圖書館

晝開館自午前八時至午後五時
夜開館自午後六時至午後九時

三大節及毎月末日ハ休館ス

麹町上六番町四十三番



專賣特許 安全剃刀

甲 壹圓五十錢 替刃付箱納
乙 壹圓紙函納
丙 五十錢

最新發明ノ特許品柄ノ先ニ車ト子ジアリ自在ニ回轉ス耳鼻穴ノ外ヘ思フ儘ニ剃レ小兒ノ頭チ剃ルニハ至極妙陸海軍人海員海外移住者ニハ是非必要ノ品ナリ

東京日本橋本石町四、十
發賣元 三劍商店

●圖書總目錄

御入用の御方は往復端書にて御申込あれ早速送本可仕候最近の總目錄は七月末の調査にして近刊の圖書は悉皆掲載せり

東京日本橋區本町三丁目 博文館小賣部

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治する故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵券封入にて御照會あれ

千葉縣安房國北條町
川名助次郎

日用百科全書

博文館編輯局編纂（第三十七編）

官立私立諸學校 改訂就學案内

全壹册洋裝中版
正價金貳拾五錢 郵税金六錢

笈を負ふて都門に遊學せんとする學生諸君に對し多岐なる學界の手引たらんとする案内書の少なからざるも學界の趨勢學校の規則方針等は時に變化あるを以て往々にして舊時の規則狀況等を錄して誤謬を傳ふるものあり此書は最近學界の趨勢に見て遊學者出京前後の注意、學校の撰擇、入學成功の訣、卒業後處世上の方針等を懇切に指導し又遍ねく官私の諸學校を摘録し各校の狀況規則學課等より入學試驗問題に至る迄盡く最近のものを收錄したれば現下の遊學者に取りて無上の案内書たり……

發兌元 東京本町 博文館

（甲の三）

(甲の四)

女夫波

萬朝報記者 田口掬汀氏著



口繪鏑木清方氏　表紙平福百穗氏

前編既刊 クロース製最美本 定價一冊六十錢（郵税不要）

鎖夏の絶好讀物!!

高尚清新の家庭小説

明治文學の精華を觀んとする者は此書を讀め●良妻賢夫たらんと欲する者は此書を讀め●高尚なる生活の意義を知らんとする者は此書を讀め●上流社會の眞相を窺はんとする者は此書を讀め●此書は以上の者に對して十分の滿足を得せしむる家庭小説なり

東京本郷區彌生町三 **金色社**

大賣捌　東京堂 上田屋　北隆館 東海堂

●**女學世界**は有力なる女學雜誌にして發行部數は數万に上る隨て廣告の效力も著しければ實業家諸君は遺憾なく利用あらんことを望む

博文館廣告部

御寫眞券の賣出
輕便にして美麗
目下屈竟の進物
團体紀念寫割引
九段佐藤寫眞館

金澤巖君著（袖珍本）

通俗治療救急法（第五版）

正價金貳拾五錢　郵税四錢

本書は衣服住居婚姻育兒防疫等の一般衛生より諸病治療法看病法及び藥品調製法急病頓死過傷等の救護法溫泉海水浴轉地療養其他に心得べき百般の衛生醫藥に關する事項を細大漏す所なく詳細に記載し且文章平易にして通俗を旨としたれば何人と雖常に一本を備ふべきものなり

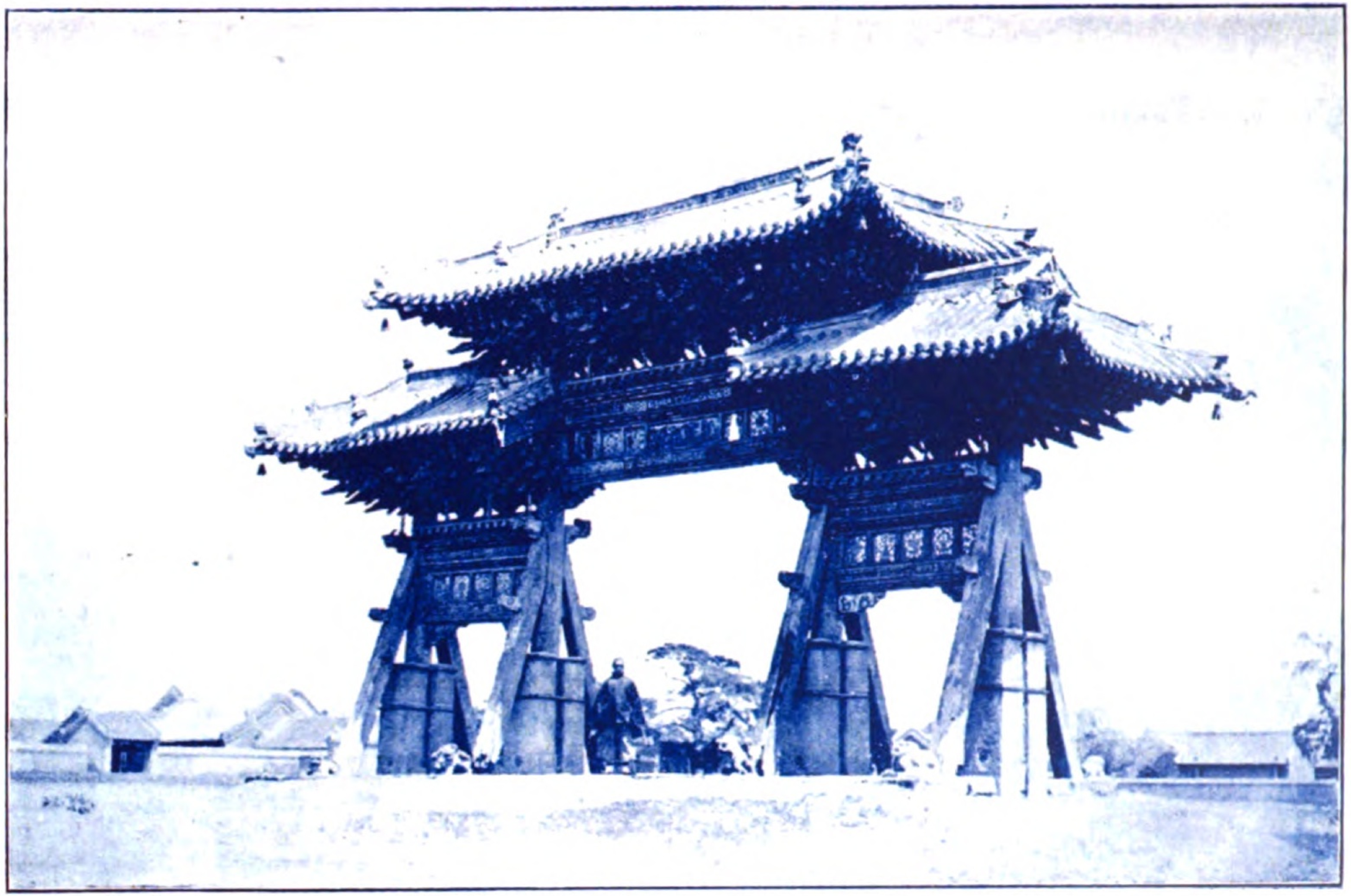
發兌元博文館

（甲の五）

（甲の六）

滿洲偉觀

(奉天府城內彫刻門)



(博進社工場印行)

軍人家庭（一）

坂井陸軍中將の家庭



軍人家庭（二）

石本陸軍少將の家庭



大島師團長の令孃秀子



軍人家庭（三）

寺垣海軍大佐の家庭



日本庭園の圖



1本館　2眺望亭　3賣店　4金閣　5臺灣館　6茶器陳列所　7アヅマ屋　8事務局

（世界大博覽會記事參照）

セントルイス市中の光景



(世界大博覧會記事參照)

前橋明治裁縫學校



（乙の一）

江見水蔭君新著　富田秋香君口繪揮毫

軍事小説

進軍の巻

全壹册

洋裝菊判書表紙
美本紙數約二百五十有餘頁
正價郵税未定

武裝の巻に大喝采を博せる**著者**は更に後備隊として**進軍の巻**に筆を進めり**軍國の詩編**として誦するに足るのみか**後世戰史**を編するに際して**多大の資料**を供給するに餘りあるべし**戰爭の裏面**を窺はんとする人よ**新聞雜誌以外**に軍人の活動を知らんとする人は**須く讀むべし!!!**

巻中目次大要

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(乙の二)

農業教科書新刊

農學博士稲垣乙丙君　西郷政治郎君共著

續農學階梯

下巻　洋装總クロース金字入

正價　金七十五錢

郵税　金十二錢

晩近農業書の刊行頗る多しと雖、單に教科書の用に供するか或は各部專門的記述に止まり特に農業教育家の參考に資すべき目的を以て編述したるものなきは頗る遺憾とする處なり稲垣農學博士夙に玆に見る所あり、曩に農學楷梯を著はし、之れを世に公にするや好評嘖々斯界の歡迎を受けたること頗る大なり、本書は即ち其續編にして上巻には穀菜蒭草工藝作物の記述をなせしが今此下巻に於ては果樹、林樹、養畜、養蠶、養蜂、養魚等を網羅し、縱横反覆之が解説を下せり、由來栽培の術、育畜の法各地風土の異なるに從ひ、頗る趣を異にし、巧に取捨折衷を加へて各地に適應せしめんこと頗る難事たり、本著者各多年斯學教授の任に當り造詣頗る深く、取捨撰擇、最も宜しきを得、加ふるに序次整然、記述懇到、眞に近來の好著なり而して本書の應用は獨り參考書たるに止まらず、又以て師範學校、中學校、農學校、蠶業學校等の教科書として適好なるべし、且農家座右の寶典として缺くべからざるの書たり若し夫れ稲垣博士著農學入門を以て教科書とし此書を教師諸君の參考に資せば眞に本書の應用として完全なるものといふべし。

類書

稲垣農學博士著 ●農學楷梯（全壹冊 洋装）正價 金七十五錢 郵税 金十二錢

稲垣農學博士著 ●農學入門（全壹冊 洋装）正價 金三十五錢 郵税 金八錢

横井農學博士著 ●農業讀本（全二冊 洋装）正價 各金四十錢 郵税 各四錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（乙の四）

中學課程 數學講義錄

七月二十八日發行　主筆竹貫登代多君　每月一回二十八日發行 一年卒業

算術及三角（第三號）

第壹學年　課程 小數の乗法と問題………　解義 問題第一より第九………
第貳學年　課程 比例雜問………　解義 問題第三、上下………
第五學年　課程 直數表と其問題………　解義 問題第四………
補習科　課程 諸試驗を以て之に代ふ………　解義 次號に讓る………

●最大公約數と最小公倍數に付て　馬込立教中學校教授
●三次方程式の解法に就て……中村＝本中學校教授
●百人一題算術一問……鷲塚福太郎君

代數學（第三號）

第貳學年　課程 法則と負數と其問題………　解義 問題第三の續き、第四………
第三學年　課程 聯立一次方程式と問題………　解義 問題第二………
第四學年　課程 無理式と問題………　解義 問題第一乙の續き、第二、第三、第四
補習科　課程 諸試驗を以て之に代ふ………　解義 問題第二………

●重二次方程式に就て……山下成城中學校教授
●極大極小に就て……一柳＝本中學校教授
●百人一題順列一問……江澤鼎次郎君

幾何學（第三號）

第三學年　課程 三角形の定理と問題………　解義 問題第二………
第四學年　課程 等積の定理と問題………　解義 問題第一の續き………
第五學年　課程 比例應用作圖題と問題………　解義 問題第一の續き………
補習科　課程 諸試驗を以て之に代ふ………　解義 問題第一の續き………

●作圖題一問……小林淨土宗中學校教授
●球体幾何……田中攻玉舍中學校教授
●百人一題幾何學一問……稲垣四郎君

試驗問題

水產講習所入學試驗問題（數學）
商船學校豫備試驗問題（代數、三角、解義）
同校無試驗入學志願者選拔試驗問題（數學解義）
學事彙報

問題募集

▲好きな題
▲嫌いな題
前記の見出の下に其問題を書く寄稿はがきにてもよし

正價

各種共一冊 金拾錢宛
三ヶ月分 金貳拾九錢宛
六ヶ月分 金五拾七錢宛
一ヶ年分 金壹圓拾錢宛
▲外に郵稅每冊壹錢宛

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（乙の五）

古今無比
最新良劑

婦人藥

發見せり
効顯偉大

●多年の血の道も一週の服藥にて確効あり故に發賣日淺きも禮狀山の如し

此藥は世にありふれたる一時的の氣安め藥と違ひ効顯確實なる最新良劑なれば

無効返金を保證す



主治摘要
○血の道ゟ來る諸症
○子宮病○産前産後
○赤帶下○月經困難
○逆上○頭痛○眩暈
○腰痛○冷感○貧血
○衰弱○神經性諸症

定價	
一日分	金八錢
三日分	金二十錢
一週間分	金四十五錢
三週間分	金壹圓廿五錢
五週間分	金二圓

●郵送料 七日分迄は一個金貳錢 三週分以上一個金四錢

本舖 內外藥品賣藥 化粧品問屋 合資會社 博愛堂藥店

東京市日本橋區本石町三丁目十八番地

電話本局二百八十六番電信略號〇ハク

○取次 各地至る所の藥店にあり

(乙の七)

阪本隆哉君著

衛生食物調理法

彩色口繪 料理調進の圖……(小峯大羽君筆)

(乙の八)

全壹冊

和裝菊判
製本出來
正價金三拾錢
郵税金六錢

本書内容

(一)調理に就ての心得(二)金と時間の經濟(三)器具(四)色素類(五)飲料水(六)中毒(七)魚、鳥、米、野菜の鑑別(八)調理の方法(九)香味料と嗜好品(十)庖刀の切り方(十一)食物調理の便宜方法(十二)出し汁(十三)注け酢、注け醬油、注け酒、附味噌、混味噌の製法(十四)刺肉及膾類(十五)汁類(十六)羹物及蒸物類(十七)煮物類(十八)炙物類(十九)和物類(二十)浸物拵樣(二十一)揚物の仕方(二十二)鮨の製法(二十三)寄せ物類及蒲鉾、はんぺん、しんじょ(二十四)調理雜集(二十五)人体營養の事(二十六)食物の消化吸收の事(二十七)小兒營養の事……

本書は從來の料理法より其衛生に叶ひたるものを撰擇し其調理法を最も平易に述べたり故に日常の膳椀に上るべき食物も此書によりて調理すれば滋味多くして人体を加養すべし例へば章魚は皮を去り奴豆腐は沸湯を注ぐなど其外野菜の洗方切り方煮又は炙り方食物の着色中毒物又は飲料水の選び方器具の清潔小兒の食物など逐一説き示したり家庭衛生として日用料理の師冊として各家是非一本を備へらるゝの必要あることを知るべし。

類書

藤本藤蔭君著 **實用料理法** (全壹冊洋裝) 正價金二十五錢 郵税金六錢

佐々木孝君著 **西洋料理法** (全壹冊洋裝) 正價金二十五錢 郵税金六錢

下田歌子君著 **料理手引草** (全壹冊和裝) 正價金三十五錢 郵税金八錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館



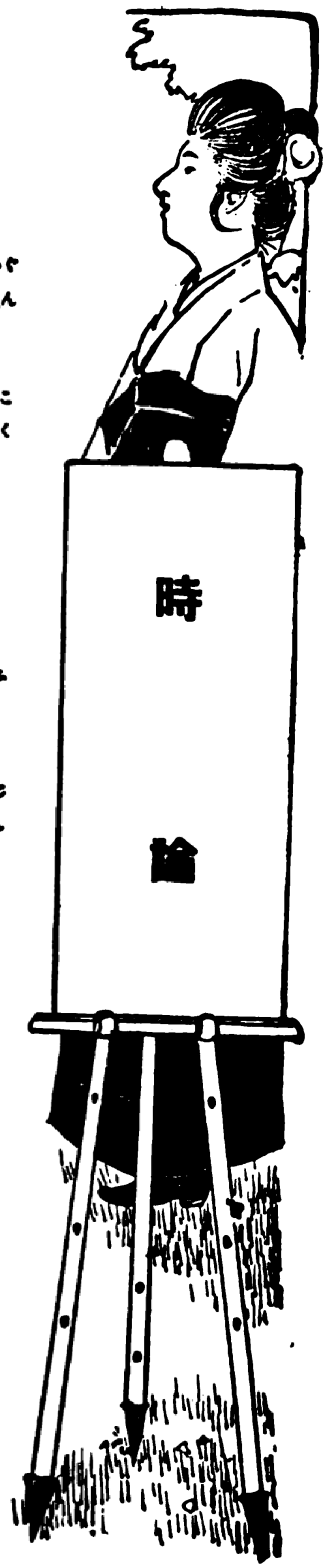
女學世界



第四巻第十號

心の避暑

朝夙く起き出でゝ、太陽の出でぬさきに、冷水にて口そゝぎ顔あらひ手足など打きよめて樹木しげれる公園など散歩する心地よさ、きれいに掃き清められたる庭に面し、開豁にあけ放たれし室に入り、机の前に坐して旭に輝く青葉山を見る氣持よさ、時に會心の友を呼び時に好める書をひもどき、靜かに世上の有様を語り、徐ろに學海の人となる愉快さ、若し夫れ旭日三竿に上り、炎威壖へ難きに及べば、崖を上り川に沿ひ、時に樹間に憩ひ、時に清流に枕して徐ろに涼風に浴し、徐ろに青山白雲の去來するを眺むその氣樂さは封侯萬戸の威も、金衣玉欄の樂もいづくんぞ如かん、夏を樂しむものは眞に自然の寵兒なり、一年三百六十日世帶の塵事に營々し、家事の煩累に役せらるゝ婦人も時に塵事を忘れ、煩累を脫してこの如く天然の寵兒となり無垢の小兒となる又神氣變轉の一作用にして人間の健康に益する處大なりといふべし。



軍國の婦人

三輪田眞佐子

今や我が國運の盛衰、國力の消長は一にかゝりてこの時局にありされば日本帝國の國民たるものよしや寝食を忘れんもこの時局を忘んや即ち男女老少共に同心協力して所謂擧國一致の實を表せんことを願はざるはなし。されど文明國には人々各分業あるを以て時局に際するも必ず各自の分業に忠實なるべし是れ取りも直さず國家に忠誠なるものなり、如何となれば國家は永遠の生命を有するもの、戰爭は種々樣々に形を變じて永遠に繼續するものに過ぎざればなり故に國家百年の大計を講ずるは今日即刻の急務なりと知らざるべからず。一時に熱して一時に冷ゆる如きは永遠の道に反くものとこそ知れ、されば軍國多事に際して日本國民たる一半の婦人がつくすべき任務は如何。

第一出征者をして内顧の憂なからしむべし　國家のため万里遠征の途に登る帝國の軍人も偶然明月の夜遙に天の一方を見て故山を思ふの情に堪へざるともあらん、されど家に良妻あり室に賢母ありて毫も内顧の憂なから

んか、死を鴻毛より輕からしむる武士の決心をして益固からしむるを得べし、これ婦人は身戰はずして能く勝を制する妙力を有するものと言はざるべからず。

第二笑つて軍門に夫を送るべし　凡そ人として涙なきものはあらじ、わきて涙を以て生れたる女子にして誰か夫の死を歡ばんや、されど義勇國に報ゆるは國民の本分也、されば軍國の婦人たるものは尊き決心を以て笑つて夫を軍門に送るべし、私情のため袖を引きて千歳の青史を穢すべからず、昔日スパルタ國の武功を立てたるは其の國の教育制度等に由ること多からんも專ら婦人の軍門にその父兄を送る瞬間の態度にありと言ふ過言にあらず。

第三出征者の家族を慰撫すること　わが國民の戰へば必ず勝つ所以のものは戰術にあらず武器にあらず、全く其の精神にあり、されば時局に處する婦人の天職は出征者の家族を慰撫してこれに滿腔の同情を表すべし。

第四勤儉　戰は精神に由りて勝たんもこれを補助するものは財貨なり、元來財貨は能く貯蓄せんために貯蓄せずして万一の秋に於て能く消費せんために貯蓄するものなり故に今後國民たるものは勤と儉との二道に由りて軍國の基を作らざるべからず、即ち婦人たるものは無爲に衣食するなく上下各々應分の勞役をつとめ、富國の實を擧げざるべからず、これと同時に冗費を省き、節約を行ひ、奢侈の習慣を棄てざるべからず、思ふに人に依賴する心を有つものは、おのづから其の行卑劣なるべし、眞に獨立にして獨行の人こそ尊けれ、而して斯る尊き人とならん道は勤儉をつとむるの外になし。

第五健全なる國民たれ　身体の健全なる國民は個人として最も幸福なるのみならず其生產力おのづから强きを以て殖產工業の上に於て大に見るべきものあり尙我が國民は忠勇世界に比なきは近時の戰史に於て明なるも外人に比して体の弱小なるは事實なり、されば今後は益々婦人をして体育に注意せしめざるべからず。

第六世界的日本婦人たれ　わが國民の世界万國と交通する淵源は遠しと雖も直接友邦として諸國と相交るに至りたるは近年の事なりされど今後戰爭の結果單に東洋の一孤島としてよりも世界の日本として認めらるゝべし故に今後の婦人は世界の日本婦人として活動するの必要あり。

第七平和の化身たれ　ナイチンゲール孃一度クリミヤ戰爭に愛の涙を注ぎしより忽ち万國赤十字社の博愛的事業を起すに至る、今日帝國軍人の滿州の野に戰ふ所以は屍の山を築かんためにあらず、血の池を穿たんためにあらず、涙を揮つて義のため、人道のため、干戈を交ゆるのみ、されば彼敵にして前非を悔い以て我が軍門に降らば忽ち平和は回復せらるべし、されど頑迷なる彼等は自ら平和を口にしながら平和の實を擧げさるを以て我等は進みて彼等に博愛と平和の何たるかを知らしめざるべからず、これ今度日本婦人の新に執るべき事業の地なりと知るべし。

古人曰く文事あるものは必ず武備ありと、されば今日婦人たるものは身を以て平和の化身となる必要ありと雖も徒らに宋襄の仁をなして後世の笑を遺さゞるこそ肝要なれ、思ふに平和は未來永遠の目的なりと言ふも一朝一夕に實現せられざるを以て、軍國の婦人たるもの其の任務を盡さんこと難しと言ふべし。

戰時の衣食住

醫學博士　高木兼寛

赤十字事業が、社會、人類に及ぼす所の影響の偉大なる事は、改めて謂ふ迄もないが、我邦の赤十字が、今

日の如く世界無比の發達をして、十分の成蹟を擧ぐるに至つたに就て、之れが我邦の社會に及ぼした影響、結果は如何といふに、この事業が我邦に起つて以來、國民の身躰、精神の健康に對して與へた影響は、實に非常なものである。

赤十字事業が、我が國民の身躰、精神の健康に及ぼした最も著しきものは看護婦の養成である、抑も我邦に於ける看護婦の養成は、明治十五六年頃に於て、發議されたものであるが、實際に之れが養成に着手したのは、其後數年を經てからであつて、今日から數へて見れば、僅か二十年の星霜しか經て居らぬのである、初め東京に、西京に、其他各樞要の地に於て、看護婦の養成所を設け、一般の需要に應ぜんとしたが、なか〳〵難事であつた、その中に各地方に支部が出來て隨つて事業の普及するに從ひ、看護婦を養成して、其卒業生を以て救護班を組織するに至つた、之れで日本全國に、澤山に看護婦が出來たのである、この赤十字社より出でた所の看護婦が、社會の病者、傷者に對して盡した功績は偉大なものであつて、社會一般が爲めに非常の利益を蒙つたとは、著しき事實である、一体病者に對しては、たとへ如何に醫者が上手で、診斷、治療の方法が確實十分であつても、看護が下手では駄目である、病者に對しての看護如何は、實に重大なる關係を有つて居るのである、然るに未だ此赤十字社の看護婦が養成されず、各地方に配置されなかつた以前は、この看護が不完全であつた爲めに、ドノ位不利益を蒙つたか知れない、然るに赤十字社の看護婦が全國に普及してから、病者に對する看護の大切なることを知悉せしめ、同時に看護の事は、啻に看護婦にのみ頼るのみならず、一般に之れを知つて置かなければならぬといふことになつた、又特志看護婦會なるものが起つて、上下一般、看護の事の必要を認め、今や看護といふ事は、天下一般の事業と認められて來たのである、之れが爲めに我が國民の身体に及ぼした影響は非常なものであらう。

嘗に身体のみならず、いろ〳〵の事の上に及ぼして居るが、先づ第一に衣服に及ぼした點も大なるものである、思ふに我が邦をして、世界の列强と同等の地位に上らしむるには、衣食住の三者を改良發達せしめなければならぬ、而して身体を健全にし、身体を健全にして精神を健全にし、而して國家の健全を期せなければならぬのである、此點に就ても、赤十字事業は大なる影響を及ぼして居る、先づ衣服の點からいへば、赤十字事業は、我が國民の衣服の改良を促して居る、ソレは孰れの看護婦を見ても、タスキ掛けをして居る者は一人もない、皆な筒袖を着て居る、長い袖などをブラ〳〵さして居ない、キチンと筒袖で働きよいやうにして居る、之れを以て見ても、必要なる仕事、働きをするには、從來の長袖では不可ぬといふことを知らしめたのである、斯くの如く日夜業務に從事する、殊に忙しく從事するものは從來の長袖で、大きな幅の帶（丸で臨月のやうな腹をして）では働きが出來ぬといふことを明かに示してゐる、されば赤十字社の看護婦によりて、我が國民の衣服が、働くのに不適當であつて、筒袖の衣服、簡便なる衣服が適切であるといふことを示した功績は偉大なるものと謂はなければならぬ。先年來、衣服改良といふことは、大分世間に唱へられて、之れに盡力された人々も多かつたけれども、今日では其勢が衰へて、また餘り熱心でなくなつたのは、非常に悲しむべきことだが、併し結果は必ずしも全然空しきにあらず、段々幅の狹い帶を〆め、袖を縮め、袴をつける樣になつたから、退歩したのではなく進歩はして居るのであるが、しかし此等の改良服は、すべての社會、階級に行はれずして、僅かに女學校にのみ行はれ、今日では全く學校服となつて仕舞つた樣で、學校に居る時分は此等の服裝をして居るがイザ學校を卒業して奧樣になると廢めて仕舞つて、また長い袖を着、幅の廣い帶を〆めて、身體の發育を害し動作の自由を妨げ自から窮屈の服裝をする、甚だ殘念である、さればこれは奧樣になつても、婆さんになつてもやはり、學校服とのみ制限ずして、社會一般、いづれの階級に於てもやつて貰いたいのである、しかし現に

角、今日多少ながら改良の服裝を見るに至つたのは、赤十字事業の影響であつて、赤十字社は、全國に渡つて居るから、上下一般をして、次第に服裝の改良を促し、變化を爲さしめ來ると思ふ。で、赤十字社が發達すればする程、改良が進歩するのである。

既に服裝の改良が出來れば、身體が健全になり、身體が健全になれば、擧動が活潑になる、擧動が活潑になれば、身體の健全を維持することが出來る、で、改良といふことは學問の上からでは、なか〳〵出來難い、理屈からでは實行が出來難い、實際の上から、事實の上からでなければ不可ない、學校で何といつても、之れは所謂疊の上の水練だから、奧樣になれば廢めて仕舞ふ樣になる、然るに赤十字社は、實際の必要なのだから、ドーしても筒袖でなければならぬのであるから、赤十字社の進む所には、衣服の進歩が伴ふといふことが出來るのである。

この戰爭は、必ず日本が勝つに相違ないが、勝つは勝つても永久に之れが名譽を保つには、國民の身體が健全でなければならぬ、健全にして大に働き大に列强と力を角せねばならぬ、一體衣服の必要は、寒くないやう醜くないやうにといふのであるが、又一方には身體の發育、動作の上に注意をしなければならぬのである、今日我邦の裁縫術によると、唯羽織はコー縫ひ、衣物はアー縫ひ、コーすれば切れが要らないとかいふやうな事に止まつて、經濟の點からいへば、或は感心すべきことか知れぬが、衣服は必ずしも經濟を基礎とすべきものではない、身體の動作は如何、身體の發育は如何といふ點に大に注意しなくてはならない。要するに衣服は、身體の動作、發育に適し、而して寒さを凌ぎ、醜きを蔽ふ樣にしなければならぬ、然るに今日の裁縫術の點に於て大に不注意であると思ふ。

第一、袖が四角では、充分に手の働きが出來ない、こゝに於てかタスキが要る、このタスキが一本一錢づゝ

としても、日本の人口四千五百萬とすれば、四十五万圓だから、これを節減した許りでも大きな經濟である故に經濟の點から考へて見ても、甚だ忌むべきものである、然るに赤十字社が之れを實行して行く、戰場に往つて御覽んなさい、タスキ掛けの救護班は一人もない、世界中タスキ掛けの國民は、日本を措いて他には決してないのである、又帶に至つては更らに恐ろしいもので、日本の婦人の帶代ばかり二億圓かゝる、一師團の兵を一ケ年間戰はせる費用を要して居る、而も此帶が樂かといふと、非常な苦しみ、大阪博覽會で、七百圓する帶の片側があつたといふが、ソーいふ帶を〆めて客にでも行つたら、なか〳〵苦しい、傍から見て居てもなかなか苦しさうである、で、コーいふ客を迎へる家では、大事の客だといふので、數日前から之れが接待の工夫をして、いろ〳〵料理や何かを調へて置くと、客の方では大きな帶で大弱り、なか〳〵ソンなものを召しあがる所ではない、丸で妊娠のやうに肩で息をしながら、ウン〳〵いつて居るといふ始末、若し之れが男子ならば宴會でもあると、さア袴を取れ、羽織を脱げあぐらをおかきなさいとも云ふのであるが、女子に向つて帶をおときなさいとは云はれぬではありませんか、斯くの如き次第であるから、衣服の改良は一時の流行策ではない之れを赤十字社でやつて來れるから、赤十字社の事業は、大に我が國民の身体の爲めに大なる利益、影響を與へて與れるものと謂はなければならぬ。

次には食物である、一般の人は、只食ひさへすれば可いものと思つて居るが、決してさうでない、衣服の仕立て方と同じことで、身体の營養、發育に必要なるものであるから、身体にツリ合ふ樣にしなければならぬ、今日まで私共もいろ〳〵食物に就て、衛生の注意や、改良の奬勵をしたが、今だに分らぬ樣である、其結果としては、世の中に病氣が澤山ある、一体人間は、病氣をするのは間違ひ、病氣はせぬものである、然るにソレをするのは之れは皆な飮食物より來るのである、然るに赤十字社の看護婦が全國に普及してあるので、今や追々

之れに注意する樣になつて來た、之れも又赤十字社の賜物である、先づ看護婦が地方へ行つて、戸々別々に、食物はコーなくてはならん、病氣の時はコー、平時はアーといふ樣に、衞生上の注意をし、敎授をする、彼等に六ケしい衞生學や病理學を說いたところで分らない、之れを實際の上に敎へるから覺えが宜い、分りが早いのである、此の食物に就ては、赤十字社の看護婦は、大なる傳道者であると謂はなければならぬ。

次は住所であります、疊の上に坐る、寐るといふ風俗、これは甚だ宜しくない、疊は惡魔の棲家である、試みに疊を取つて御覽んなさい、ゴミが一ぱいである、バイキンが澤山居る、そのバイキンは悉く病魔の媒介者である、疊の上に眠るのは、恰も賊の忍んで居る上に寐るやうなものである、油斷をすると生命を取られる、一体疊などいふものは、朝鮮の寐胡坐であつて、板敷の上へ夜寐る時に敷くのである、ソレを日本では敷き詰めるので、板の代りになつて居る、之れを廢して居るのは醫學上で、第一に病院、赤十字社を御覽なさい、皆寐臺を用ひて居る、下は板敷若くは絨緞を用ひて居る、看護婦は必ず腰掛けを用ひて居る、疊の上で坐つたり立つたりして居ては活潑な働きは出來ない。

かく衣食住改良の先鋒隊は赤十字社が大なる働きをなして居るのである、故に赤十字事業は、日本全國、隅から隅まで行き渡る樣にしたいものであります。

時局と日本婦人

立敎女學校長　小林彥五郎

斯の戰局は間接に婦人をして能く社會に接觸せしむ、蓋し今日迄の日本婦人は其狹隘なる道德と、之に據り

て作られたる歴史的悪慣習との拘束する處となり、深閨の中に籠居して社會に接觸するの機甚だ少く從て婦人の爲せる社會的事業とては辛じて指を屈するに止りしが、今回の戰爭は直接に婦人を刺戟し或は出征家族を慰問し或は有志看護婦會を組織して軍國の急に應ずる者續出し、現に東京市に於ては上流貴婦人の團集より成れる遺族救護會あり、京橋戰時婦人會あり、其他樓指すれば正に二十有餘に達せりこれ如何に時局が婦人の活動を要求し婦人も亦た其要求に應じて奮起して之に赴けるかを想見するに難らず、殊に京橋戰時婦人會の如き其會員は夙夜出征者の家族を慰問して老幼を慰め病者をいたはり、財政の事情にも立入りて極力遠征者をして後顧の憂なからしめんとするは誠に得難きの美事と云ふべし、啻に是等團體の名によりて爲されつゝある事業のみに止らず、某子爵夫人の如き單身市內の貧民窟に赴きて懇ろに出征者家族を訪問し溫言之を慰め之を勞はり各々若干の金品を寄贈し同時に刺を遺して必要に際しては事の大小を問はず、其住宅に於て相談に應ずべしとの旨を傳へて引取りたれば、元來敎育の素養無き貧民等も痛く其の同情に感激して不知不識暗涙に咽びたりと云ふ、想ふに斯の如き出來事は今日迄は未だ曾て耳にせざりし事、否耳にし得たりし事にて偶々此の時局が動機となりて宿昔の遺憾を一掃せる者と謂ふべし、更に戰捷後の婦人の位地に想到すれば快感言ふべからざるものあり、何ぞや。克捷成るの後我國民は世局の進運と積年の進步的國是とに從ひ或は滿韓の地に移住し、或は移住せざる迄も之等の地方を舞臺として事業を經營する者の多かるべきは、豫想するに難からず、從て男性者の是等の方面の需要に應ずる者前後相續ぎ其補充者として婦人を要求するに至るべきは自然の數なり、今日迄學殖あり技能ある有爲の婦人にして社會の之を迎へて其能を効さしむるの機會少きが爲め空しく髀肉の嘆を發して年と共に萎縮する者頗る多かりしは多數者の認る事實にして人物經濟の點より之を視るも誠に遺憾の事にてありしが、世機一轉して社會の各局部に婦人の手腕を伸すの地位を生ずるに至らば、直にこの遺憾を一掃し

能く歐米の婦人と對抗して社會の表面に活躍するを得べきに至るは明なり。

時局と女子教育に就ては取立てゝ之と云ふ程の考案も無したゞ學生をして一方に於て遠征將士の勞苦を想像せしめ、一方に於て國民全体が負擔する增税の多大なるを思はしめ、其勤儉貯蓄の念を牢固にし、之を實際に應用せしむるが如きは最も興味ある事なるべし。

要之目今の時局は婦人の位地を高め、社會に活動するの好機を與へ將來に於ては益々其手腕技倆を發揮するの希望あるものなるを以て自重自愛して文明の潮流に後れざらむ事を期すべきなり。

實務教育

裁縫女學校長　戸板關子

今日女子教育の隆盛なることは言ふまでもなきことにて女學校と名の附きたる者に不景氣は無しといふも敢て過言にはあらず。其の校舎の多きと生徒の增加は實に著しきものなり。偖其の學校の性質を問はゞ。以前と變りて。多くは實業的に傾きたるが如し。從來の女子教育は多く普通科なりしが故に。中には文學に志すものもあり。英語を専習する者もありしが。今日は然らず。女子が獨立自營の道として。何か職業を得んとするの志厚く。隨て裁縫造花刺繡等の如き。何にても直ちに女子の職業となる者を敎授する學校の續出を見るに至りしなり。以前に在ては多少高尙なる所ありたれども而かも人の妻として聊か迂遠なる所なきにあらず。今日の者は實際の用を缺くこと寡しと雖ども。其の志や或は陋なりとの誹りなしとも云ふべからず。中庸を得るは勿論難きことなれども。努めて其の志を高尙に養ひ其の手足を實用的に煅煉すること尊要なり。近來は衣食に

事缺かぬ令夫人とも云はるゝ人にして。裁縫を學び。割烹を習ふ者の多くあるは。乃ち皆な之れ必要より起りたる者にて。實に結構のことゝ謂はざるべからず。

抑々我等が此の裁縫學校を興したるは。敢て婦人の仕立屋を多く造らんとにもあらず。又單に裁縫教員を養成せんとするにもあらず。要は唯々普通教育ある淑女に此術を授け。家に在ては良妻と爲り。外に在つては良教師たるを得べき。圓滿なる人物を生み出さんとするに在り。中には頗る高尙なる人は。一言の許に裁縫の術何にかせんと擯斥するもあれど。我が邦が今一層進歩し。分業の法盛んに行はれ。三度の食は皆な料理店より運ばせ。衣服は悉く裁縫師に注文するに至らばイザ知らず。今日の我邦の然かも人の乘りたる車を人が挽く如き此の日本國には。女子に裁縫を教ゆるは最も適當にして亦大に必要なる事なり。

扨一概に裁縫といふ。布を裁ち針と絲とを以て之を縫ふの謂なるべけれども。布帛に種々の品類あり。仕立物製作物に樣々の差別あり。之等を我が意の如く仕立上げんとするは決して容易の業にはあらず。遲くして拙なきは誰も能ふ所なれども。速くして巧みにするが所謂技術の妙なれば。之は一通り二通りも勉强せざるべからず。然るに從來の教授法なる者は。甚だ迂遠にして。二年若くは三年の間研究して尙ほ其の要を悟らず。又裁縫一通りの事に涉るを得ざるが如き者すらあり。されば羽織長着は數十枚を仕立てたれども未た袴の仕立方を知らずと云ふ者なきにあらず。誠に齒痒ゆき次第なり。今日にては渡邊氏及び其他先輩諸氏が研究の結果。新方法を案出して其の術に改良を加へ。盛んに子女を教育せらるゝに至りしは眞に喜ばしき限りなり。自分も亦久しく此道に意を用ゐ嘗て學習せし朴澤流を取捨折衷し。之に自分が多年實驗したる新方法を加へて一の新教授術と爲し、之を以て生徒を教育するに。其の結果頗る良好なるを見る。我が田に水の誹りは固より免かるべからざるも。之れ自分が深く信ずる所なり。猶ほ自分の希望は將來一層此の術を究めて學習の便を得せしむると同時に。又我が校に來れる子女をして圓滿なる道德的發達を得せしめんこと之れなり。

家庭月令

八月──大──月

(一日)武藏氷川祭。(四日)山城北野祭。(八日)立秋、此日より初めて秋となる、敏行朝臣の歌云(秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる)。(十五日)筑前箱崎祭。

(氣　節)　殘暑炎威を振ひて山川草木悉く焦熱す、概れ上旬中に年中の最高溫度を現はすを常とせり、天氣は晴燥にして南風徐ろに至り、概れ平靜なりと雖も、時々雷雨大風の襲來あるを免れず。

(農　事)　蔬菜其他の收穫に忙はし、夏作の草取り、秋蠶飼育、秋作の播種には秋蒔蔘、尾張大根、蕪、牛蒡、玉葱等

(園　藝)　大暑の候なれば別段園藝の手段に及ばず、唯だ打水、灌水のすが〱しからんこそよけれ。

(行　樂)　此月の樂みは露の干ぬまの朝顏見に、月入らぬまの夕凉みに、暑さを洗ふ瀧浴みに、扨ては拂曉濁りに染まぬ蓮花の開く有樣を見に行くも興あるべし、家族打連れての避暑旅行は淸味此上もなく、快は即ち快なりと雖も、樂みは夕顏棚の下にもあるものを、敢て遠くに行くにも及ばざらんか。

(景　勝)　朝顏の名所は東京入谷。蓮の名所は東京不忍池、京都大谷、大阪天王寺。瀧は日光裏見、美濃養老、熊野那智、駿河白糸。秋草にてよきは向島百花園、廣尾笑花園。

(食　品)　蓮めし、いなだの膾酢、ナメ豆の粕漬、すり芋、西瓜、まくわ瓜、但し此期の食品は新鮮なる物を撰び、調理に注意して、苟も腐敗の嫌ありと認むるものに箸を附く可からず。

(日曜日)　七日……十四日……廿一日……廿八日。

軍人家庭

阪井陸軍中將夫人

中村鈴子

夫人春子は舊高知藩士伊藤兵一氏の長女にして安政六年二月の出生なり明治八年を以て今の陸軍中將坂井重季氏に嫁し二男三女を擧ぐ人と爲り寛裕忠實にして故舊に厚く初明の者にも城府を設けず夙に赤十字篤志看護婦會、愛國婦人會等に盡瘁し獻身的に運動するは眞に軍國婦人の模範たるに庶幾し

陸軍士官學校横手の坂を登り切つて、市ケ谷仲之町なる留守師團長坂井中將の御邸に令夫人を訪問致しました。恰も五月雨空の珍らしく霽れて、薫風ソヨ〳〵と面を拂ふ心地好き六月二十六日の朝、檜葉、青桐の列べ植ゑられた庭を伺ひつゝ御玄關へ刺を通じて八疊の應接室へ案内されたのです。此室は前に士官學校、市ケ谷八幡を近景とし、四谷區の東部を中景とし、赤坂、麻布兩區の一部を遠景として居るのですが、お庭先は老松參差枝を交ゆる間に、老梅五六臥龍の趣きを呈し淡黄色に熟した梅の實が三つ四つ新緑の芝生に轉がつて居る側に、小雀が羽搏きしつゝ虫をあざる風情が、何となく四條派寫生畫の趣あり、木槲の大きいのは石の手水鉢と配合好く、亭々たる梧桐と楓樹が御椽に近く立ち列んでありました。床の間に東州生彝と落款した詩の軸を掛け、白い陶製花瓶に黄色の夏菊數枝を挿み、傍床の小さい戸棚に雪白の御戸帳を垂れて瓶子二個を恭しく供へてあるのは、兩陛下の御眞影ならんと推され、一体に雅潔清素な御趣味ある御家と感じました。お小間使が茶菓を運び皮蒲團を勸めなどして『昨日終日出歩きまして小々疲れを休めて居りましたので御待たせ申し上げました』と慇懃に述べ、其退くや直に出で來られし夫人は、御納戸地に白の格子縞の浴衣に、黒繻子と葡萄鼠色の絹縮更紗との晝夜帶を結び、油氣の少い束髪に紅葉の飾りあるピンを挿され、色の白い中高な雙瞼のハッキリとした御顔、チヨット金義齒の微かに露はるゝ尋常な口元に愛嬌溢るゝばか

り、骨格大々として沈鬱の風采は微塵も見えず、御話振りは眞率で快活で對手の心を引き立たせる御方と存じました。夫人は赤十字の徽章を嵌めた銀指環の輝く手先を重ねられて——

▲日々の御出勤

私のやうな昔者は何事も行き屆きませぬが、働くだけで御役に立つ事ならと存じて、不束をも顧みず皆様の御仲間入を致して居ります。ハイ赤十字の方と、此頃又報國婦人會の裁縫の方とて、日曜の外は大抵毎日出て居りますから、家の事は綻び一つ縫ふ暇も御坐いません。併し私のやうな者も斯ういふ際には少しでも御用に立つことを致さなければ濟まないと存じまして……、ハイ此度は皆様御一同が大層な御出精で、御身分の高い御方々も却々御骨を折られて居らつしやい升

▲三角の小包繃帯製造

此製造は六月十九日から始めまして、最初は格別御急ぎでも御坐いませんでしたが、俄に○○個だけと云ふ陸軍省からの御注文で……此頃は却々忙しいので御坐います、毎日午前七時から午後五時迄ですが、皆さん御晝御飯後もゆつくりと御休憩もなさいません、烟草を召しあがる方でもホンの一服吸つて急いで立たれる位です。執務中は必要の言葉の外一切禁じる事として御坐います。

▲消毒嚴重

此製造は消毒が非常に嚴重なので、手は腕の上部まで消毒致し、上草履までも消毒して室に入ります、それほどですから參觀も許しません。この三角の小包繃帯は最初幹事ばかりで致す積りの處、至急にと云ふので幹事以外の會員方も御手傳ひになります。これはテーブルを四板に分けまして、第一板はガーゼを剪いて疊みます、ガーゼはグル〳〵と卷いて鋏を入れ、一時に澤山繃帯が出來るやうに致すのです。第二板は消毒紙へガーゼを包み安全針と共に包むので、此消毒紙は美濃紙へ澁を引いて消毒した物で御坐います。第三板では三角形の布片へ之を入れて安全針と共に四角形に包み、第四板では四角の茶色の布で包み、針で留めて仕

上げます。此包は軍人のポッケトへ入れて置き、戰場で負傷の際、直に自身で繃帶致し安全針で留められる樣に供へたものですから、消毒を嚴重の上にも嚴重に致し、又手早く包を開け得らるゝやうに造るので御坐います。

▲卷軸帶製造

これは大分捗取つて繃帶も溜りましたが、今度の艦の事件で又忙しくなるだらうと存じます。ハイ此方は一時から五時迄で、皆樣却々の御勉强で御坐います。德川樣の御姫樣なぞ實に御熱心で居らつしやいますよ。水曜日には公使の御夫人方なぞ外國貴婦人が四十名ほど繃帶卷に御出でに成り、一心に御盡しに成るのです此時の幹事は何時も大山さんを願ふのですよ。私共は外國語は存せず又御交際の振り合も判りませんから……。矢張り勤務中雜談は致さぬ事にして御坐います

▲報國婦人會

報國婦人會は軍服を仕立てるので御坐います。最初一週間洋服職人を聘んで習ひましたが、當節は皆樣大層御熟練で、速い御方は大抵一日に一着の餘も御仕上げです。仕上げのミシンを掛ける爲めに頼んである職人が追はれて困る位で御坐いますよ。裁縫は充分叮嚀に致し、戰地で直に綻びるやうな事のないやうに注意致しますので、手縫とミシンと兩方で致して居ります。場所で御坐いますか、成るたけ各方面からの中央が皆樣御出掛に便利といふ考で、幸橋内の黑住敎會の家を借り受け裁縫場に定めましたので、先達ても日本新聞社から撮影に參りまして一昨日寫眞が一枚出來て參りました。私なぞ他に何んにも出來ませんが、裁縫のやうな事なら元から働き付けて居りますから、此方へも始終出掛けます。

▲車代節約

會の爲めに出掛けるには、何樣な方でも御歩行の御心掛では御坐いますが、毎日の事ですから左樣ばかりも參りませんし、又雨天の節なぞは據ろなく乘るのですよ。併し乘る時には電車か又は辻車に乘る事に定めましたので、立入つた御話しですが、私共宅から乘り

ますのとは殆ど倍も節倹になりますので、皆様と御相談致し車代を倹約した金を僅少づゝでも積んで恤兵部へ献金致さうと云ふとに定めました。私なぞ別に收入の道もなし、其上随分種々な會に入つて居りますからさう〳〵主人の補助ばかり頼むのも濟まぬと存じて、先ア出來るだけの節約を致さうと心掛けて居ります、近頃は漸と慣れましたが、最初のうちは途中まで下女と一緒に出掛けて、車夫に掛け合つて貰ひました。自身で直を定める時なぞ、車夫の溜つて居る處で多勢から聲を掛けられますと、どぎまぎして可笑しう御坐いました。直を定めて乘つても老人の車夫でゞもあると實に可愛相で、後で増して遣したりなぞ致す事がよく御坐いますよ。電車も込みますと辛う御坐いますので寧そ歩いた方が宜いと存じ大抵歩いて了ひます。私共昔者はキマリが惡いと云ふ感情があつて可けませんが、御身分の高い方でも御若い御方は御手輕で御巧者で居らつしやいますことね。皆様御召物なぞは御搆ひなくホンの御平常の儘で御出席に成り終日熱心の御働で其上往復は御歩行ですから、却々御疲れだらうと存じますが、一同に氣が立つて居ますから、何とも御坐いません、實に此度は一生懸命なので御坐います。

▲遺族救護

遺族の事を思ひますと實に可愛相で耐りませんね、此方を御擔任の御方も一通りの御骨折ちやア御坐いません。彼の千家の奥様が御計畫になつた洗濯の御周旋も却々御世話が焼けるさうです。其方法で御坐いますかあれは軍隊のシャツやヅボンなどの洗濯を遺族の困窮者に致させ、其多寡に拘はらず一日二十五錢づゝ遣るとに定めてありますが、中には洗濯場へ參つても烟草を喫かしたり、雜談したりして怠ける者があつて困るとか云ふ御話もありました。

▲傷病兵の出迎看護

傷病兵が新橋へ着きますと、繃帶の巻替を致しますので、順番に停車場へ出迎へます。傷兵は廣島で一度巻替を致して參るのですが、重傷者は痛がつて巻替を厭がるのを醫者が說聞かして巻替へさせ、又傷口へ探

りを入れたりなぞ致します。肩のところを銃丸で貫かれて居るのなぞ見ると、氣の毒で厭な心地がしましたが、近頃は餘程慣れました。

▲常陸丸遭難遺族

此度の船（陸常丸）の遭難は誠に殘念で御坐いますネ。御遺族方の處へ御悔みに參つても御玄關の敷居を跨ぎ兼ねまして、……何と申し上げて宜しいか、申し上げやうに困る位で御坐います。名譽の御戰死には相違ありませんが、御家族方の御心になれば何樣に御無念で居らつしやるだらうと存じましてネ……。

夫人は話して此處に至られ感極りて御聲も沈み少しく顫はれました。最前より次第に強くなつた東南の風は、颯と一陣松の梢を掠めました。話頭一轉

▲中將の御嗜好

書畫と讀書が何より好きで、平日は自分で書畫を認めたり、詩の會に參つたり致すのを樂みに致して居ります。ハイ書は日本の極古い流儀の方で……。演劇や寄席なぞは大嫌ひで演劇へ行く暇があれば上野あたりか郊外へでも散歩するのを樂みに致して居ります。ですから私なぞ東京へ來てから演劇は據ろ無い場合で二度見たばかりで御坐います。主人は食物に就て好き嫌ひの無い方で、其代り何でも澤山戴きますが、御酒を戴きませんから御料理に世話は御坐いません。私は毎日の他出で何も彼も放擲つて置きますが、兩親に別れた不幸な妹が宅に參つて居りますから、萬事これに任せて置きますし、主人も『お前のやうな者でも御役に立つなら何でも働くが可い、皆樣の御不都合のないやうに早く出掛けろ〳〵』と申して、急ぎ立てる位ですから、私も出歩きには大きに都合が宜しう御坐います。

▲御夫婦の健康

主人は身躰が極壯健で仕合せで御坐います。唯だ先年少しの病氣の爲め馬に乘るのが難儀になつて休職致したのですが、當節又御留守役（○○留守師團長）を仰せ付けられまして、忙しくなりましたら好い鹽梅に全治致しました。私も御覽の通り至極壯健で大きな躰格

だものですから、『貴女は擔架の方へ廻すと好い』など丶會員方が仰つしやいますオホ丶丶丶。

▲出征と家族

日清役の時も早く主人に出征の命令が下るやうにと氣を揉んで居りましたが、漸く仰せ付かつて下の關まで出向きますと、丁度李鴻章が參つて媾和の談判と爲り臺灣の方へ參るとになりまして、何ですか落膽致しました。此度も最早老年ではあるし致し方はありませんが、妙なもので主人が戰地に居ると家族は心丈夫ですけれど、戰地へ主人が出掛けて居ませんと、出征軍人方の事が氣に掛つて、心配で〱耐りませんね。これは私ばかりでは御坐いません、皆樣其通



りだと仰しやいますよ。決して他で思ふやうなものぢや御坐いません、出征の家族方御主人の出征を喜び勇んで、何處其處で戰があつたと聞く度に、何卒勇しい軍功を立てられる樣にと唯だそれのみ祈つて居らつしやる位で御坐います。

▲令息と令嬢

私は二十一歳の時から年子に五人持ちましたが、唯今は三人だけになりました。二十四歳になりまする長男は昨年の春から美術學校へ參つて油繪の修業中で御坐いますが、軍人の家に生れた者を斯樣な業をさせるのは不本意だと主人は頻りに歎息して居ります。併し如何も性質美術が好きで望むもので

すから、強ゐて曲げるのもと存じまして……。イエ未だ未熟で御覧に入れる品は御坐いません、次男は唯今國民英學會へ通つて居ります。これは又文學が好きで特に小説を作るのが一番の樂みなので、始終書見ばかり致し毎晩十一時十二時位まで耽つて居りまして、イクラ嚴ましく申しても熱心で困ります、先年紅葉さんの御弟子にも願ひました所が、丁度御病氣に御成りの際で、入門が出來ませんでした。末のは娘ですか、昨年成女學校を卒業致し、何より裁縫が好きで御坐います。音樂も好きですから、何か稽古を始めさせたいと存じますが、時節柄ゆる見合せて居ります。私は毎度娘に向つて、唯今こそ一般に女子敎育が盛であるが、私の育つ時分、私の郷國では鹿兒島と同じく女子に學問の必要はない、働きさへすれば宜いと云ふ風であつたから、私は此通り何んにも辨へぬ人間になつて不自由をして居る、何卒汝だけはシッカリ遣つてお呉れと申すので御坐います。

▲新聞と號外

新聞は日々と時事を取つて居ります、此頃は毎朝急いで見ませんければ氣が濟みません。主人は朝七時からの出勤で、新聞を讀む暇も御坐いませんので、歸つて參ると直に今日の新聞は如何だと尋ねます。私なぞも號外の聲を聞くと、待兼ねて電車の中ででも買つて見ます。

御話しは益々活氣を帶びて膝の進む折柄、御女中が襖を開いて某貴婦人の來訪を取次いだので、記者は殘り惜くも御暇乞を致しました。

陸軍次官石本少將夫人

夫人ゑつ子は慶應二年十二月を以て舊金澤藩士安達氏の家に生れ明治十五年十二月を以て今の陸軍次官石本新六氏に嫁す人と爲り温實敏活にして善く家政を整理し六男一女を敎養する寬嚴宜きに適し獨立自治の氣象を開發せしめんとを務め眞人をして毫も内顧の憂なからしむ

旅順陷落を今か〳〵と待ち顔に街衢に交叉された旗竿に、國民の熱誠は例年より炎帝の來臨早く一たびは九

十度を超越した暑氣をも忘れ居る七月一日、赫々の名を得ず矻々の勞に服し我出征陸軍をして連戰連勝せしむる石本陸軍次官の官邸に同夫人を尋ねました。黒板塀に門燈ある御門を入ると右側に「馬繋」あり迂回して御玄關へ伺ふと上草履六七足列べあり、正面に洋刀一口銃一挺を飾り付けられ、御廊下にはいたいけ盛りの令孃が遊んで居られました。手織縞の單衣を着た御女中に案内され、和洋折衷の廣々とした應接間へ通りました。東側には甲冑一領を丸に橘の紋打ちたる朱塗鎧櫃の上に据ゑ、金無地の鞍、鐙、采配など卓上に置いてあり、扁額の重なるは周信筆墨畫の龍で風神活躍雲氣堂に滿つるを覺えるのであります、掛軸は玉章の溪流、直彥の富士、屛風は光琳の四季花木などで、素人眼にも逸品ばかりと存じました。ストーブの棚上には蜘蛛貝、銅製の馬、銅製の突貫兵士を程よく配置され、其他の棚上、床の間等に珍品奇什を散布されて、ご主人の趣味を想望し得らるゝのです、御庭には赤松扇骨木、梧桐、椶櫚等亭々として綠影を築山の天然石に印し、拂々と樹間を漏れ來る涼風は周り緣を掠めて却々に心地よく感ぜらるゝ、折柄、西側の襖を開いて出で來られし夫人は、白地に木賊形の縮の單衣に黒繻子と濃茶小紋更紗との晝夜帶を結び、淡藤色綸子の帶上げを爲され、前髮も根加減も上品な束髮、血色良く眉目に快活の氣を帶べる御顏、肉附よき御身躰は落付いて、愛嬌深く巧妙な御話振り記者に多大の滿足を與へられました。夫人は曉齋筆の深草團扇を勸められ、自らも優然とあふがれつゝ――

▲次官の御嗜好

宅では何よりも畫が好きで、丁度御婦人が衣服や髮飾を欲しがる樣に、よい物を見ると欲しくつて耐らないので御座います。新らしいのも古いのも好きなのですが、古畫は本當に鑑定が難かしいので主に當節の畫家に賴みます。ハイ川端玉章だの熊谷直彥、それから荒木寛畝の養子の十畝と云ふ方なぞに……。一躰美術は昔に比べれば進歩して居るから當節の畫家に賴んだ方が可いと申して居ります、瀧和亭の畫も大好きで亡

くなられたのを痛く惜んで居りました。畫家に頼みますのに最初のうちは何の圖をと望みましたが、度々失策しましたので、以來圖柄の注文は致さず各々の御得意に任せて居ります。畫と名が付けば何流派でも好きですが、油繪の方は餘り好きません。彼の油繪（裸躰畫の額を指して）は丁度額縁が在つたので、友人が周旋して或畫家に認めさせて呉れたのです。日本畫も匾額より軸物の方が好きで御坐います。

▲展覽會

當年はそれ處ではありませんが、何時も春秋二季に櫻ケ岡の展覽會へ缺かさず出掛け、一つ會へ三四度位は參つて觀るのです。私や子供も連れて參り買求めの相談相手に致しますが、唯だズーつと觀て歩くだけでは碌々眼に留らぬものですけれども、何れを買ふかと思つて觀て廻ると、隨分詳しく調べますから、何の畫も善く記臆が出來るやうです。それから諸大家へ依頼の爲めに種々な會が設立されて居りますが、其會へも大抵入つて居りますし、本當にこれが一番の道樂なので御坐います。彼の陸軍監督官の片山さんも、却々の畫好きで居らつしやる相ですが、彼の方は鑑定が御巧者だと宅で申して居りますよ。

▲趣味の感化

好きな道には又御仲間が出來まして、「僕は今度直彦に斯う云ふ圖を畫いて貰つたが、君も一つ頼んでは如何だ」なぞと言はれて、又頼みたくなると云ふ具合ですから、道樂が漸々進むので御坐います。それで自然子供達まで畫を觀る眼が進歩致しまして、「御父樣、此頃は暫らく玉章に御頼みになりませんネ、先達ての直彦の畫は如何です」なぞと云ふやうな風に爲り、至つて無風流な私まで漸々感染れて畫が好きになりますネ。イエ宅では子供の折少し習つた事があるさうですが、自分ではチョットも筆を執りませんで、唯だ見るのを樂みに致して居ります。

▲骨董

畫が好きなのに伴れて、骨董も矢張り婦人が衣裳を欲しがる通りなので御坐います。それで各地へ出張中

雨でも降つて休みの時なぞは骨董店を素見して歩きます。彼の鐙は對島で求めましたので、先頃から十二支を集め始めましたが、未だ却々揃ひません。

記者は此時眼を置物の方へ移しましたが、御話の通り玉を擁せる龍の香爐、陶製猿と鷄、水晶の兎、木彫の虎兒など配置されてありました。夫人は虎兒の置物に就て笑ひながら話らるゝやう、

これは私の留守に骨董屋が持つて參つたので、妙な格好な物だと私が笑ひましたら、これは古い彫刻で却々面白い作品だ、決して子供にいぢらせては成らぬと申して、大切に致して居ります。

▲放任主義

子供等にも別に嚴ましい小言は申しませず、自由に放任して置く方で、子供も皆御父様好きで御坐います。他家ではよく御父様を恐い者と定めてありますが、私共では却て私の方が憎まれ役の位です。併し男親は何處か嚴な處があると見え、宅で一言申すと強く感じる樣です。宅では總て何でも之でなければならぬと申すやうな事は御坐いません。食物なども先ア御酒が少し好きな位で、他に好き嫌ひは少しも無いのです。

▲讀書

讀書は大好きですが、矢張り何の種類の書がよいと申す事はなく、其處らに在る本を見て樂みます。子供等の取つて居る少年世界御伽噺まで見ますし、時によると小學校の敎科書まで讀んで居ますが、其樣な本でも讀むと面白味があると申して居ります。

▲旅行

御用で方々へ出掛けますけれど、家族同道で旅行致す暇は當節は勿論平生でも少しも御坐いません。併しナロット散歩する際には必ず子供を拉れて出るのを樂みに致します。

▲母堂の逸事

姑は八十四歲まで長命致し却々確乎とした人でした。郷里の姫路では大抵屋敷内に菜園があつて耕作する風習だものですから、東京へ參つても終始畑を致し亡くなる前年まで毎日缺かさず出て居りました鍬は使はず

に鏝で丁寧に畑をうなつて奇麗に野菜を作り、御晝飯も椽側へ腰を掛けて食べる位熱心に致したので身躰も極壯健でした、針仕事も自分の物だけは人手に掛けず汚い御話ですが湯卷なぞも決して人に洗はせませんでした。大勢手がありますのに、年寄に其樣な事までさせますのは、如何にも氣の毒ですから、たつて止めましたけれども、自分の事だけは自分ですると申して聞き入れませんので、宅でも御自由に御させ申すが可いと申して意に任せて置きました。それから信心堅固で精進を善く守る人でしたが、魚肉を食べる若い者達と別の御菜を拵らへるのは手數であらうと察して、心の中で精進を守れば宜いと考へ、精進日には朝だけと定めて了つたのです、善く行屆いた姑で御座いました。

▲令息と令孃

子供は大抵年子で多勢で御座います。長男は十七歳で憲吉と申します、これは父の幼名を付けたのです。次男は十六歳で、憲次と申します、これは憲法發布の前日に生れましたのです。三男は十五で寅三、次が巳四雄、五雄、六人目が三歳の女子で總子、これは總務長官拜命の月に生れたので、紀念の爲めに總と名けたのです、末の男子六哉は極幼少で御座います、私は乳房が細いので、皆牛乳を混用致し、五六ヶ月位の後は牛乳ばかりで育てますから、他出の時に拉れて行く世話が御座いません、私は小さい子供を拉れて出るのは大嫌ひで、六七歳位までは拉れて出ませんから、子供も亦慣れて何とも申しません、保姆は四歳から離すヿに致し、幼稚園へは滿四歳から遣はせますが、男兒ばかりですから、皆伴の付くのを厭がりまして、幼稚園の門の處で下女の持つてる御辨當を引たくつて門内へ駈け込み獨りで通つてる樣に見せると云ふ風で、最初から迷惑がりますから、獨りで遣はせます、先達ても餘り大雨でしたから休んだら如何だと申したところ、此位の事で休むやうな弱虫ぢや無いと言つて、裾を高く端折りズン〳〵出て參つたので、私は内心耻ぢ入つたので御座います。三男、四男は師範學校附屬の小學校へ通學致します、ハイ道程は十七八丁位でしやう、各

自汗びつしよりで歸つて參りますが、慣れて居るので平氣で御座います。

此時四男巳四雄君は白飛白に白メレンスの兵兒帶で應接間に來られ、記者に一禮し、母君の命を謹み聞いて出で行かれましたが、放任主義と仰しやるに拘らず、御子樣の禮節に嫻れて居らるゝのは深く感服する所で御座います。

▲各令息の特性

前申す通り放任主義ですから、就寢時も召使だけは十時と定めてありますが、子供の方は定めてありません併し皆學校好きですから、平日は早く起き日曜だけ緩くり起きると云ふ風で一向世話を燒かせません。



長男は師範學校附屬中學校へ通つて居りますが、これは自然弟達を保護する性質が備つて居ると見え弟に向つて「お前達は最早試驗ぢや無いか算術は如何だ、理科は出來るか」などゝ復習の世話を燒いて居ります。次男も矢張り長男と同じ學校へ通つて居りますが、これは此家の交際官だと申す位の愛嬌者で、議論がゝつたとは言はず、奉公人に小言を申すにも腹を立てさせずに笑はせて從はせるのです、ですから朋友との交際も上手で、電話も次男に一番澤山掛つて來ます此方でも試驗時分には出校前に電話で今日は何々の本を御忘なさるな抔と、深切に朋友に申して遣る風で、自

然に何處からも可愛がられて居ります。三男は軍人が志願で陸軍幼年學校へ入學致しましたが、實に竹を割つたやうな性質で、馬も早くから巧者に乘りますし、身輕ですから木登りなぞすると細い枝へまで登り、競走なども大の得意ですから、丁度軍人に適當して居るのですよ、懇意先の奥さんによく御子達の性質に就て御心配なさる方がありますが、私共では自由に其特質を開發させるのが宜いと存じて、一向構はずに置きます。食物も何品でも食べさせる事に仕付けましたから粗食は平氣です、次男なぞ生意氣に麥飯の催促を致しますよ。軍人の子供は特に粗食に慣らさねと可けないと存じて、これを善く注意して居ります、それで身體の發育は皆よい方で、長男など今年は父より少し丈が高くなりました。

▲圍碁の修練

子供は何でも進歩の早いものですネ。宅が御友達と時時碁を圍むのを長男と次男が側で觀て覺えまして、昨年は風鈴付きで父と打つて居ましたが、忽ち上達致して最早二目位しか置きません。それで今に御父樣を負かして遣る抔と戲言を申すものですから、宅も「ナニ貴樣達に負けて耐るものか」と叱り飛ばして、後で笑つて居ります。

▲理科の智識

總て子供は大人よりも研究熱があつて鋭敏なものですネ、チヨツト電車へ乘つても、今日は百二十番の電車へ乘つたなぞと番號まで覺えて來ましたり、何の爲めに此線が附いて居るとか、何の爲めに彼の機械が備へてあるとか、詳しく研究して參りますよ。電車には蠟燭が點いて居るが、あれは電氣が消えた時の爲めです母樣あれに御氣が附きませんかなど、私共の心附かぬ些細な事まで見出します。爾うして何によらず見る物に就て一々質問を起して、却々迂濶な答は出來ません。又植物を育てるのは皆大好きでして、種をふせたり、樣々な苗生を植ゑたりして育てますが、桃なぞ立派に成長致しました。他家樣から珍らしい果物を戴くと直に其種子をふせて、發育するのを樂んで居ります。

▲雜誌好き

子供は揃つて雜誌好きで、近所の雜誌店から種々な物を買つて參ります。此頃は戰爭の雜誌——戰事畫報、軍國畫報、日露戰等實記等、其他これに類した本を取つては頻りに見て居ります。

演劇や音樂は、私共では大嫌ひですが、唯だ本郷座でよく致す御伽芝居だけは子供に見せます。あれは解り易くつて罪が無くつて宜しう御座いますから……。

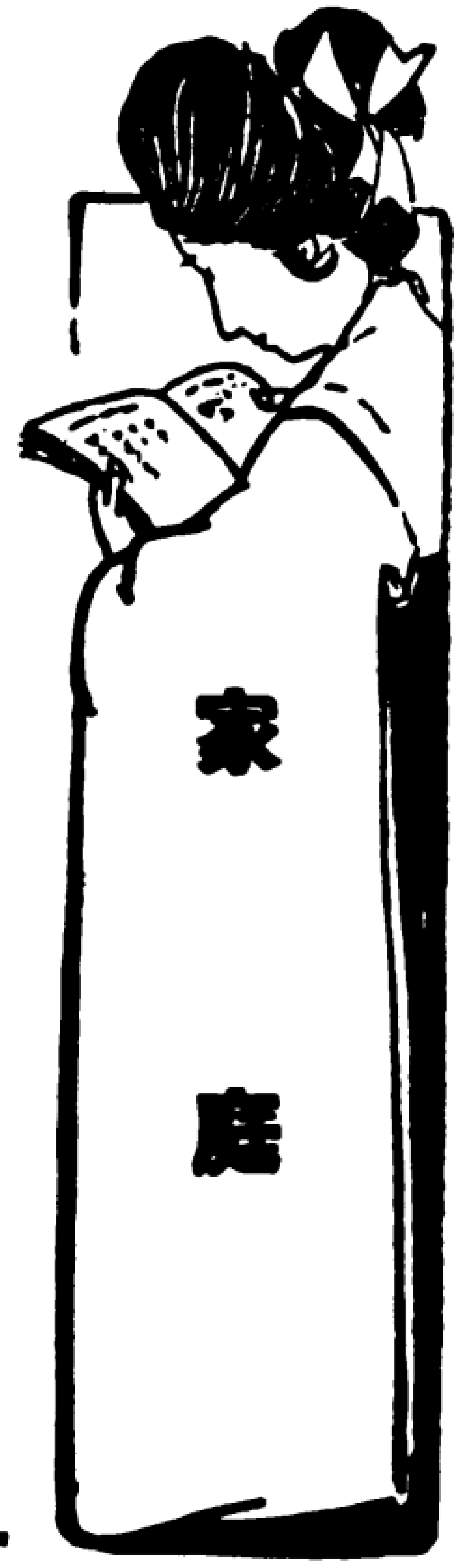
▲游泳

これは少しは稽古させませんと、獨習ばかりでは難かしいと存じ、二年ばかり江戸川へ遣はせましたが、唯今では長男次男とも教授の御手傳ひ致す位になりました。毎年横須賀の先の田戸へ海水浴に遣りますが、競泳に出たこともあり巧者に泳ぎます心配は御座いません。

▲御子達の旅行

餘程以前フトした事で、田戸の舊家を海水浴の宿として子供諸共世話に爲りました處、其翌年其家より御子樣方を是非御寄越しなさいと申して參り、それから毎年子供ばかり遣はせます。イエ下女も何も附けませんで、靈岸島から滊船で遣ります、長男は十歲にならぬ内から獨りで遣りました。人樣が「如何して貴女は然う大膽でせう、先は海邊だし若しもの怪我があつたら如何なさる」つて仰しやいますが、私が附いて居たとて泳ぎは知らず溺れた時に助ける術も無いから、寧そ獨り遣つて先方の人達に深く注意して貰つた方が、却つて安全だと存じまして。其上宅の子供は皆獨りで自分だけの始末をするのが好きで、兄弟同志で遠方へ參るのを喜んで居ります。兄弟同志(八歲の五男迄)で遣りますと、十七歲の長男が萬事親同樣に弟の世話を優しく致し、弟達も兄を頼りに慕つて、至極睦じく遊んで參ります。食物も平生何でも食べる習はせですから、農家の食物で幾日でも不自由を感じません。

夫人の御話は謙抑の中に自信あり、他日の大國民を教養せんとて、子女の獨立自治を奬勵せらるゝ熱誠は、一言一語の間に溢るゝばかりで、私は令息令孃の幸福を想望致し欽羨の態を禁じ得ませんなかつた



新世帶經營の心得

寺田勇吉

▲敎訓は實行を要す

一家の經營に關する問題は、古來より洋の東西を論せす、賢人哲士の反覆論述せられたる所にして、其の丁寧親切なること愚夫愚婦をして首肯せしむるに足るものあり、若し其の敎訓を列擧せば、民法商法の條項の多きに讓らざるべし。然れども言ふは易く、行ふは難し、如何なる善良の敎訓なりとも、之を實行せざれば何等の効果をも生ずるものにあらず。平凡の敎訓なりとも能く之を實行せば、家を益し、世を利するの効顯る大なるものあらん、吾人は宜しく吾人の位置に相應したる敎訓を選で、之を實行せざるべからず、余は舊幕士の次男にして貧困の中に生長し、艱難辛苦の境遇を經て今日僅に衣食の憂を忘れ、微力を敎育事業に盡すことを得るものは、全く余が獨力の經營にして秋毫も他人の助を仰ぎたることなし、亦聖代の賜なり、請ふ吾輩が過去三十年間に於ける實歷の一斑を述べて將に新世帶經營の途に上らんとする者に餞せんとす。

▲新世帶の種類

等しく新世帶と稱するも其の內容は必ずしも同じからず父母より巨萬の財產を分與せられて新に一家を成すものあり、紳商豪農若くは華族の子弟等多くは之に屬す、之に反して自己の智能に依賴して千辛萬苦を累ねたる末僅に一家を搆ふるを得るものあり、薄給の官吏、學校敎員等銀行其の他の會社員等多くは此の類なり、吾輩の玆に所謂新世帶とは後者に屬するものにして、父母より分與せられたる財產なき代に奉養すべき義務を有せず、夫婦兩人相對するのみにして氣樂なる代に

苦痛ありとも、之を他人に訴ふるに由なく、苦樂共に夫婦の一身に引受け、之を他人に頒つべからざるものと知るべし。

▲夫婦敎育程度の吟味

夫婦は新世帶の雙柱なれば、其の敎育程度は略ぼ同一なるを要す、若し其の敎育程度甚だしく懸隔するときは雙方の趣味同じからず、感情同じからず、理想同じからず、或は談話に誤解を來たし、或は意志の衝突を生じ、互に相敬し相愛するの情を全ふすること能はざることあり故に男子の婦を娶り、女子の人に嫁せんとするや、先づ對手の敎育程度を吟味せんこと肝要なり彼の財産若くは容色等の吟味に力を盡し、敎育程度を度外視するが如きは、實に不心得の極と謂ふべし。而して妻たる者の資格に缺くべからざる學藝中、理科の智識と割烹、及び裁縫の技能とは世帶の經營上頗る重要なるものなるにも拘はらず、往々之が學習を等閑に付するものあり、是は大なる謬なれば將來人の妻たるべき者は特に此の點に向て一層其の力を盡さんことと吾輩の切望に堪へざる所なり。

▲家計豫算表の調製

既に結婚式を擧げて新に世帶を構へたる上は、先づ家計豫算表を調製すること肝要なり、此の豫算表は毎年の收入支出を豫定するものにして、經常費と臨時費とを區別し、別に豫備費を置き收入に應じて支出を定むべし、其の支出は更に費用の性質種類に從ひ數科目(例へば飮食費、衣服費、衛生費、敎育費の類)に區別して整理するを便とす、此の豫算の執行は專ら妻の職任に屬するを以て、夫は一たび豫算を定めたる以上は最早其の執行上に干渉することなく、妻をして十分に其の經濟的能力を發揮せしむるを務むべし、金錢の出納は毎夕必ず之が記帳計算を爲し、決して明日に延ばすこと勿れ、明日に延ばすは誤謬を生ずるの基なり、紙屑代、下掃除代等臨時の收入は之を貯金に爲し置くべし數年乃至數十年の久しきを積まば一廉の用に供するを得るに至らん。

▲夫婦の生命保險

人の此の世に處るや種々の危險に遭遇することなきを保すべからず、保險制度は此の危險より生ずる災害を輕減するが爲に設けられたるものなれば、十分信用を置くべき確實なる生命保險會社を選擇して、夫婦各自の生命保險契約を取結ぶは安心立命の基礎なりと知るべし。生命保險には終身生命保險、養老生命保險等種種の種類あれども、養老生命保險は最も都合よきものの如し、生命保險を爲すときは自然に身体を愛護するの念を増し、一層衛生に注意するが故に、自ら長壽を助くるの益あり、約定の年齢に至るまで無事經過するときは約定の保險金を受取り、養老資金に充つるを得べし、萬一不幸にして中途死亡することありとも、亦約定の保險金全額を得て遺族給養の資に充つるを以て遺族をして路頭に迷はしむるの不幸を避くるを得べし毎月又は毎年其の掛金の支出を要するが故に、自然節約を爲すの必要に迫られ、經濟思想を錬磨するの効尠からざるべし。然れば生命保險の爲に掛金を支出するは一種の基本財産を蓄積するに異ならず、然るに新世帶を設けたるの際は夫婦とも元氣旺盛の時なれば、往往生命保險を無用視し、生命保險を老人の爲すべきものとして顧みず、曰く吾輩何ぞ生命保險を爲すの要あらんやと、他人の勸説は耳にも留めざるものあれども是は大なる誤解にして生命保險の必要は老人に少くして却て少壯者に多しと謂はざるべからず。老人は最早行末の短きものなれば危險に遭遇すること少けれども少壯者が老年に至るまで數十年間世路の艱難を犯すに當りては種々の危險に遭遇することを免れざればなり且つ生命保險なるものは年齢猶ほ若ければ身体健康なるが故に、其の掛金割合に少し、割合に少き掛金を以て長き期間の危險を保護せらるゝことを得、之に反して老年に至れば高き掛金を以て短き期間の危險を保護せらるゝに過ぎず、然れば生命保險は成るべく少壯の時期に於て一年も早く其の契約を取結び置くこと肝要なり、殊に婦人は結婚後出産前に於て生命保險契約を取結び置かんこと其の身の爲め、其の夫の爲め、其の生兒の爲め最も有益なりと知るべし。彼の保險掛金を

貯金と比較し殖利の多寡を計算し、貯金を以て遙に優れりと爲すもの丶如きは未だ保險の本旨を解せざるものと謂はざるべからず、況んや保險に於ても會社の性質と契約當時の取極とに由り利益の配當を爲すものあるに於てをや。

▲住家の獲得

夫婦の生命保險に次ぎて心懸くべきは住家及び其の敷地の獲得是なり、住家は夫婦同棲の根據にして家族團欒の城郭たり、新に世帯を設くると共に住家は必ず之を獲得せざるべからず、否世帯を設くるは住家を獲得したる後に於てせざるべからず、然るに近來の



花火線香

習慣に依れば住家は之を賃借するを以て通例と爲し、資產あり名望あり自ら紳士を以て任ずる者すら賃居を以て便利と爲し、往々其の家賃の高きを以て誇と爲す者あり、蓋し近時士官の徒或は其の任所を轉せられ或は其の官職を轉せらる丶こと頻繁にして、東奔西走永く其の住所を定むるを得ざる等より馴致せし風習なるべしと雖も、斯る事情を有せざる者即ち一定の住所に永住するを得る者にても猶は賃居を甘じ、今年東に住し明年西に住し、甚だしきは一歳の中すら猶は數回其の居を轉すること古昔の水草を逐ふた

る遊牧民に類するものあり、此の如きは曾に經濟上不利益のみならず女子の教育上に於ても亦不利益を免れず、然れば賃居も新世帶早々の際に於ては已を得ざる便法なりとするも、一日も早く賃居を去て自家所有の家屋に住するの計を講ずべし、即ち新に家屋を建築するか、又は既成の家屋を購入するに在り、然れども最初より理想通の家屋を獲得せんとするも之が資金を調達すること容易ならざるを以て、後日賣却に便なる地に於て先づ價格の低きものを獲得し、數年の後更に之を賣却し、賣却代金に若干金を加へて更に相當のものを購入し、漸次此の方法を以て遂に自巳の理想を達するに在り、人或は家屋を所有すれば家屋に對する租稅を負擔せざるべからず、破損あれば之を修繕せざるべからず、家賃を拂はざる代に此等の支出を要するを以て、家屋を所有するも經濟上格別利益あるにあらず、若し不幸にして火災に罹ることあらん乎一朝にして烏有に歸し、大損失を被るを免れざるべし、賃居の煩勞なきに如かずと難ずるものあれども、吾輩の計算に依れば、自巳所有の家屋に住する方賃居に比し損失なきのみならず、利益あるは疑ふべからず。況んや我所有家屋に住居する精神上の愉快の計算すべからざるものあるに於てをや、彼の火災の如きは保險の方法あり以て杞憂を除くに足れり、新世帶經營の志ある者は家屋の獲得を念頭に置き永く賃居に甘んずべからず。

▲住地の獲得

家屋の獲得に關聯して離るべからざるは其の敷地の獲得なり、敷地の獲得は其の困難家屋の獲得に比して更に數倍なるへしと雖も、成るべくは家屋と共に之を獲得せんことを努めざるべからず、若し獲得する能はずんば姑く賃借の方法を取るも亦巳を得ざる處なれども敷地を獲得するにあらざれは家屋の獲得も十分其の効を現はし難きが故に、平素成るへく速に之を獲得するの準備を怠るべからず、吾輩が新世帶の經營上住家及ひ其の敷地の獲得を第一の要件と爲すは其の世帶の獨立を實にせんが爲なり、借家に住するときは家賃を約定通に仕拂へば夫にて借家人の義務は濟む筈なれと

も、結婚出生死亡等の事故に遭遇する毎に所轄市町村役場へ差出す屆書に家主の加判を求むる等純然たる獨立を保ち難き事情少しとせず、又住家は自己の所有なりとも其の敷地を借用するときは是れ亦地主へ對して種々の點より獨立を保ち難き事情なきにあらず、其の精神上に不愉快を感ずること決して少きにあらざるなり、然れば住家及ひ其の敷地を獲得するは新世帶獨立の基礎なりと知るべし。

▲結婚後の四五年間

新世帶を設けたる當初は新夫婦が最も得意の時期なれは、動もすれば前後の思慮もなく無用の失費を爲すことあり、格別の用務もなきに下婢を雇入るゝが如きも其の一なり、夫婦相對するのみなれは殊更に下婢を雇ふ程の用務あるものにあらざれば妻の手にて飲食の調理衣服の裁縫、洗濯より内外の洒掃其の他一切の家務を處理して十分に餘裕あるへし、當初の二三年乃至四五年間こそ世帶の基礎を固むるに最も都合よき時節なれば、成るべく無用の失費を爲さゝる樣心懸け、少しも多く將來の豫備に向て其の力を盡すべし、結婚後一兩年を經過したる後子女の



海濱散策

出産あれは、茲に始て育兒の世話を爲さゝるべからず從て生計費を增額せざるべからず、爾後子女を舉くる每に此の世話と費用とは益々增加を告ぐるものなれば、此の時に至りては最早節約せんと欲するも臨時意外の事故湧出し、到底豫定通に節約の出來るものにあらざれば新世帶の初に於て成るべく夫婦協同して節儉力行世帶の基礎を築き上ぐることを怠るべからず、妻が家政料理の傍ら內職を營むは言ふ迄もなく、夫も亦一定の職業に從事し一定の收入を得るのみを以て滿足せず、必す朝夕又は夜分若くは休日等を利用して內職的の勤勞に從事すへし、或は猶ほ進で自己の學術技藝の練磨に從事するも可なり、是れ亦立身出世の資本なり、吾輩は公務の餘暇獨逸書の飜譯に從事し、之に依りて得たる料金を蓄積して住地の購入及ひ住家の建築費に供せり、鄙家を飜譯館と命名したるは聊か此の來由を紀念せんか爲なり。

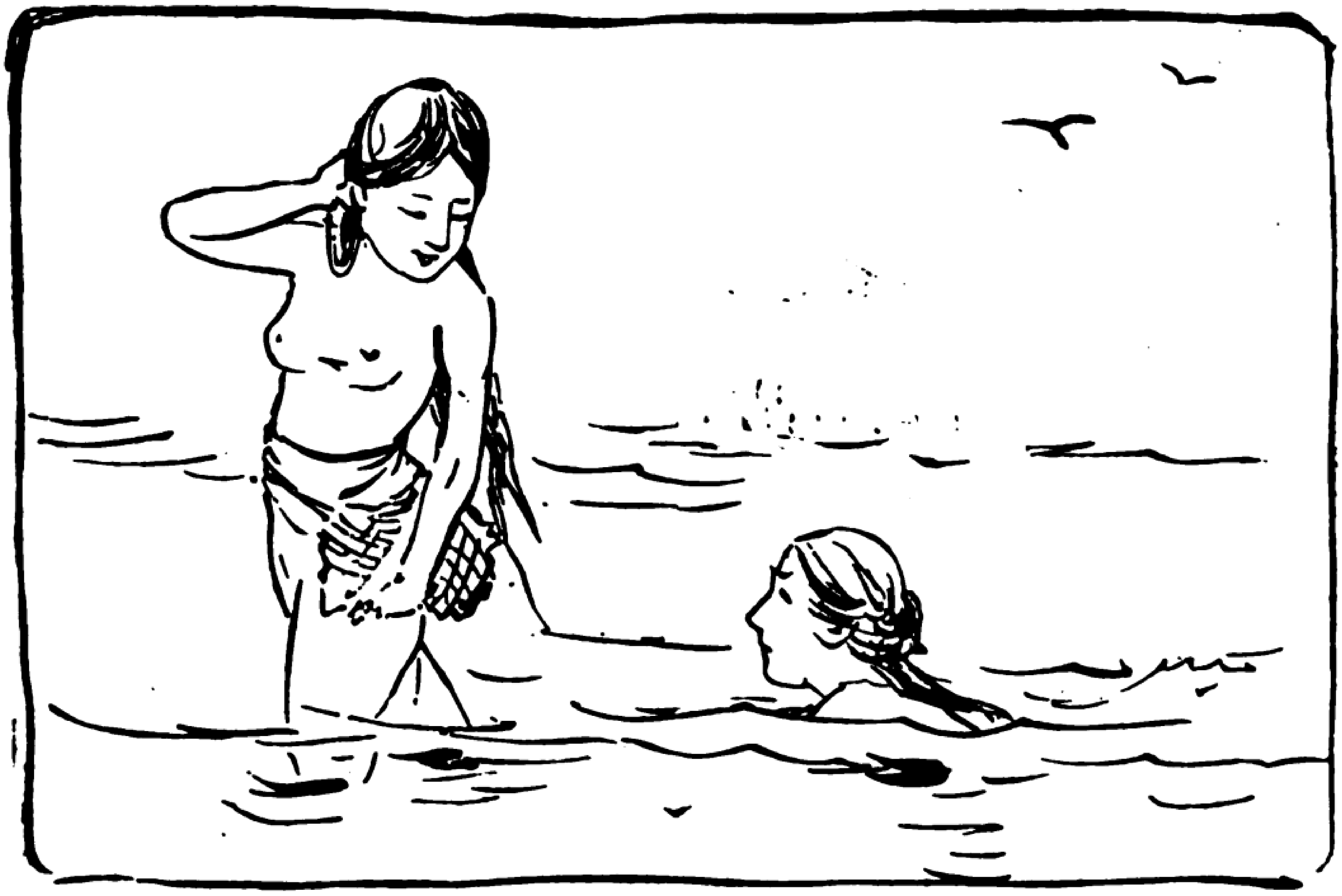
▲子女の教育費と結婚費

夫婦が旣に其の資格を進めて父と爲り、母と爲るに至ては兒童の養育及ひ教育を負擔せざるべからず、女兒の爲には嫁資男兒の爲には高等教育を受くる學資の準備を爲さゝるへからず、吾輩は女兒の爲には土地を購入し置き緣談の整ふを待て之を賣却し以て嫁資に供せり、男兒の爲に學資を準備するも亦此の方法を取れり蓋し土地は世の進步に伴ひ何等の施設を待たずして其の價格自ら騰貴するを以てなり、世或は殖林して他日の用に供するものあり、保險又は貯金の方法に依るものあり、是れ亦可なり要は兒童の爲め將來の準備を怠らざるに在り。

▲懸買と現金購入

日常の生活費即ち衣服飮食に要する費用は必ず現金仕拂と爲すべし、米屋より米を購ふにもせよ、八百屋より野菜を購ふにもせよ、薪炭屋より薪炭を購ふにもせよ、吳服屋より布帛を購ふにもせよ、必す懸買を爲すべからず、懸買を爲すときは仕拂期日迄の利子を仕拂はざるべからず、是れ一の損なり、相當の代金の外に利子を仕拂ふのみならず保險料も之を仕拂はざるべか

らず、是れ二の損なり、茲に所謂保險料とは商人が懸賣を爲すに當り懸賣の中若干は仕拂を受けざるもの即ち貸倒と爲るものあるを豫算し、此の貸倒と爲るべき金額をも懸賣の代金中に包含せしむるを言ふなり、懸買を爲すときは縱令一定の期限に於て正しく仕拂を爲すとも猶ほ此の如き保險料までも仕拂はざるべからず、又懸買を爲すときは品質の精良なるものを得難きの虞あり、其の故は懸買の事なれば多少氣に入らぬ點ありても引換を命じ難きと商人は此の弱點に乘じて品質を粗惡にするの弊あればなり、是れ三の



海水浴

損なり。懸買を爲すときは精算を經るまでは幾何の金額なるや知り難きことあるを以て濫に注文するに至り、後に計算書を覩て始て此の如き注文を爲したることありしやと驚き、再三熟考したる末漸く記臆を呼ひ起し計算書の誤謬にあらざるを知るが如きこと尠からず、是れ四の損なり、之に反して現金にて仕拂を爲すときは孰れの商人たるを問はす、品質の善良にして價格の低廉なるものを選で之を購入することを得、是れ一の利なり。取捨選擇の權を我に有するが故に商人間に競爭を生せしめ精品を廉價に供給せしむ

るを得、是れ二の利なり。現金を手許に有せざるか又は手許に殘餘の乏しきときは購入を扣ゆるが故に濫費に失するの虞少し、是れ三の利益なり。此の如き利益あるに拘はらず懸買を爲す者の多きは何故ぞや、其の都度金錢出納の煩を厭ふに由るか將た商人か好で懸賣を爲さんとするに由る乎、元來商人は懸賣を好むにはあらざれども懸賣懸買は世上一般の風習なれは、現金にて賣らんとすれは得意先を他の商人に奪はるゝの恐あるが故に、一般の風習に從ひ得意先の機嫌を損せざらんと務め、其の都度現金を領收するを好まざるの風を裝ひ、成るべく懸買を爲さしめんと欲す、是れ得意先の弱點に乘して成るべく自己の利益を占めんとするものなれは、新に世帶を經營するものは此の計畧に乘らさるの覺悟肝要なり。又現金仕拂と爲す以上は家居して賣込み來る商人に就きて買はんよりは、成るべく外出して買入るゝを可とす、八百屋魚屋等數多は商家に就き品質の良否を吟味し、價格の高低を比較し、十分我に利益なりと認むるものを選擇するの便利あればなり、總て衣服其の他器物等は少々位は價格高きにもせよ、成るへく堅牢にして保存上の利益あるものを購入するを善とす、衣服の如きも妄に時の流行を追ふが如きは眞に世帶の經營に志ある者の爲すへき所にあらざるなり。

▲生活の程度

生活の程度は質素を旨とし、奢侈に陷ゐらざる樣戒愼を加ふべし、殊に俸給を以て衣食住の支出に充つるものに於ては此の心得一層肝要なり、平素扣目に暮すときは休職退官其他の事故に遭遇することありとも、之が爲に家計上俄に困難を感ずることなく、依然として平素の生活程度を維持するを得べし、吾輩は判任官たりしときも奏任官たりしときも勅任官たりしときも未だ嘗て昔時の困窮を忘れず、家計上常に身分相當と信ずる程度を守りたるを以て、今や退て閑地に在りと雖も之が爲に毫も平素の生活程度を引下ぐるの必要を感せす、今日も東京高等商業學校長在職の當時も衣服飮食を始め、婢僕の傭役等に至るまで其の程度

全く同一にして、少しも變更を加へざるなり、然るに平素衣服の華美を競ひ、飲食の珍味を貪り、住家の壯麗を誇るもの丶如きは之か爲に財嚢を傾けざるを得ず從て他日の豫備に供すべき餘裕少なきを以て、一朝不慮の事故に遭遇するときは昨日の美衣美食に引き換へて今日は粗衣粗食に甘せざるべからざるに至らん、彼の貴顯と呼ばれ紳士と稱せらる丶人士か一朝死亡の廣告を新聞紙に掲載するや、塋域の土未だ乾かざるに先ち、其の遺族は忽ち住み馴れたる壯麗の邸宅を引拂ふて見る影もなき矮屋に轉居するは殆ど通例なるが如し、是れ皆平素の生活程度を誤りたる者の免るべからざる應報にして、新世帶經營者の宜しく殷鑒とすべき所なり。

▲時間の勵行

時間を重するの風習は先づ起臥の時間を正くするより始めざるべからず、即ち大人、小兒、老人等の區別に從ひ、各〻適度の時間を定めて之を勵行するに在り、此の起臥の時刻は一たび定めたる以上は日の長短に依りて伸縮すべからず、氣候の寒暖に依りて變更せざるを善とす、然るときは自然習慣と爲りて起きべき時刻來れば目自ら覺め、寢ぬべき時刻來れば目自ら閉ぢ、正しく時刻を守ることを得るものなり、抑も朝早く起き夜は早く寢ぬべしとは古來より、正しき敎訓にして、一日の計は朝に在りとは誠に動すべからざる金言なれども、人間は兎角朝寢夜ふかしの弊に陷ゐり易きものなれば、新世帶の經營者は先づ此の弊に感染せざる樣戒愼せざるべからず、我邦公私の間に於て時間に懸直なるもの行はれ、或は早く或は遲く自他共に迷惑を感ずること尠からず、諸官廳には勤務時間の規定あれども午前八時の出勤時刻なれば、早くも九時乃至十時に至らざれば總ての職員は出揃ひ難く、又午後四時の退廳時刻來るも閑散無聊に苦みなから早くも四時半乃至五時に至らざれば退散せざること稀ならず、滊車の發着時間さへ或は早く、或は遲く、殊に何等の事故なくして數々延着を報せらる丶は乘客の甚だ迷惑を感ずる所なり。然れば此等の弊習を矯正せんが爲には、各世

帶に於て起臥の時間を正くするより始めざるべからず起臥の時間を正くするは、國民をして時間の觀念を有せしむる第一着歩なりと知るべし。

兒童教育　こゝろの僻み

東京感化院長　高瀬眞卿

可憐無邪氣の小兒をして僻み心を起さしめ長じて惡僻に染み、遂に狂暴制し難きものたらしむるものは抑も何人の罪なるか、母の罪か子の罪か倆しくは社會の罪か、世には繼母を惡んで蛇蠍視するものあれど、繼母いづくんぞ先天的惡人ならんや思ふに是れ母子共に心情の透徹を欠きたるものにして社會風習の然らしむるものに外ならず、既に母たり、子たる身にして心情の透徹を欠きそれよりして双方の誤解を生ずるに至る豈悲しむべからずや、世間の人事は多端にして一様ならず、繼母として子を育つるの人も多く繼子として母に養はるゝもの多し、願はくは双方共に親情に疎隔なからしめんか、母子の幸福はいふまでもなく、社會の爲めに又喜ぶべし。記者爰に見る處ろあり、豫て不良少年感化に熱心なる東京感化院長に請ひ同院に於ける不良少年中に就て殊に母子心情の疎隔より生せし惡結果の實例を得て兒童教育増々大切なるを感ずるの餘り、聊か抄記して以て家庭教育に任ずる世の母親方の一考を煩はさんとす。

女學記者

其一　妹よりも親切にされし人

この少年は十五才なり父は會社に從事して相應の位置を有しこの子四才の時に實母は身まかりて後妻は程なく來りぬ、其翌年男の子生れ、その次の年に女の子生れたり、父はこの子の行跡よろしからず常に後妻に抵抗するを見て行末いかなる風波を起すやも測りがたしとて東京感化院に托して心術の改良を賴みたり院長はしば〳〵此の少年を膝下に招きて彼が心をさぐり且つ其思ふ處を言はしむるに語る處左の如し。

私が本とうのお母さんはどんな人であつたか知りませ

ん幼さい時に今のお母さんが來ました、今のお母さんも私が幼さい時は可愛がつてくれましたが、近ごろは弟の事許り世話をして私なぞは極く冷淡にします、そして私が少し惡戯をしても直ぐお父さんに告知ますお父さんもお母さんの言ふ事は何でも眞實にして直ぐ私をなぐります、いつか私と弟で喧嘩をしたらお母さんはわざと弟を責つて内證でお父さんに私が惡い樣に言つたもんですから私は大層打れました。

お母さんは私と弟と妹を公平に可愛がるとお父さんは常に言ますが、私は決して然う思ひません、お父さんは斯う云のです、世間に繼母と言ふものは自分の生だ子許り可愛がつて繼子を邪見にすると言ふが家のお母さんは決して然云人ではない、お前の事は常に大切に思つて弟や妹よりも深切にするのである、お前かヒガミ心を以て自分許り他人の樣にされると思ふは大變な間違である、ト斯う云ますが、私はソレを眞實とは思はないのです、お父さんが家に居る時はなんの蚊のと深切らしくしますが留守になると恰で樣子が違つて仕舞ふのです、私もどうせ斯んな家に居てもつまらないと思つて亂暴しました、お母さんをぶん擲ろうと思つた事もあります、お父さんも腕力で私をいぢめますから私も腕力で弟や妹をやつ付ます。


朝顔賣

此の少年の繼母は果して少年の言ふが如く自分の子のみ愛して彼をば冷遇せしや否やまた父が子に向つて言ふが如く公平の母なるや否やは片言以て之を判すべきにあらればこの繼母に數回面會して其心得の如何を聞試みたり語る處左の如し。

度々お尋を受まして御深切にお聞下さいますから、妾もよい幸ひと存じまして腹藏なくお話をいたしますが御存知の通り繼母と申すと何か意地の惡い者の樣に世間では申しますし、妾も何となく身がひける樣な心が致して殊に自分の產だ子も御座いますゆえ先妻の子と自分の子と別隔てでもあつては猶更夫へ對して濟ぬ事と存じて居りますゆえ妾は何事に就ても決して隔てる心を持ませんで實子よりも心をつけて朝夕世話をいたしまして御座いますが、それがどうも自分の子は惡戯をいたしても極く呵り付ますが彼はどうも然うまいりませんので呵責ては惡るかろうと云ふ心が起ります子供がお小遣をくれと申ても自分の子をばさうお小遣が入つてはなりませんと申て制しますが彼の子に向つてはどうも其が言れませんでツイ違るやうになります御承知の通り、彼れは隨分惡口も言ます、父が居る時は呵られるのが怖さに小さくなつて居ますが、留守になると弟や妹を泣せたり、下女と喧嘩を致したりします、餘りの事に妾が呵りますと、なんだ自分の子供許り可愛がりやがつて己を殘酷にするお父さんに告知るから見ろなんぞと申します時々は弟の頭へ瘤なとを出しましてソレを父に問れて據なく話しますと父が大さう立腹いたし彼を打つこともあります、然ういたすと父の留守に妾へ喰てかゝりまして己れの事をある事ない事取拵えて父に話しやがつたなど〻申して暴れ出すので御座います、妾も實にどう致してよいのやら困り切つて居りました、今度は先生のお世話になりまして、能く辛抱してくれますから、妾も安心いたしまして只だ餘り遠ざかつては後々の爲になりますまいと存して時々お邪魔にあがるので御座います。

眞鄰云この少年の繼母は性質極めて順良にして世間にて云ふ繼母根性と云ふ偏僻たる心は持たざれども惜かな育兒に關しては經驗上僅に智識を有すれども、敎育と云ふ觀念を有せず、これ學識なきためにして深く咎むべきにあらず、彼が語る處の吾が生の子は隨分呵嘖もし懲らしもすれど前妻の子に對しては何故か斯くする事能はず多くは遠慮する事に至ると云ふもの親子の親愛を欠く所以にして己

に愛情に於て實子と彼少年の間に一つの隔てある處なり、人心の靈うつらざる事なければ彼少年に於ても自然に繼母なればこそ斯くあるなれと思はしむるに至るなり。記者曰く實子よりも親切にされし人にしてこの如し親情の疎隔甚しからずや。

其二　實の母よりも可愛がられし人

私の母は實の母よりも私を可愛がります、私の四歳の時に實の母は死にましたから能く覺えませんけれども今のお母さんは實に私を可愛がります弟は腹が違ひます今のお母さんの子です、けれども弟よりは妾を大切にして呉まして弟へ袷せを着せても私には綿入を着せるやうにしまして、お小遣もお父さんに內證で呉れます、ソレをお父さんが知つて怒りました、私が惡戯をしてお父さんに叱られますとお母さんが傍からなだめてくれます、私が〇〇の學校へいつて居る時もお小遣がなくて困りますと內證でお母さんが送つてくれるソレがお父さんに知れて大さうお母さんが叱られたのです親父は叱る許りで少しも可愛がつて呉れない私は親父よりはお母さんの方がよいと思つて居ます。

某婦云この少年の繼母は生ぬ中の子なれは邪見にすると他人に言るる事のみを恐れて及ふかぎりの同情を繼子に寄せ彼がなす儘にせしなり母としての職務より論すれは非難すへき處ありと雖も吾子よりも前妻の子を愛すと云ふ一點は尋常の繼母には立優りたる心なり、併し人爲的愛情の過度よりしてこの少年は吾儘なる性となり遂に不眞の行爲をなすに至りしものなり記者曰く實の母よりも愛されし人にしてこの如し双方情の透徹を欠きしもの恐るべし。

其三　繼母に惜まれざりし人

この少年は某縣の者なり入院の時十六才、實母は彼れ出生後數日の後に死去し其年繼母は來りしなり、繼母の子種なく生れてこれも男子なり繼母は二人の子を生育して大方ならず辛苦せしと言へり、然ども前妻の子不眞に陥りて吾子は然る聞ゆなきを以てこの家庭も決して完全なりと言ふを得ざるべし、況んやこの少年の語る處事實ならむには繼母また罪なしとせず事實の判斷はしばらく他日に讓りて先つ繼子の言ふ處を記さん。

私は弟と年が一つ違ひますが二人の間は隨分仲がよいので、いつも二人で遊びますが私は惡い事をして母に叱られた事はありません、弟はよく叱られますなぜ私を叱らないかと思ひまして子供の時から不審に思つて居たのですがある時お母さんの針箱から錢を廿錢持出して二人で菓子を買つてたべました、この事は弟が

貯金でアの針箱に銀貨がある持つて來やうかと言ますから持て來いト言ましたら直ぐ持つて來ました二人で買にいつて裏の物置でたべましたさうすると親父が非常に怒つて私に散々小言をいひまして私一人で致たやうになつて仕舞ましたから殘念で仕様がない、母に言ましたら兄の事だから致方がない是からあんな事をしてはいけませんトこれも私一人の樣に言ひます其からと言ふものは二人でした事もいつも私が勸めてする樣になつて叱られるのは私一人です親父は弟を叱つた事は一度もない弟の顔を見るとニコ／＼して居て私しがゆくと強い顔をする、母は別に私を憎がると云ふ事はないのですが、二人で遊で居ても弟の方はいろ／＼と世話を燒いても私はマヅ構はん方で、親父が歸つて來ても弟が居ないとどうした何處へいつた早くよんで來いなど丶言ひますが、私なぞは外に遊んで居ても呼れた事はない、私が尋常小學を卒業した時は何とも言ない感心だともよく卒業したとも言ないで弟が卒業したら大喜びで、今日は魚でも買てたべさせるがよいなぞと嬉しがりました、私が死んだ母の實家へ遊びにゆくと爺さんが喜んで大事にして來れますから、家へ歸れてゆくとソレを知つて親父が叱ります、餘り悲しいから爺の處へ逃げてゆくとよく來た母のない子ださぞつらかろふなぞと言つていろ／＼なものを呉れます、私も家に居るのが嫌になつて一夜あそび歩いて翌日歸つて來た事があります、然うすると親父が怒つて私を縛りました、ア丶つまらないと思つてそれから遊び出しましたものだからとう／＼感化院へ來るやうに成りました。

眞鍋云この少年の如き其性質は温和にして前途望みある者なり、父は相應の學識を有し相應の信用ある人なり、後妻また決して輕薄なる性を有せず繼母としてあしき人にはあらず、さて父母及び子の三人ともに尋常の性格を有し皆な多少の愛情を以て集りて其結果斯の如しこれ其原因いづくに在りや。

其四　短刀を持出して屑屋に賣りし人

この少年は某華族の家扶の一子、十五才にして入院せり、この少年浪費する事度なく其使用する處は飲食、演劇、寄席、等を主とし浪費ます／＼つのりて家の什器を持出して賣却し遂には他人の物品を竊取するに至る其の初めは繼母より彼が歡心を得んとして多額の小

違な與ひしより初まるなり彼は兄弟なく父は五十歳母は三十歳と聞ゆ。

私のお母さんは極く私を可愛がつてお父さんには内證でお小遣をくれました芝居や淺草なぞへ連れてゆかれてもお前にこのお小遣をやるから好な處へいつて遊んでお出といつも五十錢くれたり、七十錢呉れたりしました、家に居てもお客が來た時なぞ遊んでお出なさいと言つて三十錢位くれましたお父さんに知れると呵られます、私はお母さん位いゝ人はないと思つて居ましたが、私もお友達が段々多くなつていくら小遣があつても足らぬ樣になりましたからお母さんに下さいと言つても然うはいけません、今月は最早八圓も遣つたからいけないと言ます。ソコで家の品物を持出しました初めはお父さんに知れずに居ましたが短刀を持出して屑屋に賣た處が、其の短刀が殿樣より拜領した八釜しい名刀だと云ふので直ぐ知れまして、其より段々調べられまして賣た品を皆な白狀しましたお母さんがいろいろ言譯をしてくれましたので免されましたが、其の後伯父さんの家へいつて衣類を持出してそれで感化院へ來たのです、お母さんは



夏の夕暮

私の事を大事にしてくれました、今でも逢たく思ひます、私がお父さんに縛られた時はお母さんは大さう泣きました、皆な妾しが不行届だからどうぞ勘辨してやつて異れとお父さんに取着て泣いたのですソレでお父さんも繩を解いてくれました離縁になつたお母さんなぞは無暗に私を叩り廻して許り居りました今のお母さんには一度も叩られた事がないのですから。

眞婦云この少年の繼母を呼ひて面談せしに彼は紅粉を裝ひ美服を飾りて來りしなり其人となりを見るに優柔不斷にして一家の妻としての資格に於ては大に欠る處あり、此婦人は決して家庭を掌りて子女を養育するの能力を有せずと認めしなり、然るに其夫に問へば云く妾は穩厚にして慈愛の心深く、伜を愛育して能く介抱をなすのみならず、召仕の者に至るまで慈愛の情至らざるなしと。嗚呼。世の父たる人猛省せざるべからず。

其五　父親は道樂の人

此の少年は廿才なり性質は穩柔なれども繼母に對しては常に反抗せむとする傾きあり不眞に陥りし原因一ならざれども其主因は繼母の處置よろしからざるより「ヤケ」を起したりと自ら言へり先つ彼と彼が繼母と語る處を記すべし。

先生わたくしの母は能く尋ねて參りますがアレは私を大切に思つて來るのではないので、全く父親に對する義理一ぺんでやつて來るのですから私は少しも嬉しいとは思ひません、實にづるい女で彼れは藝者で柳橋で有名な○○と言つた女で私の母が死んだのちに彼が後妻になりました、父親は女道樂で母の存命の時から彼れに關係がありました母が言ました彼の女がある許りで妾しはこんな難儀をします妾が死んだなら必らず彼れが家へ這入るであらうソレも定る因縁と思へば致方がないお前も彼の女に憎まれぬ樣に穩厚くしてくれと度々言ましたが私は彼の女を親とは思ひません先生彼れは口が達者でうまい事を言ます、親父の前なぞでは私を大切にしましてモシ此子が病氣になつては妾はお醫師樣へ御願を掛て濟ますなんて嘘ばッかり言ふのですソレを父親は眞實と思つて、アヽ世間では繼母を惡いものゝ樣に言ふがお○なぞは心懸がよいから子供は仕合せだなどと言ふのです、けれど父親が居ない時は恰も別人の樣で私が少し夜など遊んで歸ると直ぐ父親に言つけます○太郎はどうも近頃は惡い遊びをする

やうだの女郎買をするのと宜加減なことを拵えて言ますから父親は腹を立て私を打擲ます私も馬鹿〳〵しいから父親と喧嘩をしました、一体わたくしの親は子供を打など丶言ふ事はないので呵つてもよく理解きかせまして穩やかに小言をいひましたが四五年このかたは無性に嚴しくなりまして直私をなぐり付ます、私だッて彼の女めが父親を焚付やがると思ひますから默つて打れては居ませんとう〳〵「ヤケ」で遊び出しました退院したつて彼の女が居る中は家へは歸りません歸つたとて一日も居られますものか。

此の少年の語る處にては繼母は餘り心術のよろしからぬ者の如くに聞ゑたり、父の語る處によれは後妻は若い時より苦界におりて有りとあらゆる辛酸を嘗め苦勞を重ねたれは人情にも通し他の思ひやりも淺からず、故に倅に對しても深切なる介抱をなしたれども彼はいつも母の言ふことをは用ゆる事なし全く彼が心掛よろしからざる爲めなりと斷言せり」繼母に面會して其人となりを見れは極めて怜悧にして世故に通し辨舌も人にすぐれ能く人の氣を逢迎して應對頗る巧みなり。

先日は彼が病氣の由お知らせ下さいまして早速に參院ます筈で御坐いましたが妾も風をひきまして心ならず御不沙汰をいたしました妾もあなた彼が病氣と聞まして夜るもよく眠みません位心配になりましてどうぞ早く直るやうにとそれは大体心配いたしたのでは御坐いません、お蔭さまで快くなりましたさうで大安心で御坐います妾が斯様に度々あがりますのを家でも、さうゆくには及ばぬと申ますけれど妾はまた朝晩心にかゝりまして御承知の通り實の子では御坐いませんから邪見にでもいたすかと思はれては詰りませず十歳の時より手にかけましたので實の子に少も替りはいたしませんから心配になるので御坐います、どうも一日も早く改心して歸つてくれますれは家でも喜びませうし妾も安心いたします、どうか彼にお申聞下さい何なりとも入用な物があらば内々にて妾へまで申送りますやういかなる都合をいたしても彼に不自由をかけ度御坐いません兎角子供と申ものは親の心を存じませんで先日もこのお席で逢ましたら然う度々來てくれるには及ばぬなどと申すので御坐いますヨ親の心子知らずと申すはこの事で御坐いませう云々

この心はいかにぞやかくては名聞のために訪問するやうにも聞ゆべし。

新家庭へ注文

蜻蛉女史

一体家政學とはどういふものでせうかといふに、抑も此の世の中は如何にして出來ましたかと言ふ處ろから說明せねばなりませぬ、無論社會の根本は家でありま す、家が集つて町村をなし、それが集つて郡市をなし又それが集つて府縣を成し、一國を成し、遂に世界を成すのであります、故に家政學の本は家であるが、併しこの家は家屋といふ譯ではありません、譬へ何程道具立が立派に出來てゐても、その家は決して家庭即ち「ホーム」ではありません、而らば家庭は人の居る處であるかといふのに、一軒の家に祖父と孫とが居或は令孃と下婢とが居て種々仕事をしてゐたからとて、それで家とは言はれません、どうしても家の本は夫婦であつて、夫婦あつて始めて一家をなしたといふとが出來まする、斯樣な事は元より分り切つた事ではありまするが、慥かにして置かねば標準が違ひますから家の定義を定めて置くのであります。扨て一家に夫婦あり、夫婦の外に親あり子あり、兄弟あり、姉妹あり、又雇人あり、そこで一家の細君即ち主婦は一家の中心でありませう、然らば家は元來如何なる事を希望してゐるかと言ふのに、申すまでもなく一家內の平和、一家中の愉快でなくてはなりません、世に夫婦の中ほど親密なものはない、實に愉快の絕頂でありますけれども、併し家を持つた以上は夫婦ばかりが愉快を擅まゝにすべきではないです、家內一同愉快にして幸福を受けねばなりません。これが即ち圓滿なる家庭、即ち「スヰートホーム」でありませう、されば始めて御嫁となつた方はいづれも前途多望で、誠に愉快な境遇であります實に人間の一家を經營するといふ事は一生中の最大愉快、且つ最も高尙な事業であります、元來人間は萬物の靈長でそれ〳〵靈妙な機關を天から附與されてゐるのは他の動物と異つて最も高尙な生活をするといふ事が最後の目的でありませう、扨てそれに近づくには

社會の職務の中で家政學ほど高尚なものはないのであります。

斯くして女子が一軒の家を立派に治めて行くのは其家の幸福を進むるばかりでなく、社會に大なる幸福を與へる事になつてゐるのであります、然るに世の中には家政學は唯經驗によつて出來るものであるから學ぶ必要はない譬へば昔から學問のない者でも隨分、飯を焚く、子供を養育して來たではないか、といふやうな議論があります、是は甚だ間違ふた話で斯る議論をする人は到底高尚な家を作る事は出來ない人でありませう家政を立派に修めて行かふといふには普通學を能く修めた上、特別な家政の學問を研究せねばなりませぬ、然るに世の中には盲蛇物に怖ぢずといふ譬にもれず、眞の智識を持たずして立派な家を作らふと思ふ樣な大膽な者があります、丁度戰爭をするのに兵法も何も心得ずに敵に向ふやうなものです、されば家政學を學ばずして家政を執つてゐる處ろの家は唯形式的の家であつて決して精神の籠つた家ではない、されば家政學に疎い女子は、立派な女子とは言へないのである、又家政の學問を修めて女子の本分を盡すといふ事は女子の身の上に尤も尊ぶべき事である、乍去家政の學も唯理論を知つてゐるばかりでは不十分である、どうしても一軒の主婦たるだけの品格を備へ、その主婦の言行が夫を感化し、平日一點の疑ふ處なく其の良人をして安んじて家政の全權を委任せしむるといふ事にならねば十分とは言へないのであります。蓋し一家の主婦たるものは一家の盛衰興亡の責任を持つたもので、一家を金城鐵壁としてその品格を高め、その地位を進めるといふ事が肝要でありませう。

扨又家政に就て最も重んすべきは家風でありますから今その家風に就て申しませうに、家には必らずその家に存する家風がある、而してその家風の中心となるのは誰であるかと言ふに、それは無論夫婦であります。その夫婦の上に於て家庭の風をよく訓練し立派な家風を養成する任務は重に主婦の責任である、而してその家風は家庭の風氣が最も美しく純良でなければなりま

せぬ、而るに現今の如く過渡時代にて昔かたぎの家風は漸次破壞されんとして居る處故、家族の半分は昔風で其半分は現今の敎育を受けて居るといふ風であるから家風一定せず、其内には昔風が八九分を占め、文明的の新空氣は極僅かな家もあります。又或家には、文明が八九分昔風が一二分といふ有樣ですされぱその家風の相違によつて家族に對する取扱を異にせねばなりませぬ、扨女子が斯る家に入つて家政を擔任して行くに就ては主婦の境遇はどうであるか、隨分困難な場合が多からうとおもひますが、併し元來世間の男子が世に處する上に就て社會から眞の信用を受るのは妻を持つた時でありますそれは其人の内部に於て助けてゆく人が出來たといふ事を發表したからであります、即ち妻のした事は夫の行爲になるのである故に夫婦が精神上多年實行した事が、つまり後日の家風となるので譬へば正月の儀式は如何にする、子供に木綿着物の外は着用させぬ、又敎育はすべて中等以上の敎育を受けさする、又女子ならば高等女學校を卒業せねば如何な事があつても結婚させぬといふ風に家に一種の規律が出來る、今日までの日本でも隨分家風の定まつて居らぬではありませんが皆財產をやかましくいふ、譬へば此家の戶主は絹布の紋付を着る事は出來ぬ、下駄は表付を用ゐない、わら草履に腰辨當携帶の外は許さぬ近州邊の金滿家と言はるゝ人は皆然り、今日で言へば主人は如何なる場合でも三等汽車の外は乘らない、海の魚も一日、十五日の外は食するとが出來ずといふ風に金を增す考へはしたが女子の敎育や家の聲譽を保つとは等閑にされてゐます、斯る處ろへ今日の敎育ある女子を入れ家風を改革しやうとしても到底むづかしい。その人は精神を殺して家風に從はなければならぬ。

扨世間の家風には樣々あつて、有名な西園寺侯爵家に於ては正妻を迎へぬといふ規りであります、むかしから正妻を迎ふれば何か家に惡しき事が起るといふのであるそうな、今の侯爵もお孃さんはあるが正妻はない又黑田侯爵家に於ては敎育がすべて平民的でむかしは五十五萬石の大名であッたといふ考を持たせぬ樣、平

民的の氣象を養はれて今の侯爵は福澤先生の起された慶應義塾の寄宿舍に入り、大名の子であッても他の人と同樣に水も汲ませる當番が來れば掃除もさするといふ風であッたされば侯爵の家に在つては車にも乘らず大侯爵と同じ室にも居らるゝとを許されません、書生部屋の如き小な家を屋敷の隅に作つて、そこに起臥して居られた、段々勉强して大學豫備門を卒業し英國の最も有名な「ケンブリッヂ」の大學の二枚の卒業證書を得學位を得て歸朝せられた、そこで其祝賀會と結婚式とを兼ねて行はれた時家の憲法の一部を作られて、以來黑田家に生れた男子は諸外國大學の卒業證書二枚以上持つて歸つた人でなければ家督を讓らぬといふことを定められましたそうです、されば何れの家でも男子ならば高等専門の學科、女子ならば高等女學校を卒業さするまで、他へ緣付かせぬといふやうな大体の家法をきめて愉快に家の基を作るのはその家の妻君が中心とならなければなりません。

偖家の事は萬事良人と相談の上にて取極るのでありますが夫婦は互に友人として相談し、萬事を處理して行くのであるが、その間に禮式といふものを忘れてはなりません妻は良人に謀り良人は妻に謀り双方熟談の上事を極めて後日に於て決して迷惑の懸らぬ樣にせねばなりませぬ。

家風を作るは、まづ每日寢起の事、修學習藝の事、或は交際に關する事、譬へば親戚に慶事不慶事あれば手傳に行くとか、靈前に何を供するとか、その他萬般の家務を日記に記載し、これを數年實行し、研究して始めて家風が出來るのである、偖てこれを小兒や雇人に至るまで漸次訓練するのである、それには一日とか十五日とか赤飯をたき一家擧つて祝ふ時に之を教ゆるといふ風にせば、必ず立派な家風が出來るだらう。斯樣にして諸子が良家風の製造者として中興の祖として尊ばるゝでありませう。

偖一家擧つて愉快に暮し、晩食には家長の歸宅を待受て一同膳に向ひ、一日の事を互に語り合ひ、此上なき愉快となす又他へ遊びに行く時も共に一家擧つて行き

日頃のうさを晴す、併し夫婦の中のよいのを彼是いふ風があるこれは封建時代の遺習の然らしむる處でありませう。

それから家計の事に就て少しく申しませう昔しの凶年には黄金、白銀を北斗に達くほど積でも何の用をなさないといつたものです。交通機關のとゝのはない古代では實にその通りで實際黄金の財布を頸にかけつゝ路に倒れた飢人もあつたといふ、けれど今日は奈何なる大飢饉に遭遇しても決して其な事はありますまい、商業上の機關があつて天下の有無を相通ずる時に當つては外國から食糧を輸入して一時の急に應ずる事が出來る、けれど輸入が多ければ又それだけ國家の費へであれば結局國の損失となるです。それは兎も角もさし當つて物價は大騰貴をします米穀の如きは必らず四五割も上ります。品によりては倍以上にも及ぶ、かゝる際に當りて各種の產業は必ず衰へ、個人の收入も一般に減少し、收入の減少と物價の騰貴とで國民一同の崇るべき損失は著るしく世を擧つて不景氣の歎聲を聞くに至ります、その時に當つて狼狽するも最早遲い、されば心ある人は以前から注意して節儉を事とし平素無益の費を愼み、貯蓄を饒かにして眞逆の際に周章ないのが眞の獨立の人といふのです若し餘あれば足らぬ人に施して同胞救濟の一分を盡し慈善の旨にも叶ふべく、昔時は一村一鄉の內に備荒の設けありて、餘裕の穀米を蓄藏し置き或は芋を植へ稗を作りて凶年に供しましたけれども、今日は去る面倒なる手數を要せず又迂遠の事をなさずとも、貯金によりて何時でも急時の用を辨ずる事が出來れば備荒とおもひて家々に餘裕を剩す事は肝要です。但し金錢は米穀と異りて使用し易く、且つ動もすれば奢侈贅澤に流れ易きものですから餘裕を貯蓄することは米穀の如くに確かではありません、けれども心の剛な人は必ず已れの慾に打克ちてこれを實行し、不時の用意に應ずるものです。さてそれを實行するにも種々の方法があつて嚴儉を旨とするもあれば又寛裕なのもありますが要するに節儉忍耐の主意を貫くのが第一です、唯習慣を變せずして徐々と行へば、

譬へ凶年の準備でなくとも一家の經濟上に於て大なる益があります。

父母の責任

ドクトル　川瀬元九郎

▲幼童の危難

幼年の時より成年に至るまで歩み行ける道すがら、數千の陥穽ありて動もすれば之に陥ゐるものあり、是れ害悪不測の陥穽なり、幸に此の危険なる陥穽を避けて、眞直なる一條の正路を進み行かんには、適當の案内者なくんばあるべからず、父母は取りも直さず此案内者の位置に立てるものなり、故に幼童にして夙に悪習慣を得て此陥穽に陥る者は之が案内者たる父母の指導、宜しきを得ざるの罪なり、例せは父母其子に命令する所あるも直ちに強制執行を命せざらんか、父母の耳目を避けて命に背くの行爲をなす實に易々たらんのみ、或は幼童が邪路に踏み迷はんとするに際して、之が父母たる者絶て之を非難することなく之を責罰することなからん乎、幼童は忽ちにして父母の命に服從するの義務あることを忘却し、已が随意の道を進み行くこと、ならずんば幸なり、斯る幼童は既に深く零落の道に踏み込みたるものにして、罪悪を犯すの手段方便を講究するの外餘念なかるべきなり、故に其子供をして不正不義の陥穽に陥ゐらしめざらんと欲せば、速かに厳密なる注意を以て其命令する所に從はしむるの習慣を養成せしめざる可からず、賢良なる父母は不條理なることを以て其子に強ゆべからず、其子に對して正に苛刻と見らるべき行爲あるべからず、其子の權利を害すべき所業あるべからず、若し父母として斯る行爲ありたらんには其子の尊敬心を失ひ、如何に警戒を加ふるも、或は之を責罰するとも、絶て其効なかるべきなり、去りとて又た多くの母の如く幼童を放縱して置かんも亦た決して其宜しきを得たるものにあらず、今茲に一の幼童あり、非常の暴威を逞ふして殆ど制御する

こと能はず、其父母兄弟姉妹之に手を付るを懼れて其爲すが儘に打ち棄て置きたりとせん乎、遂に其幼童は全家族中の獨裁君主の如くなり澄すに至るべし、斯の如きは實に家庭の一大不幸といふべきなり。

幼童にして自巳の道を踏み行き、毫も他の牽制を受けずして其欲する所好む所を行ひ、自巳の腐敗したる性質、訓錬なき意志の命令に從ふの外、何等の法則をも知らざらん乎、其幼童は成長して後他の權利を顧りみず、天理人道に服從するの義務あるを知らず、放縱無賴の中に一生を送りて、累を社會に及ぼすこと必せり、是れ其父母が家庭敎育に全く無頓着にして毫も注意する所なかりし罪に歸せざる可からず。

▲信賴と純正

幼童の陷ゐり易き不善の他の陷穽は詐僞是れなり、幼童が親の目に觸れざるに乘じて其の命に背くことあり、其母之に向つて『汝は我が命令に背きしよな』と詰責せんに、其幼童は半ば恥ぢ半ば罰せられんを恐れて、其實を告げず僞りて『否な』と答ふ、然るに其母は愛に溺れて嚴重に其事實を追窮せざるが故に、其僞りなることを見出すを得ずして終るなり、斯くして一度詐僞の事を働けば從つて他の詐僞を働くの端緒となり、階梯となり漸を逐ふて詐僞に詐僞を重ね、終に誠實、正直、信義の諸德を全く沒却するが故に成長するも、信用と責任とを要する職業に就くこと能はず爲に悲境に沈淪すること必せり、故に世の父母たるものは其子の幼稚の時より信義、正直、誠實、純正等の德性を養成して、人格を高めんことを要す。

▲惡習慣

今吾人が目睹する幼童の大部分は、殆ど何等かの惡習慣に感染せられざるなし、吾人は大都府の街頭に於て往々左の如き事實あるを見る、身に襤褸を纏へる小兒の辛ふじて歩行することの出來得る程の年恰好なるが、街頭を徘徊し居る內塵芥の中より捲煙草の吹殻を拾ひ取りて、如何にも愉快げにスパ〳〵と吹かし行

く樣、最も上手なる喫煙家と見ゆるばかりなり、凡そ煙草を好める幼童は間もなく「ビール」其他の酒類を飲み習ひ、終に進んで酒客となり、其身を持ち崩さんは最も見易き順路なり、既に此等の悪習慣あれば概して他の悪習慣が之に伴はざるを得ず、斯く他の悪習慣が伴ひ來るに於ては其精神を一層陋劣ならしめ、其體軀を一層衰弱ならしめ、卑猥陋醜殆ど記載するに堪へざる行爲を敢てして恥ぢざるに至らしむ、嘆ずべきの極みならずや、されば、卑猥不潔なる行爲談話を爲す悪童は決して之を友とすべからず、斯る悪童は之を忌み恐るゝこと恰かも虎列拉病、黒死病の如き傳染病患者に對すると同一ならざるべからず、肉體上に於る傳染病の害毒如何に甚だしと雖も身心を不潔となす悪習慣の害毒には遠く及ばざるなり、而して當代の幼童中に斯る悪習慣の廣く傳播しつゝあるは蔽ふ可からざるの事實なり、殊に學校就學の幼童にして既に何等かの悪習慣に感染し居らざるものは稀れなりといふに至つては恐るべく亦嘆ずべき次第ならずや。

父母が其の幼童に對する職責は、一にして足らずと雖も、中に就て罪悪不善の何ものたるを教へ、且つ悪友を避けて腐敗墮落に陷らしめざる樣極めて注意を密にせんは、其職責中殊に大切なるものと謂つべきなり。資性純正なる幼童は罪悪不善の初めて來らんとするとき是れを避け、既に罪悪の淵に沈淪せる者を悪み避けること、恰かも傳染病若くは毒蛇を恐るゝが如くなるべし、男子生れて幼稚の時より青年に達するまで、意馬心猿に驅らるゝことなく、心火情焔に燃やさるゝことなく、不潔なる想像汚穢なる思念の爲めに曾て害せられたることなしとせん乎、眞に是れ無上の幸福と云はざるべからず。家庭教育に於ける父母の責任は實に玆に在るなり。

夏季と小兒

弘田博士談

▲海水浴の適不適

避暑に行くと云へば多數の方は海邊へ行かれるやうで

すが、此事は熟考しなければならぬ。殊に幼い小供を伴れては一層御注意を要する。一体海邊は場所によると温度は慥かに東京よりは高い。只海上から吹來る風のために涼しく感じるので若しも其風を遮つたならば、餘程暑い、つまり、暑氣が軟かで無くして、風故に、堪へ易すく感ずるのです。故に夜分雨戸なんぞを閉めると、室内は隨分堪へられぬ程暑い。斯う云ふ所へ小供の强弱、性質、年齢をも撰ばずして、只海邊が空氣が好いからと云つて伴れて行くのは、不當です。其邊は、充分に醫者に尋ねて、研究することが必要です。或時には海邊が最も好いと云ふ時と、或時には海邊よりも山の冷氣のある所が遙かに身體を益する場合もあります。或は小供の體質に依つては、海邊が全く不適當なものもあります。夫れで一概に空氣が佳いと云ふのみで海邊に行くと云ふとは宜しくない。海邊も空氣は宜しいけれ共、山も亦非常によろしい、只空氣の好いと云ふ點から云ふと、山も海も兩方とも差して變りは無い。毎年九月頃に成ると、そろ〳〵海邊から小供を伴れて歸つて參りますが、その小供を見ると全身に、「アセモ」、又は「チブ」なんぞを拵へて歸つて參る人がある。夫等はつまり小供の身體に不適當なところへ行つたが爲めです。其邊に付ては母たる人は、流行に附和せずに、醫者に計つて、適當した方を取らぬといけませぬ。昔から日本では湯治と云ふものは、身體に利益に成ると云ふことを唱へ來つたのですが、これも强ち誰れにも善いと云ふ譯には參りませぬ、矢張り人々に依つて適不適があるから、其邊は能く考へて、取捨しなければ成りませぬ。

▲海水と天性

年齢十歳位に達した子供であると、大槪は游泳を好みます、これをさせるのも身體に宜しい。夫れ故游泳と云ふ目的で行くのなら無論海邊で無くては成らんが、併し人に依つて適不適があつて、稀には天性水に這入ることが出來ない人がある。例之ば、海の中に這入ると不快の感じが起つて動悸が打つて堪へられんと云ふやうな人而う云ふ人を無理やりに海に入れるのは宜し

くない。近來海邊が宜しいと云ふ事を一般に言ひ出したものですから中には迷信して天性這入れない者までを無理に入れやうとする人がある。例令ば牛乳は利益に成るものだと云つて居るが中には牛乳を呑むと必ず腸に異狀を起して堪へられんと云ふ人がある。それと同じやうに海水にも注意がいる。

▲果物の注意

追々果物も多く出る時季に成り小供の食物としては極く適當ですが、矢張或る年齡以上の小供で無ければ用ふることは出來ませぬ。且つ日本の商人の果物を賣るのを見ると、未成熟のを賣つて居るが、歐羅巴では果物は成熟したものでなければ賣りませぬ。何故日本では斯く未熟のものを賣るか一ッは先を爭つて市場に出すと云ふこと、、今一ッは長く置くと虫が付くと云ふ所からでせうが、どうか商人に於ても自已の利益のみを計らず、公德を重んじて人に害を與ふるやうなものは賣らぬやうにし、又買ふ人の方でも、注意して半熟のものは買はぬやうにせば、自づから商人の方でも氣を付けるやうに成りませう。夫れで先づ今日のところでは、小供に果物を食べさせるには、寧ろ煮て食はした方が危險が尠ない



▲男兒と女兒

世間で能く云ふ男の兒は女の兒に比較べると、育て惡い、直きに熱などが出て、來る

から心配で成らぬと云ふが、これは決して學理上にない事です。只男の兒は、身體の害に成るやうな事に多く接するので例之ば女の兒であるとあつい時寒い時室内に這入つて靜かに遊んで居るが、男の兒は而うはいかん。寒風の吹荒む時でも外へ出て、飛んで歩き、又酷暑の頃でも蟬をさして歩くと云ふ風で、害を及ぼす機會に多く接するから自然女兒に比較して病氣をする塲合が多い、男兒と雖も親が注意して居れば、多く病氣することは無からう、先づ私の實驗上、男兒も女兒も抵抗力は左したる違ひは無いやうに思ひます。是から追々夏に向つて來ると、食物其他遊戲の點に於ても、男兒はどうしても女兒よりは活潑であるから自然害を蒙る事が多いでせう。

▲風邪と吸入

風邪に限らず何でも氣管に故障のある病氣には吸入をして遣るのが一番よろしい、五歳未滿の小供になるとどうしても含嗽をする事が出來んから、其代りに吸入をして遣ると、鼻の中へも咽喉にも藥が這入るから、只咳が出る位の風には宅で吸入をしてやれば大抵は全快ります。けれ共是を行るに就て一寸注意すべきは、最初から吸入器の口を小供の方に向けて置くと、湯などが多過ぎた塲合には其口から熱湯がはしり出して小供の顏に懸つて思はぬ怪我をすることがあります。其他又どんな危險が起るかも知れないから、最初は必ず吸入器の口を他方に向けておいて、故障無く息が出るのを能く見濟した上で、小供の方に向けて遣るが宜し猶注意すべき事は、器械の取扱ひで此程も或る所で、吸入器が破裂した爲めに、小供を始め、傍の人も大變火傷をしたと云ふ事を聞きましたが、其原因は矢張り器械に損所が出來たのを、普通の鑄掛屋に直させたから、其直し方が惡かつた爲めに、遂ひに間違ひが起たと云ふ事でした。何しろ一つ間違ひますと大事に立至るから注意の上にも注意を加へたいです。

夏の病氣

急性腸加答兒は勿論赤痢、コレラ、腸チフスの三病は

其病毒天然痘又は麻疹の如く瓦斯躰に非ずして固形躰なり換言すれば其原因は下等植物又は下等動物にして早くいへば「虫」なり而して其人に傳染するや空氣に依て來る事なく只食物又は飲料に混じて躰内に入るなり故に口より入ものに注意すれば是等の疾病に罹る事なし注意とは何ぞや煑沸の二字のみ煑たるものを喰ひ沸したるものを飲めば安全なり何となれば病毒は「虫」なるがゆゑに煑沸すれば彼等皆死して無害となるを以てなり。



▲腸加答兒

慢性と急性とあり慢性は大抵結核(肺病)なるがゆゑに慢性のものは既に醫治を加へつゝあるべく素人にして承知すべきは急性の者なり、原因は胃加答兒と同一なり、即ち不攝生(酒の飲過、不消化物過食、腐敗物の飲食等)、徽候は腹痛、下痢、其療法は不消化物を禁じ温き消化し易きものを食すべし、腹部を温暖に保ち腹痛には蒟蒻の温めたるものを貼てる事良し、一日以上治せざれば醫診を受くべし裏急後重(しぼりはら)あるものは秘する事なく早く打明くべし殊に赤痢の時然りとす。

▲ねびゑ

熱きが爲めに夜中寢具を剝ぎ又は冷所に眠り内臟の感冒するものをいふ之に因て腸加答兒を起し又他病の誘因となることあるべし。

▲脚氣

は米の中毒なりとは先年竹中醫學士の説に米は運搬、

貯藏の爲め其中に一の毒素生ず人は此毒素に罹るなりと元來脚氣の原因に就ては學説一定せず貧血説、寄生蟲説、瘴氣傳染説、細菌説、魚毒説、自家中毒説、米食説等あり。

本病を豫防するには米を全廢するには及ばず米六分に麥四分を混じたるものを常食すれば宜し軍隊監獄及之を勵行せる學校等に徴して明なり、未決監には脚氣ある理なり、何となれば已決囚は病人の外勝手の食を許さゞるも未決囚は自費若くは差入等にて普通辨當即ち米食を許すものなればなり、又た麥酒はアルコール少く又少々ながら滋養品を含むゆゑ脚氣病者には頗る良き飲料なり。

避暑のしをり

私の專門は小兒科ですから、小供の避暑に就て少し許りお話して見ませう。避暑は全体から見ても海邊より森林の在る閑靜な山の方が適當で、小供にしても其通り、餘り壯健でない者を海に入れるよりは、山で運動させる方が好いのです。

西洋では大槪何處でも小學校の生徒が夏期の休業中を市街に置かない事に努めて居りますが、特に獨逸の如きは旺んに此事を行つて居ります。其行り方は中流以上の家庭に在る小供が學校で搆はなくも、家庭で何處へでも遣はす事が出來るから、是等の者には搆はないで家庭に托し、家庭で搆ふ事の出來ない中流以下の者に對して、學校が是等生徒の体質を調査して、百人でも百五十人でも一纏めにして廣い運動の十分に出來る山に四十日を一期として送り込んで、炎暑を避ける様にして居ります、無論之れには教師も附いて行つて、一日に一時間か一時間半位宛、學術上の講話抔もし、醫師も付添つて居るのですから、家庭で少しも心配する事なく、學校に托されるのであります、斯う云ふ事が慈善的に成立つて居りますから、夏になつても小供の事に少しも心配なくして居られますが、日本にはこんな組織が少しも出來て居りませんから、中流以下の小供は此暑い最中折角學校が休みでも學校に出る時よ

りは多く塵埃の多い市街に遊び歩く事になりますから、其が爲に種々の病氣杯に罹る者が澤山あります。斯う云ふ狀態ですから、我國でも慈善的にこんな樣な事を組織して、中流以下の小供を保護する樣にして貰ひたい。東京の近所では何處の山が避暑に適當して居ると云ふ事は、一向取調べた事がありませんから、何處と云て指定する事は出來ませんが、先づ朝夕に氣候の變化のない處で、樹木の多い空氣の好い、光線の不足しない處でなくては、極好いとは云はれません、其れから塩湯のある處が一番宜いので、此塩湯に一日一回位づゝ入つて、適宜に運動の出來る處が最も好い。小供は空氣と光線さへ好ければ、食物杯は少し位ゐ惡



くても、生育上少しも差支へないのですから、夏はどうしても、山の樣な閑靜な處に遣る必要がある。兎に角小學校の暑中休みを、東京の樣な塵埃の多い市中に置いては、身体の爲めに大變惡いのですから、山には限らないです、田舍でも海邊でも暑を避ける處に行つて、保養させる事が急務であります。試みに避暑から歸つて來た小供に就いて調べて見ると、体量から營養が全然違つて居ります。

右は小兒科專門瀨川博士の避暑に對する談片なり。

朝顏の培養

▲移植　まづ鉢の徑五寸深さ四寸位のものを用意し、

ソレへ培養土（滞泥にてよし）を入れて、朝顔の苗を移植させるのですが、鉢は勿論素焼の荒いものを選んだ方がよい、瀬戸類の鉢は水の乾きがわるい、又移植するのにも無暗としては不可ない、最も適當な時期は双葉から本葉が一枚生た時です、日和のよい夕方に苗を竹のヘラで、深く土にさし入れ根を損せぬ樣、少々土をつけて拔取り、鉢に移植させるのです、移植したらば直ちに水を施して二日間許り日光を遮つてソレから外へ出す、置場は空氣の流通のよい日當りの最もよい所を選ぶのが肝腎です。

▲支柱　支柱は朝顔の蔓を纒はせるもので、帽子作り、行燈作り、櫓作りの三の種類があつて、これは竹で作り細い針金で結び附けて宜いが、細い寒竹を用ふると最も高尙に出來る、之には蔓をなるべく、下の方へ纒はせるのが良いです。

▲灌水　水は朝顔の乳でありますから、注意が肝要、水は汲置きの水を用ゐるのです、冷たい水を懸けると、花や葉の光澤を失くすものだ、よろしくない、豫じめ桶を用意して、これに井戸の水を汲み込み、一日日光にあてゝ、温氣を含ました後使用します、河水泉水のは其儘用ひてもよろしい灌水の數は普通毎日夕方に一回施せばよい土用中の樣な暑さ烈しい時は、鉢の内の水分が乾き盡して葉の凋れる事がある、此際は正午頃尙一度水を施さねばならぬ。

▲育花　は朝顔の培養上最も大切な事柄で、其遣り方は蔓の伸びるに從ふて葉際から出る枝を未だ伸びない中に悉く摘み去り、本蔓一本丈を育て、蔓が三尺位に伸びると其先を切り留める、蔓が多いか又は長いかすると、自然養分が分れるから、花が小さくなるを免れない、其處で最早蕾を附ける段になれば之を一隔てに摘去り、一節から蕾が二も三も出るときは、矢張一を殘して他は皆摘去るのである。それから花を開けば毎朝賞翫した後で花がまだ萎まない内に、蔓の着際から花莖を剪取つて次の花に精氣を殘させる、斯くすると終り迄花の見劣りがしない。

偖追々花が小輪に傾く氣味になれば、肥料水（にしん

の養汁）の量を増し灌水の量を減せば良い。又變りものを培養する法は、大輪ものと大抵は同じです。要するに朝顔の栽培は葉を小さく、蔓を細く、花を大きく作るのが名人である。

▲効用　朝顔培養の効用は他の植木類と同樣に、成育させるのが愉快な計りでなく、七月上旬から九月下旬迄、毎朝美麗な花を開いて目を悦ばせ、自然に早起の慣習を作つて新鮮の空氣を吸收し、大に衞生に益がある。全體夏期の花には三ケ月間も續て花の勢が衰へないものは外に見當らぬ、其上に朝顔は栽培も誠に容易であり、且此植物の特性として年々種々の變化を生ずるから、非常に興味を感ずるのである。其變化を計るには甲の種類を母とし、乙の種類を父として媒合させる様な工合に適ると、頗る面白い結果を奏する譯である。凡て花卉は世の文明に赴くに從つて、益賞美するに至るもので、歐米の諸國にても花卉競進會が盛に行はれ、又時としては紳士淑女などが、各自愛育のものを持寄つて品評するが、此等は至極優美高尚な遊興であらうと思ひます。



土用ぼしの栞

追々夏も三伏の暑に向ひたれば土用干の注意二三を左に御話し申すべし。

元來衣服は毎年二度づゝは土用干と寒干とをなすべき事、又た衣類は毎月一回疊み直す必要ある事、且つ着物の疊み目には綿を挾み置く事

紋には畳紙をなす事、次には簞笥の中に虫防を施す事。
土用干の必要なるは暑中土用の風に當てゝ大氣に曝し、克く濕氣を除きて虫喰みの害を防ぐが故なり、されど土用干のみにては滿足すべからず、尙ほ又寒中寒冷の氣に當てゝ十分乾燥せしむべし、是れ濕氣、汚れ氣を取除くの功用あると共に、土用干の殘餘及び其の以後發生せし食衣虫を悉く驅除し終るべし、故に少しの手數を要するも毎年土用干と寒干の二つを忘るべからず。

以上の外尙ほ十分に爲んとならば一ヶ月に一回簞笥又は長持より貯藏の着物を取出し、之を疊み直すの面倒を見るべし、其の効用は衣類に其の時々の空氣を吸はせ、簞笥の中の蒸氣を散ずると共に、一は疊み直す毎に幾らか折目を違へ、長く一所をのみ壓搾するより起る所の折目切目又は仕舞褶の憂を來すとなし、されど之を行ふには好き天氣を選ぶこと肝要なり、曇天雨天は元より、殊に霧摸樣の日などには却て衣類に濕氣を與ふるものなれば、可成外氣に觸れぬ樣仕舞ひ置べし。

右は木綿物、絹物は勿論、毛織物も亦た同樣、殊に濕氣は毛織物に大毒にして、少しく注意を怠れば汚點を醸すこと多し。

以上の方法を實行すると共に尙ほ必要なるは、簞笥長持の内に豫め虫避けを爲し置くの方法なり、之は樟腦の如き香料を衣類の中へ添へ置くことなれど、其の香料を用ふるに就て注意すべし。

一体絹物に香料を用ふるは惡ろし、何となれば樟腦は香氣餘り激烈にして、却て衣服の質を痛め、色合を變色せしむる恐あれば、寧ろ丁子を用ふるを安全とす毛織物、毛皮類には樟腦を可とす、次に最も功能ある方法は松の青葉をふりまくなり。

夏の洗濯

夏は洗濯の季節なり、袷、綿入などゝは違ひて單物は甚だ汚れ易く、垢染み易きものなれば怠らず濯ひ洗ふが肝要なり、又冬衣、夜着、布團等は梅雨の時候に遇

ひて黴を生ずるものなれば時を過さず解きほどきて洗ふべし、若時過ぎて黴の固まるに至らば後悔詮なかるべし、尤も絹衣にて黴の患なきものは洗はぬがよし。

さて洗濯の方法は何人も知らるゝ如くに注意すべきは用水なり、洗濯に用ゆる水は場所によりて大いに異なり、鹽分、鐵分、泥分を含み居れば是等の硬水を用ゆるは甚だよろしからず、蒸餾水若しくは雨水の如き軟水を用ゆべし、去ながら洗濯用水は孰れも多量を要するものなれば雨水などにては間に合ふまじきゆゑ、沸騰せしめたる湯を用ゆる方よろし、さすれば石鹼もよく湯に溶解して洗濯の効も大なり。

○洗濯にかゝる前よく天氣を見計ふべし、雨天續きには大物(夜具、蒲團其他)の洗濯に取かゝりて中途にて雨に遭ば大に難義を極むる事あれば注意すべし、木綿の單物を洗ふには清水又は米泔水にて石鹼を用ひ、よく〳〵揉みて洗ふべし、殊に襟、袖、臀、腋の諸部は汚れの甚しき所なれば氣を付くべし。

○絹布は成るべく洗はぬ方よろしけれど垢など着き居れば致し方なし、石鹼を溶かしたる水、又白水に浸し揉まぬ樣、打振り、動かして洗ふべし、「フノリ」をもて洗へば其効著るしけれど「フノリ」代の費用を用するなり、而して地質の强弱色合等に注意し、損傷なき樣にすべし。

○白地の物を純白ならしめんと欲するは手にて揉む位にては容易の業にあらず、其前に苛性曹達にて煮るなり、されど此方は地質を損傷する患あれば、ハンケチなどの小物を除くの外は絹地に用ゆるは惡し。

○毛織物を洗ふには微温湯と石鹼を適宜に混和せしめこれを以て濯ぎ洗ひ、よく〳〵絞り度々ふりて桿にかけて乾かすべし。

○フランチルの黄色に變じたるを洗ひ落すには白石鹼百七十匁、硼砂二匁五分等清水に混和し洗ふべし永く水に浸し置くはわるし、暫時にして乾かすべし。

○彩色ある織物を洗ふには熱湯に灰汁を混和して洗ふをよしとすれども絹物に試むべからず、深紅色の布を洗ふには、糠に沸騰したる湯を注ぎこれを漉し、布を

涵し洗ひ終りて再び熱湯を灑くなり、酢又は石鹼水にレモン水を混和して洗ふをよしとすれど未だ試みたる事なし從來の洗濯法は兩手を以て揉むより外は他に良法なしとしたれど。斯の如きは徒らに時間と勞力を費やし多くの疲勞を覺え且つ手のひらを痛むる事なり。

○フラチル類を洗ふ　は微溫湯をよしとす、釜にて煮るよりも日本洗にて手にて洗ふ方收縮少し、石鹼は好ましがらねど汚甚だしきは止むを得ず、透明石鹼か又はアンモニヤを用ふべし、洗ふにも灑ぐにも微溫湯を用ふべし、熱湯も冷水も共に收縮甚敷小いさき物となり了る故也、干方も風乾とし日光に曝すべからず生乾の時早く取入れ火熨斗をかけて濕氣を去るべし。

○白の新フラチルは必殺膠を塗てある物なれば、洗濯するには一夜湯に浸し置べし、尤も一夜を經れば湯は冷水となれども始め漬る時湯なればよし、かくせざれば斑點を生ずる事あり。

○色物の綿布を洗濯するには其染工の用ゐたる染料何なるかを探り知りて、成るべく其染料と同性の品にて灑ぐを肝要とす、たとへば紅には鹽酸錫を用ゐ綠黃には綠礬油を用ゐるが如し、扨洗ふ順序　大槪の物は始め米水にて洗ひ油汚ある物はホワイト（菩提樹の類カタキ木也）の板上に廣げて汚ある部分を海綿又は羅紗に卵黃を附て塗り竪橫別々に摩擦して汚を去り、然て清水に振り灑ぎ三回目に其染料を和したる水にて灑ぎ、猶是にアラビヤゴム少許加ふれば更に美色を出し、綿布は引上げたる儘決して絞る事勿れ、雫の垂るに任かせて勿論陰干に爲すべし、もし猶おちずば再度洗ふもよし。

○總じて洗物の干場を定むるに日面よりも風通りよき日陰の方利益多しとす、何にても日光に曝すは速に乾けども地を痛めよわらしむ、故に日に干たる物は速かに取入るゝ事を怠るべからず。

▲糊附の心得

○京坂地方にては古より習慣として洗濯物には必ず糊を附けるが定なる故に、誰にても糊附法を知らぬ者はなく啻に糊附のみならず、其後の敷のし打方等いはで

も知れ切たる事なれば、東京地方はとかく粗暴なる習慣有て、洗濯物も多くは其職工に任せて念とせず、さるからに下婢も常服寐着の洗濯をムヤミに洗ふのみ、洗濯屋と號するも糊附とも後の始末を知らず、皺だらけに強張らすの外なし、拙き事論外にて、再び外着とは爲べからざる物となる、糊附には法有後の取り扱を上手にすれば、新物の如く成也、東京の婦人の爲に其法を記さん、先洗濯して乾たる後糊を單物一枚に丸半片の半分斗と見積りて水に和し、(但し始より水を多く入べからず掌にて糊をとき乍次第に水を増すべし）小粒の出來ざる樣に克く攪和し、扨衿廻り裾等強張てあしき處々を水先に濡して糊汁を滲込せて、もし汁不足なれば水を少し加へ、ひた〳〵になるを程として竿に干すべし急ぐときは洗濯して乾くをまたず、搾りて直に糊を附、是を濡がひ糊と云此時には糊の解樣を濃くし、其衿裾等は別に糊汁に浸さず只自然に廻るに任すべし。

○糊附物克く乾きて、シヤツキリと成たる時、取入れて水のします、其法霧吹器械にて十分に吹掛口にて吹てもよけれど口吹は熟練せざれは荒くなり易し、又別に小盥に水を汲傍に置て裏がへして縫目の糊にて着たるをはなし、一巾づゝ左右へ斜に引ては眞直に引出し霧吹の屆かぬ處々は傍の水を手に扱かけて全體ムラなく濕らし扨縫目々々を仕立上た時の如く改めて筋をつけ置く猶十分をいはゞ洗濯に望て衿と裾の縫目を解て洗ひ、糊附て後縫改めれば新に仕立たる如くなるべし、洗濯の際揉が故に衿の中の縫込ゴロ〳〵と成て塊を生じ、縫目釣て見苦敷なる故に絲を始に解おけば、此憂なき也、此憂なき仕立法有と雖、爰には云がたし、扨折目を正しくたゝみて茣莛に包暫時上にて踏附、又は何にても重押を掛置かして改取出して衣紋竿に掛て家の中にて干全く濕氣去て後納む越後縮木綿縮等の糊附敷のし法如斯。

○洋服の襯着の衿に糊を附るは凡一枚の襯衣一條の襟によきスターチ(葛粉の類)一匁餘とす少計水を入て塊なき樣丁寧に磨碎て其上へ又水をよき程攪和し豆

大の白蠟とスターチの十二分の一程食鹽を加味して之を沸騰したる鍋の中に注込、長箸にて手を止ず掻廻し(手を止れば忽焦付べし)つゝ煮る凡十五分間斗にして火より卸し上に浮べる汚物を杓子にて掬び去り、桶に水を汲置きて布袋を一人桶上に口を擴げ居て煮たる糊を注入杓子にて克さらへ込、手早く口を括て糊水袋中に滿て、外に洩出ざる内に其儘冷水中に入て漉搾れば熱き事なく容易く搾らるゝなり、其スターチと水の分量は糊の強弱の好みに應じて加減す一定の規則有に非ず、扨て糊を塗法は襯衣の胸及襟を熱湯に浸し、箸にてひき上げ絞りて雫の出ぬ程にして濕氣ある内に糊を塗よく摩擦て乾たる布に包みて搾り、外面に殘れる糊は再び板上にて摩擦て緊しく卷置、夏なれば三時間の内に必ず熨斗を掛ざれば酸氣生じて品の爲にも身體の爲にも宜からず、冬には一夜を越ても害なし、黒色綿布類には亞刺比亞護謨又米糊にても妨なし。

日用心得艸

▲手を白くする法　レモン(東京の洋食品店には販賣しあり)ほど身体の皮膚に有効なるはなければ多くの目的に之を使用し得可し手を白くせんとするにもこのレモン汁數滴を玉子の蛋白に混じ善く打ちて毎夜手に塗りそのまゝ乾かす時は著しく手の色を白くするの效あるものなりこれは手に限らず顏に用るも可なり。

▲油手を治する法　職工その他誰にても油手のために難義するものはサルシル酸三分、滑石七分、澱粉九十分の割に混じたる粉藥を製し度々これを撒布す可し或は粉末にせる明礬を水で溶しこれにて屢々手を洗ふも善し。

▲通俗美顏水　安息香丁幾と薔薇水とを混じたる液体數滴を雨水又は蒸溜水に落しこれにて毎日一回顏を洗ふ時は顏の肌理を細かにするの効ある可し。

▲手を柔らかにする法　細末硼砂六グラム、純良グリスリン(普通販賣し居るものはいづれも雜せものあり)

四分の三オンス、薔薇水八オンスの割合にて混じたる液体を製し置き毎夜手を湯にて洗ひたる後右の液体を善く手になすり置く時は手を柔らかにしなやかならしむるの効あり。

▲足痛を治する法　足痛には一週二三回樟脳油にて足の掌をこする時は屢々著しき効果を奏す長路をせんとする時などはその出立前にこの油を善く足になすり置く時は疲るゝとも痛みを覚ゆる事少なかる可し

▲下水管の臭氣を防ぐ方　一週間に一度宛強き鹽水を下水管に注ぎ込む時は善く管内を清潔にすると共にその惡臭を去ることを得可し。

▲鉢植の草木に對する注意　鉢植の草木を室内に置く時は一週一度は必らずその葉を洗はざる可からず總て植物はその根より養分を取ると同じく葉よりもまた養分を取るものなればその葉を清潔にし養分を取り易からしむるにあらざればその植物は漸々生氣を失ひ果ては枯死するに至る可し室内の植木には殊に塵のかゝり易きものなればこの注意を忘る可からず。

▲牛乳の保存法　牛乳は容易に腐敗を醸し易きものなれどもこれに少量の硼酸を投じ置く時は善く乳皮の分離を防ぎ數日間は腐敗の憂なく又その風味を變ずる事なし身体には素より無害なり。

▲顔の色艶を好する法　常に牛乳にて顔を洗ふ時は色艶を善くし尤も肌理を細やかにするの効ある事は今更云ふ迄もなけれども殊に寒き日別して寒風の吹荒む日などに外出せんとする時湯をつかふ代りに牛乳にて顔を洗ひたる後外出する時は決して風に吹荒まれたるため顔の肌を荒す事無かる可し。

夏季總菜の取合せ

▲汁

○若茄子小口切にして霰豆腐。

○丸むき茄子に紫蘇こま〴〵。

○竹の子そぼろ解きがらし（一寸五分ほどに切り丸く繰る〳〵と巻き一方を切はなし延ばし縦に細くきざみ

潮煮にして煮こみ芥子を放して出す)
○茄子の角切に新牛蒡のさゝがし。
○温飩のつみ入れに人参の葉こまぐ。
○あかえいに冬瓜の面とり口こせう。
○こちの切身になすびの角切り口茗荷だけ。
○泥鰌の骨抜に新牛蒡のさゝがし、口山椒。

▲吸物

○新百合に海松、口はり生姜、(ゆりの玉を剝がしざつと湯煮し清汁に煮こみ海松をよく洗ひ、よき程に切り温湯に浸け岡入にす、はり生姜は生姜を針の如くきざむなり)
○鮎の片身おろしに新牛蒡をたゝき、焼青唐がらし。
○鱧の骨切りに莢ゑん豆に青山椒。
○鱸の切身に冬瓜のせん、口めうか。
○海老の摘み入れに團扇茄子(團扇茄子は小茄子を立に窒まで切るなり形團扇のごとし)。口柚子。
○鳥の摺身に結び昆布(以上は清に仕立るなり)
○花小鯛に摘み菜、口芽うど。(花小鯛の首をとり尾を付けて三枚にをろし、骨を取り皮を内にして尾を立て、竹串にまき直に潮煮の汁にて煮る椀へとる時串を抜きとる)
○大鯵筒切、茗荷竹こまぐ。
○鮑のそぼろに生姜のおろし汁、(あわびの周圍を取り中の身ばかりをざつと湯をとをし細くきざみ、潮仕立にして生姜の汁を落して出す)以上は潮仕立にすべし。

▲鱠、刺身類

○鯛細づくり、白瓜せん、三杯酢。
○鯵せごし、胡瓜せん蓼紫蘇酢。
○鱸のなげ作り海松そへて蓼酢。
○堅魚大身づくりきうり小口薯蕷醤油(それはじねんおよを摺りて醤油にて解きたるなり)
○洗ひ鯉に獨活の白が、いり酒、○鯔細作りゑびむしりてわさび醤油)

▲酢味噌

○水貝に花生姜鮑を大賽に切り、鹽をふりかけおき、鉢に入れ、冷水に湛へ、新生姜を切り桔梗又柏の葉に

て切て放す)

○筍木の芽あえ(たけのこの尖を二つに割り小口切湯煮し、薄味つけ、白胡麻を炒りて摺り山椒の葉少し入れてよくすり味噌を入れ又酒にてゆるめる。

○もみより芥子酢、みそあへ。

○胡瓜もみて百合の根ゆで、蕃椒酢、味噌あへ。

○小茄子に刀豆(茄子の蔕を取り刀豆をせんに切り湯煮し、醤油のもろみにて漬る)

▲煮物

○茄子に布目を入れて新午房筒ぎり。

○茄子のいり出し(茄子を二つに切り胡麻の油にてあげ昆布だしに醤油加減の汁をかけて器にもりて小皿にをろし、大根をつけて出す。

○茶筅茄子と新午房の餡かけとき芥子(小茄子を軸付にきり立に筋を入れ湯煮してひねれば茶筅のごとし。)

○あなごの薄くず煮。

○鮑の江の島煮、(生にて薄く切り青腸をときてよく摺り煮汁へませて煮るなり)

○鶏肉むしり蒟蒻にすり柚子。

○芝海老に胡瓜の餡かけをろし生姜、(えびは皮を取り胡瓜は立に拍子木に切る但し冬瓜まかびに使ふなり。)

▲焼物

○茄子の亀甲やき(皮むかずに二つに切り皮目に厚く庖丁を入れ鍋に胡麻の油をひきて煎り焼にし生姜醤油をかけて出す。

○新里芋を絹かつぎに煠で串にさし生醤油の付焼。

○ぬかご串にさし醤油の附焼き。

○茄子の鴫焼(皮をむき輪切にし串をうち胡麻の油をつけて焼き、味噌を甘加減に仕立て干山椒の皮を入れ茄子に塗りて又焼くなり)

○鯛を松笠切にして青山椒、醤油附焼。

○大鯵鹽焼にして蓼酢。

○魴魚を一と鹽にして酒の付焼。

○鮎をひらきにして蓼醤油付焼。

○鱸を細くわり串にさし蒲焼。

○鱧を角に切り串にさし山椒味噌魚田。

▲浸し物

○根芋薄くきりて酢醤油すり胡麻。
○ずいき揃へて胡麻醤油。
○莢ゐんぎん揃へて山椒醤油。
○茄子立てに薄くきりて胡麻醤油。
○萵苣細ぎりにして酢醤油。
○蓮の若葉細くきりて生姜醤油。
○茗荷の子立に二ツに切りて胡麻酢、醤油。
○若胡瓜生にて小口ぎり唐がらし醤油。
○せんまへ揃へ切りて芥子醤油。

▲鹽をし漬

○おろぬき大根のもみ漬（莖、葉とも摺盆にて鹽をふりてよく揉み青汁を捨てゝをし漬にす。
○新蓮根薄くきりて梅酢漬。
○大豆生のまゝ梅酢漬け。
○茄子の鹽をし漬（常坐食には、釘五六本桶の端へ入れて漬けるなり、茄子の色よく出るなり。久しく蓄ふるは何も入れずに鹽からく壓石強くつけ口を西洋紙などにて包み冷かなる處ろに置くべし。
○茄子の味噌づけ（蔕を去り生のまゝ二三日目に干し赤味噌へつけ、壓しつけて置くなり。
○白瓜の糠漬。常の漬方に、糠を入れて壓石を置くなり、（常坐食なり）
○十六さゝげの粕づけ、（あまり身の入りすぎぬ内に取りて生のまゝ粕につけ込むなり）
○實抜唐がらし日光つけ（唐がらしと紫蘇の葉にまさ鹽をふりて壓石をかけて二十日程經ち日に干して蓄ふ
○らつきやうの三杯酢、（らつきよ五升に鹽一升に生姜の芽刻みこみて押づけにし三十日經ちて、砂糖蜜につけるなり。漬けて酢氣薄ければ酢をさしてよし又常食には唐辛を入て薄鹽につけ五六日漬て酢に醤油を加へて漬け代ふるなり。

▲飯

○いんげん飯、（莢扁豆を細かに切り味淋醤油にて味をつけ飯を移すと岡交せにす。
○しゞみ飯（蜆をゆで身を取りよく洗ひ、飯の火を引

く時上に置く鰹の煮汁醤油加減しておろし大根と葱の小口、唐がらしの香料にて出す。

夏の庖厨

△新里芋の旨煮　芋の泥を落して擂鉢に入れ、手にて搔廻はしながら皮を摺剝き、後先を切落して敷笊き敷きたる鍋の中に入れほどよく茹で上りたる時其湯を棄て味淋を六分酒四分の割合にて半ば煮詰めたる所へ醤油を加減に落して味を附け、器に盛る際おろし柚子を添ゆれば一入の風味あり但し落し蓋をなして煮べし。

△鰹の味噌煮　可なりの大きさの鰹一尾に付き砂糖百目、味噌百目、醤油一合、水二合の割合にて煮るべし又二鍋にも三鍋にも分けて煮る時は前の割合に準じて砂糖、味噌、醤油、水の四ッを節く調合すべく切方は適宜たり。

△茄子の茶筅　小茄子の後先を切取り縦に庖丁を入れて茶筅の如く切附け其を一旦茹でたる後味淋一杯醤油半杯の割合にて煮るなり。

△鮑の冷し物　賽形鮑と桃を配合せて出すも面白し切鮑は殻より放して能く洗ひ生の儘五分角に切りて薄く鹽を振掛けたる後水にて洗ひ更に之を鹽水を張りたる丼の中へ入れ之へ殺ぎ桃と氷を落して出すべし。

△親子丼　雞の肉を細く切り味淋と醤油を程よく割りてザット煮上げ、殘りの汁の煮詰まりたる時、再び前の肉を入れて掻交せ、取上げて飯の上に並べ、又卵を半熟に煎り前の飯の上に並たる肉の上に掛るなり。

△山掛素麺　切素麺をザット茹で水に入れて能く揉洗ひ布を敷きたる笊にあけて水氣を取り、之を煮出しと薄醤油にて一寸下煮をなし、椀に盛りたる時硬く作りたるトロヽを掛け、おろし山葵と燒海苔を載て出すなり。

△紫蘇飯　紫蘇の葉を細く刻みて鹽を少し振掛け、布巾に取りて汁をザット絞りたる後鍋に入れて煎り干かし飯を櫃に移す時前の紫蘇を振込むべし。

△海老の鬼殻燒　伊勢海老を水に入れ彫にて甲羅を能

く洗ひ、出刄庖丁にて縦に二ツに割り、之へ醬油を掛け金網に載せて焦目に燒きモウ一回醬油を塗附け焙れば宜し。

△南瓜の煮附　南瓜を能く洗ひて適宜に切る、之を鐵鍋に入れ其南瓜の嵩ほど水を差し、砂糖を少し入れ落蓋をして煮附け、大略汁の詰りたる時醬油を適宜に割りて暫時煮るなり、但し箸にて掻廻すべからず、取上ぐる時には杓子を片手に持ち箸にて南瓜を寄附けて上ぐべし是れ南瓜を崩さぬ用心なり。

△鯵の脊ごし酢味噌　脊ごしに調理する鯵は骨の儘切らねばならぬゆゑ、成るたけ小さきものを撰むべし、抑其の調理法はゼンゴ脊（兩面の脊と腹との間にある堅き鱗）及び鰭等を去り、尾の際まで切りて酢にて洗ひ、それより器へ盛り、此前に酢味噌と晒し葱を附合はすなり、また酢味噌の仕立方は、甘味噌を茶飲茶碗に一杯を凡そ二人前と見積り、これを庖丁もて細かく切り深き器へ入れ、此中に酢並に湯にて溶せし砂糖汁を入れて程よき食味に伸ばし、生姜の卸したるを加ふ

出征の留守宅

▲中村少將の家庭

一 記者

南關嶺の堅壘を抜き、更に長驅して柳樹屯を占領して威名高き陸軍少將中村覺君の留守宅は麹町區紀尾井町にあり。

嚴めしき楠木門を入り、緑深き若松の馬車廻を左へ廻つて、綺麗精爽の植込を拔けて、玄關に音訪へば小間使の取り次で、直ちに八疊の應接室へ通されました、其處には中央に赤き模様の氈をかけた卓子之を圍んで奇麗な椅子が五六脚。扉を掛けて、正面を見れば、軍隊勅諭の扁額支那風の牡丹繪の掛額、其他寫眞額が掲げられてある。床には玩具の小銃が、ずらり三四挺、銃架に並び、背嚢も三つ四つ共に打掛けてある、大方令息達の運動器械でありませうが、流石は軍人の家庭だけに何處迄も武裝されて在ます。

青葉若葉の折重つて、吹く風も涼しげなる庭を眺めて居まするど、やがて、奥の方より出で來られたのは、年比二十二三の、面長な、すらりとした青年、是は即ち令息謙一君で御座いますが、記者は何となく見覺がありますので、若しやあらぬかと、談話の方面を妙な所から展開しますると、全くその推察が中りまして、二人は四五年前共に某校に机を並べてゐたこともありますので、共に奇縁々々と云ひ合つて、其より談話の火花を散らしました。

少將の評判　「父が第一の雄辯で、その會話といつたら、中々骨を折

ります、それも大概鹿毛馬が嗜きで、北海道雜種の鹿毛の駿足が一頭居まして、これを大變可愛がつて、平生から一朝事ある時は、此馬で戰爭に行くんだとか、言つてゐましたが、生憎その馬が出征間際に、足を傷めて、大きに弱つて居ましたつけ……ハイ、酒ですか、これは嫌でもありません、まづいける口なんで……アハ……。」

陸軍中の歌人　將軍戟を執つて、陣頭に立てば鬼神をも取ひしぐ猛將でありますけれど、文事を好まれ、最も和歌を能くせらるゝので、或軍人などは將軍を呼んで陸軍中の歌人と申して居ります。されば今回の出征についても、次の三首を詠まれました。

出征につきて

七たびは生きかはりてもこの仇を
　うちつくさずばなにかへるべき

シベリヤのひろ野をかける大鷲を
　たゞ一矢にて誰れ射止めなむ

ものゝふのこゝろいかにと人とはゞ
　たふれてのちにやむとこたへむ

少將の抱負は、實にこれによつて遺憾なく發揮されてゐます。

夫人の談話　令息謙一君と暫く談してゐまするど、軈て、次の室より「どうも、お待たせ申して――」と云つて、進み出でられしは、夫人千代子殿。面長な、肉付豐な、目鼻立の美しい、如何にも氣品高い、又調子もはきとした快濶なお方で御座いますのさて家庭について、伺ひますと夫人は聲高に打笑はれまして、「宅は最う子供で埋りさうですよ、長男が此處にゐる此者で、(年二十三、工科大學の二年)それから男兒が、皆頭に謙の字がついてゐまして謙二(二十)謙三(十七、謙四郎(十五)謙五(十二)謙六(四つ)の六人、女はてい子(九つ)せつ子(七つ)それから當年生れましたいさ子と都合九人で、いさは眞人の出征する前夜、三月二十七日に生れましたので、眞人の勳功を祈るため、いさと付けたのです……。謙二は陸軍幼年學校へ入つてゐますが、謙三と謙四郎とは日比谷中學、謙五は番町小學校、てい子は華族女學校へ通はせてゐます、其故晝間殘るものは、謙六、せつ子といさだけで、まづ靜ですけれど、學校が退けますと、皆々ドヤ〳〵歸つて來まして、それはどうも大變な騷ぎ、笑ふやら、泣くやら、跳るやら、暴れるやら、ほんとうに騷なこつて御座います。……

出征後の音信　につき伺ひまするど早速手文庫の中から　左の御書面を取り出されました。

去る九日〇〇に無事上陸致し其後無事なり敵は遠く前面にあれども未だ開戰に至らず何れ近日内地にも知れ渡る如き戰闘あるべし只々それのみ相待ち相樂み居候

千代どの　　　　　　　　　　　　　覺

餘り長居はお邪魔なりと思ひ、お暇申しました時、令嬢達は征露の軍歌を歌つてお在で御在ました。

▲寺垣大佐の家庭

開戰以來、數度の旅順攻擊に於て、勇名を轟した敷島艦長寺垣猪三君の留守宅は麻布霞南坂を登り詰て、眞直に突き當つた所、私の御目に懸りましたのは、即ち大佐夫人で、年比は三十五六の、面長な、眉目晴しからぬ、優容なお方、小紋の白襟の單衣に、黑繻子の帯、如何にも質素な扮裝でした。

導かるゝまゝ、左手の令嬢達の机の並んでゐる座敷を拔けて、御客間

な緒側を右へ左へと參り、外れの八疊の座敷へ通りましたが、正面の床には初夏山水の淡泊とした掛地。その前には紫の花菖蒲二三本を生けた花瓶、違棚には敷島の其名にも相應しき大和櫻の造花が、御國に盡す武夫の赤き心をこめて花籠に咲き亂れてゐる、仰げば金線の輝き渡る扁額それには「藏輝」といふ文字、これは、大佐が十數年以前、有栖川威仁親王殿下と御同艦の砌り、殿下より賜つた御直筆で、殿下が週番士官として候所の掃除の指揮まで遊ばされました當時の紀念品である。

大佐の暑歴　に就て夫人の語らるゝやう「古い時分のことは、はつきり覺ねて居りませんが、日清戰爭の時分、まだ大尉で、亞丁に在ました軍艦龍田を受け取りに參りまして、早く回航して、戰爭の間に合さうとしましたけれど、目算通りに參らず、到頭戰爭には出られませんでした……ハイ、北清事件の時で御座いますか、彼の時は淺間艦長で、それから昨年の五月、現今の敷島の艦長になりました。」

昨年五月歸京す　大佐が今度の出征に就て伺がへば「左樣です。夏人は、昨年の五月、敷島の乘組みになりました時、ちよつと一日歸京つたばかりで、それから直ぐに出征したのでございます。そして、其一日が亦妙です、家にはちつとも居りませんで、道樂の釣遊に伜の孝三と品川へ參つて來まして、その翌日早々佐世保へ歸りました。」

性行と嗜好　大佐家に在る頃天氣晴朗なれば、必らず前記のやうに令息を伴うて、釣遊に行くとを唯一の娛樂として居らるゝ、そして自分では、釣位、心の奇麗になつて、下らぬ妄想や雜念を去るものはないと言はれて居らるゝ。大佐は風宰も至つて溫和柔順で、君子風に見ねまするけれども、資性は頗る剛勇沈毅で、諧謔が亦非常に上手で、九死の中に一生を得ると云つたやうな、危險な塲合でも、猶平時と同じく、混々として警語奇句を吐いて、能く人の頤を解くといふ風ださうです。

その家族　大佐は舊加州金澤藩士で、夫人柳子(三十七)との間に三男五女ございます。長男孝三(十九)次男敬三(十四)三男捷三(十)長女千鶴江(十六)次女濟子(十一)三女龍子(七つ)四女仲子(四つ)五女巴(三つ)の都合八人でありまして、男子には皆三の字を付けてあるのは、則ち大佐の猪三の三で、三男捷三は日清戰役の時捷報續々と來る際に、出生されたのから斯う名付けられたのださうです。長男孝三君は正則中學を優等に卒業しましたが、今度海軍兵學校の入學試驗に應ずる爲め、目下千葉の方へ赴いて勉強中次男敬三君は第一中學校へ、長女千鶴江子は虎の門の東京女學館へ、他は小學校へ何れも餘念なく通はれてゐます。

斯樣に目出たき數の愛兒達を、夫人は能く一手で撫育されてゐますが何れも息孃は花の如く愛らしく、眉字の間に喜悅の情が溢れてゐるのは。その家庭に於ける夫人の圓滿なる薫陶に基くのであらうと思はれます

▲露帝の收入と俸給

世界中に於て報酬の尤も多きは露帝なるべし、八百萬方里の領地、一億三千萬の臣民を統治する主權者としての報酬は、一年四百八十萬弗にて、外に月俸四十萬弗を受く、然るに此等の常收入に三四倍せる丈の別收入なくば、帝の生計は維持し難し、帝には實に一百の御料地あり、一百の城廓宮殿あり、其收入と支出とは、皆な帝の特別經濟に由れり、帝の召使ひ玉ふ隷屬は、合して三萬人あり、帝の御殿にして帝の未だ見たる事なきもの四十、只だ外見のみにて一夜も眠り玉はざるもの二十、只だ一泊せしのみのもの二十あり厩には馬五千頭、常畜の牛五萬匹、日常は六時に床を出られ、朝餐は英國風にてハムと鷄卵メン。バタ特別製のマルマラダ及茶を命じ玉ひ、朝餐後はハバナの太だ強きシガーを服し玉ひ、夜御寢の時まで、曾て離し玉ふことなしと云々。

家庭叢談

セントルイス世界大博覽會

この春以來日露交戰の爲め日本國民の休戚は一に戰爭の上にかゝつて世間の噂は戰爭沙汰で持切られ、戰爭の外に耳を傾ける向は極めて少いあり樣でしたが、太平洋を超へた海の彼方には今やセントルイス市の大博覽會で、日露戰爭と同じく爰にも又世界の耳目を集めて居ります。されば戰爭は戰爭として置いて爰に聊か世界大博覽會の事を記して世界平和の賑はひの一端を瞥見しやうかと思ひます。

▲聖ルイス市の位置

セントルイス市は米國の大江ミスシッピー河の上流に在る一大市府で合衆國では第四番目の大都會であります。(第一紐育、第二市俄、第三費府、第四聖ルイス)其人口は七十萬でザッと我が大阪市と伯仲の間に居ります。一體ミスシッピーといふ河は非常な大河で又其枝葉が幾つもあつてこの河に沿ふた處ろは至つて豐饒であるのみならず又運輸交通が中々便利であるから、此の河に沿ふた處ろは一體に繁昌を極めて居りますがセントルイス市は恰も此の河域に於ける商業の中心で貨物の集散莫大なるのみならず、又工業の都府として大繁昌を極め現に八千餘の製造所が立てられ、長短の煙突が雲の中に聳へて居るといふ次第であります。

▲何故の博覽會

今回の博覽會は米國に取りて第三回の大博覽會であります、第一回は今より二十七年前、費府に合衆國獨立百年祭の爲めに開かれました、第二回は今より十一年前市俄に開かれた、さればコロンブスが亞米利加發見四百年の紀念としたもので、今回のは合衆國々力膨脹の紀念で佛國から昔しルイジニヤ洲を買取つて建國の基礎を固めたその紀念を祝ふたものであります。

▲觀覽の費用

日本からこの大博覽會へ見物に出掛ける方は目下戰爭

中で甚だ僅かでありますけれども、假りに渡航見物をするとして其の費用はどの位懸りませうか。まづ日本(横濱又は神戸)から米國西海岸(桑港)までの滊船賃は

上等四百圓　中等百七十圓　下等六十圓

次に桑港から博覧會までの滊車賃

上等六十八弗(日本金として百三十六圓)

中等五十七弗　下等三十八弗

右の外寢臺附車料凡二割を加へますと中等でザツト日本金百五十圓位になります。それから滯在費一週間分の概算

上等七十弗　中等四十五弗　下等二十五弗

次に旅行日數は

渡航日數　十六日　滊車日數　四　日

觀覽幷に附近遊覽　十四日

ザツと二ヶ月懸ると想へば澤山です。

▲セントルイスの風俗

同市は米國中でも長い年月を歷て發達した處ろだけに尤も保守的な市府である、隨て紐育や、市俄古に比較して見ると質素な風である、殊に市街を歩いて居る婦人の服裝などを見ると誠に質朴であるが、但市中の道德はあまり正しくないといふ噂であります。同市の飲用水はミスシツピー河の水を飲用するので常に赤く濁つて居る、又市中に焚く石炭は無煙炭でないから下町邊は黒煙天を掩ひ日光を遮ぎる樣丸で倫敦の下町同樣であります、が上町即ち博覧會の近傍は空も晴々して誠に心地よい有樣です。

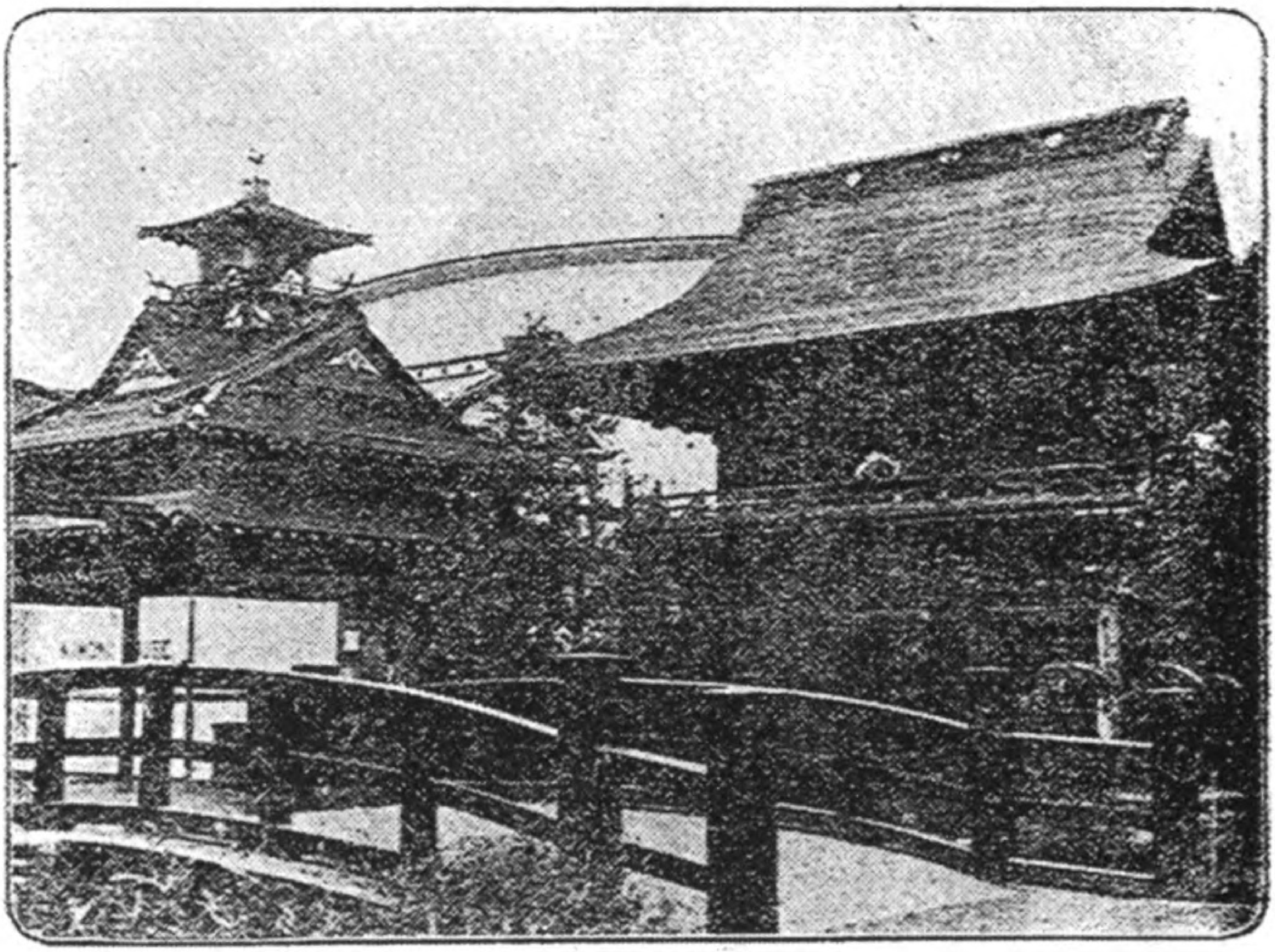
▲日本園の優雅

同博覧會の日本園は會場敷地の中央より少しく遠ざかりたる小山の上に設けられたれば其眺望頗るよく殊に他の建設物とは大いに趣が變つて純然たる日本風で、周圍は悉く樹木の塀が築かれてあるから、世界各國の風俗を見物して此所に足を運ばせば自然故鄉へ歸つたやうな心地がする、其の敷地は凡そ二町四方で、入口に大門あり、其左手に喫茶店を設け、門を入れば左手に池があつて其向ふに金閣寺の堂宇が聳へてゐる、此の邊すべて東山時代に倣つて庭園の風致雅趣を極め各

所に散在せるあづま家には休息する客の絶ゆることなし、それから少し進んで中央の高所に至ると迎賓館といふ宮殿を擬した建物と之れに附屬した建物があります、其構造優美高尚なることは實に日本の特色で數多ある洋館の中に一異彩を放つて居ります。

▲遊興の催し

博覽會は會場の要所〳〵に音樂隊を置き或は種々の遊戯を催し、夜に入りてイルミネーション(電光の飾)をなし觀客を喜ばしめ樂ましむる事を勉むる外に、又利に敏き商人が觀客の意を



各國興行場日本村

迎へて一と儲けせんとする興行が澤山企てられて居る

そこで、ゼルサレム會社は五十萬弗を擲つてゼルサレム(大古の聖地)市を建て耶蘇敎の本山を示して觀客を求めんと計畫して居る、亦瑞西の村落を建つるものもある又日本の新井組といふのは二十萬弗の資本で壯大な日本村を建つるの計畫し遊船を池に浮べるものあれば、南洋の蠻人を連れて來るものもある、又二十萬弗の資金を懸けて空中旅行の競爭を企てゝ居るものもある其催しは實に盛なものであります。

▲電氣仕掛のいろ〳〵

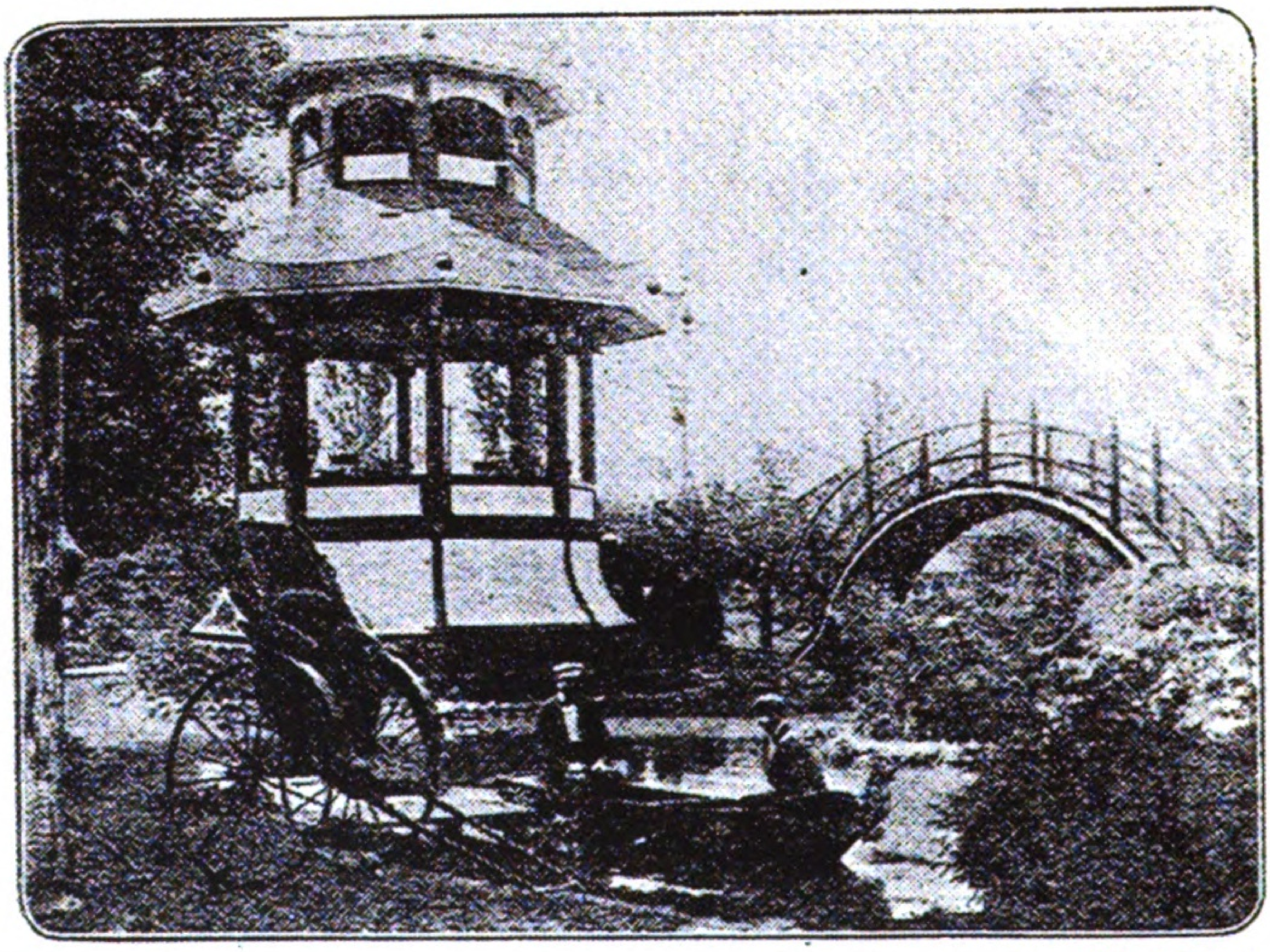
ドコの博覽會でも必らずすばらしい新發明の電氣仕掛けを以て觀客の膽を奪ふ樣な計畫をするものであるがこゝでも又電氣瀑といふ空前の大仕掛をして居る、電燈の光幾色にも輝く上を瀑となして偉觀萬人を驚かした巴里博覽會にも劣らぬ仕掛で其の計畫によれば中央の高所に二エーカーを掩ふ大饗應室を設け、此所より左右に各七百呎に及ぶ翼を作り前面の地に向ふて中央のホールの前と左右の三方より落下する瀑は電燈の光色幾變更を爲す上を流下する事であるから其電燈の光色は池の周圍をかためる庭園の電燈及池邊を回れる電燈と相映じ、池波更に其光を碎いて奇觀言語に絕へたるものなりといふ。次に電氣館といふ建物がある、それは電氣を應用して其の檐其屋根は寶冠に寶石を鏤ばめたらんごとく電燈を以て飾り立つることシカゴ、巴里のよりも更に壯大である館の廣さは竪四百尺、横七百尺で其の周圍はすべて漾々たる水を以て充した池であるから電燈の光は其の池に映じて相反映する樣實に天下の奇觀である、其の費用は四十萬弗である。

▲興行物

博覽會が世界的である丈に追がに興行物も又世界的である、其の仕掛の大なる事は一つの建物に二十萬弗より五十萬弗の費用をかけて居るのでも其の大さうな事がわかります。各種の興行物の中で最も見物人の眼を驚かすものはアルプス山と大ホイールである。アルプス山は獨逸人の興行物で彼の嵯峨として千古の雪を頂ける名山は眞に實物を見る樣で規模の壯大はエッヘル塔以上で從來の博覽會に於て曾て見た事のない拔群のものである、その建築費も百萬弗といふ、又ホイールといふは大輪車で其の高さ三百尺、此の大車輪は全部堅固な鋼鐵で造られたもので車の齒の所ろに客車のやうなものを釣下げ、其の客車の中に見物人を（一回に二百人乘）入れて廻轉する仕掛である、そして其の室は重力の理が應用されてゐるから室の轉覆する憂はなく輕氣球に乘るよりも安全に天邊に達することが出來るのであります。

▲大旅館

この大博覽會に就て米國各地よりは勿論、遠く世界各國から觀覽に來る人は何十萬といふ數か知れません、でこの多數の客を宿泊せしめる旅館は如何なる按排かといふに、それは實に大したもので第一がフランタースホテルといふ、室の數が四百五十もあつて一時に千五百人の客を泊める事が出來るそうです、第二がザーザンホテルといふので是も室數三百餘もあるといふ大建築、十階以上の高厦で以上二旅館の室代は一日弐弗即ち日本の四圓、風呂附て



日本村大鼓橋

三弗五十仙、食事は客の注文によつて異るが朝飯日本貨で貳圓、夕飯參圓以上ださうです。又第二流の旅館になると少し廉價であるがこれでも室代一弗半、食料一回一弗です。故にまづ一日の滯在費日本貨幣の拾圓と見ればよろしいのであります。

▲日本庭園の概觀

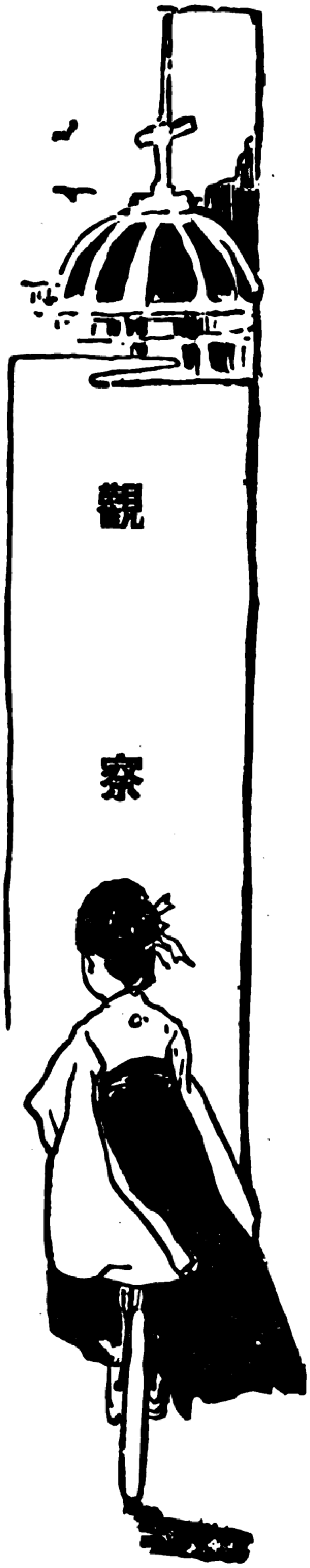
博覽會中の日本政府館は敷地約二千五百坪で各國政府館中第一に居りますが今少し庭園に配築せる家屋の裝飾其他を紹介しましよう喫茶居としての臺灣館は門の右手にあつて純粹な臺灣

風の家屋で白人の眼には清人の家屋ならんと感ずるものもあらうが正面の上部にはフヲルモサ即ち臺灣なる英文を筆太に記し此館に二名の臺灣少女と二名の臺灣人(男)が居る尤も歸化清人なるが能く日本語を操り、接客の任に當つてゐる其裝飾は數百の紅燈を以てし二階には米國音樂隊の一隊ありて時々君が代を吹奏せり臺灣館の右手の樹林を隔てて喫茶店としての金閣寺があり金閣寺は多くの裝飾はしてないが池に面し位地尤もよきを以て客の來たる者臺灣館よりも多い、門を入



日本庭園の景（以上大久保雄藏氏寄贈）。

りて右手の上丘に事務局あり、事務局の右手に添ひ園内第一に廣大なる建築として見らるゝ賣店あり、此賣店は當日の立食場にして内部の裝飾眞に善美至れり盡せりである、園内最高にして、正面に位せる所には迎賓館あり、此の館内には時代人形を配置してある、外部には錦の幔幕を引き廻し、至つて高尙閑雅に見へる其の右手の下部には曾て大阪博覽會へ御料局より出品せる高尙なる建築物二棟がある又庭園は市川某の設計に成り尤も配置よく造られてあります。



現今の女學生

與謝野鐵幹

◎私は玆に女子に就ての雜感を順序も無く申述べやうと思ひます。是は私共の柄に無い事では厶りますが、更に深く考へまするに、女子は何も今の女子敎育者や女敎師先生や女學校監理者などの人々の專有物では無い、女子は女子諸君自らが守らるべきものであり、又女子の相手たる男子が、相手として如何なる男子も女子問題を議し得らるゝ事であり、又私共の從事して居る文學では、古來女子を題目とせざるものは殆ど無い、女子を外にして詩を作ると云ふ事は恐らく出來ませぬ、斯様な關係のある間柄であるから、文學に從事して居る者の婦人論も、宜しく許さるべき事で厶りませう。

◎更に又無遠慮に申しますれば、今の女子敎育は、彼の變生男子の女敎師先生や、學校以外に聊も社會を知らず、且つ日本古來の女子の性情に於て少しも知る所の無い女子敎育者などの議論ばかりを採用して、文學者美術家等の意見を聽かぬ爲めに、甚だ面白からぬ現象が數多あるのでは厶りますまいか。(女學記者曰く所論は痛快でありますが時弊を刺すに少しく見當が違つては居ませんか、追々拜聽して妄評を加へませう、)

◎私共の女子に就ての考は斯うであります。女子は先

づ美くしく生みたい。昔から美人才子と並べて云ひますが、男子は內部の才能の秀れたるを第一とし、女子は外形の容姿の麗はしいのを先づ尊重する。美人が尊重されるのは、如何なる時代でも爭はれぬ事實である。どのやうな辯護說が出ましても、醜いと云ふ事は女子の不幸でムります。(所論一應尤に存じます)

◎旣に容貌の美くしい女子が產れたとして、此上は更に外形ばかりで無く、內部の性情もまた圓滿に美くしい發達がさせたい。そこで敎育の必要が生じます。內部の性情が敎育に由つて高尙、圓滿、優美に發達しますると、女子が外形の美は更に數層のにほひを加へます。遊女賤業婦などの美は容貌の美にのみ止まつて、心の美を缺いて居りますから、其容貌の美は惜しいかな野鄙で、何れも品位と云ふ點が無い。未開の世には兎も角も、文明世界の眞の美人と云ふのは、容貌の美に此の敎育から磨かれた性情の美が備つた女子を云ふのでムります。(大に同感)

◎さりながら實際に於て容貌の極めて美くしい女子と云ふ者は少い。十人並の容貌と云ふのすら今の世には少い。女子の多數は醜い部に屬して居ります。女子は人間の花であると云ふ以上は、何卒私共は美人の方を多數にしたくてならぬ。是は一朝一夕に出來ぬ事であるけれど、美人を多く生むために、一面には美男子と美人との結婚を奬勵し、一面には女子の容貌の美を添ふる爲めに、內部性情の敎育を普及させたいと思ひます。(一應御尤と存じますが著者は社會の不完全といふ事を算用に入れて居られないのは殘念です。)

◎然るに此頃途上で行き會ひまする女學生諸君の或る部分を見まするに、私共は實以て愕く計りで無く、面を背け眉を顰めて慨歎せざるを得ないのであります。嗚呼今の敎育は何故に美人を造らむとはせず、却て斯樣な醜婦を多く造らうとするのでムりませうか。

◎先づ歎息するのは服裝です。或るものは鼠色の筒袖の殺風景な上衣を被らせて、女子が服裝の美を一切押匿して居る。下田歌子氏の實踐女學校などが其例です。或るものは袖たけを六寸に限り、地質は木綿、袴も黑

きモスリン地に限り、短く脛を出して穿いて居る。東京にも見受けるが、京都、大阪、奈良等の高等女學校が其例です。此外に流行の海老茶袴と云ふものも、十七八歳の女子には却て見苦しい服制である。

◎右樣の服裝は質素と云ふ事から割出したのであらうが、私共は今の敎育者の物の分らぬに驚かねば成らぬ。又斯樣な服裝をして多人數の目に觸れねばならぬ今の女子諸君を氣の毒に感じます。斯樣な服裝を以て飾られては、如何な美人と雖、その美を失つて了ふ。況して其他普通以下の女子に至つては、狼が歩むやうな感じがする。疑も無く是は女子の美を害する服裝で厶ります。(女學生の服裝は質素はかりではありません、動作の活潑といふ事も勸定に入れなければなりません。)



◎日本の處女の衣服の美は、第一その袖の長いのにある。次には胴以下裾のまはりに現れる皺のやうな柔かい線にある。次には帶にある。是等の美を掩ひ去る上衣の、宛ら亡者が歩むやうな鼠色の醜くさ。のみならず硬ばつた綿服に限るとなし、袖を短くし、袴を黒くして長く引くを許さざるなどは、女子の神聖を害すること、彼の裸體問題以上であると思ひます。

◎私共の考では、女子には美くしい上にも美くしくさせたい、天稟美くしい容姿の人は勿論、又美くしく無い人も、敎育の結果性情の美よりして容貌の美を添へる事を計ると共に、衣服より髮かざり其他一切

の装飾まで、身分に應じて能ふ限は美くしくさせたい。質素と云ふ事も世わたりの一個條ではあるが、贅澤と云ふ事もまた世わたりの上で正しい一個條である。間違つた勤儉論を唱へて却て經濟界の恐慌を招いた人の譏は、間違つた質素説を女子教育に應用して女子の美徳を失はしむる今の教育者にも下されませう。女子の装飾の如きは正當に爲すべき贅澤でありまして、之を質素にせよと云ふのは、木から花を奪ひ、花から香を奪ふやうなものでムります。家々の財政の許す限は娘達の服装を美にすることは、其の娘達の教育と共に怠つては成りません。之を否む男子はシミッタレ男子である。之に反對する親は女の子の愛を知らぬ親である。之を拒む夫は意氣地無しの夫である。女子に美くしい服装をさせぬ國民は未開野蠻の國民であります。

◎如何やうな服装をさせて、一層女子の美を増さしめやうかと云ふことも、女子教育の必要條件だと思ひます。女子の衣服を改良するのは宜しいが、女子の美を害するやうな服装は、女子の神聖を瀆すものである事を忘れては成りません。(理の當然です)

◎次に驚くのは、一部の女學生の風采擧動です。怪しげな束髪を蓬々と亂し、海老茶袴をダラシなく穿ち、男子の前、多人數の前をも憚らず横行濶歩し、笑ひさゞめき、狂ひ合ひ、且つ其の言語の生意氣千萬なる、是は又自ら女子の美を放擲して、見苦しい事の限であります。總じて女子の謹愼を缺き、羞恥の態の無いのは、男子の粗暴なるよりも一倍見るに堪へぬものであります。私共は几帳のかげに身を寄せ、扇に半面を掩うて人と語つた古の女子の奥ゆかしさを追懐して、今の一部の女學生に愛想が盡きまする。(女子の粗暴は困りますが、さりとて今日の女を王朝時代に仕立やうとは明治文壇に新機軸を出された明星主筆の言とも思はれません)

◎之に就て最も新しい例は、近頃私の宅を訪問した女學生がある。十八九歳許の女學生でしたが、突然遣つて來て逢ひたいと云ふから逢ひました。其談話の擧動が先づ普通の初對面の人の爲すべきことで無く、男

子同志でも斯う傍若無人には出來ぬと思ふ位に、無遠慮不謹愼なものです。娘ざかりと云ふものは、顏を見られるのも恥かしく、物を云ふにも目を下に、聲を低う仕勝ちのものでムりますが、其女學生は面と打向ひて笑ひながら滔々と辯じまして、其の云ひ草がキザです。『文學界も高山樗牛が生きて居た時分は面白いと思ひましたが』云々。『青柳有美は二度尋ねて議論をしましたのよ』云々。かう云ふ調子で、新体詩家の誰彼なども皆呼び捨てゝムります。キザとも何とも、齒が浮くとは此事でせう。さうして其女學生がどの位の學殖があるかと云ふと、高等女學校を中途で止して女子大學の家政科とかに居ると云ふのです。（惡い例をいへばお釋迦も屁を放る、まづ御手柔かに願ひます）

◎一葉女史の話などもしますから、私は一葉の作に就て評を聞ひますと、實は『たけくらべ』すらまだ讀んで居ないらしいのです。源氏を聞ひますと、空蟬まで見たと云ひましたが、夕顏と云ふ花はどんな花でムいますかと問返されたのには驚きました。

◎斯樣なお轉婆女學生が今の女學生の一部に有るのは事實です。此等の女學生は、どこに女子の美德が認められませう。一見女裝せる男子である。女裝でも無い、女の化物でムります。

◎次に驚くのは、今の女學生の理想です。私共の想像では、女子たる者は、心も姿も美の圓滿を極め、富貴の位地に在つては光明皇后の如く、源氏物語の紫上の如くに成らむと思ひ、又たとひ世の緣薄くして衰へても、古の小野小町の如く、或は祇園に澁茶を斟みし梶女の如くに成らむと思ひ、又文筆の才を發揮しては紫式部、淸少納言、式子内親王、和泉式部の如くに成らむと思ふべきであるに、何たる理想の低い事であらう、今の女學生の多數は陸海軍將校の妻に成らう、大學卒業生の妻に成らうと云ふに過ぎませぬ。

◎如何にも中少尉より大尉少佐、法學士醫學士文學士、何れも名譽はあり生活にも困らないであらう。併し私の考では、男子の名譽に縋るなどと言ふ事は頼もしく無い心がけであります。女子は男にたよるものだ

と言ふ思想は卑屈な思想である。女子は宜しく女子の美德(心と容姿との美)を以て、一世の男子を歸伏せしめる感化力が無くては成らぬ。女子は自らの美を發揮して、其の美くしい『たかぷり』を以て男子と對すべきである。光明皇后たり小野小町たり衣通姬たる女子最高の美德を抱きながら、輕々しく一身を將校學士などの空名に托するには及びません。天下有數の俊才が女子の眞價を慕うて來り迎ふるを待つべきであります。

◎また生活の問題を憂ふるのは、今の男女學生の通弊であつて、甚ださもしい量見である。生活と云ふ事は病疾不具の人で無い以上は、さまで案ずるに當らぬ事であります。日本に五千萬の人はあるけれども、餓えて死ぬる者は數ふる程しか無いではないか。さう人は死ぬるもので無い。况して女子の衣食は、當然男子たる者が恭しく捧げ來るべきものであります。女子を養はぬやうな意氣地なしの男子は、今後の日本に跡を斷ちますから、御安心なされて宜しい。

◎一体娘ざかりの皆さんが、今からどうして生活しやうなどと云ふ、お婆さんじみた量見を出すのが間違つて居ます。生活などはどうでも宜しい。唯なよ〳〵と優しく、おほらかに、なさけ内に滿ちて、おもての物ごし雅ましく、事にふれて才氣にくき計りなるも見ゆると云ふ少女の美を愛護して、化粧と學校の教課とに、さながら夢を見る如くにして、樂しき日を送られたいのであります。

◎此に至つて私は斷言します。女子教育は女らしい女を造るのが目的です。美くしい人間の花である少女を造るのです。然るに今の女學生には、不幸にして女らしい女、少女らしい少女を見ることが少いのであります。それは前に述べた如き服裝にも由り、また言語舉動にも由りませうが、更に根本の教育の目的が私共の考とは違つて居るからです。

◎今の女子教育の目的は、女らしい女を造るのでは無く、二言目には賢母良妻を造ると云ふのです。是は今の女子教育者の甚しい不量見であります。母となり妻

となる位な事は數へるまでも無い事で、夫を持てば自ら妻の爲すべき事を行ひ、夫婦の間に子が出來れば又自ら母の爲すべき事を覺え得るものである。若し敎育の目的が良妻賢母にあると すれば、男子の敎育も亦「中學以上大學は良夫賢父を造るを目的とす」と云ふ綱領が無くては成らぬ。良妻賢母と云ふ如き事を目的として敎育するが故に、女子の性情を矯めて夢幻的より理性的たらしめ優美を沒して粗暴ならしめ、小賢しく生意氣ならしめ、殆ど女子の特色を失はしめたのであります。それで男子の敎育が男子らしい男子を造るにある如く、女子の敎育も娘らしい娘を造るやうにしたいと思ひます。鬼の面の如き醜婦で、嫁入口の無い女敎師先生達が、自ら經驗した事も無い賢妻良母主義の敎育に從事するのも矛盾して居ますが、又その擬生男子流の女敎師先生に、との娘らしい娘の敎育をなさる資格も缺けて居ます。(この議論には徹頭徹尾服す事が出來ません。)



◎されば良妻賢母は跡廻しの事で、眞に女らしい女を造ると云ふ事を女子敎育の目的とせねば成りません。娘の内にはお轉婆でも、妻となり母となればおとなしい女に成るのは常に見る例です。一家の主婦として金錢の出納を自身でするやうに成れば、さうガラシなくもせられず、小兒の一人も出來て見れば自然と敎育の事も考へ出す。良妻賢母と云つて娘の内から騷ぐには及ばない事です。それよりか途上で行き會つても振返つて見させるやうな、

氣高い美くしい娘ぶりを多く養成する事が必要です。人間の花と云はるゝ女性が、次第に男子化して、面を背けさせるやうな考計りに成らうとする今日の傾向は甚だ見苦しい事であります。

◎近年また一部の女學生間では、衣服その他の持物まで華美を競ふ風が行れて、一寸不斷着にも四五圓の銘仙を着ると云ふ有様で、一日に三四回も服裝を取替へ、お召や風通の衣服、絽の襦袢、琥珀の袴、金時計など と云ふ贅澤を盡して居りますが、是は彼の化物の如き服裝の女學生に比べると、甚だ眼に見ても快い感じを與へます。誠に斯樣な贅澤は贊成である。女子は其身分の許す限り其裝飾を美にするが宜しい。貴族や富豪の令孃達が黑ッぽい綿服やモスリンの黑袴などは見られた風でありません。併し服裝持物計りを美くしくしても、前に述べました性情の美を磨いて無くては、其表情なり姿勢なり言語擧動なりが、何處となく野鄙でありますから、無教育な女子の盛裝は却て厭らしく似合はぬものに成ります。此に於て私共は愈々今の女子教育の方針を、女の女らしい品性の陶冶に重きを置くやうに改めたいのであります。

◎今の女學校には餘りに課目が繁多である。其割り女子に必要なる課目は尠い。女學校は賢妻良母の養成所でもなく、女教師や女學者のやうな變生男子の製造所でも、無いとすれば、女子の性情を美くしく發達さする程度を限りとして、餘り煩瑣な六つかしい學科などは敎へるに及ばないと思ひます。女子の頭腦で三年や四年外國語を修めたり哲學を研究したりした所で、それがどれ丈の功果がありませう。數學なども餘り六づかしい事は必要が無いと思ひます。家政學などと云ふ課目もありますが、料理法や育兒法や迂遠な實際に關係の無い講義を聽きまするより、弦齋の「食道樂」一冊を讀むか、自分の家の下女に聞くか、又婦人科と小兒科の醫者に二三度聞けば、夫で十分に分る事であります。女子大學まで行つて料理法を習ふなどとは餘計な事です。抑も料理法と育兒法、簿記の附け方位で家政が修められるものでありませうか。家政學と云ふ名

が既に嗤ふべき名であります。之が家を修めるに實際必要な學科であるならば、男子も必ず家政學と云ふものを學ばねば成らぬ譯です。（記者曰く今の女子教育には不感服の點が甚だ多いとおもひますが去りとて著者の言には首肯し兼ます。）

◎女子の學科として必要なのは、文學、歷史、植物學、音樂、作文、習字、裁縫、畫學などである。其他の學科は今の高等小學校程度位に止めて一と通り心得て置けば宜しい。さて是等を敎へるのに、何れも趣味と云ふこと、語を換へて云へば美的鑑賞の力を養ふことを忘れては成らぬ。文學と云ひましても、今の國文の敎師の如く土佐日記や十六夜日記の如き惡書の字義や文法を敎へて得意で居るやうでは何にも成りません。苟も日本の文學を敎へる



以上は、萬葉集の相聞の歌の面白さや、古今集以下二十一代集の秀歌や、源氏物語の豐富な情話や、平家などのあはれな物語や、近松の世話物などの元祿氣質や蕪村等の俳句や、是等の上に現れてある、趣味を知らしむる事が必要である。歷史を敎へても然うである。何天皇の時に何々と云ふやうな事計りを暗記させた所で、女子の性情陶冶には毫末の利益も無い。夫よりか奈良朝時代に於て推古聖武の諸帝、聖德太子光明皇后などの王后大臣が如何に宗敎や美術の上に執心で有つたか、大鏡や榮華物語に現れた藤原氏の榮華が如何に燦爛たるものであるか、と云ふやうな古代趣味を知らしめる事が必要である。

◎植物學などは不必要のやうであるが、女子が社會學

や經濟學を修めるこそ不必要で、花を培養するとか花の名を多く知つて居るとか云ふ事は女子に似つかはしい學問であります。愛らしい唇から喋々と哲學論や經濟論を聴かされる程興醒める事は無いが、無心に一朶の花を眺めた女子の風情は誠になつかしい心地が致します。かよわい人間界の花が、同じくかよわい自然界の花を愛護すると云ふは、益々女子の美徳を發揮する美くしい仕事であります。私は室内に計り居る日本女子に、斯う云ふ園藝の樂を與へるのは宜からうと思ひます。

◎音樂繪畫なども女子の品性を美くしくするに宜しい學科です、作文や習字も其通りで、女子のコツ〳〵した文章は興ざめますが、善い手で氣の利いた手紙や歌を書く女子は、顔を見ない前に先づ其人柄が慕はれます。近頃の女學生諸君に殊に惡文惡筆が多いやうに思はれるのは歎はしい事です、如何に容貌が美くしくても、衣服の着ざまが惡く、言語擧動が卑しく、手紙の文章や文字が拙くては、却て其容貌の美を害してしまひます、裁縫も唯だ衣服が縫へると云ふ丈では足りません。如何にどの色とどの色とを配合させて、巧みに自分の美を加へるやうに縫はうかと言ふ事に通ぜねば成りません。此後は男女交際も自由に成るであらうし女子の社會に出でる事も增すであらうし、女子の裝飾と云ふ事も從つて佛蘭西などの如く色々新案の流行もあらうと思ひますから、女子が如何に自己に適した上品な優美な衣服を縫はうかと云ふ研究も必要でムりませう。

◎お白粉のつけかたなども今の女學生諸君の多數は至ツて粗雜であります。質素とか何とかと間違つた今の教育者の意見は沙汰の外として、お白粉をつける事も亦女の女らしい身だしなみでありますから、日常大切な事であります。厚化粧も薄化粧も其人の形に由る事でありませうが、能く注意して化物の如き顔に成らぬやうにせられたい。女子はどうしても美と云ふ事が生命です。學問も服裝もお白粉も臙脂も、共に女子の美を添へる爲めに必要であります。私共は賢母良妻主義

は大反對で、どうか美くしい女子を造り上げる爲めの敎育が起つて欲しいのでムります。(女學記者曰く此の議論一ト見識あつて面白けれど賢母良妻主義に反對をしたらば女子敎育は始末がつかなくなりませう此段著者の一考を煩します。)

◎私共文學に從事して居る者から申しますと、今の如き敎育の下に心を鍛へられ、今の如き服裝をして居る所の女子はどうも美くしい詩題にする事が出來ません源氏物語の内に多數の女子が書いてありますが、今の多數の女學生の如き厭ふべき女性は一人も現れて居りません。(記者曰く御尤ですが、併し女が悉く詩の材料になるやうでは國の前途が危いかも知れません)紫式部が書き分けた女性は、悉く容貌の美を具足しては居りませんが、それが一々私共になつかしく思はしめるのは、皆その性情なり服裝物ごしなりが美くしいからであります。某小說家の書いた『魔風戀風』が今の女學生間に歡迎されると云ひますが、彼の女主人公初野の如き女が美人であるならば、私は墮落した明治の美人の標準を悲まねば成りません。私はどこまでも美人の標準を、光明皇后、小野小町、和泉式部、紫上、花散里、紫式部、式子内親王、梶女などに取りたいと思ひます。

(完)

女學生の服裝

紅生

女學生間に、袴が用ゐられてより、其流行天下を風靡し、現今女學生と言へば、直ぐ海老茶又は紫の袴を聯想する程盛んになり殊に去年大阪に開かれた博覧會に於ても、其見張女に此服裝採用せられ、陳列棚の角に紫袴をつけて、德利然と立つて居るのを見ました。斯の如く盛んに流行するのは、種々原因も有りませうが、要するに活潑なる運動に適する事、腰かけるに不便ならぬ事、及び袴の色合の華美な事が、其主なる原因でせう。

元來、巾の廣い帶を廢して袴を着けるに至つたは、吾國女服の大なる變遷と言はなければならぬが、經濟上幷に美術上の研究がまだ屆いて居ませんのは殘念です。

衣服は身體を保護するに止まらず一の裝飾で、身體の醜所を全く隱すと仝時に、美點を發揮するものであるそれ故欠點の多い身體の者程、完全な衣服を要する理で、殊に妙齡花の如き婦人は、家庭の裝飾、公會路上の美觀となるのであるから一層大なる注意を要する事でせう。

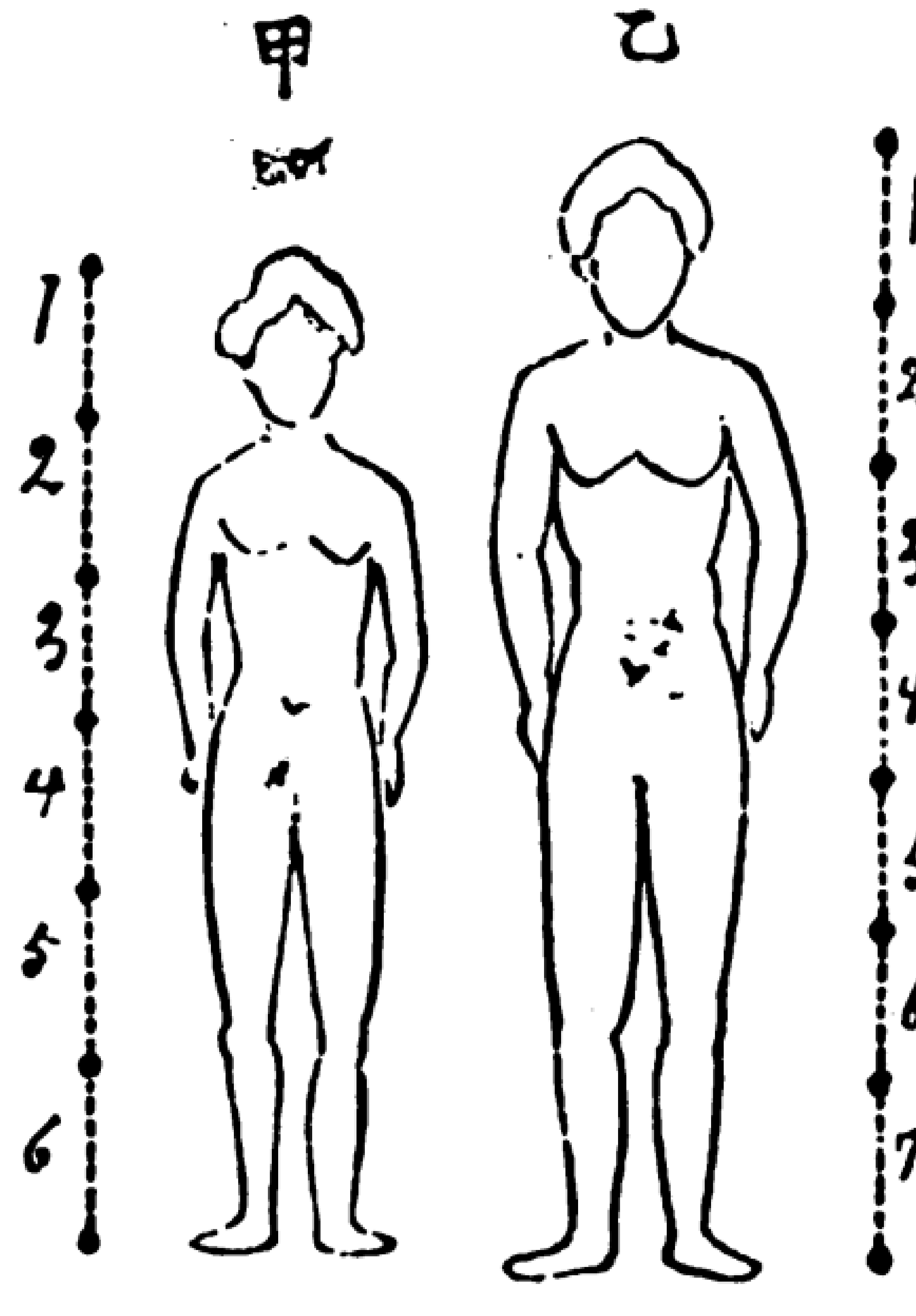
衣服を研究する前に身體の事に付て一通り知らねばならぬ、自然が創造した人體は其形左右相似形で、眼と眼、手と手、足と足、との如く、凡て右と左には仝一の形のものが相對し、上下には頭、胴、腰、足と不規則に、各部が結合されて居るが、全體を見ると、各部各適當の位置にあつて、美の點からも實用の點からも、申分の無い形で有る。美術上の原則に多樣中の一樣（Unity in Variety）とて變化の有る内に統一の有るのを主として有りますが、人躰の形は其適例で大小無數の曲線が、此原則通りに綜合せられて、各部互に相一致し相對照して、其間に美くしい調和の存する事を云ふのです。

又美術家は人躰に付ても、各部の割合（Proportion）を特に研究します。即ち顏面、四肢、胸部、腰部等の間に存する、大小長短の關係で有ります。是れは勿論人種風土によつて種々異なる點もあります。美術家が認めて完全な形と見做し、繪彫刻に表す上には、必ず一定の割合が有る古代の彫刻家にも、人間の身体の割合より其權衡を研究した人が多いのです。

凡て吾國人は躰格劣等で、殊に婦人に至つて甚しい肉の不發達、骨格不整頓、全体の不格好なる事、五色にして、自然の前に立たせ、其れで繪になる身体は殆んど無い。二十歳前後の婦人に就て顏面の長を單位の一とし、其れによつて測つて見ると身體の全長が六。三兩手を水平に延せば其長さ殆んど身長に等しく、臍の

位置頭の頂より三のところに有り、臍を中心として上部下部の比が大略十一と十二、肩の巾は顔面の巾の二倍。

更に發達した西洋婦人の一例を見ると、全長が七・五兩手を水平に延した長さ全長に等しく、肩の巾顔面の二倍強、臍を中心として上部下部の割が七と十、著しく胸部、腰部の肉が發達して居る、是れを前例の吾國婦人の割合に比較して見ると兩手肩と全長の割は似て居るが身體全長の比が甚しく相違して即ち六・二、と七・五、其間に一・二だけの差が有る、是れだけ吾國婦人は顔面の部分が、大きく見ゆる理です。又臍を中心として全身上部及び下部の割合に付て見ると、一層甚しい相違が有る、即ち日本人は十一と十二、西洋人は七と十、是れだけ吾國婦人は足の部分が短かい。此上下部の割合は全身の權衡上最も必要で、古來有名な彫刻に付て見ても、三と五、七と十一、七と十二の如く、何れも下部が上部の一倍半以上となつて居る。



第一圖

要するに吾國一般の婦人は、骨格上、肉の發達上、各部の割合上總て美の點に欠けてゐる、豚のやうだとか鵞鳥のやうだとかと、種々なる惡い形容の起るのも無理では有りません。近來は餘程よくなつた樣で有りますが、猶俯き過ぎるのが多い、他人と對座の時、路上を歩く時、眼は常に足に注がれて居ます。凡て俯く姿は、思索、沈思、悲哀、卑屈、乃至は搜索の意味を有し、頗る見苦しいのみで無く、爲めに全然胸部と背の上部の形をくづし、胸の豐かな趣を欠き、背部の優美なる曲線の接合に、調和を失つて居る。其原因は全く習慣からで元來吾國服裝の襟元が、俯むく方に便利なやうに出來て居るのが、大な

る原因です

かく吾國婦人の身體は、欠點が多いから、何れの國の婦人よりも一層完全なる衣服を要する理ですが、さて衣服は實に千差万別で各國皆各樣の形式を有し、一國内でも地方に依りて異なる、これは、國の風土、氣候、宗教、風俗、習慣、社會の狀態等によつて然るのであるが、是れを學術的に分類しますと、大略三通になる。

一、單に身體を被ふの目的

二、身體の運動を自由にするもの

三、自然の體格を多く表はすもの

第一は、單に布切を集めて身體を被ふに過ぎません野蠻人の衣服は多く此類です。第二は體格を或度まで包んで其四肢の運動を多く表すもので、仕立が比較的直方形に近い布片から出來て居ります。(和服は此種類に屬す）第三は自然の體格を其儘表すを主としたもの、仕立が最も複雜して居ります。(洋服は此例）身體各部の位置が衣服の上からでも、明らかに指適さるゝのです。(洋服でも婦人の服の下部は、第二の種類に近し）



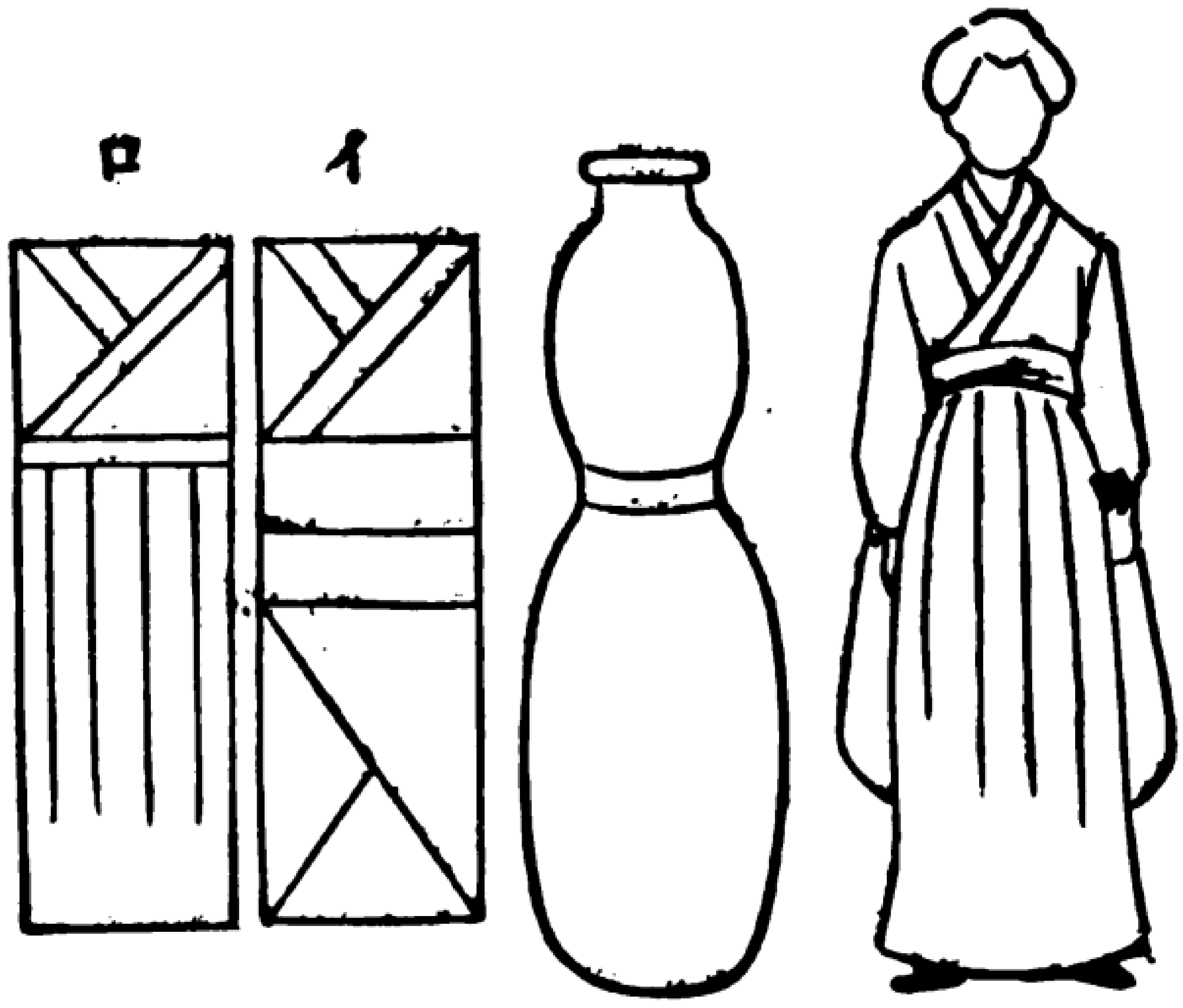
第二圖

日本では上古の服裝は、衣と裳の別が有つて若し其儘一直線に發達したならば、今の洋服となつたかも知れないが、其が横線の方向に發達して現今の如くなつたのは、如何なる理由か、おもふに吾國の婦人は其體格最も不美術的で有るから、是れを格好よく飾るには是非とも第二種による の必要がある。

元來洋裝の裝飾的主意は、身體上欠點の少ない臍から上部は、自然の外形を其儘に表して優麗を主とし、比較的欠點の多い腰部以下を、大きな袴で包んで仕舞て神秘的とし、上部の細く複雜せる形に對し、下部を太く單調にして其間に、對照の調和を保たしむるのです。即ち首、兩手

肩、胸の部分は、天然の美くしい形を其儘表し、乳の下からコルセットでしめ付けて、腰部の肉付を一層過大ならしめ、腰から下は單に運動を表すに止まり、凡てを大きな袴の内に包んでしまう、此上部の細きに對して下部の太く廣がつて居る形をマトメルには、其外形を自然よりは一層曲線的にしなければならぬ、即ち胴の部分が細くなる程形は美に近づくので、コルセットの必要も自ら生じて來るので有る。

是れに反して吾國の女裝は、全然別な裝飾的主意が有る。洋裝の兩手の細きに反して巾の廣い大きな袖が下り、乳の下をコルセットでしめつける代りに、厚ひ帶を巻きつけて太く見せ、洋袴では太く見せる腰のまわりを、和裝では可成小さく見せやうとする等、大なる差が有るが、先來吾が國の婦人は、胴に比して、足が短かい、即ち上部と下部との釣合が惡いから是れを乳の下でしめて上下の句切とするは甚だまづい仕方で有つて此部分に巾の廣い厚い帶を二重三重に巻きつけ、華美な色合模樣を撰んで、色の上から、句切を此部分につけるので、巧妙な方法と云つてよい。其から下部は膝の處迄、衣物をピッタリ合せて裾を開かせるのは棒の樣な外形を優美な曲線に變じ、圖の如き花瓶と全一、兩袖は手の運動を一層美くしく見せるのみで無く横に面積を與へて、全體の調和をよくする價値が有ります。(第二圖乙)少なくとも兩袖は裝飾的一要素で、是れを無くしますと和裝は確かに、其美的價値の半を奪ひ去らるゝので有ります。如上の主意から吾國では婦人は、腰のまわりが細く無くてはいけない、付てはお尻が大きくては恰好がよくない歩くにも必ず内輪で無くては裾が見苦しくなる。凡て



美人の要件等も此邊から割出さるゝので有ります。

女學生の服裝だが、此服裝は要するに其主眼、在來の帶を廢して袴に變へたに止まり、其袴と言つても明治の新案では無く、上代に在つたものを復古したので袴を用ゆる女學生式は洋裝の瓢簞主義に近づいて居るが。娘式は巾の廣い帶で以て胴の部分を自然よりも一層太くし、單に其華美な色合にて、上部下部の句切をなし、其結目に意匠を凝らして、裝飾の主要とするものですが女學生式は乳の下から直ちに袴をつけて、胴以下の形を其儘表して居る、言はゞ單一な手法で有ります。

又娘式では襟の合せ目が三角形をなして、其一邊が延びて左に走り、帶を隔てゝ腰の部から右に方向を轉じ、裾に至つて再び相似の三角形をなし、上下相對してよく調和して居ります。學生式でも上部は仝樣で有るが、其左に延びた線は其儘乳の下で隱れて、下部は全く別物の袴となり、且つ袴にあるだけの襞は、其が有する唯一の裝飾的意匠で有りまして、見たところ縞がついて、大ひに嚴粛の意味を與へ、且つ腰から下の垂直の性質を、非常に補けて居ります。其れは恰うど男子の洋袴に、竪縞を用ゆると仝じ理由です。

側面背面に於ても學生式は、形の惡い瓢を前後左右から見たと一般、肩から腰のあたりの體格がよく見え何處までも不格好なプロポーションが一層眼立外、殆んど變化も意匠も有りませんが、娘式では全く別樣です。即ち巾の廣い帶の結目が、背部の大なる面積を占領して居ります、極言すれば日本の娘は、帶を背負つて立つて居るので有ります。此大膽な結目が裝飾の凝つたるところで、見る者の注視點を、盡く其一部に集合し、兎角醜惡な體格の背部を巧みに隱して、全く別樣の美くしいものに仕立てる働を有して居ります。是れが、在來の帶の特長で、且つ和裝には欠く可からざる一大要素で有る。

序ながら袴をつけた場合には履物は是非とも、靴で有りたい重々しい在來の下駄は凡ての點に於て袴に調和しません。其は娘式に靴が調和しないのと、仝じ理由です。

珍書解説

通俗源氏物語 夏季學校(二)

水原翠香

注解

○帚木　坂上是則が哥に園原や伏屋に生ふる帚木の在とは見えて逢はぬ君哉。美濃信濃の國堺に園原伏屋等云ふ處あり、こゝに生ふ木遠くみれば帚を立たる如く近く寄れば似たる木もなし、故に在ながら逢はぬ戀に比して讀る也、此物語作物にはあれど昔今共に世に有たる事實を其人名を替て記せるなれば有とみればなし無とみれば有、此物語の惣名ともみるべし、巻中雨夜品定は著者の特に心を竭せる處、是紫女が持論也。

○松明　昔は挑灯なし、夜行には松明を採て道を照せし也。微行には人目を憚りて態と火を細くする也、松の木を割て二三本を寄て括りたる物故に松の明とかく、たいまつは焚松也音便タをイと云ふ、巻中松明の事處々に有り一々注せず松とのみいへり。

○臨時祭　加茂臨時祭は舊暦の十一月酉日也、調樂は下稽古也、四日前午日内裏にて行はる、延喜四年十一月廿三日因雨雪着深沓、此實記を採て奕ふるといへり。

○我歌雨途　白氏文集秦中吟云主人會良媒置酒滿玉壺四座且勿飲聽我歌雨途富家女易嫁々早輕其夫貧家女難嫁々晩孝於姑上下畧之、此意を以博士が式部に我女は孝貞也と誇りて盃をさせたる也。

○さゝ蟹の擧動　蜘蛛の形蟹に似て小なり、故に小蟹と云ふ、允恭天皇衣通姫に通はせ賜ひける時、姫軒より蜘蛛の下り來るをみて吾脊子が來可宵也小蟹のくもの擧動兼而驗毛と詠賜ひしより、蜘蛛の下るを俟人來兆とす、故に式部の歌之をいへり。

○五月節　五月五日節會天皇武德殿出御宮内省獻菖

蒲。内侍藏人續命縷賜群臣云々○何のあやめ物の黒白分ぬ也といふ　菖蒲もあやめといへば掛て云ふ文章の活也。

○九日宴　天皇南殿出御文人博士を召て題を奉らしめ各々韵字を探り詩を作る也○推叩とは推とせんか叩とせんかと一字を置兼て久敷間惑ひし人有、是が詩句を考案する事を推叩といふ、前の五月菖蒲と九月菊と正對にかける文章也。

○中神塞　金櫃經云天一立中央爲十二將定吉凶云々。天一神と云ふ神有りて中央に立つ故に中神と云ひ四方に巡行す、此神の在方を犯せば祟る故に塞と號す、方違とて明たる方に宿りて神の他方に移るを俟て行けば祟なしと云ふ迷信也、方除方崇等昔は重く尊信せられし也。

○肴求むと小動の磯　風俗に云「玉垂の小瓶を中に置て主は妹とや肴もなきに肴求めに小動の磯の和布刈上に」紀守が賓客に忙走る樣を面白くかける也。

○戸張帳　催馬樂歌「吾家は戸張帳をも掛たれば王きませ聟にせむ御肴は何宜けむ鮑栄螺か甲贏よけむ、」此歌の意にて聟にせむを含めて戸張帳は如何と戯れ賜ふに對して何宜けん共承はらずと答たる也。

○格子　昔の家は今も寺院等に有る如く堅横に組たる格子戸を一間に二枚を横に箝て一枚は鴨居上に掛留下は引上て脱し、さす時は下を先箝て上を卸て上下を鐶にて掛け置たる也、棲戸は開戸の事。

○空蟬　蟬の脱空也、源氏の忍入を敏捷に悟りて薄衣を脱捨置て逃出たる其薄衣を蟬の脱空に見たて、、是より此女を空蟬と號く。此卷專ら此女の事なる故に卷名とす。

帚木

源氏十六歳の夏中也○卷名歌による事詳にくはし有名なる雨夜の品定は此の卷にあり。

光君の名世に騷がしく衆女の愛賺すと餘りに腌臢き故にや、表には着實を粧ひ給へど裏には無理事に心を竭さるゝ癖有て、折に觸て有間敷御擧動も交るを秘すとすれど顯れては針小棒大に語り傳えけむ、人の物言嫌さよ。

中將にて在ける時五月雨晴間なく内裏の御物忌（物語の帚木巻に注せり）續きて彌長居侍ひ賜ふを、大臣家には怨しとは覺し乍も、御裝束や何呉と萬に注意して贈らせ賜ふ、御子の公達唯此御宿直所の給仕を勤め賜ふ、中にも宮腹（宮腹とは皇女の生み賜へるを云ふ此物語中處々に多し后腹といふに同し）の頭中將（帝の御妹女三宮左大臣に降嫁在て此中將を産賜へり）と葵上は殊に親密にて、戯遊びも他よりは狎々しく事勸へり、此人も又右大臣の聟なれど寵愛るゝ正室（四の君）は腌腊がりで好色なる仇心の此君に意氣相投ずるなるべし、君の出入に打連て晝夜學問をも管絃をも共にし何方にも綢繆爲行程に自然禮敬も置ず心中の秘事をも隱さず語合けり、今宵も御宿直所に入て御厨子中の色色の紙なる艶書を不遠慮に惹出してみるを君遮りて他の打解たる文をと許し賜はぬを、中「其打解て傍痛しと思召こそ切望、普通なるは不肖も相應に書交して澤山持てり、女の物恨めしき折又は俟良なる夕暮等のこそ有趣けれと强てみる、大事に秘し賜ふは厨子抔の人目に附易き處に置賜はねば是は二ノ町なるべし、片端より見乍推量に夫か彼かと問ふ中に云當るも有、無端事を思ひ寄せて、疑ふも可笑、源「其許にこそ多く集へたらむ、ちと見せ賜へ、中「有は有れども御覽ずる程のは尠からむと、申序に凡世中に難なしと申可き女は稀也と漸々悟りぬ、表面可也に折節の返歌走書よく爲るも多けれど實地に其才學の撰に洩る間敷は稀なるべし、少しく學才あれば人を貶しめて傍痛き事多かり、（今も女學校上りに此類多く有り可愼）親の寵愛女は費用を惜まぬ故に自然何事も宜く見え侍女輩も其遲たる方は隱して云はず、能方の片端を取繕ひて語るを夫然非じとは空に奚推貶さむ、眞かと入て見れば見劣せぬは無哉と呻吟て云ふに君も思合さるゝ事や有らむ打含笑て、源「其片廉もなき程の女は有らむや。

中「然斗拙劣なるには誰かは偖され寄べき、採處なきと優たるとは數等しくや侍らむ、上流は人の尊敬に依て隱るゝ處多かり、中品にこそ各自の主義も見え分る物なれ、下品となれば何事も人の耳目にたゝず等尤も至當にいへば、

源「其上中下の品々は何を標準としてか分類すべきと

宣ふ折柄、左馬頭藤式部丞の兩人打連で御物忌に籠らむとて參れり、兩個共頗好色家にて殊に馬頭は快辨なれば中將好時期へ來れりと

中「今云々の問題あり辨解せよと仰すれば、此人々元來得意の事件なれば、それは面白しと眞顔になりて論じけり是より品定也。

馬「元來の門閥ならぬ發達者は世の思做宜からず、又貴族血統にても逆境に立てば萬心に任せず、劣びたる事自然に交る物なれば取々に理て共に中品に置べし受領（今の知事）等の品定りたる中にも（タカノシレタト云」）又段有て憖の上達部よりも非參議の四位等に勢力有て素姓卑からぬが富裕なるに任せて十二分に寵育女には貶め難きも多かるべし、宮仕に出て意外の幸福を得る例も有り等いへば、

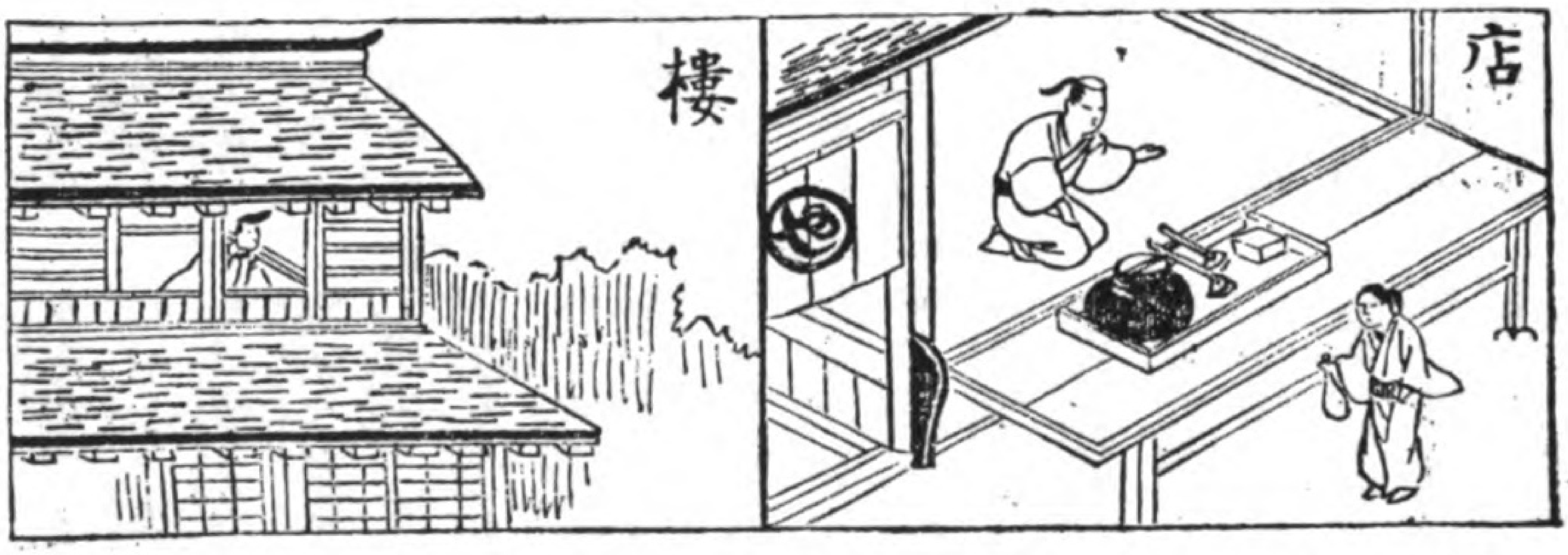
源「總て富榮に從可也と笑ひ賜ふを、それは他人のいふ言也と中將惜がる（源氏程の貴人の言ふべき言に非ず餘りにうがち過て憎らしといふ也）

馬「素姓勢力共に有る家の女にして拙劣ならば其親さへ云甲斐なし、又優たりとも當然の事にて珍氣なし、上流の御事は我輩の及ぶ可ならねば申さず、扨又世に在とも知られず、荒破たる葎門に案外臈更たる女の閉され居るを見出たる社限りなく珍しけれ、或は父の老て頑固に、兄の顔の憎氣なるに引換て高尙なる女在らば、上流の御目には如何か不知、生等に於て爰か心留めざらむやと式部を見やれば、吾妹の佳聞あるを云ふ也と心得て、忍笑して嬉氣也、君は上流にも難をいはば多く有をと覺す、白き御衣に軟なる直衣（なほしの音讀貴人の常服也）無造作に紐等も解たる儘にて机に寄懸り居賜ふ、御火影の美しさ此御爲には上が上を撰出ても猶飽まじく見えたり、馬頭猶語り進みて、

馬「他人として見る間には難なきも、我妻として後に申分なきは扨なき物にて、男子の朝廷に奉仕するも世の重鎭國家の棟梁たるべき器量あるは稀なるも、天下の政事は一人二人にて執るべき物ならねば上は下に輔られ下は上に從ひて事廣く讓合ひて行はるゝ也、狹き一家の主婦一人を按するに兎に角に一得一失にて無疵と思はるゝは稀否皆無といふ共過言ならざるを如何せん、然れば必しも心に適はずとも逢始たる緣を緣として止まる人は實意有と他人も稱し、然保たるゝ女も幸

福といはるべし、君達の無此上御撰には奈何人かは配合賜ふらむ、我輩風情の中等の女すら若き程は塵も附かじと身を粧ひ飾り、文かくにも墨次幽艶に思はせ態し聲聞許近寄ても蟻の私語如くにて克も聞かせず上﨟疑しきに僞さるゝ事あり、又娜娜に女らしとみれば餘り情に過て仇めく是を第一の難と爲べし、又一家の主婦たる勤は克爲もそれに專て身をも粧はず寐亂髮も梳らず、夫に對する勤を忘れて不風流なるも興醒ぬべし、又男子外に出ては公私に附て腹立事、心に餘る事、他人にいはれぬ事をも妻に語りて慰めらるゝならばいかに信憑からんと語りたりとて事情を解せねば何かは爲むと獨り歎息するを何事ぞなど茫然に無情ぞ云甲斐なく口惜き、況て懊惱める心も知らず侍女らとさもなき事を笑ひ興じたる擲も懲

朝の風俗



しつべし、又鷹揚に柔順なるは思ふ儘に教育も爲む差向ひて可憐なるに足はぬ罪赦さるゝも他國に出張などしたる時、何事にもあれ便に附て云ひやるに其返事の要領を得ぬぞ云がひなき等限なき理辨者も定めかねて歎息す、噫素姓にもよらじ容貌は猶更いはれじ、唯佞出たる心なく貞淑なるをこそ探べかりけれ、或は艶に物羞して怨むべき事をも只管に忍耐て心一つに餘る時、淒き歌など讀置て身を隱す例も侍るかし、童なりし頃女房が物語に然る事申しゝを尤と感じて心深き事哉と聞侍りしが今思へば輕々しく物好なる事にこそ候へ、譬奈何憂事有とも志有る男を捨て迯隠れたりとて何の能事か有らむ、然るを心深し等稱す人あれば情に激しては尼にも成べし、始の程こそ心も澄たる樣なれ緣故人尋來て殿女の夫の御心

に澮らずおはする物を可惜御身を早まり玉へるよ等云はれて悔しき心附ぬれば生浮びして佛も却て心汚しとや見賜ふらむ、唯何事も克耐忍して末遂るぞ上策なれ、惣じて恨むべき事有ば憎からぬ程に諷じて所謂遠火にやく餅の甘味は男も忘難く夫々附て思ひの增物也餘りに放任無嫉妬も氣樂なる樣なれど夫として面白からず、却而女の必を疑ふ事あり、男子の心も多分は其配偶者の故に亂も修りも爲るもの也、然は非ずやといへば中將肯首て、中「實穩順なるにしくはなしとて我妹の姫君は此定に適へりと思ふに君の眠りて聽かぬ樣にお在るを心疾と思ふ、左馬頭判决博士と成て得意然たり、中將は此評論聞果むと熱心に成て會釋へり。

馬「萬事に准へて思召せ木匠の物を製造するに寸尺の定めもなく、唯意匠を稱する物は歪晒落たるも又有趣く珍きに目移りするも、昔より規則正しき物品を無難に造るは眞の上手は格別にて劣者は遠く及ばず、又繪畵とても人の知らぬ神仙、荒海の鯢鯨、靈鬼の容貌等は其實似たりや否知られねど筆勢力ありて恐る可人目を驚かせば足るべし、尋常の家屋、庭園、花紅葉、湍にても克知れる鳥獸の類は上手拙劣尤克見え分れ侍る、書も又深く學ばぬ人の爰彼點長に走り書紛して打視才々しきも猶正式に筆法を學びたるが守りてかけると採並べては實力の慥なるをぞ採べかりける、伎藝猶且然り況人の心術行狀に於おや、附而好色がましけれど若年の頃の懺悔物語申さんとて近く居進れば、中將彌興に入りて頰杖突乍向ひ居り法師の說經に似たるも有興、馬「まだ最卑官なりし時通ふ女在しが容貌よからざりしかば若き心に之を守らむとは思はれず、爰彼紛れ歩行しを妬甚しくて毎度口諍しあひき、雖然此女數にも非ぬ我を何故斯迄思ふらむと心苦しき迄萬に心を竭しく醜面をも疎まれじと朝夕に取繕ひ、他人に見えなば夫の不面目にやと恥躱れて常に衣食の方にはなき手を出して又なく信憑かりしかど、唯此嫉妬深くて後には公用にて夜の更るをも疑ひて腌臢さ堪難かりしかば一度懲る斗脅なば愁さも少し止まむかと思ひて、斯いつ迄も愚痴のみいはゞ我も又耐難し今夜

を限と思は丶何とでもいへ偕老と思はゞ妬を慎め今と
そ余身卑けれ行末立身せば糟糠の妻と崇めて堂よりは
下さじ等賢く敎立る積にて我猛く言貶したるに少し笑
ひて、女「其徽賤を忍びて立身を俟方は苦からず、唯
多悄せらるゝぞ耐られぬ、互に耐難きは是迄の緣なら
めと妬氣に云ふ泣詫むとこそ思ひつれ案外なるに呆
れ、且腹立しきに憎々敷罵れは女も激して某が指に咬
着たり、こは何爲ると突放ちて然ば今夜こそ限なれば
と痛き指を屈めつゝ、

男「手を折りて逢見し事を計ふれは
イマヽテノイサカヒチカゾヘタラナンノ只今クヤツ
是ひとつやは君が憂きふし
カレタバカリテナシウキフシハ毎度ノ事デアル
モウカンニンナラヌ

女「憂きふしを心ひとつに計へきて
オマヘサンノウハキチカゾヘタライクラカシレヌ
こや君が手を離るべき折
今コソ君か手ヲキツテワカレルベキ折デアルアベシ

など云合ひて別れしかど心底には絶果むと迄も思は
ず、日頃經る迄消息もせず捨置しが、(臨時祭の調樂)
に夜更て退出る時霙降りて寒きに我家は遠し、内裏に

直宿も凄冷、此頃通ふ所も少し厭氣付し折にて、思へ
ば行方なきに舊想發りて奈何思ひ居るやと動靜も見傍
雪を打拂ひ乍入て生人歹く爪嚙ゆれど、舉然今宵日頃
の恨は解べく思ふに燈壁に背けて衣を伏籠に掛等して
人俟㒵也、果然と心誇するに正身は不在女房に問へば
親の家に行たりと答ふ、含情歌にても有かと求むれど
何もなし、失望して歸りしが、其後衣服抔注意して贈
りおこせたれは猶思ひ放たざりけりと察せられて兎角
挑み試るに、否とも應ともいはで御心の改まりたらば
とのみ答たり、此方も云懸りにて然改めむとも云はず
縄引（双方より引合也引よせば只には寄らで 春駒の縄引するぞ名はたつときく）せし間に病て亡候
ひぬ、果敢亢言をも眞の大事をも商議するに云甲斐有、
染物は龍田姬、機は織女にも劣る間敷、裁縫將工伎に
なせしぞ最惜きと追想して歎息す、中「其織女の工伎
を永き契に換て肖らましかば、然るに依て難き世ぞと
は云なれと言棄し給ふ、馬頭彌得意に成、男「扨又
今一方は人柄も增り、歌讀、走書、琴の爪音、何事も
覺束なからず、容貌も美なりしかば、此妬女の目を忍

びて折々通ひし程は大に心留りしが、彼女の死後は屢通ひて慣るゝ儘に餘り仇々敷に嫌氣さして自然枯々に成し間に、他に心寄する人有りけらし、(アツメラレイ)神無月(今ノ十一月末)の頃月の面白かりし夜、内裏より退出に或殿上人と打連行しに、此人今宵人侯宿有とて立寄るは彼女の家也、偖はと悟れど不知貌して見てそれば、此男甚く輕跳て(ソワ〳〵スル)門近き廊の簀子に尻掛て暫時月をみる、庭の菊代謝て風に競へる紅葉の亂等實適とみえたり、懐より笛探出て吹鳴し影もよし(飛鳥井に宿りはすべし影もよし御水も寒し御馬草もよし)など口號唱ふ、内には女克鳴る和琴を調整へて巧に搔合せたり、月に澄て折面白きを男甚く愛て簾下によりて庭の紅葉は踏分たる跡もなしと妬ます(我より外訪人なしと云て妬ます也)菊を折りて(無情人は兎夫を云馬頭即其人なるを不知して如斯のろけを云ひて友に聽させる也女も馬頭を見附ざりし也)

男「琴のねも月も得ならぬ宿ながら無情人をひきや留ける、(トメハセナンダトミエル)歹かめり抔いひて今一聲聞棨す人在にと勸て戯れ掛れば女も聲甚く繕ひて、(コガラシノヤウニアキノキヌオマヘサンノ子ナレバ 事なかけたり)(コトバデイフナヨ〳〵)

女「凩に吹合すめる笛の音をひき留むべきことの葉ぞなき(トスチヲイフ也)など嫉き耕す、此淫婦奴と憎むも知らで又箏琴を磐渉調にしらべて花やかに彈出たる爪音は面白けれど、官女などの飽迄人馴洒落たるは斯樣の事勘も時に有趣からめ、生涯の妻とせんに信憑氣なく差過たりと爪彈せられて絶果たりしが、此二人を比較爲に若輩の心にだに仇なる方は厭はしゝ、今は況て然而こそ候へ君達の御心の隨に觸らば落む萩の露、拾はゞ消む玉笹の霰的の艷なるは有趣と覺召さるべけれど、今七八年の後には必覺知り賜はむ、拙生が卑言も御心留めて淫蕩なる女には拘はり賜ふな、動ば御名を汚す恐れ有と、眞面目に誡め申せば中將例の肯首、君は少し含笑て、頭「何方に附ても人歹く仂なかりける物語哉と打笑ひ賜ふ、中將予にも失態の話あり卒かたらむ。

「一とせ忍びて通ふ女在し、父母もなく心細氣にて只顧予に依賴する樣可憐也、心の外に中絶せし時嘸恨むらむと思ひて行き見れば、然氣もなく穩順なりしかば心易くて忘るゝとはなけれど、公私の多忙に紛れて久

しく音信ざりし程に、此常にみる渡より甚く脅嚇たる事有しとぞ、遙の後に社鬨侍りしが、其時（右大臣の四君中將の本妻也）は然る事有とは夢にも知らで、猶幾日をか經たりけむ、思ひ悄て撫子の花を折ておこせたりしとて涙臨たり、

源「扨其歌はと問賜へば、中「何珍らしくもあらねど、

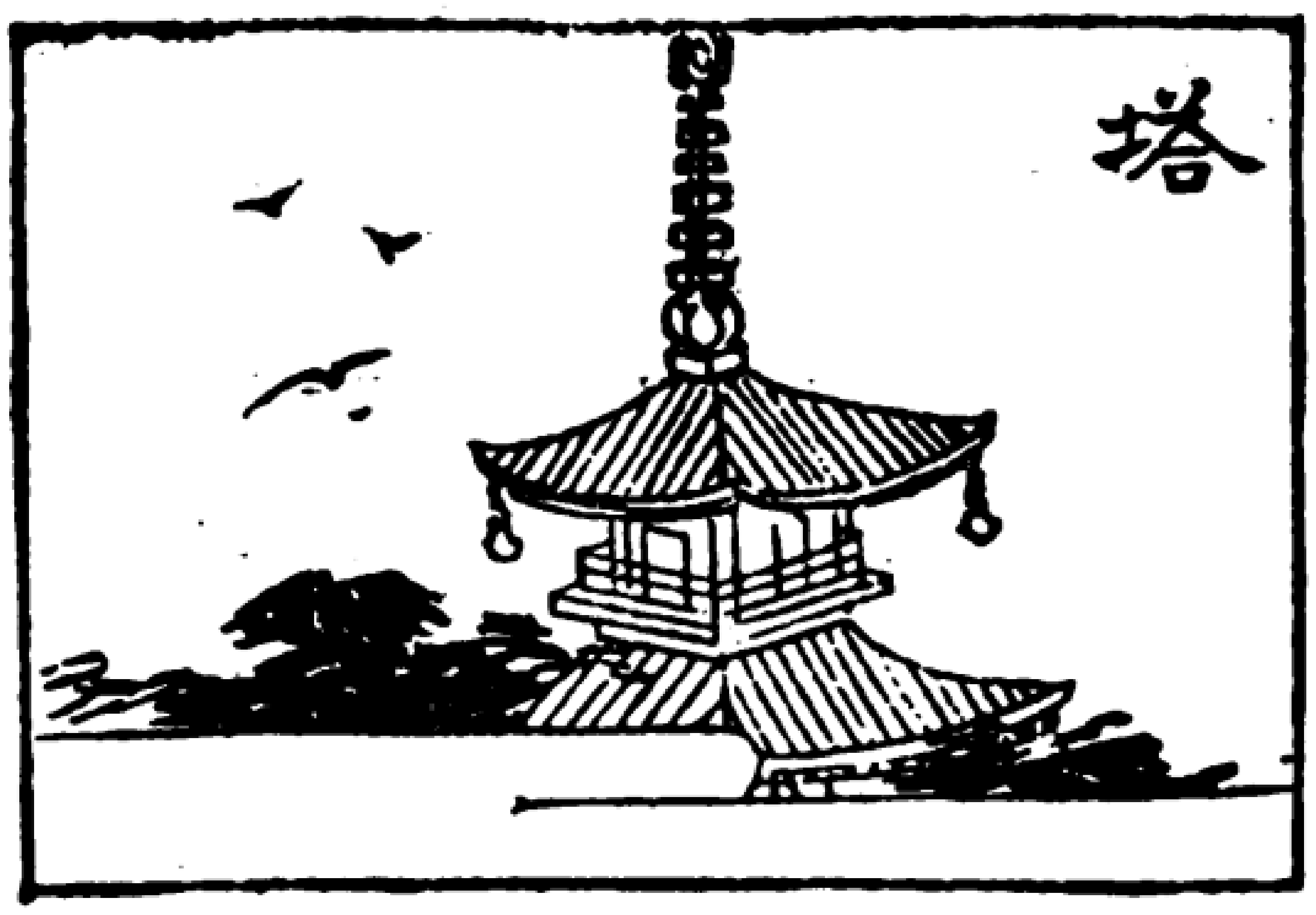
女ノ歌「山賤の垣は荒るとも折々に
カズナラヌ我身ナレバステラルヽトモセヒナケレドモコドモヘ
憫はかけよ撫子の露（撫子ニ兒ヲ掛テイヘリ）
アナタノ兒ナレバフビント思フテ折々ハツユノナサケヲカケ下サレ

是に催されて行きたれば、例の恨も何もいはねど物思ひ貌に虫の音茂き庭を詠めて、露に爭へる涙は昔物語めきたり。

中「咲まじる花はいづれと分かねども
本妻ヲハジメ他ニモ女ハ多クアリテ何レオロカニハ
猶常夏にしく物ぞなき
オモハネドモヤツハリオマヘニシクモノハナイ
一バンカハユヒハ見マデアナシタユヱ

倭撫子を置て先塵をだにと母の心を採る
妹とわがぬる床夏の花（塵をだに据じとぞ思ふ咲しより）

王朝の風俗



女「打拂ふ袖も露けき床夏に
コトロリナニノカヒモナクバカリナル身ノ上ナルニ
嵐ふき添ふ秋もきにけり
オソロシキアラシノフキアレルトキニナツテキタアヽコハヤカナシヤナントシヨウゾ

と果なげにいひ做て涙の落るを恥て紛らはし隱してのみ在ければ、然迄の事は、心付かで歸りける程もなく跡掻消て行方も不知成ぬ、死せりや生けりや、若世に在らば何方に彷徨らむ、彼時打明て語りなば斯も憧浮爲せむやは、右大臣家によし何と思はるとも夫は夫として爲方も有物を最愛の撫子の尤惜ければ、怎地尋出ばやと、心を竭せど今以線索もなし、是や彼宣ひつる果敢例なるべし、彼女も何方にてか胸焦るゝ夕も有らむ、實に保難く信憑氣なき方也けり、彼妬女も裁縫の方に忘難かめれと差向ひ煩はし、琴聲佳風流の才有とも淫風の罪重かるべし、噫世中や種々に比較苦かりけり、此種々の能限りを具て難點なき人は何處にか在らむ、吉

辯天女と雖又佛臭き嫌有べしとて皆哄笑ひぬ。

中「式部が處にぞ艶話は有らむ、少し語り申せと促されて。

式「下が下の際に何條聞召程の事侍るべきと辭すれど頭の君許賜はず、遲しゝゝと責られて何事をかと暫時考へて、

式「まだ文章生（書生の事）にて侍ひし時、賢女を見し事ありき、今も馬頭が申しゝ如く、公私の事をも商議すべく、處世の要旨も至深くて、學才將生青博士耻かしく、概て男子に口開すべくも候らはざりし、夫は或儒博士の女にて其父に漢學の爲通學し、いつしか忍びて云寄しを、父聞つけて、突然盃を採出て（我兩途を歌ふを聴け）と申ぬ（此事別ニ注ス其大意ハ女ナ許也）以後は夜毎に通ひしに適に後見して寢覺の語にも朝庭に奉仕る心掛を敎へ、經書の字義を説明し、消息も漢文にて假名を交へず書たれば、其女を師として詩文章をも學び得たり、今に其恩は忘れねども懷歎妻とはならで、無才の我輩常に心置かれて羞愧のみ思ひし、男子すら詩才なき者多くあるをとて息をつく、殘話をいはせんとて、

中「扨々珍ら敷女哉と挑奬賜ふ、とは知り乍も鼻の邊蠢めかして、

式「故ありて久敷罷らさりしが偶と立寄侍りしに、例の便室ならぬ客間にて物隔てゝ逢しかは中絶せしを拗ねにやと嗚呼がましけれど、此賢女輕卒物怨すべき者に非ず、聲も急促にて此月頃腹病重くて極熱の草藥を服して尤臭きに憚りて今宵は對面賜はらぬ、任他用事有らば承はらむと適に云ふ、何事かは云はる可唯宜程に答へて立てば、無愛相とや覺えけむ、此惡臭失なむ頃に來ませと高聲にいふ、答ざらむも逭にて立止まれば、實其臭氣顯然たるに鼻を掩ひ乍逃目をつかひて、

式「さゝ、蟹の挙動しるき夕暮に
　　ひるま過せといふがあやなさ

蛛ガ下レハ夫カクルト云フ其シラセアル夕暮ニナセニ蒜ノ臭氣失ルマデマテトハサテくキロクカナイ

何等の託言ぞやと云も敢ず走出るを追かけ來て、

女「逢事の夜をし隔てぬ中ならば

毎夜來テ下サル程ノヘメサナキナカナラバ

（恥を掛けたり）ひるまも何か眩羞かるべき（晝間テロ耻ズオメニカヽルケレトアナメカタトクナサルカラツイエンリロカチニナル）遉に口疾く返歌し侍りきと訥辯苦氣に滑作語る、君達呆れて何處に然る女在るべき虚談ならむと笑ひ阻めて、今少し宜事を申せと責給へど、是より外の事は知り侍らずと云ひて汗を拭ふ。

畢竟總て男女共に僅に學才あれば夫を人にみせむと爲社笑止なれ、三史（史記、漢書、後漢書）五經（毛詩、禮記、春秋、周易、尙書）の道しきを說明する女社愛なく氣疎からめ、然り雖又女なりとて世に交際ば公私の事共無下に知らぬも口惜、態と學はずとも天稟の才あるは耳目に留る事自然に多かるべし、然る儘に女同士の文にも字勝に走書し噫此才有て女らしからばとぞ歎かるゝ是は上臈中にも多かる事也（此段紫式部が淸少納言及同僚の女房中に、學者顔る人多かりしを諷刺してかける也）歌人は又歌に拘泥して然有間敷折にも人に讀かけて自己獨得意がれど他は同からず（五月の節に急ぎ參內せむと爲朝何の黑白も思はれぬに長き根を引掛）（菖蒲の歌贈る事）（九日の宴に難詩の推叩に他念なき折柄（九月九日には菊水の宴とて詩を作る例也歌は似合す）菊の宴を託寄る）等不注意千万返歌爲は煩はし爲ざらむも仂なし、後に思へば有趣もあれど其折の不似て目にも留らぬを思はぬが心遲き也、萬事時宜を知るぞよき、夫不解程ならば有情的得意然等せぬこそよけれ、知れる事をも知らぬ貌し、云はま欲き言も控へ愼めるぞ宜なかりける抔いふにも、君は藤壺の御擧動を想像して過不及なく世に有難くもおはする哉と彌慕はし、何方に寄果るともなく終には奇怪の戯言に笑ひ動揺て夜明にけり。

○辛うじて（ヤツトノコト）今日は晴ぬ斯籠りてのみお在るも大臣の御心憐ければ退出賜へり、又一層粲然になりし心地して露も亂たる處なし、是こそは彼人々の捨難く云へりし眞忠人と信憑べけれとは覺さるゝ物から、餘りに整然打解難き嚴重さに苦しくて女房達を相手に戯言宣ひ乍暑さに亂れ賜へる處へ、大臣渡り給ひて打解お在るに憚りて、御几帳隔て御物語申賜ふ、暑きにと苦み賜ふを人々笑ふ、噫罪とて脇息に寄御坐す、暗くなる程に今宵中神內裏よりは塞也といひ出る人ありけり。

源「二條院も内筋なれば何處にかは違へむ最惱ましき
にとて御寐ならむとす、例も忌賜ふを今宵に限り違へ
賜はでは歹からむと人々評議して、紀伊守（伊字を讀まぬ例也以下伊なし）
くはぶにて親く仕奉る人在、其家中川（京都の堀川也）を堰入れて涼
しければ彼處へ渡らせ賜へと勸申にぞ夫可也とて俄に
紀守召に遣はす、密々の御方違處は必有べきも久々
にて渡り賜へるに方塞とはいへ、又他へと覺さむが憫
きなるべし、紀守に命令あれば「父伊豫介が在國中女
ども移り居りて狹き家に侍れば無禮なる事や侍らむと
困じいふ。

源「其人近き何かは苦しからむ、唯其几帳の後方にて
可也と宣ふ、人々も聞入れず疾く〳〵と催促すに紀守
俄にと侘つゝ走歸る、近臣許にて微行し賜へり、東南
悉く拂ひ開て假そめの御座粧飾たり、遣水潔く流
れて田舍擬柴垣も珍らかに樹下風凉しく吹て螢多く飛
ちがふ、廊下より出たる泉に臨て人々酒呑む主人は（肴
求むとこゆるぎのいそぎありく）程（此段皆催馬樂也、（）注ある印）君
は閑に詠賜ひて彼中品に採出じは此並ならむと覺す、

彼伊豫介が妻は兼而高尙也と世評ある女なれば懷しく
て、何方に居るらむと耳を欹賜ふに、此西表に人の氣
息し衣の音聞え若き女ならむ忍びて笑ふ聲も聞ゆ、格
子は上て有しを守不注意也と叱りて御させたり、燈
影障子の上より洩たれば徐寄て覗賜へど隙間なし、暫
時倚聞賜ふに此近き母屋に集ひ居る女どもの私語は我
御上なるべし、甲「早くより本臺定まり賜へば究屈にぞ
思すらむといへば、又一人乙「されど能躱て微行賜ふ
とぞ杯いふ、式部卿の宮の姬宮に蕣奉り賜ひし歌、
少し錯誤て語る、可笑と聞賜ふに人の來る音すれば退
き給ひぬ、紀守燈籠持來て掛添へ火明く挑て御酒羞め
奉る、源「戸張帳は如何ぞ準備なくては不注意也と含（オチマノオトヤ）
笑て宣へば、紀「何よけむとも承り申さぬをと畏ま（女ハ禪山チリマスガドレガヨイト）
り乍笑ふ、主人の子供數多有、伊與介のも交れり、殿
上にて御覽するも在けり、中に十二三許なるが優てみ
ゆるを何れがいづれの子と問賜へば、
紀「是は故衞門督が末子にて殊に愛見なりければ殿上

爲させむと心掛居る中に、不幸にも父母共に死侍りしかば姉なる人の緣故にて爰に侍る也と申す、
源「憫然の事哉其姉とは足下の後母か、紀「然候、
源「不似母にも有哉、先年上に奉る可奏し丶を如何爲けむといつぞやも宣はし丶が、世こそ定なけれ等老成てのたまふ。
紀「世は皆然り就中女の緣宿は殊に定なきが憫無に候ふ。
源「伊與は寵や君とこそ思ふならめ。
紀「私の主と崇め侍る好色とて我輩を始家族承引侍らす。
源「然りとて足下達の年齡若く色めく中に卸立むやはと打笑ひ賜ひて、何處に在や、紀「俄の御光來に悉く下屋に逐卸したれど、狹き處に大勢なれば、退兼て潛伏も侍らむ恐縮の至と申す、醉進みて主人も退出人々皆靜まりぬ、君獨り寐られ賜はず此北の障子の彼方こそ彼潛伏所と推察らるれば、密と起出て例の偸聞し賜ふに先に在つる兒の聲にて、「何處におはすると問ふ、女「爰にぞ客人は就寐給しがいかに近からむと案じたりし少し隔りて嬉しと云ふ聲の似たれば姉也と悟らる。
子「音に聞つる御光形を見奉りては實も比類なきかなと密めく、姉「晝ならば覗て見奉らましをと眠氣にいひて引入る音す、猶や今少し聞聴けかしと覺す。
鬼「吾は端に寐む噫暗しとて燈挑などす、姉は唯此障子口に寐たるべし、姉「中將の君は何處ぞと呼ぶに、長押の下に人々臥ながら「今湯浴してぞり、今に參らむと云ふ、暫時にて皆々寐入たるか音もせず成ぬれば、試に鐶を抨て引開給ふに彼方よりは鎖ざりけり、火味暗きに櫃や何やと縱橫に積重ねて狼藉たる中を身を窄め分入て見賜へば、最些少て狹き物の間に唯獨臥たり、掛たる衣押除迄呼つる人と思へり、現ともなく中將の君かといへば。
源「中將と呼すは人知れぬ思ひの屆くかと嬉しくて（婦女の中將と呼しは源氏も中將なれば慨智に聞違へし如く宣ふ也）と宣ふに、何とも角とも思ひ分れず、鬼に魘る丶心地して叫と悑ゆれど貌に衣觸りて聲立たす熱睡中の人々奚か知らむ。

源「卒然に浮薄と思すらめど年頃想ひ渡る心底を告むとて如斯機會を俟出たり、淺くは非じと察し賜へ等、鬼神も荒立まじく宣ふに、主君にさへあれば仂なく罵るも憚られて、唯
女「人違にこそとて消惑へる樣最苦氣なり。
源「違ふべくも非ぬを空脱賜ふな、無理業は爲じ、唯是迄思ひ渡りし事少し聽て賜はれとて、最少軀なれば抱拉て障子の方へ出賜ふ、折しも中將と呼ばれし女房來合たり、怪牙と探り寄るに忽貌に燻か丶る許甚く薫れば頓悟りて、淺猿やこは什麼生と心騷げど、並々の人ならば社荒らかに引捜もせめ聲立て人知らば吾主の御耻辱也、爲左杜右と心も空に從來を君は動せず障子を引たて丶、源「曉に御迎に來よと宣へば女此人の思ふらむ事さへ死ぬ許苦きに流る丶汗に津濡て絕も入べくみゆるを、何處より採出賜ふ詞に軟（ドコチオモセバソノヤウナナ子ガスルカト俗ニ云フ）、女の心動く斗宣ひ盡せど猶淺猿さに現とも覺えず、女「數ならぬ身乍も斯迄侮り辱め賜ふとは餘りに無情御心哉、下﨟にも操は侍る物ぞと少し激して怨泣く、實甚心慙愧ければ

源「其身分を未知初事ぞや、普通の多情と思ひ做されては薄情也、自然傳然聞給はむ予今迄强なる事は不爲を奈何にか自巳も奇き迄思惑ひぬる抔、繰返宣へばやう／＼泣押拭ひて。
女「斯品定まらぬ先に親の家にて此御志を見奉らば有間敷妄頼にても僥倖と思ひ侍らめ、今の身にては奚かは此上の御情には今宵の事を努人にな語らせ賜ひそと、又も沈然容體眞に憫然也、人柄の綽約たるに烈心を加へたれば嫋竹の心地して流石に折るべくも非ず、さしもの光君も詞に究し賜へり、鷄も鳴ぬ。
人々起出て甚猷寐かりける哉、御車曳出よ抔いふ守出來りて、紀「女の御方達の樣に然勿急がせ賜ひぞといふ君が又如斯機會有べくも非ず、御文も公然とは通はし難きを覺せば、いとゞ放ち難けれど彼中將も出來て苦がれば心周章、鷄も頻鳴　源「强面さを恨も果ぬ黎明にとりあへぬまでおどろかすかな（鳥をかけたり）（サテ／＼セワシナイ）女「我身を省みては尤不似合羞明て名に高き光君も何とも思ひ足らず、常には强直不風流と侮り思ふ伊豫の方のみ想像て

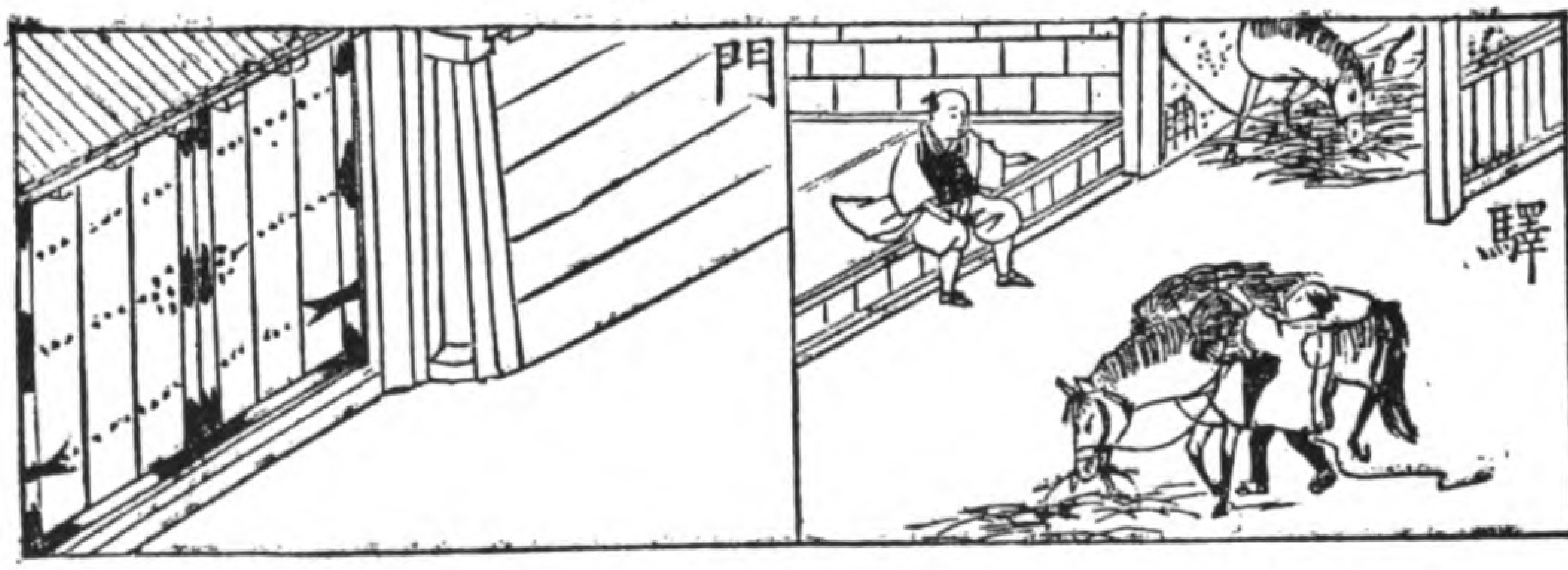
夢にやみゆらむと恐ろしく包まし。

女「身の憂を歎くに飽かで明る夜は
（身ノフシアハセ源氏ノ横レンガ）
とり重てぞねも泣かれける
（今夜ノヿ實チシラヌ人ハ源氏ニナビキシト思フカトサマ〴〵）

明くなれば是非なく障子口迄送り賜ふ、内外人騒しければ直衣着賜ひて南の高欄に寄て詠給ふ、西表の格子悉上て人々覗く、椽の中央に建たる小障子の上より仄にみゆる御光景を身に泌許思へる好色女も在けり、有明の月光爽にて有趣曙也、何心なき空も觀人故艶にも凄みゆる也けり、顧がちにて出賜ひぬ。

殿に歸賜ひても彼女の事のみ想像、容は優ねど平易爲做ても在ける中品哉、（タシナミノヨキヿ）隈なく召集めたる人の言は違はざりけりと覺すに附ても、此儘止まむやはと、一計を生じて紀守を召寄せて。

王朝の風俗



源「在し衛門督の子可愛ければ近習に爲む殿上望まば我より奉らむと宣ふ、紀「冥加至極の仰言にも侍る哉、姉なる人に申聞なば嘸悦び候はむ、源「其姉にも兒ありや、紀「未一人も侍らず、參りて二年に成たれど亡親の掟に違へりとて、常に慊焉たらずと承る。

源「慘惻の事哉、宜と聞えし人なるを實に佳也や、と占問賜へば、紀「褻しうは侍らざるべし、常に疎遠く、世の諺にて睦び侍らねば克も見ずと申せば、其實には紀守頗好色者なれば此繼母の若きを可惜者に思ひて、常に追從する心なれば君の命令を奉じて我兒の如く萬を後見しつ、四五日のゝち彼兒を將て奉れり即召入れて御傍に侍らせ小君と召されて懷しく語らひ賜へば童心に最嬉と思へり、姉の事問賜ふに可然事は答辨して年に合せては

老成たれば打出難し、雖然尤甘く告知らせ賜ふに小君は案外の事とは思へど適に童の深くも察して、仰の如く御文を持來れば、姉君淺猿くて此兒の思ふらむ事さへ恥く涙の溢るゝ面隱に御文を披みれば、先夜の事ども書つらねて、

見し夢の合夜有やと歎く間に
　目さへ合はでぞ頃もへにける

寢る夜なければ抔、美事看惚るゝ許に書做し賜へり、心得ぬ宿縁哉と悲し（先君程の人に嫁はるゝは女冥加なるに殊には氣も無て參內に外れたる上に受領の妻と成て不足ながらも不幸の因縁と諦め居るに今に及で懊惱せらるゝは結の神も聞ねぬ心得難しと也）翌日召あれば參るとて御返しを乞ふ。

姉「かゝる御文看るべき人なしと申せと、いへば打笑ひて、

小「奚然は申さるべき、慥に姉君にと宣ひし物をといふ殘なく云聞かせ賜ひしよと憂愀限りなし。

姉「將老成言はいはぬ物ぞ、諸然有ば參る勿と發憤ど召には爭かとて參りぬ、君召よせて。

源「昨日は俟寐しぬ、猶想ふ間敷ならむと怨じ賜へば、赧然て畏る、源「如何申つると問はれて恁々と申す。

源「云甲斐なや、汝は知らじ其伊豫の翁より前に見し人ぞ、然るを首細くて信憑氣なしとて屈竟なる夫に嫁して、予を斯侮慢なり、汝は吾兒になれ、彼伊與は翁なれば行先短きをと宣へば、幼心に然もや有けむ扨心得ぬ姉が心哉と思ふ氣色なるを笑止と覺す（先君程の人に契りながら何故しかも其臣下たる伊與に嫁しけむと心得難き也）、此子を懷けて內裏にも將て參り吾御匣殿（裝束裁縫など司る役員也）に令して裝束爲させ抔親めきて扱ひ賜ふ、女は御文の度重なるを此兒も未幼きを若し て落しもせば忌々敷大事と危險恐しくて返事せず、比類なき君に想はるゝ艶福も今の我身に何かはせむ情知らずの强慢といはるゝ共操は生涯破らじと決心增々堅固也、君は斯迄とも思ひ賜ず然るは今迄女の方より兎角と仇めくが多くて膸と覺す程なれば、苟にも物云掛賜ふ女の靡かぬはなかりしかば珍らかにもと、今は負じ心發りて、何奈爲と百法苦慮の結果、例の忌べき日を心に期して內裏より退出の途中にて御心付ける

擬似して俄に先例なればと、中川へ光來有、紀守驚きて遣水の面目と畏り悦ぶ、小君に含めて御消息有ければ女も斯迄思謀り賜へるを淺くは思はねど然とて今更節を折べきやは、夢の樣なりし歎を又や加むと惱亂て小君が御前へ出し隙に、客人の御座近くて憚多しと號へて、彼中將が局なる稠人中に移躱れぬ、とも知らで小君に先斥候と命るに、小君全家中を巡々て終に跋來り。

小「什麼甲斐なしと思召さむと泣許いへば、

姉「怪しかる事いふ童哉、幼き癖に取持貌こそ憎けれと甚く叱りて、惱しければ、絕ず人に押させて在と申せ、人々怪訝と思はむに又勿來と云放て意衷には斯品定まらぬ先ならましかばと返々も殘念とぞ思ひ續ける、君は慫と聞召て暫時物も宣はず、いと甚く打呻吟賜ひて　帚木の事注にくわし、

源「帚木の心を知らで園原の　コヽマデキテ

　　道にあやなく惑ひぬるかな　アイテ〱ハナカレテアヽ面目シメイモナヒナントシロウ

と押返し强ていひやり賜へは、女もさすがにて返事したり、

女「數ならぬ伏屋に生ふる名の憂に　ワタクシノヤウナモノデモウキナノタツハオソロシタ

　　在るにも非て消るはゝ木　マヽ御意ニソムクモオソレ入マスソレコレデアルニモアラレズイツソ死ニタイ

小君憐さに眠くも非で惑ひありく、例の人々は貪眠に君は獨坐凄悽人に似ぬ志操の昂然を且感じ、且猜くて其隱たる處へ將てゆけと責賜へど、下人多き中恐多し强ておはしますとも何の甲斐か侍らむと申すに爲方なくて、

源「諾汝だに嫌ひそとて御傍に臥させ賜ふを切て嬉しと思へる樣、强面人よりは却而可憐に覺されけり。

帚木終

空蟬

前卷帚木より續けてみるべし
同し夏の末より秋かけての事

寐られ賜はぬまゝに予は斯人に憎まれし事はなきぞ、今ぞ始て世は憂き物と思知りては羞愧て生ける甲斐なしと宣ふに、小君憐さに淚落し作、臥たる容体彼女に

似たるも可愛く覺さる、强て跋寄ても事成らずば彌面目を失ふべしと覺せば着實に冷凄くなりて、夜更きに出賜へば小君尤甚憐と思ふ、女も尋常ならず傍痛きに、其後は御文もなければ思懲にけりと思ひ居たるに、君は却而反動心の止難くなりて小君に、

「幾度反省ても心にも從はず苦しきに可然機會を視計て今一度導けと宣ひ渡れば、如斯方にても召調纏は嬉しくて、幼心に奚機會も欲と窺ひ步行に、紀守國に下りて女同士閑暇なる夕暮の道辿々しき紛れに、我車にて將て奉る、此兒悧伶けれどまだ幼きを危險とは覺せど變粧して門鎖ぬ內にと急行して人なき方に卸し奉る、童なる上に此家の兒にも非ねど宿直人も特に出來ず、放任せる却而心易し、東の袘戸に俟せ奉りて自巳は態と南隅の格子を叩て奚や暑きに卸たるといへば、童より西の御方の此方にて碁打給へばといふ也、小君は入ぬ、君は是を聴賜ひて偸見ばやと徐簾の狹より入賜ふに、今開つる格子其儘明てあれば西樣に見通さる、此際に建たる屛風も端の方へ押疊まれて障るべき几帳も暑ければにや打掛て尤克見入れらる、火近く置てお母屋の中柱に寄たるや彼女ならむと、先注目賜ふ、濃綾の單か何か上に着て頭形細く少く眉張姿なるが貌は差向へる人にもよくは覩す間敷以隱したり、石打手勢瘦たるを袖中に引込めて指先も籠がち也、敵手は東向にて殘處なくみゆ、白き薄衣、二藍の小袿蔑に引掛て紅袴の腰迄胸露出に猥褻なる擧動也、色白く粒々と肥て漫なる人の頭形額容鮮明に眉眼口形愛嬌有て花麗なる容貌也、髮は總々として垂端肩邊淸らかに惣て曲所なく、快活なる人と見えたり、父は嘸寵愛らむと看に少し靜肅なる氣を添たきぞ欠點なる、碁打果て欠さす樣心疾けに敏捷と騷動きを今一人は尤肅然優て、

「待賜へ其處は地なるべし、此邊の刧をとそそといへど、

「卒今度は負にけり、隅の處卒々と指を屈めて十廿卅四十と計ふる樣、伊豫の湯桁も跋々しかる間じく品劣れりと見冷ぞする、相手は常に口覆ひて面半隱したれ

と眼を疵居れば自然傍目に見ゆ、眼瞼少腫たる樣にて鼻低平佳所みえず言揚れば醜方なれど用意周到克其欠點を隱して此優者よりは意匠昂しと推察らる、一方は賑しく愛嬌ある容貌を笑ひ戲て彌匂多く然方に有趣人柄也、浮薄とは看乍も好色心には是將捨難し常に見賜ふ、人々は皆十二分に粧飾し注意に注意を加へて繕へる表面のみ如斯打解たる容体を偸見ては始てなれば珍かに面白くて覗蕩賜ふに小君の來る音すれば殘惜けれど元の戸口に寄て立賜へるを最恐縮と思ひて、

小「折惡く客在て近うも寄せ候はず、

源「今宵も又空しく歸さむとする歟、

小「否今に歸り侍らば謀り申すべしとて、此度こそと思へる容量ながらも信憑氣也、源「紀守の妹も此方に在や予に偸見させよ、

小「爭か格子には几帳添へて隙も侍らずと申す、雖然見つるをやと笑けれど看つとは知らせじ、憫然と知らす貌に夜の更るを俟給ふに、碁終つるにや、人々動揺て退散の氣息す、女房の聲して

「小公は何處に御坐ぞ、此御格子今卸侍るといへど鎭と答へず、暫在て就寢也、源「入て謀れと宣へば小君は姉の心挑む可も非ず云合す由なきに唯密に入奉るの外なしと思ひて、此度は妻戸を叩入る、小「此障子際に吾は寢む暑や風吹通せと獨言乍押明て臥、東の庇に御達は寢たるべし、暫時佯眠して他の熟睡を窺ひ寄と起て燈の方へ屛風廣げて暗き隙より導き奉る、徐々入賜ふと爲れど人定れる夜中、御衣の物に觸る音自然瞭かりき、女は音信なきを嬉とは思へど奇しく夢の如なりし事心に忘られねば今も猶心解ては寢られず、晝は詠夜は寢覺がちなるに偶然薰き香のするを怪訝と頭擡、みれば一重打掛たる几帳の隙間に暗けれど人の動進氣息瞭ければ又もやと驚かれて掛たる生の單を窃と脱置て辷出にけり、君は探り寄て唯獨臥たれば心易しと掛たる衣、撤除賜ふに殺の容体よりは肥大く覺ゆれど異人とは奚か知らむ寄臥賜へど不知貪眠に怪訝と搔探りて漸悟りて淺猿くも猜くも悔くも惜くさへなれど、事既爰に達て今更人違とて逡巡かるべしや

は、本意の人を追蕁か、斯迄巧に遁るれば見出は得せで彌嗚呼と嗤はれむ、宵に見つる女ならば鷄肋的と、移志なる浮薄心ぞ薄情なる、漸醒されて愕乎呆然たる形容、何の意志もなく然迄畏怖もせて靡くは未通女に似氣なく解情たるにや、予と知らせじとは覺せど什麼有斯ぞと后に思惟も自爲には事にも非ねど彼强面人の甚く他聞を憚る逌惘然なれは度々の方違も君故など、尤宜云罔賜ふ熟世人は悟るべけれど然社差過たれ妙齢少女の心づかず憎しとはなきも、心の留處なければ猶彼憂人の方を微妙と覺す。何處に躱れて冷嗤ひ居るらむ、斯まで裏を缺即智の逞しさよ珍しき女哉と感ずる反對に何心もなく若やかなるも又憐なれは逌に情々しく契りたまふ。

源「公然よりも密會は愛情深と昔人も云ひける、相思賜へよ、憚多ければ自己の心にも任せ難しと宣へば、

女「人の思ひ侍らむ事、耻羞ければ文も奉られじと無與底いふ、

源「小君に傳へば可也、他人には氣色もなくし給へ等

いひ置て、彼脫滑の薄衣を採て出給ひぬ、小君を搖り給へば影護思ひ乍寢たれば忽醒ぬ、戸を徐排る音に老たる御達の聲して誰何々々と仰山に聞煩はしくて吾ぞと答ふれば、

老「何爲夜中出給ふと乘巧て起出來れは憎くて速く君を外へ推出奉りて、少「暑くて寢苦けれは凉む也とて、立掩ふとすれど少年の体に餘りて月の明きに偶と人影みえたれは、

老「まだおはすは誰ぞ民部のお許ならむ夜目にも驗き高さ哉といふ、背高き女の常に笑はるゝを云ふ也けり、老女是を連立行と思ひて、今に立並ひ賜はむと、いひいひ己も此戸より出て來れは迷惑極れど押戻すべくも非ねど、戸に添ひて暗き方に躱立給ふを此老女差寄て、

「お許は今宵上にや侍らひ給ひつる、一昨日より下痢にて苦けれは下り居つるを人尠也とて召しかは、宵に歸參すると猶痛くてと憂ふ答も聞かで噫腹々今又申さむとて廁の方へ走行に辛くも遁れ出賜ふ、密事は實危險也けりと覺し懲ぬべし、二條院歸りて後、小君に光

景語り給ひて斯迄嫌はれて眞に身も憂く成ぬ伊與介に劣りけるよ、杯宣へど彼小袿を御衣の下に引入て就寢ぬ、小君を傍に臥せて汝は可愛きも憂き由縁に憎し等宣ふを尤佗しと思へり、

空蟬の身を變てける木下に
セミノヌケカラナマテナビトタナツ付ケラレメケレド
猶人がらのなつかしきかな
ヤツハリオ前ノアルトロロガオオモシロクテナツカシイ

と書給へるを小君懐に入て一兩日の丶ち家に行たれば姉君待つけて甚く叱責す、小君右に左に苦しけれと彼御歌探出でみするに、彼空脱を探給ひけるを耻しと思へと斯迄の御氣色を聞ては在しながらの身ならはと取返す物ならねと忍びがたし。

空蟬の羽におく露の木隱れて
人シレズ
忍び〲にぬる丶袖かな
カゲナカラ我不運チナオモヘハ

空蟬終

源語中光君とて雙びかぬ女もなき中に珍ら敷其手に落さりしは朝貌齋院と空蟬唯二人のみ然て朝貌は高貴の姫君にして始より歌の贈答に止り一回も對面の事なし空蟬は源氏の家臣伊與介の妻なれは源氏に迫られて勢逃れ難き場合にも克貞節を守りし且主君の怒を避て夫々災害を及ぼさず終を全うしたる物といふべく紫式部自己の事を空蟬に比してかける物なる事は日記に御堂殿の懸想を程克避たる件に於て験し是を以て惟は式部は空蟬の如く容貌佳ならさるも其注意以做に依て克思はれたる人なりけむと推察せらる傍軒端荻の貌は美なるも擧動賑かしく節操なきを對照し里中にも一は敏捷に逃出一は貪眠て男子の弄物となるを以反對となり女子たる者以て誡とし疎に一笑に附する勿れ。

▲入谷の注意　入湯するにも時間を選ばなければならぬ樣に御婦人などは猶更の事だが満腹の時と空腹の時は決して入浴してはなりせん満腹の時には胸が悪くなるし空腹の時には眩暈がして孰れにせよ湯氣に上る事がある之れは血行の變化であるが旅宿へ着いた時など「一風呂召して御飯を」杯と女中から勧められたら其時はビスケツトを三ツか四ツ食つて夫れから入浴なさい夏は猶更の事斯うすれば湯氣に上る憂ひもない



日本古代の軍歌

佐々木信綱

今やわが皇軍は、劍銃を携へて遠く滿洲の地に入り、世界に强を誇つて居た露軍と戰つて居る。敵はかの南山に據つて、盛んに砲壘を築き、地雷よ金網よと有らゆる防備の手段をめぐらして居たにも拘はらず、わが兵は無二無三に攻めよせて、砲戰十六時間といふやうな、戰史にも未だ曾て見ない長時間の戰爭をしたといふ事である。が、その間に、彈丸が盡きて如何ともせん術がなく、盛んに軍歌をうたつて居たといふ事である。其光景、いかに勇壯な事であつたらう。

軍歌といふものが、いかに三軍の士氣を鼓舞して、陷し難き堅城鐵壁をも乘取る事を得るやうに盛ならしむるかは、實に想像もし難い位であらう。今度の戰爭は世界の戰史にも特筆すべき大戰爭である。從つて又壯んな軍歌が出來る事を望むのである。

この軍歌といふのは、いかなる時代に發生したものであらうか。彼の拔刀隊の歌などか始めであらうか。それとも維新當時の『宮さん宮さん』などが起原であらうか。否。其やうに新らしく起つたものではない。遙かに〳〵以前起つたものである。今の時代に於てこれを研究するも、いさゝか趣味ある事であらう。

我國で此の軍歌の物に見えて居るのは、今より二千五百年以前、即ち人皇の初なる神武天皇記を以て始めとする。そは或は相鬪に用ゐ、或は慰勞に用ゐられたのであつて、天皇親から歌ひ玉ひ、又將軍みづから謠ふたものである。勇壯なる士氣をして益々勇壯に、疲れて後に止まむの大決心を補助して、いかに間接直接に奮起せしめしかは、今も古へもいさゝか異なる所がな

かつたであらうと信ぜられる。

こゝには、神武紀に見えて居る軍歌六章をあげて、其いかなる場合に歌ひ玉ひ、いかなる歌であつたかを示し、註釋を施して、古歌古詞を解し得ない人にも了解の出來得るやうにしやうと思ふ。

神武天皇、八十梟帥を國見丘に撃ち玉ふに當り、御心に必克ち玉はむことを期し玉ひ、歌ひ玉はく。

神風の、伊勢の海の、大石に、いはひもとほる、したゞみの、あこよ、〳〵、したゞみの、いはひもとほり、うちてし止まむ、

神風のは伊勢といはむ爲めの冠辭、いはひもとほるのいは發語、はひもとほるは延ひ廻るの意、したゞみは細螺また小蠃子と書きて、今俗に醋貝といふもの。あこよは吾子よにて、親しみのたまふ詞。萬葉集十九に、遣唐使をさして「此吾子を唐國へ遣る」とあり。こゝは皇軍をさしてのたまへる也。天皇のいかに軍人に對し愛憐を垂れ玉ひしかは、この一句をもても窺ひ奉るに足らむ。

一首の意は、伊勢の海の大石に這ひめぐつて居る細螺の如く、八十梟帥が軍の四面を、我子とも思ふ將士等よ、千万の皇軍もて隙間なくめぐり圍み打勝たずしては、止ましどの意なり。

既にして餘黨猶多く、其情測り難し。乃ち大將軍なる道臣命に勅し玉ひて、汝、來目部を帥て、大室を忍坂の邑に作りて宴を設け、虜を誘りてうてと詔り玉ふ。こゝに道臣命、詔のまに〳〵竇を忍坂に堀て猛卒を陰かにかくしおき、酒酣ならむ後、吾起て歌はん聲をきかば刺せと期りて、虜に雜へ居らしむ。さる謀ありとも知らで、情のまゝに醉へる時、道臣命起ちてうたひつらく。

忍坂の、大室屋に、人さはに、入り居りとも、人さはに、來入りをりとも、みつ〳〵し、來目の子らが、くぶつゝい、石つゝい

持ち、撃ちてしやまむ、

忍坂は大和城上郡の地名。大室屋は山懐へ横に掘入れたる土室。人さはには八十梟帥らが數多にとの意、みづ〳〵しは御稜威御稜威しさ、來目の子らは組部の人々、即ち皇軍の將士をいふ頭椎石椎ともに劒の名。

一首の意は、忍坂の大室屋に、八十梟帥らが多に入り居りとも、來入り居りとも、斯く御稜威御稜威しきわが將士らが、頭の槌の如き劒、頭の石の如き太刀をもちて撃たずば止まじの意なり。

歌を聞きて、軍人倶に、其頭槌の劒を拔きて、虜を殘りなく殺しつ。皇軍大に喜び、天を仰ぎて咲ひ、歌ひつらく。

えみしを、一人もゝなひと、人はいへども、たむかひもせず、

もゝな人は百並ぶ人にて、一人當千といふが如し。たむかひのたはたわすれ、たばかりの類にて發語。

一首の意、かの八十梟帥を一人當千の强敵ぞと、人はいひしかども、今この戰に手向ひもえせぬ事よの意。現今の戰も斯くの如く、徒らに强を誇りたるものも敵にあらざるが如し。この皇軍の天を仰ぎて笑へると、今萬歲の聲天地を動かすと、いづれも勇壯の限といひつべきなり。

皇師大擧して磯城彥を攻めんとす。是よりさき、皇軍攻むれば必取り。戰へば必勝てり。然れども軍人つかるゝ事なきにしもあらず。故に天皇將卒の心を慰めんとて、歌ひたまはく。

楯なめて、いなさの山の木の間ゆも、いゆきまもらひ、たゝかへば、われはやたちぬ、島つ鳥、鵜飼がとも、今助けにこね、

楯なめては楯を並べてなり。いなさの山は大和宇陀郡にあり。いゆきのいは發語。われはやのやは嘆息の聲。ゑぬはうゑぬのうを略けるもの

島つ鳥は鵜の冠辭。鵜飼がともは鵜養が徒にて今の兵站部といはむが如し。すけに來ぬはたすけに來よの意。

一首の意は、楯を並べて、いなさの山の繁ぎ木の間から、ゆきてねらひ窺ひ戰へば、わが軍卒疲れ飢たり、日々つかへ奉る苞苴擔つ子らよ、早く助けに來て、食物を奉れとなり。この歌をきゝし時の將卒の士氣、それいかにか奮ひたりけむ。

皇師又長髓彥を擊つ。昔孔舍衞の戰に、皇兄五瀨命矢に中りて薨じ玉ひしを、天皇常に憤り給ひ、この度は必誅せむと思して歌ひ給はく。

みづ〳〵し、久米の子らが、粟生には、臭韮一もと、其根がもと、其根芽つなぎて、うちてしやまむ、

みづ〳〵し久米の子らが、垣本に、うゑし蜀椒、口ひゞく、吾はわすれず、うちてしやまむ、

みづ〳〵し久米の子らは前にいへる如く、御稜威御稜威しき將士の意。粟生は芝生蓬生の如く生ふのおを略きしもの。こは久米部の將士が住みし邸內の粟生をさす。次の垣本にも然り。臭韮はにらのこと。其根芽つなぎては其根も芽もつなぐの意にて、逃げても逃がさず追ひとめて悉く擊果してんの意。垣本は粟生に對したるにて、垣根の意。はじかみは蜀椒。口ひゞくは口疼くにて、蜀椒の實の食ひて後まで口のひゞく如くに、かのうれたみの止み難しとなり。

わが將士らがすめる家の粟の生へたるところに、韮が一本ある。その根も芽もつなぐ如く、かれ長髓彥をつなぎとめ、悉く擊果さむ。

又將士がすめる垣根にうゑたる蜀椒を食へば、口中のひり〳〵する如く、吾は長髓彥の爲に、兄五瀨命のかくれさせ給ひし口をしさを、いかでか忘れむ、是非とも打亡しくれむの意。粟生の韮、垣根の蜀椒等、卑近なる比喩をもて歌ひ玉へるこの

御歌をき丶し將士や、いかに奮ひたちけむ。

前にあげたる數章の軍歌の外、猶兄猾を擊ち給ひし折の長歌もあるが、餘りに長くなるから、略くこと丶する。

今でこそ詞が古くなつて、たゞ聞いたばかりでは解し難い節もあるが、その時代にはいかなる人といへども解せざるものはない四邊の存在物、即ち細螺、臭韮、蜀椒等の比喩をもつて軍歌の料とせられ、而かも極めて力ある句を疊みて一首の歌とせられたのであつて、儒夫も爲に起つが如き感を興したであらうとは、今日よりも想ひやることが出來る。どうか今度の千歳一遇の征露戰爭に於ても、大に士氣を奮はしめ、現代はもとより千万年の後世に至つても、民族の氣概を奮起せしむるやうな大軍歌の出る事を希望して止まないのである。

（完）

女英雄マリヤテレサ

藤葉女史

西暦一千七百四十年即ち我が德川氏の中世元文五年獨逸帝（今の墺國）チャールス六世崩じ給ひてハフスブルグ家の男系絶へ、只マリヤテレサと其妹マリア、アンの皇女在はすのみとなれり、初め獨逸帝ジヨセフ、及弟チャールスの二人は御父君レヲポルド一世の遺志に基きて相盟ひ給ふらく「チャールス百歳の後若し男子なき時はジヨセフの皇女等をして墺地利匈牙利、ボヘミア、ロンバルジー、ニユーゼーランド（當時是を總稱して獨逸といふ今の獨逸にあらず）の帝位を繼承せしむべし、チャールスの皇女には之を繼承せしむ可らずと、此盟約を名付けてフハミリーコンパクト（家約）と云ふ。

當時チャールス皇帝にはレヲポルドと云ふ皇子在はしけれは何の考へ給ふ處もなく、容易く之に同意し給な

て別に異議も仰せられざりき、然るに不幸なるかな皇子は未だ光榮ある此帝位をふみ給ふに至らずして早く已に世を去り給ひけり。御父君チャールス帝の御歎き如何ばかりなりけむ、さはれ戰國のならひ屹と御心に決し給ふ處や在はしましけむ、今は公然と家約に背きて更に盟ひし事も在さぬが如くに見へさせ給ひたり。實に帝が望みの光りは二人の皇女猶在はましけるによりて益々輝けり。此御姉君こそマリヤテレサ、アクリスチナと申し奉り、西暦一千七百十七年五月十八日墺國帝都ウヰンナに其初聲を擧げ給ふ、實に此皇女はウヰンナ宮廷の花なりき、此皇女ありて宮廷はいつも春の如かりき、皇女は生れながらにして威容あり、自ら末は大國を領し給ふべき女皇の風采を備へられたり、之を以て御父君は殊の外に之を愛で給ひ、曾て兄君ジヨセフ二世とつがはれたる御約束ありしにも拘らず、如何にもして此女皇を御位に卽けむと日夜肝膽を砕き給ひけり、然れども先帝ジヨセフの皇女マリヤは、波蘭王に嫁しマリヤメリウはパヲセン公に嫁して各々其良人を後援として先約を履行せんと勤め給ひしかば、流石のチャールス陛下も之が帝位繼承權を剝奪せん事甚だ難く、かてゝ加へて諸々の外國が其間に異議を挾まん事の恐れありしを以て、頻に手段を外交政略に盡して其歡心を買はん事に勤ひ給ひけるが、苦心其甲斐ありて歐洲の强國皆チャールスに味方し遂にプラグマチツク、サンクシヨンと名付くる法律を制定し、若し万一の場合には兵力に訴へても之を行はん事を盟ひけり、然れども佛、普、西の三ヶ國は陽にチャールスの利を謀りて此盟ひに賛同したる如けれども、其實は決して然らず、實に大に他に期する所ありしなり、國と國との交りに豈一片の義心ありて他國の利益を圖るものあらんや、マリヤテレサの前途は、實に危險なるものなりき。

マリヤテレサは容姿嬋娟天資英邁にして才藝にも亦疎からず、深く天主教を信じ給ひて毫も浮きたる御振舞なかりき、御父チャールス陛下は思慮淺く常に沈みがちにて曾て晴々しく御笑ひ聲さへ洩し給ひし事なかり

き、然れども流石は大國の上に立ち給ふ君主程ありて慈愛深く常に惻隱の心に富み給ひ又深く音樂を嗜て其最長せさせ給ふ處なりき、されば宮殿の舞臺に劇を演ずる折々は帝親ら樂師の首席を占めて二人の皇女に舞踏をなさしめて此上なき樂しみとなし給ふが例なりき、父帝又深く伊太利の詩人メタスタシアを敬愛し之に保護を與へ皇女マリヤテレサの教育を彼に托し給ひき、故に皇女は未來の主治者に必要なる歷史或は國体を研究せずして先政事に遠き詩文の道を修め給へり。女皇か御年十四才に達し給ひたる時、父帝は之を帷幕の内に與らせ給ひき、然れども之は只傍聽者として列り國の秘密を理解せしめん事を旨とし給ひけるが、宰相ユーゼース公が世を去りてよりは皇女は實に父帝の片腕となり給ひき。

之より先レオポルド(祖父君)及チャールス(父君)の二帝は漸く匈牙利國に向つて壓制を施されしを以つて四方に怨聲の聞ゆること多し慧眼なる女皇は此時早くも我將來の爲に同國民の心を手なづく事の上策なるを察し給ひければ、勉めて之を辨護し傍ら同國の貴顯と交りを深くせんが爲に性來好み給はざりし語學の研究に御心を傾けさせられ、重にラテン語を話し得て御父在世の當時已に不言不語の内に匈牙利國の執政の權をぞ握り給ひける。

茲にロイラルテ公フランシスジョセフと云ふ人ありけり幼きより女皇と共に維納の宮中に人となられき天性溫雅美麗誠に瀟洒たる貴公子なりけるが、夙に女皇の才貌兼備なるを見て甚だ敬慕し給ひき、或時は相擁して林中に鳥を追ひある時は相携へて宮苑の芝生に小蝶を尋ね妙齡無心の幼き内より、片時も離れたる事なく睦み親しみ給へる程に、皇女も物心早や知り初むる頃にて、竊に心を公に寄せ給ひつれども、青雲未だ此二貴公子の上に開かれざるに先ち、墺國の財政は當時已に非常の難艱を窮めたるを以て、父帝は止むを得ず皇女をスペインの皇太子カロス親王に與へて以て一時を救はんとなし給へり。

皇女は之を聞き給ひて悲しさやる方もなく、カロス親

王とは嘗て一面識もなき人なり、已に百年の苦樂を共にせんと竊に盟いたるロイラルチ公を措きて又今更に何を他に望まんやと、切に母皇にすがりて父帝を諫め給ひければ、父君も終に其止むを得ざるを察し給ひてスペインと婚を結ぶの念を斷ちて皇女の切に乞はせ給ふがまゝに、終に一千七百三十六年我元文五年茲にロイラルチ公と合卺の式を擧けさせ給ふ、時に皇女御年二十歳、公は二十八歳に在はしたりき、是に於て多年の宿望初めて遂せられ、其滿足如何計りなりけむ、窈窕たる皇女の風采は瀟洒たる美青年の夫と相對して正に是一對の名花、さしもに沈み果てたるウヰンナの宮殿に、又時ならぬ香をぞはなちける、さはれ人事意の如くならざるは浮世のならひ、皇女も終に又此例へには洩れ給はず、實に同四十年十二月廿八日未だ此花の榮へも眺めず御父君はあへなくも此世を去り給へり。ウヰンナの宮廷萬事茲に休しぬ。當時兵亂の連りなる已に百年の久しきに亘り、國庫と兵力と共に頼みなかりき、國庫は猶四万弗の金を有したれど、一方には國債積で山をなし、兵は猶三万の多きありき、さはれ其兵がいざ起て戰はんとするも、あはれや取つて立つべき武器なかりき、あゝウヰンナの宮廷萬事茲に休せり見るもの聞くもの皆最後の瓦解に向つて急げるが如かりき。

あゝ御年未だ廿有餘年、世が世なりせば月花の眺め絶へせぬウヰンナの宮殿奥深く、そが敬愛せる背の君と幾久しく花と榮へ給ひけむものを、萬事休したる今終に望むべくもあらずして女皇は痛はしくも此衰弱せる國家を、そが纖弱き双肩に擔ひて統治すべく父帝の位を繼き給へり、たとへ上に明君聖主在しますも、之を補佐する賢相なければ、其國の政事はよく完全なる能はず、韓信あり蕭何なり張良ありて沛公は漢の高祖たりき、モルトケありビスマークありて獨乙先帝の名は今に赫々たるにあらずや、テレサは年猶うらわかき女性の御身なり、たとへ内には溢るゝ剛毅の天性を有し給ふとも、是猶一個纖弱き婦人の御身なり、此女皇に一の賢相ありしや、我は未だ之を聞かず、あはれ不幸

にして此四面楚歌の内に帝位を繼ぎ給ひし痛はしの女皇を輔けまゐらすべき人は無かりき。

斯くの如く一致團結せざる國に斯くの如き災殃の日に女皇は父帝の位を相續し、内には賢臣の輔けなく、外には外國の弱きにつけこむあり、實に女皇が今頼める唯一の武器は所謂プラグマチツク、サンクシヨンなりき、さはれ外交上の盟約程信じ難きものはなし、況して道義など思ひもよらぬ當時、只唯一の此武器も何の便りとなるべしや。

女皇は直に匈俄利及ボヘミア女皇、墺地利大女公ニーセルランド主權者、シレシア女公の位に即き、使節を以て之を各國に報じ給へり。

之に應じて英、露、普等の諸國は速に女皇の權利を承認したれ共獨り佛國は事を左右に託して回答を猶豫し竊に陰謀を企てたりき、實に女皇の運命は危かりき、歐州諸國及び獨逸諸侯の承認を得て平和に王位を相續せんとし給ふの時、更に不幸にも今迄爪をかくして女皇に味方しまゐらせたる普魯士王フレデリツキは然かく何時迄も温順ならず、突然にも不法なる干渉をなしぬ、其結果は延いて歐州列國の干渉する處となり、平和を歌はんとしたる墺地利の山野は忽にして軍馬蹂躪の巷となりしこそ實にうたてけれ、凄絶なる所謂墺國相續戰爭は此時よりぞ始まりける。

我にシレシアを與へよ然らずんば我は我兵と金とを以てサキソニーとバヷリアとを助け汝に敵して起たしめんと之ぞ無謀なる普魯士王フレデリツキが先には好意を表せしにも係らず只一片の通牒だになさずして突然二十の歩兵大隊と三十四の騎兵大隊とを率いてシレシアに入りて叫びたる要求なりき、之を聞きて誰か扼腕せざらんや誰か切齒せざらんや女皇は憤然として此要求を斥け給ひぬフレデリツキは一度其要求する處を斥けられて忽屈する程の人にはあらざりき彼は爆發したる彈丸の如くに直に兵を進めてシレシアの首府ブレスローに侵入し事もなく之を乘り取りてシレシアに自巳の制度を布き一先本國さして歸りけり。

抑もこの首府ブレスローといふはオーダー河の中に散

在せる數多の島の上に建設せられたる都にして風景絶佳誠に仙境のごとし加ふるに建築は宏壯優美なりければ此處歐洲の市街中最美の一として數へられたりき、さるを今このプロシャに征せられて墺國の花其一を失ふに至りしこそ哀しけれ。

女皇はフロシア王の不法なる要求と行爲とに憤慨やる方なく、如何にもして兵力により墺地利家の從來の名譽と領土とを全ふせんと、心は矢竹にはやり給へど、悲しいかな疲弊に疲弊を加へたる墺國當時の有樣は到底プロシア王に對し報復を圖ること思ひも寄らず、かてゝ加へて他の外國も女皇に敵せんとするものゝみにて一人の兵を貸し軍資を賜りて女皇を助けんとするものはなかりき、されど剛毅なる女皇は斯の如き困難の場合にも周章することなかりき困難の上にも困難を加へしが勇氣は却て益々振ひて苦しき中より出帥準備をなしユーベルグを將として兵をシレシアの境に遣り給へり是れ實に尋常婦人の成し能はざる處なるべし。さるに此時女皇は懷姙し給ひて已に臨月なりき、さはれ天は猶此君に幸せず、最後の勝利は又もやプロシア王に歸したりき、モルウイッツの戰敗は流石の女皇にも恐怖と失望とを與へて「我敬愛する神よ神は斯くも妾にのみ情なきか」と慟哭數時女皇の御身としては實に痛はしさの限りなりき。あはれ女皇の當時を追想するもの誰かこゝに一滴の涙を灑がざらんや。

斯かる悲運に在りても猶女皇は祖先傳來の領土を他國に辱しめらるゝを以て徹骨の遺憾とし給ひき、女皇は常に墺地利家の領土は永久に其子孫が之を相續すべきものなる事を疑ひ給はざりき、且子孫のみ之を相續すべきものにして、他人の之に喙を容るゝを許さゞるものなりと信じ給へり、女皇は親ら御身の神聖にして犯す可らざる墺地利家の皇女なる事を信じ給ひき、夫故に英國が數回の仲裁にも從ひ給はず、プロシア王とは勿論和せず、一寸の土地だも失ふ事なくしてよしや幾千萬、眼に餘る大敵なりとも破り破りて挫き盡さんと固く決心し給ひたり、されども人事意の如くならず、女皇は當時分娩し給ひて御產の床に横はり給ひし時な

りき。
歩むに足なく、飛ぶに翼なきに等しき痛はしの女皇よ、する事成す事皆失敗に終りて、亦起つ可らざるに至れり、然るに時運は端なく旋り來りけり、この時匈牙利人の狂熱せる忠勤により、さしもに危かりつる御境遇を一變して驚天動地の大業をなし給ひしぞ、實心地よき想へば昔 惠 薄しとかこち給ひし其神は、此處に其御力を盡し給はんとてしばらく時を見給ひしにはあらざるか、匈牙利の民は義俠にして又勇敢なりき。
時は千七百四十一年の夏、匈牙利の首府プレスブルグの宮殿に於て女皇は匈牙利王の即位式を擧げ給ひぬ云ふ迄もなく式はいとも莊嚴なりき、マリヤテレサは古代の典禮にならひ騎馬して宮殿の附近にあるロヤルマウントに登り劒を擧げて天の四方を指し、匈牙利の祖先の古色蒼然たる御衣を着け給ひ、建國以來傳はれるこの國の王冠を戴きて式は全く終りぬ。
此時女皇はやうやく產床を出で給ひけるばかりの時なれば天の成せる嬋娟の御姿は日頃の御憂ひと疲勞とに一層の悲壯を加へて樸直なる匈牙利人の目には只天女の天降れるとのみ見られ、群集は皆尊敬の念に打たれて仰ぎ見るものなかりき、其王らしき御振舞、威嚴ある風采に加へて、而も此美はしの天女が歐洲の大半を敵として猶自若として動かざる女王なりと、目のあたり見奉りて深く敬愛の念に打たれたりき。
女皇は即位の式を終へて直に議會を召集し、其玉座より立ち給ひ、裕々迫らざるの御擧動に深き憂愁なる御有樣を以て少しく前に進ませ給ひ、徐にラテン語を以て匈牙利の貴族に告げ給ふ樣、朕が國歩の艱難は朕をして朕の敬愛するハンガリーの國に訴へて其救濟を仰ぐの止むなきに至らしめたり、墺國已に犯されたり、匈牙利の王國朕の兒女及朕の王冠も亦將に危からんとす、然るに不幸にして天朕に與せず人も亦朕を助くるなし、此に朕は匈牙利人の誠心と豪勇とに賴むの外なし、朕は深く匈牙利人を信ず、汝速に事を圖り、王冠を全うせしめん事を計れよ、朕も亦此由緒ある王國の幸福と、人民の名譽とを全うするに勉むべしと、議

堂寂として跪きたる貴族の首は次第〳〵に低くなるのみなりしが、此言畢るや數百の匈牙利人はいたくも感慨の念に打たれ、各佩刀を鞘より脫する事五六寸、再び烈しく元の鞘に納めて、異口同音に聲を勵まし、吾等は陛下の爲に斃れんと、女皇は此有樣を見たまひ其熱誠より迸り出づる此言を聞き給ひては、流石は女性の御身のはや其威風ある態度を維持し給ひがたく、喜悅と感謝との念交々至り、終に感極りて熱き涙潛然として御袖を潤しけり、之を見奉りたる數百の田舍武士は、もはや冷靜の人たる能はず、之に酔ひ、之に狂し、忽にして全國の金と兵とを盡して、此女皇を助け奉らんと誓ひたりき。當時女帝の年僅かに二十五歲樸直なる匈牙利人豈言を食むものならんや、式畢ると間もなく女皇の麾下に馳せ參じ、忽ちにして一大軍となりしかば、女皇は之を率ゐ軍擧つて戰鬪に盡しければ、さしもの彼等同盟軍も到る處に驅逐せられて、早や昔日の勢なく、千七百四十八年我元文五年終に和をユーラシャペルに媾せり。

軍國多端、憂愁又憂愁の內に最も女皇の御心を慰めたるものはこのときマリヤテレサの夫皇が獨逸皇帝に撰ばれフランシス一世と稱せらるゝに至りし事なりき、皇帝フランシス第一世萬歲の御聲は先づ狂喜し給へる女皇の御口より發せられたることとも知られけり。千軍萬馬を叱咤して男子も及ばず、一度決心し給へる事は如何なる困難にも決して飜し給はざる雄々しの女皇は、妻として亦實に溫柔に渡らせられき夫の君は攝政の地位には在はしたれど、只是美貌溫和の一貴公子に過ぎず、其智識に於ても、身分に於ても、將有し給へる趣味に於ても、全く異なりき。而も女皇は之に滿身の愛を捧げ給ひ、決して世に有りふれたる我身の貴きをたのみて驕るが如き御振舞は露程も在はさざりき實に君としては當代の英雄フレデリッキも終に此女皇の上に出づる能はざりしなり、而も此女皇が妻として亦世の人の鑑となり給へる事は夫の君の世を去り給ひし後、一生喪服をぬぎ給はざりしにても知らるべし。之より後も戰は猶つゞけり、されどくだ〳〵しければ

茲には省きつ、要するに女皇の御生涯は半悲慘なりき世の常の女なりせば斯程の重荷には到底耐へられずして、早く已にくづをれたらんに、九重の雲ふかき宮居の内に人となり給ひ、荒き風にも耐へかね給ふべき御身を以て、六尺鬚髯の男子も後に瞠若せしむべき大業をなし給へるは、實に世界の婦人の鑑とや申し奉るべし、十八世紀の歴史に其御名赫々として輝けるも亦宜ならずや。

戰國名婦の面影

茅原蘭雪

小早川秀秋の叔母杉原氏

秀秋の叔母杉原氏は木下家定の妹にして、實に太閤の糟糠の妻なり、世に北の政所と稱す、關ヶ原役起るの初秀秋兵を率ゐて上洛す、然れども志は深く關東にあるなり、依つて遊獵に托して兵を見ず、窃かに天下の形勢を伺ふ、三成また其志を疑ひ急に伏見城を責めしむ、蓋し以て其去就を明にせしめんと欲するなり、秀秋陽に命を奉じて直に京都に入り、北政所に寓して曰く、今三成、秀頼の命と稱して東西諸侯伯を催すと雖も、德川滅ぶるの後天下の權を取りて之を己れに有せんとは鏡に懸けて見るが如し、家康に從はんとは是非を云ふべからず、石田の下風に立つに至りては到底忍ぶべからず、彼も亦稍我が意を危ぶみて乃ち伏見攻撃の命を傳ふ、此を以て吾れ少しく身を措くに惑ふと、杉原氏曰く女の身として軍の計如何なれども武士の家に生るゝ身は女なりとも思ひ一筋申すべし、此事能くば用ひられよ、其方は先づ攻手に加はるべし、少將勝俊（秀秋實兄）城中にあれば幸の事なり、吾れは其方の跡より伏見に入り戰止よ、和睦せよと敵味方を扱ひ申すべし、城中にては吾れを幸に人質と思ふべし、大阪にては吾れを出城させよとこそ申すらめ、秀賴は吾が生みし子にはあらねども今日までも母上と崇めたる者、吾諸共に攻殺せとはよも下知すまじきな

り、其内に德川殿上洛あるべし、萬一謀事相違して吾ともに攻め殺すと云はゞ運を天に任する事ぞ、勇將の決斷の場なるべしと仰せければ、秀秋尤に候とて攻手の人數に加はれり、城中の木下勝俊は此內談を知らず、舍弟の秀秋攻手に加はると聞き城中の諸士勝俊を隔心しければ恢へ兼ねて密に松の丸を開き立退きし故に、杉原氏の計る所違へり、是より杉原氏また勝俊に對面せざりしと云ふ。

女の身として軍の計らひ如何なれども武士の家に生る身は女なりとも思ひ一筋申すべし。一語何ぞ凜然たる、而して萬一謀事相違して吾れ諸共攻殺すと云はゞ運を天に任する事ぞ、勇將の決斷の場なるべしと云ふに至りては眞に死を見る歸するが如きものにあらずや、勇士の家に生れたる身は女なりとも默すべからずと云ふ武士道の下に、如何に當時の女性が其意氣地を磨きたるか、亦以て一斑を知るべきなり、夫れ秀秋は杉原氏の甥なり、而して伏見城中松の丸を守る木下勝俊はその兄なり、戰國の習ひ武士の意地今や彼等は一

度相戰はざるを得ざるなり、是れ杉原氏の私情に於て忍びざる所、而して彼れ亦甚だ三成の爲す所に慊らざるなり、乃ち秀秋兄弟として相戰はしめたる後身を以て兩軍の間に投じ、兄弟相屠るの慘を免れしむると共に西軍の氣勢を殺がんとするの苦計に出で、智慮周密なりと云ふべし、依つて思ふに秀吉の晩年は頗る女禍に衰ふ、淀君の美色を得て後不出世の英雄たる太閤殿下も氣度甚だ揚らざるものあるが如し、世或は豐家の末路を誤るもの外にありては石田三成、內にありては淀君の罪に歸す、是れまた必ずしも酷論にはあらざるべし、若し杉原氏をして淀君と地を替へて大阪の事を見せしめば恐らくは禍を未然に防遏して豐家の祀食を絕たざるを得せしめしならん、而して秀吉の晩年振はざるもの固より、頹齡老境の致す所なりと云ふと雖も、亦何ぞ其始に智慮周密なる內助の人あり、終りに淫逸是れ喜ぶの嬖寵ありしに依らざるなきを知らんや。

澤田次郎助の妻

關ヶ原の時細川氏の家臣に一個勇健の女性を出す、明智氏の義烈と、對照して君臣相得る所以の偶然にあらざるを示すものあり、今其大要を記す、初め忠興は關東にあり、父幽齋は丹後田邊にあり、而して二男玄蕃頭興元は宮津嶺山にあり、近く忠興の後を追ふて東國に至り未だ幾許ならずして三成の變あり、幽齋因て使を宮津嶺山に遣はし興元が息女内室を誘ふて田邊城に入らしめんとす、時に城中人なく領民を集めて輿乘を舁かしむるに決し、近郷に檄して百姓を求む、小野木縫殿助と云ふものあり、西軍に黨して丹後にあり、乃ち颺言して曰く若し今幽齋に與みして敢て嶺山の爲に計るものあらば、天下定まりて後必ず磔刑に處すべしと。百姓之より嶺山に近らず、澤田次郎助は興元の臣にして其領邑は丹後網野にあり、常に儒學に志して民を撫育すること年あり、今興元に從つて東國にありと雖も百姓其恩に感ずるや久し、且つ次郎助の妻嶺山城にあり、興元の室の左右に侍して危難身に迫ると聞くや、是れ恩を澤田氏に報ずべきの時なり。何ぞ其内室の爲に死命を致さゞると、二十餘人一團となりて次郎助の妻を求む、次郎助の妻時に年僅に二十また所謂深閨の人なり、未だ自ら百姓に會せしことなし、乃ち輿中より出でゝ曰く汝等能くこそ參りたれ、次郎助殿の奥方は此乘物の中にましますぞ、擕へて靜に扱ひ參らせよと云ふて興元内室の乘輿を舁かせ、然る後左右の侍女を呼んで曰く是より淸瀧までの道の程纔に一里餘りなれば如何に女の步みなりとも叶はぬ事はよもあるまじ、宜しく乘輿を廢し步行にて從ふべきなりと、自ら長手拭を以て裳を褰げ内室の肩輿に續く、自餘また之に倣ふ、依て無事田邊の城に入るを得たり、幽齋深く其機智を稱し悅喜一方ならざりしと云ふ、然るに其夫次郎助は關ヶ原の役前濃州岐阜七曲にて討死を遂ぐ。天下夫妻の忠勇に感ぜざるなし。

水谷勝隆の乳母

關ヶ原の役水谷勝隆は家康に從つて東軍にあり、其子勝隆四歲にして京都にあり、三成また之を求むるこ

と急なり、乳母襁負して攝津國山崎附近に遁る、人の情を以て告ぐるものあり、小野木縫殿助、川勝備後守追ひ到るを聞き乳母更に夜を冒して山崎の裏より小舟に取乘り八幡の松方に來る、島津氏の兵また此に要すと聞き、遂に東山の麓近衛龍山公の幽居に赴き泣て狀を告げて曰く、是れ水谷の稚子なり、君久しく彼が父を知ろし召さる、願はくば此子の命を助け給へよ、近衛公深く乳母の誠忠に感じ、勝隆を小風呂の中に匿すと二十四日間、天下定まるに及びて初めて之を出せり、夫れ亂世に崎嶇して幼兒を完うするが如きは丈夫も之を難んず、勝隆の乳母の如き眞に男勝りの女人と稱すべし、惜哉今其名を逸す、深く憾むべしとするのみ。

山内一豐の夫人

夫人が鏡筺に黃金を探りて名馬を購ひ、以て良人出身の地を爲せしとは世の普く知悉して而して艶稱する所なれば今亦贅せず、關ヶ原の役彼女が大阪より遙に書を東軍陣中の良人に寄せて其忠節を激勵せしに至りては、蓋し一豐をして克く始あり終あらしめたるもの、女流の龜鑑として遺憾なしと云ふべし、慶長五年七月二十三日家康東征の軍を督して下野國小山に至り、秀忠は更に進みて宇都宮にあり、山内一豐は宇都宮より結城に至りしも其小山に近きの故を以て諸川に移る、越えて二十三日三成擧兵の事初めて注進あり、物情稍々動く、一豐此日諸川の民家に舍す、夜に入りて門を叩くものあり、左右灯を點じ相戒しめて之を迎ふれば則ち一豐の室より發せし所の飛脚孫作なり、文函に收むる所の一通、別に增田長盛、長束正家二人より一豐に送る所の書狀を添ゆ、而して編笠の緒中修一書を籠む、蓋し道途嶮あり、非常の變に應ずるに出づ、一豐乃ち急に笠の緒を解かしめ、一覽し了りて、文函を解かず增田、長束二人の書狀と共に直に家康に致さしむ、家康受けて甚だ喜色あり、急に一豐を召して慰旨懇款を極め、且つ一豐室あるを稱す、宮中の書は蓋し一豐の忠節を勵まさんことを望み、大阪の邸を必ず守りて所天を辱かしめず、敢て意に介する勿れと

云ふにありしと云ふ。
是より先一豊の其所領遠州掛川より家康に從つて東國に向はんとするや心竊に大阪にある夫人の身上を危ぶみ、家臣市川山城を遣はして安否を問ひ、且つ留守邸の經理に任せしむ、當時西軍既に近畿を堅めて道路閉塞し容易に東方より行くものを通せず、山城乃ち身を以て熱田の神官に紛れ、素襖烏帽子を着け、祓串を持し以て關吏を僞り江州水口に至る、水口は當時長束正家の守る所、其家臣中に山城を知れるものあり、急に關吏に命じて捕縛せしめんとす、山城尙僞はりて曰く吾れは熱田の禰宜なり、公等何ぞ疑ふとの深きやと、陳辨百端彼れ尙聽かず、曰く關吏中能く汝を知れるものあり、試に汝と正面對晤せしめん、汝若し辭あらば可なり、然らずんば遂に此關を通すべからずと、乃ち山城を知る所の關吏を出して對晤せしむ、關吏は能く山城を知るもの且つ深く彼が忠誠危難に臨んで動かざるに感じ、良久しく其顏を見て而して抵掌して曰く天下相似たるものゝ多し、而も亦何ぞ汝の市川山城に似るの甚だしきや、然れども山城なるもの曾て額上に創を負ひ瘢痕掩ふべからざるなり、汝が額上を檢すれば眞僞以て立所に分明すべしと、依つて烏帽子を取りて乘人に檢せしむるに些の創痕あるなし、關吏此に於て更に颺言して曰く果して然り々々〳〵々々、只汝の果して熱田の禰宜なるや否やは疑ふべし、須らく祝詞を讀みて我が疑を解けと、山城稍々窮せりと雖も敢て色を動かす、忽ち平生記する所の銘劍の經文を高聲に唱へ出して以て祝詞に紛らし、依りて僅に虎口を脫れて、大阪に入るを得たり、一豊の妻山城の至るを聞きて大に喜び且つ曰く、天下漸く亂る、敵兵恐らくは我邸內に迫らんか、生きて辱を取らんよりは先づ自刎して死すべきのみと、山城曰く然らず余不肖と雖も此にあり、敵兵來ると雖も心を安せられて可なり、事若し成すべからずんば吾より御生害を勸め奉らんと、一豊の妻まげて之に從ふ、既にして忠興の妻明智氏の事あり、敵兵諸侯の妻室を質とするの議やみて免るゝを得たり、然らば則ち一豊も其妻を見ると極めて篤かりしなり、夫

婦相得し所以のもの偶然にあらざるに似たり。初め一豊其妻の購へる所の名馬を以て織田信長に見え依つて以て後來出身の地を爲す、而して關ヶ原の役には則ち其妻の發する所の書狀を以て大に家康の歡心を得、未だ遽に妻妾に依りて祿を得しものと云ふを得ずと雖も、其迹や婦主にして夫賓するの觀なきにあらず、後世亦或は之を疑ふ、然れども一豊また決して尋常男兒にあらず、能く衆言を容れて機を見るに敏なる所當時罕に見る所なり。

初め家康の會津を討たんとして江戸に下るや松平康重伊勢の白子に家康に追及び、語に石田治部の叛迹掩ふべからざるを以てす、家康頷して曰く是れ余の豫じめ測る所なりしと一豊座にあり、笑つて曰く『此度美濃筋へ出で候人衆の内にては島津計り用に立ち申候、是は遠國もの無人にて候よし申し候儘左したる事は有るまじく候』と彼の眼中には三成の爲人と西軍の形勢とは此の如く明白に此の如く確的に映出したりしなり、彼豈常庸の將ならんや、乃ち庸將にあらざりしと雖も掛川六萬石より土佐二十五萬石の封土を得るには主として夫人内助の功に依らざるを得ざりしなり、或は云ふ家康の山内氏を土佐に封じたるは別に深意あり、蓋し土佐は海南健兒の居る所にして豪悍制し難きものありしに、長曾我部氏武一偏の治を經て國俗愈々殺伐に赴き、當時に於ける難治の地たり、而して一豊の子は所謂聞えたる荒武者と稱せられしものにして、性嚴烈武健好個第二の長曾我部氏なりければなりと、果して然らば山内氏の一豊の妻に負ふ所益大なりと云ふべし、何となれば嚴烈武健の子を孝養したるもの亦一に彼女の功なるべければなり、嗟女は智なれば黠なり易く、勇なれば悍なり易し、一豊の妻克く智克く勇、而して常に一豊の後に隱れて毫も自ら肆にするの狀なし、是れ殊に及び難しとするのみ。

生鰹節

生鰹節を撰ぶに素人は軟いのを買いと思ふけれども生鰹節は幾度も蒸返しが利くから軟いのは少しも當にならぬ十へり堅い肉のシャンとしたのがよい 殊に寒心すべきは龜節と稱して鰹ぐらゐの大きの生鰹節の中には膜に能く蠅の子を好り付けてゐることがある之を知らずに食ふ時は忽ち食傷するから氣を附ければならぬ

日本歷世の軍用金

戰役には必ず物資を用す、糧食、彈藥幷に兵員の資給是れなり、即ち軍費の必要なり、昔の戰に於ては兵員各自に其の軍器を携へ糧に敵に由るの方針なりしかば隨つて軍費を要する事多からざりしと雖も近世戰術の進歩に伴ひ、軍事に金を要すること著るしく、殊に今日文明の戰爭に於ては、糧食、彈藥、幷に兵員の支給悉く皆貨幣に由るの外なく、隨て戰爭は金員物資の供給如何によつて勝敗の數を卜するに至れり戰時に當つて軍用金の大切なる推して知るべし。彼の旅順艦隊攻擊に於ける魚形水雷一發の價は約三千圓なりといふにあらずや、大砲一發猶千圓を要し。南山占領に要せしもの、元より精密の計算知るべからずと雖も或る專門家の說によれば、三個師團の各兵員の消せし彈藥の價は約二百万圓ならんといふ。猶現今滿州駐在一軍團の兵員に要する一日の費用は無慮五十萬圓を下らずといふにあらずや軍隊の一擧一動悉く皆金貨の消費にあらざるなし。是を以て日露戰爭に要する軍費は一ヶ年六億万圓といふにあらずや、

是の軍費を今日に徵し、是れを古へに考へ以て古今の變遷を見る又一段の興味なしとせず、即ち此に日本歷世の戰役に使用されし貨幣の形狀を摸寫し、若しくは縮寫して聊か讀者の一粲に供す。圖解左のごとし

ニ　甲州露金　戰國の頃武田信玄の造る處ろ實物大重量四匁、今日の金貨に換算して二十圓

ホ　牛舌小判　天正年間前田利家の造る處ろ堅四寸四分、橫貳寸八分

ロ　花三巴一步金　寛永年間前田家の造る處實物大

ト　甲州碁石一兩金　慶長年間甲州に於て鑄造重量四匁

ツ　加州花降銀　慶長十六年前田利長の造る處ろ縱二寸二分橫二寸

フ　安政二分判金　縱七分五厘橫四分

ヌ　金大法馬　德川幕府の軍用準備金、萬治二年の鑄造縱一尺一寸重量四十三貫目今日の金貨に直

して約二十二萬圓

イ　神功皇居征韓時代に使用せし銀錢實物大（徑一寸重量一匁八分）

チ　壽永年間源右大將賴朝の造る處ろ、即ち源平時代の戰役に使用されし金貨なり今より凡そ六百五十年前（縱二寸二分橫一寸七分）

リ　秀衡大判　陸奥の豪族藤原秀衡の鑄造せし金貨（縱五寸橫二寸重量二十匁强）年代同上

ル　朝鮮小判　豐臣秀吉征韓の役に鑄造したるもの縱三寸三、橫二寸强重量十一匁六分今日の金貨に換算して約六十圓

ヘ　十二支小判　戰國の頃今川義元駿河國に於て造りし金貨實物大なり

ハ　永樂通寶金錢　天正年間豐臣秀吉の造る處ろ戰功將士に賞與として與へしもの重量一匁實物大今日の金價に換算して五圓

ヲ　石州御藏銀　織田信長時代に於て中國の豪族尼子氏の造る處ろなりと云

カ　大阪陣の前德川氏駿州に於て造る所謂元和小判

ヨ　關ヶ原役に用ひし金板功勞ある將士を賞するに用ひし物

レ　慶長小判　豐臣秀吉の造る處ろ縱二寸三分橫一寸二分

タ　慶長大判　縱四寸八分橫三寸

ナ　安政一分判金

ラ　天保一朱金

ム　安政二分判金

チ　文政一朱金

ケ　元錄二朱金

ツ　明和五匁銀

マ　銀貨五十錢　明治三年鑄造

ウ　新金貨拾圓　明治三十年金貨本位制に由る

井　新金貨二十圓　同上

ノ　舊金貨五圓　明治三年鑄造

ク　舊金貨貳圓　仝上

ヤ　舊金貨二拾圓　仝上

ホ　舊金貨一圓　仝上、

ハ



ヌ



イ



ニ



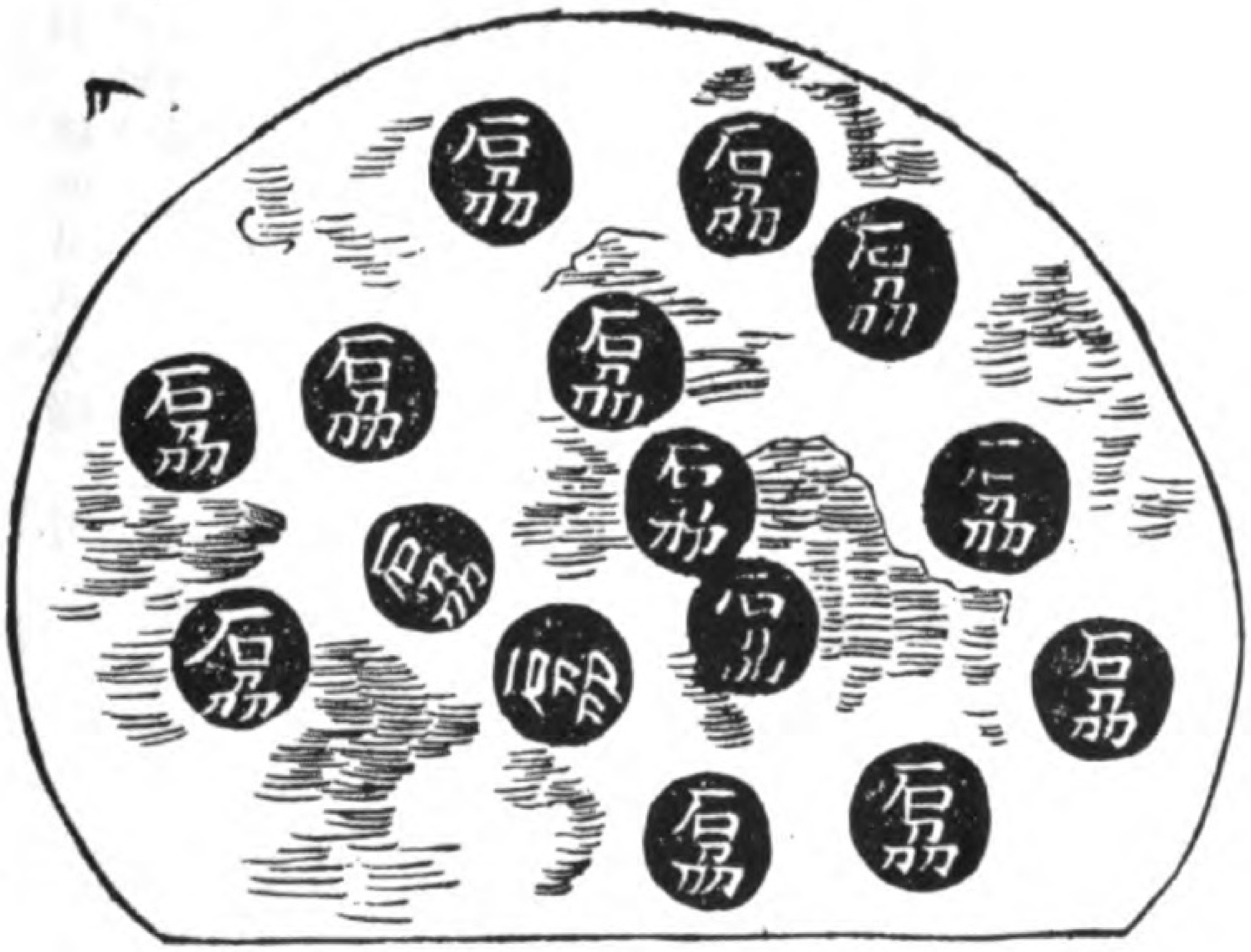
ト

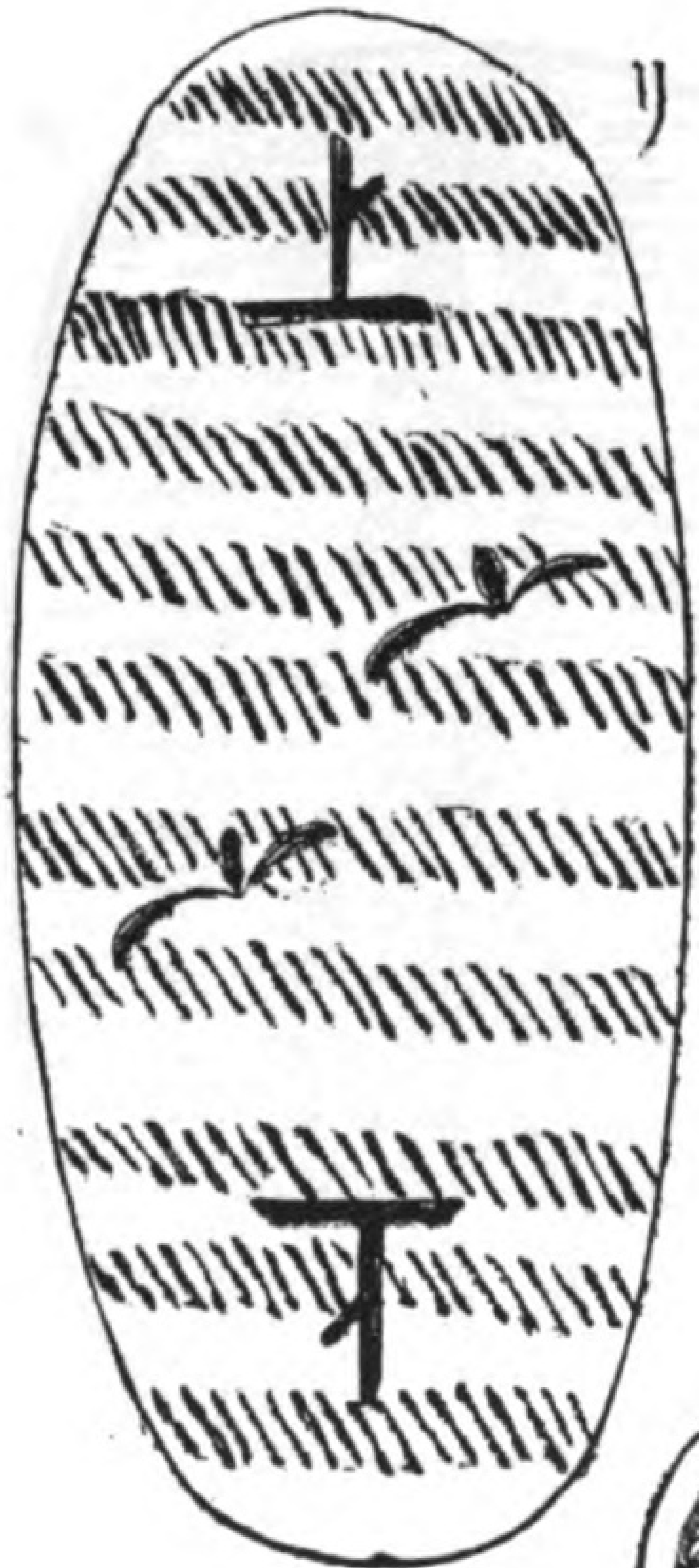


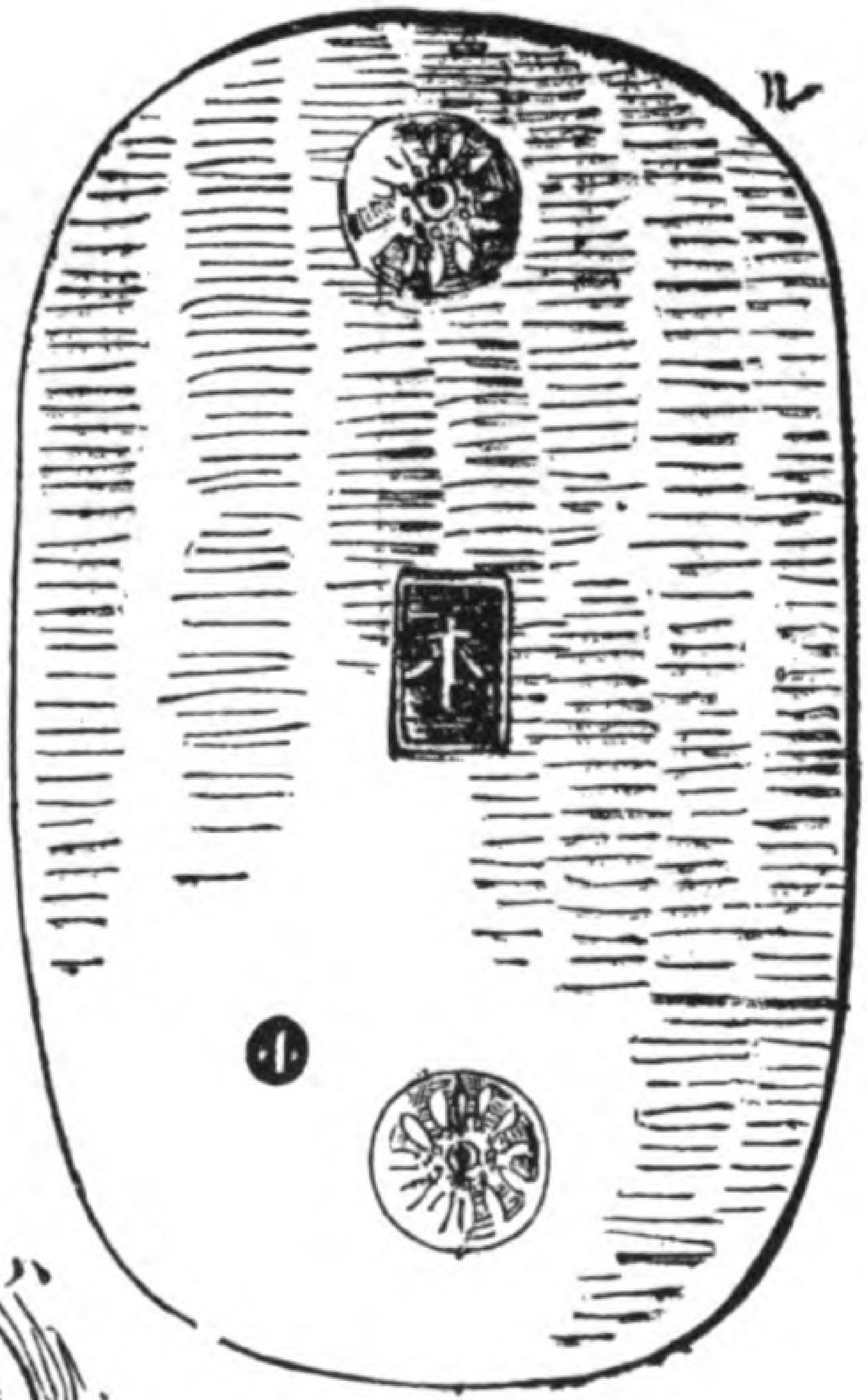
ロ



ヘ




リ


ル


ハ

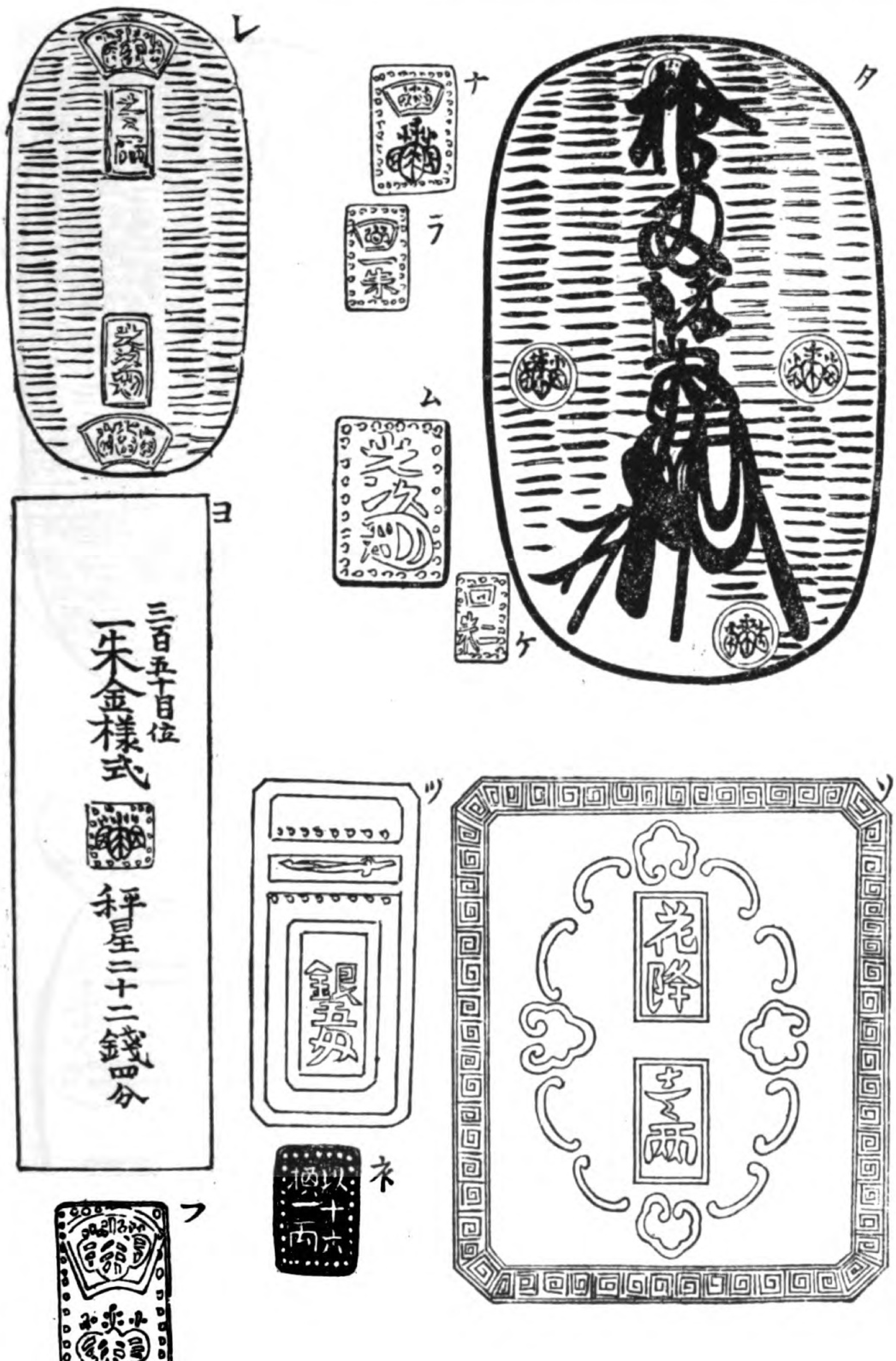


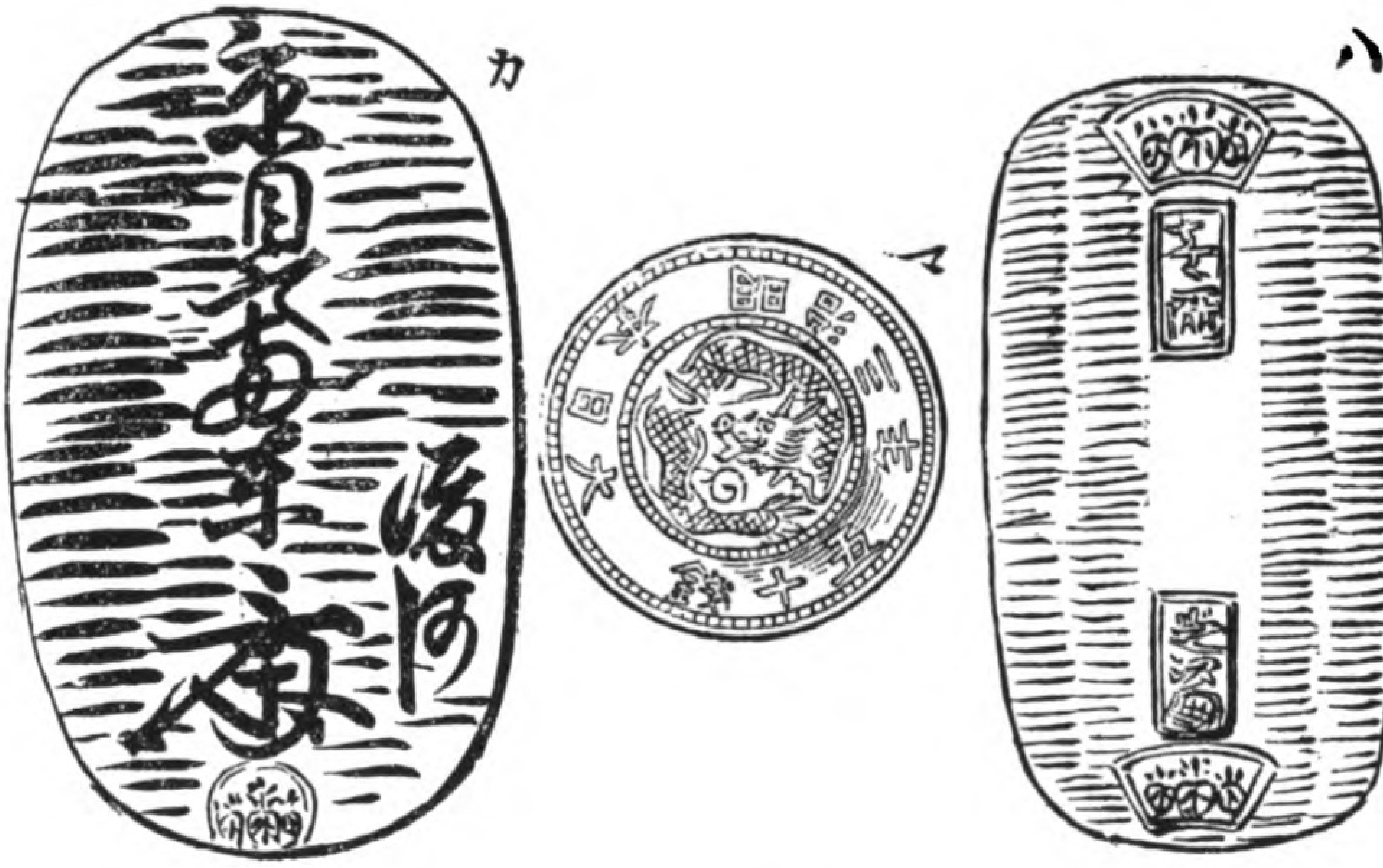
ホ

横弐寸八分

縦四寸四分[illegible]


チ


レ
ナ
タ
ラ
ム
ケ
ヨ
三百五十目位
一朱金樣式
秤量二十二錢四分
ツ
銀五匁
ソ
花降
壹兩
ネ
以十六
個一兩
フ





▲貨幣變遷略

古來日本に於て鑄造されし貨幣の質は金、銀、銅、黄銅、鐵、の五種にして大古中古に於ては專ら銅を用ひ、中古、近世に至り國民の膨張、國力の發達に伴ひ、漸次金銀を用ふるに至りしが、近世に至るまで民間普通の通用貨幣は專ら銅錢にして判金は、地方の豪族、若しくは有力なる諸侯の貯藏して非常の時に用ふるに過ぎざりし、德川氏天下を治むるに至りて太平年久しく民力著るしく膨張するに及んで銅錢の質粗にして流通上不便なるを見るや、漸次判金の鑄造を盛にして民間の需用に應ぜり、元祿より天保弘化に至る百年間に鑄されし判金の高の頗る大なるを以て之れを知るべし。而して太古より今日に至るまで各所に於て鑄造されて貨幣の種類は無慮七百餘種にして其形狀は圓形、楕圓形、長方形、額形、球形、環狀、孔方形等種々あれども、之を要するに黄金貨幣は楕圓、若しくは額形、普通貨は孔方形を以てせるものゝ如し。



天の衛生（ヘブンリーハイゼン）

糸左近

拜啓今や誰もかも衛生〳〵と却て身体を薄弱にする傾き有之のみならず戦時の最中女とても櫛風沐雨的の氣象を養成すること甚だ必要と愚考致し候まゝ「ヘブンリーハイゼン」といふ少し極端な一論文を御笑覧に供し候幸に御一讀あらんことを乞ふ。

ヘブンリーハイゼンとは**天の衛生**といふ事である。余の淺學の爲か知らねど、我國は言に及ばず歐米の學者と雖も此題目否此趣意で、徹頭徹尾衛生法を述べた書物は殆んど無い樣である、言葉を換ふれば、不自然を免れぬ衛生法が世の中に蔓つてゐるやうである。故に余の眼識を以て考ふれば、數多の男女は、矢張不自然を免れぬ所の衛生法を眞の衛生法と心得てゐるのである。一二の例を擧れば、髭の生へた紳士や、丸髷の奥樣が、病氣でも無いのに、毎日牛乳を飲んで御飯の量を減して居らるゝとか、活潑なる青年が房々とした烏羽玉の黒髪あるにも拘らず、蝙蝠傘をさし帽子を冠つて歩くやうなものである。抑ゝ牛乳は、天が幼弱な兒牛を養はんが爲に與ふる物で、其の成分を分析すれば善良な牛乳百瓦(約半合)の中に、水は八六、三三といふ大數を占め、其の他の滋養品は總計一三、六七といふ小數、これに反して同量の米は水僅かに二〇、六〇で、其の他の物は七九、四〇といふ大數では無いか然るに朝に夕に水で量の多い牛乳を飲んで一時腹がふくれた氣持がするため、肝要な飯の量を減すとは、これ天の賜物を棄つる馬鹿者と謂はねばならぬ、斯る人は遂に遲々たる牛的の行爲をなして、モーと叫ぶかも知れぬ、笑ふべき至りである。但し不知不識天の道に背いて病氣になつた折は、常の如き滋養物を消化するの力が無い、即ち身體一般が薄弱になる、そこで其の

薄弱と兒牛の幼弱と其の弱が普通である所から、暫く牛乳の力を借るのは、此の限りで無い、又如何なる天の惡みかは知ねども、親の罰が子に報いて、あはれ最愛の撫子に、垂乳根の樂しさを知らしむることの出來ぬ場合に、已むを得ず牛乳を代用するのは、此の限りで無い、然るに中には、普通よりも多く乳汁の出るにも拘らず、牛乳の方が滋養分多くあるなど丶いふ口實を設けて、何も知らぬ嬰兒に護謨管の乳首を哺ましめ何の情無き子守女に留守宜敷といふ工合で、夫婦のみ手に手を取り遊山見物に日を暮すハイカラが往々ある天何ぞ之を罰せずして止んや、日ならずして乳汁の分泌も止み、隨つて身體に一方ならぬ影響を來るか、或は間も無く姙娠するに至る、斯くして生る丶子は、薄弱或は痴鈍、この時になつて、嗚呼「天網恢々疎にして漏さず」かなど丶悔んでも、仕方が無いであらう。

次に、

禿山に何せに鳥居が立ぬやら
後ろにかみが少しまします

といふやうな人ならばいざ知らず、苟くも赤いなり黑いなりの髮が、澤山あるのに、帽子を冠つて傘を用ゐるとは、抑々何たる不心得ぞや、夫れ頭は他の部分とは違つて、血液に富み、隨つて發汗作用も皮脂分泌も多く、其の上毛髮といふ天然の衣服があるから、殊更に之を蔽ふの必要は無い、之を蔽へば新鮮なる空氣觸る丶能はず、皮脂及び發汗は蒸發するに道無く、其の上帽子の重量が加はるから、充血頭痛を惹起すやうになる、若し夫れ太陽の直射を防ぐためならば、傘を用ゐるに如くは無い、されど其の傘を用ゐるに不便なる場合は止むを得ず氣孔の疎い重量の輕い帽子を用ゐるが可い、論より證據永く帽子を冠つてゐた後に、之を脫いだ其の心持の善さ、えも言へぬであらう。

嗚呼靈妙なる哉自然の理、美麗なる哉天の道、年中銀世界の中に埋れてゐるカムチャッカ半島や千島列島のやうな北海の地には、脂肪に富んだる海獸海魚が充ち滿ちてゐて、取つて以て食へば、凜々たる寒威を防ぐに足り、焦熱釜の中に蒸さる丶やうな赤道直下には、

美汁津々たる果實が自然に在つて、取つて以て食へば身體を淸涼にするに足る、轉じて蒙古高原に到れば、馬牛羊豚の類は簇々と居て、住民の爲に身を犧牲に供ふ、さうして是等獸類の食物としては、渺茫たる高原が一面に軟草靑々と生へてゐる、天の配劑實に巧みと繰り返さねばならぬ、然るに我が國の如き四方海原に圍まれ、肥野沃土遠く連り、赤鯛靑魚五穀野菜思ひの儘に得らるゝ溫帶地方に居ながら、米と魚類とは、蛋白質脂肪が少いからとて、海に遠い大陸的地方の眞似をなし、獸鳥の肉を貪り食ひ下痢してゐる輩がある、笑ふべしと言ふよりは寧ろ憐れむべしである。尤も鯛百瓦中に蛋白質一七、六七脂肪三、〇七含んでゐるに引換へ、同量の牛肉は蛋白質二〇、六二脂肪六、四四あるけれども、我等日本人には身体に同化せざるを奈何せん、試みに右二品を別々に食したる糞便を分析すれば、蛋白の損失量は鯛は僅かに二、七〇なれど、牛は五、一〇といふ大數では無いか、斯樣に折角の蛋白質が糞便中に葬られてゐても、それでも獸肉は魚類より善良な物となすか、牛の如き獸肉中最も消化し易い物でさへ此の通りである、況んや他の野獸に到つては、其の同化せざること推して知るべしである、されど同じ我が國民でも、信州の如き山又山の中に住む者は、狐狸の如き野獸を食しても能く消化し、萬頃の波に洗はれてゐる隱岐が嶋人は殊に海魚が能く同化するは、爭はれぬ事實である、故に是等の事實に依て、我等は益々天の道を利用せねばならぬと云ふことが分るであらう。天は我等に空氣を與ふ、我等は空氣を利用せねばならぬ、天は我等に日光を與ふ、我等は日光を利用せねばならぬ、天は我等に手足を與ふ、我等は手足を利用せねばならぬ、腦を與ふ、皮膚筋肉を與ふ、腦皮膚筋肉を利用せねばならぬ、利用して我等は能く生活を遂げるのみならず、利用すれば利用する程身體健全になつて、あらゆる幸福を享くるのである、嗚呼天なる哉天。

若し是等の物を利用せぬとせんか、我等は忽ちに死んで了ふか、或は次第に衰へて遂に用をなさぬやうにな

ることは、如何なる無學者も了解せらるべき筈なるに我が國民の多數殊に上流社會に至る程之を利用せずして、日に薄弱に陷りつゝあるは、愛國心ある者の片時も見逃すべからざる事である。今試みに華族とか豪家とかのお姫樣、或はお孃樣乃至奥方御前といふやうな人々の生活を觀察せば、殆んど天の道に背かぬは無いであらう。冬は爐邊に屏風を立て廻し、衣を重襲して、座蒲團を敷き、寒の那邊に在るを知らず、夏は己が家の十分なるに倘足らで、遂に避暑轉地といふ贅澤三昧、箒を持つ手はあれども使はず、靴を穿く足あれども地を踏まず、皮膚あれども寒暑觸れず、眼はあれども日光を見ず、腦あれども何事をも考へず、朝寢に晝寢、それで毎日長夜の宴、山海の肉食に飽き、和洋の美酒に醉ふ、一寸出るにも馬車人車「コラー貴樣」の聲と「ヘイー御前」の聲と、想應じて聞ゆ、嗚呼何たる不屆者ぞや、嗚呼何たる國賊ぞや、故に如何に大慈大悲の天も止むを得ず是等の輩を薄弱短命にするのである、これに反して田夫漁人の輩を見るに、嚴寒の朝、酷暑の日中と雖も、鋤を携へ網を打つ、飃々たる吹雪の身にかゝるにも拘らず、赤裸體となつて海中に入り或は炎々たる太陽が皮膚を射るをも厭はず歌唄うて田草取る、三度の食事は菜蕗芋の類に過ぎざるも、能く吸收して身體に同化す。斯樣に天の賜物を利用するから、天は健全といふ賞を與ふ、されど彼等も亦一つ利用せぬ物がある、即ち或る賜物を殆んど棄てゝゐる、故に彼等は一生涯人の下流に立つて、左程の樂みも無く日を送るのである、然らば其の一つとは何であるか曰く腦である、天は結構なる腦を賜うてあるのに、彼等は毫しも之を用ゐ無いで、唯手足筋肉のみを使ふ、故に腦は發達せずして、其の智は何時までも進まず、徒らに從來の習慣に從うて農具漁器の改良も圖らず、空しく幸福を他に奪はれてゐる、實に慨かはしい次第である。

右の如く天は公明正大であるから、完全に天の衛生に從へば、身體健全に智力發達し、而も百歳以上の生命を保たるゝかも知れぬ、さるを漸く五十位の年で、「嗚

呼我老矣」など丶隱居する考へをしてゐる者がある、面の憎い奴である。「天は自ら助くる人を助く。」であるから、斯樣に天の賜物を五十位で棄る樣な人には、決して壽命を與へぬのである、讀者よ讀者、六十になつても七十の坂を越えても、「半分棺桶に這入てゐる」などいふやうな心細い氣にならぬ無いで、出來能ふ丈は天の賜物を利用し、分に應じて働き玉へよ、彼の鍛冶屋の手、車夫の脚を見玉はざるか、其の筋骨の發達 著しいではありませぬか、彼の醫者や盲人の觸覺を知り玉はざるか、見えもせぬ內臟の樣子を覺り、白い黑いの色までも感ずるではありませぬか。嗚呼有難い哉天、天は我等が發達せしめようと思ふ物を發達せしむ實に有難いかな天や。

今や忠勇なる我が武夫は、零點以下の嚴寒、百二十度以上の酷暑も厭はず、遼東が原、旅順の海に、南京米や梅干の食物で、一椀の湯水も得易からざる中に、心身共に健全向ふ所敵無く、連戰連勝の功を顯はしてゐるではありませぬか、讀者よ讀者、令ひ女の身であつても、富貴の家に日を送らるゝ方でも、下男下女ばかり使ひ玉ふな、使はる者は健全になるけれど使ふ者は日に衰ふ、故に釣瓶の水も汲み玉ふべし、家の內外も掃除し玉ふべし、一里や二里の路も步み玉ふべし、風にも吹かれ玉へよ、汗も流し玉へよ、まさかの時には一夜の野宿位しても、感冒に罹らぬやう鍛煉し玉へよ、將來有望の貴女方は暹羅の熱帶地に教育を試み、蒙古の高原に蠻民を愛しまるゝこともあらう、あらうどころか、今現に行つてゐらるゝ立派な婦人方もある、されば渡場の舟に醉ふ如き生地無き奥樣になつてはなりませぬ、斯う申すと、如何にも亂暴な事をお勸め申すやうなれど、從來有觸の衛生書は一般に人を憶病に導く傾きがありますから、之を矯めようと思うて、或は少し極端に走つたかも知れませぬ。されど華氏の寒暖計五十度の時は綿入一枚、同四十五度の時はXといふやうな衛生法は、果して守られませうか、一食每に何質が何程と分析したり、天秤を用ゐたりすることが、實行出來ませうか、外出して歸つた時に、如何なる〳

クチリヤが、身に着いてゐるかも知れぬなど〳〵、一々消毒が出來ませうか、出來ますまい、斯ういふ風に、ビク〳〵してゐたならば、戸を開けば塵埃が吹き込む開かねば空氣が入らず、サテ何うしたらよからう、斯うしたら惡しからうと、遂に精神病になるであらう、是に於いて天の衛生を利用すれば、容易に處置することを得るのである、嗚呼美なる哉天の道、嗚呼妙なる哉天の理、尙これに就いては、詳細なる議論もあれどそは又他日一書を著はして御覽に入れませう、今は其の大要だけを御參考までに供へたのである。

通俗科學　米の統計

經濟記者

人間の生存上無てならぬものは、衣食住、その內、何が一番大事かと言はゞ、食物です、よしや住宅はなくとも、橋の下や、樹のもとに、露を凌で行く乞食もある、或は水草を追ふて、野宿しつゝある野蠻人もあり、又世には衣服なしで僅かに木の葉で腰部を掩ふたのみで生活して居る熱帶地方の土人もある、併し飲食をせず、生きて居る人間は、天地間たゞの一人もありません、

扨又食物中で、何が一番大事であるかと言はゞ、日本人なる我々には米であります、米は百般の食物中一番美味のである、如何に皆さんが鰻の蒲燒がうまいの、鳥の鍋燒が美味のと言つても、毎日々々頂ては到底飽ずには、居られません。

所が米は年中喰ても、少しも厭ない、これが眞實においしひと言ふのでしよう、是れを人に譬へて申せば、最も眞率にして、我れに信實の同情ある、友達の樣なもので、何時まで交はるも、少しも渝はることはない、鰻の蒲燒や鳥の鍋燒などは、一寸口當りは好いが、永くはつゞかない。

米は、かく我々人間にとりて、必要缺く可らざる、物なるに拘らず、人は至つて米の事に智識が乏しい一體

米は何に用ふる物であッて、又どういふ所から出來る物であるか、且つ米の直段はどうして上り下りのあるものであるか、といふ事は薩張御存知に成て居らんやうです、かくては自分の命を繋ぐ恩人を知らないと同樣な譯けです、それゆゑ私は米に付て少し許御話を致そうとおもひます。

▲米の用途

米は何に用ゐられますか、たゞ飯として、餅として、ばかりでない、其用途は、澤山ある、皆さんのお好な甘酒も、三月節句に御雛樣にあげる白酒も、正月の屠蘇も、酢も、燒酎、アルコール、濁酒それから、小供や御婆さんの好きな飴も、皆な此の米で作るのです、其の外寒晒粉、白玉粉、氷餅粉なども、米より造られるのであります。

▲米の生產

米は何時の世から有たかと言ひますと、日本では天照大御神の頃から、旣に在たのですが、その頃は米の作り方も知らず、又料理法(食べ方も)をも知らないために、僅かしか無たようです、この時分多くの人の食物は、鳥類、獸類を獵して、其肉を食て居ました、しからば世界では、どうであつたかといふと、東印度に一番早く作られて居て今から二千四五百年ほど以前に、歐羅巴に渡り、伊太利などで盛んに作りまして又亞米利加では、二百七十年ばかり以前に、漸く歐洲から渡たのであります。

其から米の耕作に就ての御話ですが、米は世界中どんな所にでも、作られるかと言ふに、そうは行きません、亞細亞、歐羅巴、南阿弗利加等南北亞米利加、の寒くない所にはできますが、北緯四十五度位から、北の寒い國には出來ません、日本では北海道の北の方を除く外は、全國至る所、稻を植ることが出來る、一體、米は暖きを好むもの故、日本では夏の暑さが烈しい年は、豐作で、冷氣な年は屹度不作です。

皆さんも御承知の通り、一昨年は雨が多くて冷氣であつた爲めに、奧州地方では非常な不作で、爲めに飢饉となり藁や木の皮を食た所もある位です、私も其の樣

子を視察しようと思て、草鞋脚袢で、磐城の國の、十里も二十里もある、山の奥に行て見た所が、寒さのために稲の穂が出ませんそれで米一粒も登ずして、農民は菜の様な顔色して、苦しんで居りました。

其柄米は田に産するものと、畑に産するものとがあります、畑に産するものを、陸米と言つて、並の米よりか不味です、又田に産する米の内に、粳と糯の二つがあります、粳は飯になる米で、糯は餅や、硬飯にする米であります、日本では糯よりか粳の方を、多く作りまして、陸米は田米の十分の一も作りません。

▲米の生産及消費國

扨又世界中で米は、何國から多く出來るかと言ふと、東印度が一番多い、其れから次は支那です、或西洋人の調べには世界中米の産出、印度壹億壹千萬石、緬甸千八百萬石、麻尼剌千二百萬石、爪哇二千十萬石、錫蘭二百六十萬石、伊太利二百六十萬石、西班牙二十七萬石、合衆國六十萬石、日本三千八十二萬石、となッて居ります。

其れから世界中に於ける米の収穫高及び消費高は、幾干かと言ふに、元より判然した精確なことはわかりませんが、或洋人の調べによると、米を作る土地が、六千萬町歩あると言ふて居ります、其れ故一反歩に付て、米が壹石五斗收穫されるものとすれば、一町歩拾五石ですから、九億萬石となる勘定です。

而して世界中の人の數、十五億萬人で、其の内米を食する人が九億萬人ばかりあるです、其國には、支那が四億千萬人、印度が二億九千萬人、日本が四千五百萬人、朝鮮が一千萬人、其他東印度地方亞弗利加の一部、及び常食とせざるまでも、歐米人がライスカレーなどにして喜んで食べて居りますから、随分其の消費高は多いのです。

▲日本の人口と米の關係

今日我國で獲れる米で、すべての國民を養ふことが出來るやと言ふに、中々苦しいのです、モシモ國民が遠慮會釋なしに、どし／＼子供を產み、又其子供が成長して、子供を産み、鼠算に殖て行く、其の割合に死亡

者は尠ない、斯うして年々人の數が殖て行ても、御承知の如く、土地の面積は殖ないから、米も從て殖ません、尤も今迄未開墾の野原であつた所が、田地になり、又農業の進むに從て米の收獲も、以前よりは殖へるでしようけれども、之れは人間の殖る割合から見るに、實に僅少許で比較にはなりません。

今統計によつて見ますると廿五年から卅四年まで十年間に、三百八十三萬人と言ふ人口が殖てゐます。

然るに田地の方はどうかといふに、卅年に二百七十三萬町であつたのが卅四年に二百七十六萬町となりました五年間に僅か三萬町しか、殖ないのです、それから又米の收獲高を見ますると、卅年に三千三百萬石が卅四年に四千六百九十萬石となります五年間に千三百萬石許り、殖へてをる樣ですが卅年に凶作で卅四年は豊作ですからこれでは米の殖える證據とするに足りないのです。其れ故人口が十年間に約四百萬人から殖て行くには、是非とも米が二百五十萬石ばかり鼠算に毎年殖なければ、到底人間の口を養ひ切ない道理です、考へて見ると心細いことでありませぬか。

一人で一年に壹石を食るものにすれば、一年の米は四千五百餘萬石、なければ足りないのです、併し四千五百萬人の内には、小供もあれば、老人もある、又多くの農民は麥、玉蜀黍や、馬鈴薯や、大根、薩摩芋其他の雜穀なぞを、飯に混じて喰べて居ますから米の不足を補ふことが出來ますが、其の代り米は前述の通り、酒に遣ひ又外國へ輸出しますから日本で作た米では日本の人を養ふことが出來ませぬ、そこで外國から澤山の米を仕入れて、不足を補ふ事となります。

▲外國米の輸入

年の豊凶に拘はらず日本は年々外國から、米を輸入して食物の經濟を立てゝ居ります、その高は毎年五千百餘万圓と言ふ、大層な價で、其主なる國と、金高を擧げますれば、英領印度より二千七百四十二萬圓、佛領印度より千四百萬圓、朝鮮より四百七千八萬圓で、其內最も多いのは、ビルマ國のラングーン港から來る米です、其米は南京米なとゝ違て大層美味い米で、世間

では外國米を食べるなど、笑ひますが今日では如何なる上流の人でも、ラングーン米の這入つた米を食べない人はない位です、ラングーン米は白くて、美はしくて、味もよく、飯にたいて、非常に殖え、且つ日本の米よりも價ははるかに廉いのです。

▲米價の高低する譯

米の直が上り、下りする譯は、どういふ原因でせうか、是れはよく注意せねばなりませぬ、一体物の價の上下するのは、需用供給の關係に依るです世間に品物か多くて買手が少なければ、其品物は自然廉く、直段が下る又買手が多くて品物か少なければ、其品物の直段が上る、又品物ばかりでなく、勞力もそれと同し譯けで、皆さんが花見などに御出掛けなさッて居る時、雨が俄かに降て來て雨具かなイッて、美しい着物が、ビショ濡れになる故、急で我れ勝に、人力車に乘て御覽なさい、其車賃は必ず平時もの直段よりか、高く取られます、これは乘る人即ち需用か多くて、供給即ち人力車か尠ない爲めに、自然斯うなるのです。

これと同しく米も、其供給か尠なくなれば、其直段が高くなるのです、他の品物は、直段が高くなれば、買はないでも濟む、其故儉約して買はないやうにする、すると其物の直段が下ります、けれど米の様に無くてならぬ食物は、如何に儉約しやうと思ても、食べずに居るわけには行かぬ故、止むなく高い金を出しても買ふのです、それ故米が不作なれば必ず高くなるのです、併し申し上た如く米が高くなれば、外國からドシドシ米が來るように成たから幾分かよいのです。

其から米の相場は、氣候の宜悪水害の有無、虫害の多少風の如何等によつて、上下致します、又日本の農民は多く麥を食べますから、麥作の豐凶も亦大に米の直段に關係を及ぼすのです、麥が不作で取れ高が少なければ勢ひ米を食る様になるから、米の需用多くなることを、見込んで直段が高くなるのです。

又日本の内に米が澤山あつても、一時或る一局部で高くなることがあります、其の譯は、之を東京として見ますれば、東京市内では無論米か出來ますまい、必ず

外の地より持て來なければならんです、其れ故外の地方に米が澤山あつても、賣る米が少ないか、鐵道又は舟運の都合になりて、米を東京に澤山持ち込むことが出來なくなるやうな時には、米價は確かに上ります、其れから農家の内には、賣り惜みと言ふ事があります、其れは戰爭でもありそうになッて、米價が上るだらうと思ふと、何程澤山手許に米があつても、米價の上るまで賣ることを、控ゆるのです、さうすると米の賣物が少なくなるから、米價が騰貴します、其れから又商人の買占と言ふことがあります、これは米商人が米價の上るを見込んで、澤山の米を買て賣らないで置くのです、すると賣る米が少ない故、自然直段が上ります、其外米の相場は運賃により、關稅により、爲替と言ふもの丶相場により、貨幣の相場により、上たり下たりするのであります。

（完）

久方の天のかぐ山そらはれて
出づる月日や萬代のため　　家隆

動物の保護色

林天然

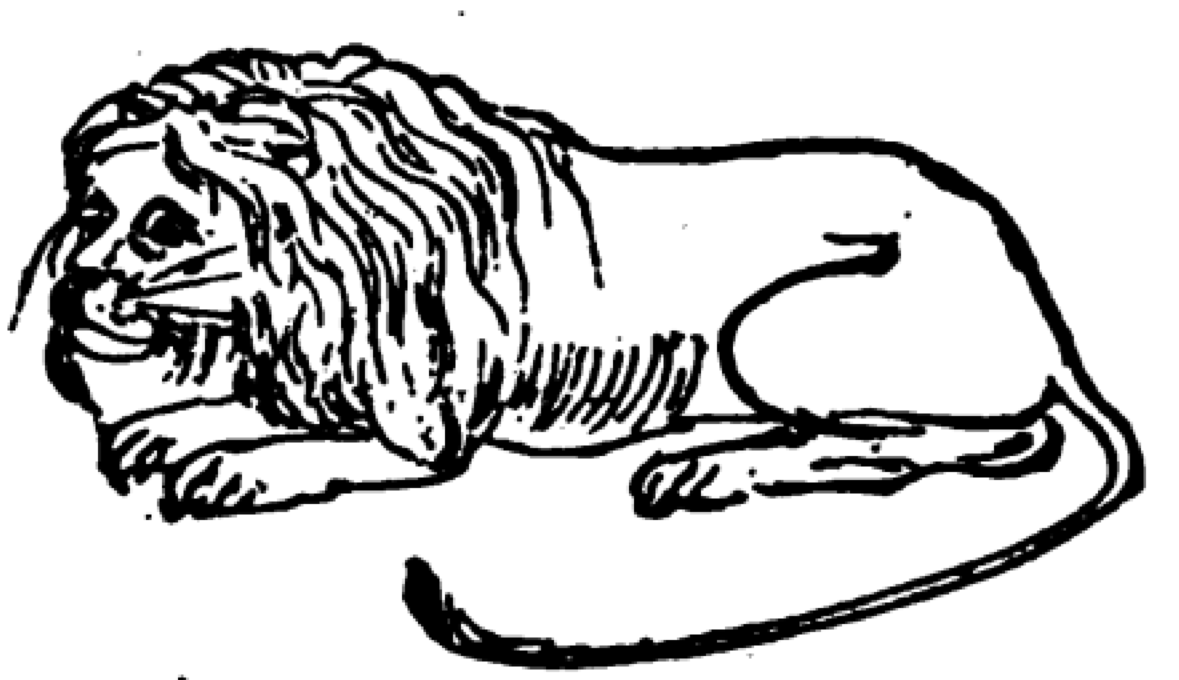
天高く地廣く、田園原野漠々として連り、山岳丘陵蜿々として起り、湖沼滿水を湛へ河川溶々として流れ、樹木蓊鬱として茂るのは、我地球上の好景である。で空晴れ、氣澄みて、風なき時は、世は靜にして、穩かなるが如くですが我地球上では、田園原野、山岳丘陵、湖沼河濱、樹の上、草の間、水の中、到る所に動物が棲息して居て跳ねたり飛んだり、駈けたり潜つたり、匍つたり登つたり、叫んだり謠つたり、なか／＼にぎやかです。そして弱い者は強い者に殺され、強い者は猶一層強い者に虐められるから、動物界は極めて物騷です。故に語を換へると、地球の表面は、生存競爭の舞臺である。此物騷な舞臺に於て、安全に生活しやうとするには、敵を攻擊することゝ、自分の身を護衞することについて、種々の方法を講じなければならな

い。或者は鋭い齒、鋭い爪、鋭い角を具へ、或者は剛い皮、烈しい毒、堅い棘を備え、或者は速い足、輕い羽を有ちて、攻めたり禦いだりして居るのです。斯の如き武器武具は、動物の爲めには、誠に利益であるが、こればかりでは、何となく心忙しくて、餘り悠つくりして居られない、所がこヽに敵を攻撃したり、身を護衛したりするに、面白いことがある。それは自分の體が、常に棲息してる所の周圍の物體の色と、同じ彩色を具へるといふことです。體が周圍の物體の色と等しい彩色であると、他の動物を攻撃捕獲しやうとするには、他の動物に近寄るに都合がよい。また己れより強い動物が來ても、容易に物體との識別が、つかないから、幸ひに强食の難を免れるのです。是に於て廣く動物界を見渡すと、自然陶汰の理により、沙漠にすむものは、砂色を爲し。雪の中にすむものは白色を爲し。草の間にすむものは、綠色を爲し。水底にすむものは、泥色を爲し、夜出るものは、暗黒色を爲し、水中にすむものは無色透明のものが多いのです。斯の如き動物の彩色をば、動物學上保護色と稱へて居ります。

そこで何のやうな動物が、保護色を有してるか、例によつて、高等の部門から述べてみませう。

哺乳類中。獅子は、砂漠の性を帶べる地方に棲息してるから、體毛が總べて灰色である。駱駝、羚羊、大更格盧等も、これらの地方に在るから、何れも砂色を呈してる。沙漠はいふまでもなく、樹木もなければ、草も尠く、唯廣々してる砂原であるから、身を隱くす場所が

砂漠地方の動物（多くは砂色を爲せり）



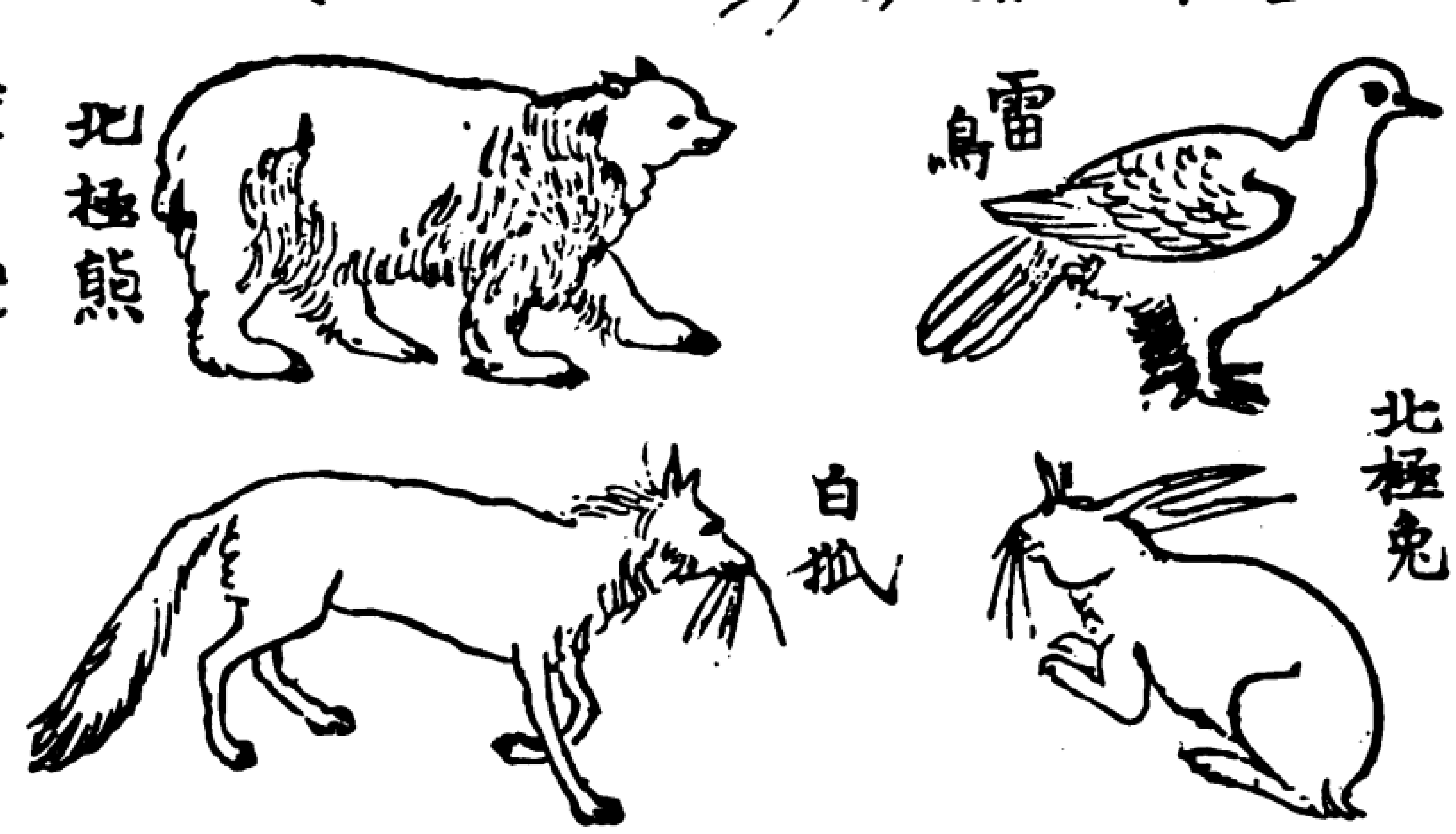
獅子



駱駝

ない、夫故少し華な色澤であると、直ぐ見出される、所が若し砂色であつて、地上へ靜に伏してると、恰もで岩石か土の塊の如くに見え、動物とは思はれない。亞米利加獅子とも稱せられてるプマは、體の色が褐色で、樹の皮に似てるから、樹の幹に接着してると、容易に分らないそうである。我邦普通山野に棲息してる、狐、狸、貉、兎等は、皆鳶色であつて、容易に目立たない、そうして亞米利加の北地に產する狐は、夏の間は鳶色であるが、冬は白色となり。我邦の日光から越後羽前羽後に產する兎、及び歐羅巴の諾威國やアルプス山、南米のウプラドル、北米のポルニヤ等に產する兎も、夏は鳶色で、冬は白色に變する、併かもグリインランドの如く、年中雪の絶えない地方に住む兎は、始終白色である。白

雪中の動物（多くは白色なり）



色のものが雪の中に在ると、「飛んでから目にとまりけり雪の鶴」とかいふ通り、容易に識別することが出來ないのです。熊は普通黒色であるが、北極熊の如く、北極地方に棲むものは、全体が眞白である。それから温暖地方で夜間出る、蝙蝠とか鼠とかいふ獸は、大概鼠色か、暗黒色である。時々海中の岩礁に攀登る海象、膃肭獸等は、黒色であるから、ちよツと岩礁との區別がつかない。虎は黄色で、波形の黒條があツて、頗る綺麗であるが、叢の中へ潜んでると、黒條が丁度草の影のやうになツて、虎の居ることが、なか〳〵分らないさうである。一体獸類は、家畜の外、綺麗な色のものが尠ないのです。

鳥類も、沙漠に產するものは、大抵背の色が砂色で

あるとのこと。駝鳥は駱駝と同じく、野暮な色をしてる。我邦到る所に見る天鷚も砂色である。鶉は野原に居るから、枯草の如き色を爲して、足本に潜んでても、なか／＼分らないことがある。雉は甚だ美麗な羽毛であるが、綠色の草の間に居ると花がさいてるやうでちよツと見別がつかないそうです。それから熱帶地方の青々してる森林中に棲んでる孔雀、鸚鵡、鳩などは、多くは綠色である。我邦の白山、御嶽山、乘鞍岳等の高山に棲む雷鳥は、兎と同じく、夏は褐色で、冬になると白色に變じてしまふ。で北極地方に産する鷹や鶚は年中真白であるそうです。我邦の夕暮、又は夜中に飛び翔ける梟、鵂鶹、蚊母鳥等は、黒褐色へ斑紋がついて、、晝間樹木の枝に潜んでるには適當である。鳥類は哺乳類と異り、野生といへども、羽毛の美麗なのが澤山ある、これは雌雄淘汰の結果によるのです。



夜間の動物（多くは暗黒色なり）

爬虫及び兩棲類中。蛇、蜥蜴の類で、沙漠地方に産するものは、其背が大抵砂色である。龜の類は、甲が灰色であるから、砂の上に匍上ッてると、砂に違はない、殊に鼈は泥龜ともいひ、水中で泳いてる所は、泥が動いてるやうです。鯢魚は山間の清流にすんでるが、皮が黒褐色で、水底にある岩塊に似てゐる。壁の隙間などに居る宮守は、壁色で。綠色の草の間に居る蜥蜴は、碧色である。阿弗利加に産するカメレオンは、保護色の最も著名なるもので、素灰白色であるが、七面鳥の肉冠の如く、見る間に金色となッたり、白色となッたり、黒色となッたり、青色となッたり、頗る自由自在である、故に

居る所が緑色の葉に覆れると、直ぐ青色となり。褐色であると、更に褐色に變ずるから、恰るで魔術者のやうなことをするのです。我邦に居る雨蛤も、春夏の頃木の葉が緑色であると、躰の表面が緑色で、秋になり諸々の木の葉が落る頃になると、褐色或は灰色に變じて、樹の皮に扮らうのです。金襖子は樹の皮に類せる色を爲し。金線蛙は草の葉に似たる色を爲してるから、跳ね廻はらなければ、ちよッと見別け難い。疣蛙、蟾蛙の如きは、殆んど土塊と同樣で、動物と見受けられない場合が多くあるのです。

◎魚類中。泥上に居る泥鰌は泥色で、岩の間に居る鰕は暗黒色である。海底に居る比目魚、板魚、牛尾魚、華臍魚などは、躰の腹面は概ね白色であるが、背面は泥沙と同色である。故にピッタリ水底に着いてる時は、何うも動物とは氣

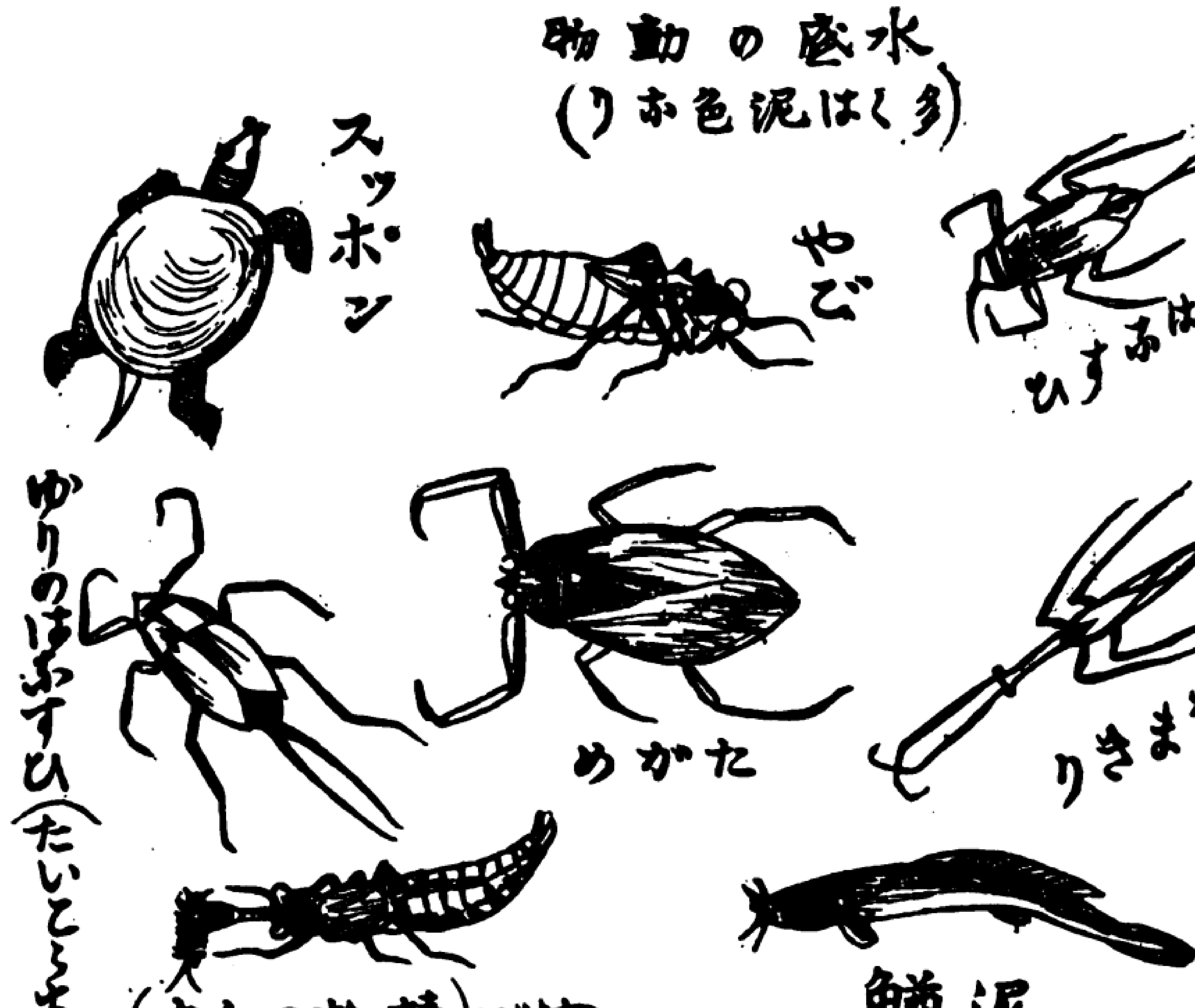

カメレオン

付かれない。其他水中を游泳してゐる魚類は、大概背面が青黒色で、腹面が白色である。是等の彩色は、水中にあッて、上から見ると、水のやうに見え、下から見ると、空の樣に見え、動物とは、ちよッと認識しられない。これでは鯛の赤いのはどういふ譯かといふに鯛には保護色の代りに外部に針を以て居てこれで防禦するとが出來るのである。

◎軟体動物類は、大概ね堅剛な介殼を具えてるが、殼の無い蛞蝓や、殼があッても極く薄い蝸牛などは、其色が褐色で、樹の皮の色と同じ樣であるのみならずこれには叉液を吐く作樣があッて他の蟲類を毒する事が出來る、軟体動物の豪傑章魚の入道は、色素の作用により、居る所の色に似せて、種々に變色し、他動物の目を瞞着する。それから烏賊は墨汁を吐いて敵を晦ま

す作用を持つてゐる。

蟲類は、其種類最も多く、動物界の大分部を占めてゐる、けれども大概小弱で、常に哺乳類、鳥類、爬蟲類、兩棲類等に捕食されてゐるから、隨ッて自衛の爲め保護色を有するものが甚だ多い、試に野外に出て窺ふに、綠色の草間には、綠草の螽蟖、蝗、飛蝗、浮塵子、蟷螂、竹節蟲などが居る。田畑山地には、土色の蟋蟀、金鐘兒、金琵琶などが居る。庭園内には、砂色のツチイナゴ、蜘蛛、螻蛄などが居る。樹幹には、褐色の蟬が居る。菜花には、黄蝶が居



る、大根花には白蝶が居る。枯葉の邊には、木葉蝶が居る。垣牆には、壁色の蜘蛛、蛭などが居る。河流の水中には無色の蝦が居る。で昆蟲類の蚜虫、尺蠖、烏蠋の如きは、同じ種類の中でも或者は綠色となり、或者は褐色となり、或者は黒色となり。能く其棲む所の植物の色に似てるのである。それから淡水海水には、透明無色の小動物が無數に繁殖して、一々擧ぐるに遑が無い位です。

抑も保護色とは、巳れが攻擊を加へる動物と、巳れを襲擊する動物とに對し、成るべく巳れの身の知れない樣に務

めるのであるが、こゝに等しく保護色でも、之に反對する番外者がある。此番外者は、已れの姿を隱くす所か、態々他の動物に見易いやうに、著しい彩色を着けてゐるのです。是等の動物は、體内に烈しき毒があるとか、惡い臭があるとか、肉が醜いとか、其他鋭い武器があるとかにて、他の動物は之を補食することを嫌ふのです。けれども若しも體に何にも異つた點がないと、他の動物には知れないから、矢鱈に攻撃を受ける。折角已れの保護に備ふる毒液、惡臭、醜



味も、鬪合ふの上ならでは、効能が顯はれない。そこで毒液、惡臭、醜味を有する動物は、特に派手やかな彩色を具えて、却つて他の動物の注意を起さしめ、徒に試食ひに遇ふのを豫防する。即ちこれらの彩色をば、特に●警戒色と稱へてゐるのです。

動物中警戒色のある者は、實に尠ない。亞米利加に產するスカンクといふ獸は、鼬鼬の類で、堪へ難い惡臭を有つてるが、其毛色は黒と白の縦條で、やゝ離れても明かに見別がつき、併かも他の動

物を恐るゝことなく、悠然として樹の枝を歩いてゐる

世俗に狐の一ッ屁といふ事があるこれは他の動物に逐はれて絶体絶命となつた時屁を放つて敵を晦まして遁げる用意である又蛇類中烈しい毒のある種類は、他の動物の注目を惹くやうに、美しい彩色をしてる。昆蟲類にても、鋭い武器のある蜂類は、何れも黄、赤、黒などの色を雑えてゐ。毒毛のある蛄蟖にも甚だ見易い色をしてゐるのがある、それから悪臭の有る椿象、瓢蟲なども著しい色である。

保護色及び警戒色によつて、多くの動物が如何に其身を安全ならしむるか。野外に出て、少しく注意すれば直に實驗するであらう。嗚呼一匹の虫の色といへども、決して偶然に出來た譯ではない。

終りに臨んで人間社會を顧ると、軍隊にはや丶保護色が利用されてゐる。彼の英國といひ、米國といひ、露國といひ、軍人は孰れも目立たない服を着てゐる。我日本では、嘗て北海道に置かれた屯田兵が、既に保護色的の軍服を用ゐてたが、其他の軍隊は、衛生上冬は黒服、夏は白服であつたのです。然るに夏期萬緑中、白色程顯著のものはない、顯著のものは、戰爭上敵の注目を惹き、甚だ不利益である。夫故白服は近頃大に改良されて來たのです。で美麗なる赤色或は青色の服を着け、燦爛たる金飾を附けるのは、所謂警戒色若くは威嚴色ともいふべきであらう。軍艦の如きは、平時は黒色若くは白色に彩らるゝが、戰時に際しては、保護色を應用して、青灰色に塗換へ、水色に染ふて容易に識別がつかない樣にする。說來ば保護色の功も亦偉大な者です。(完)

スカンク



(臭獣)

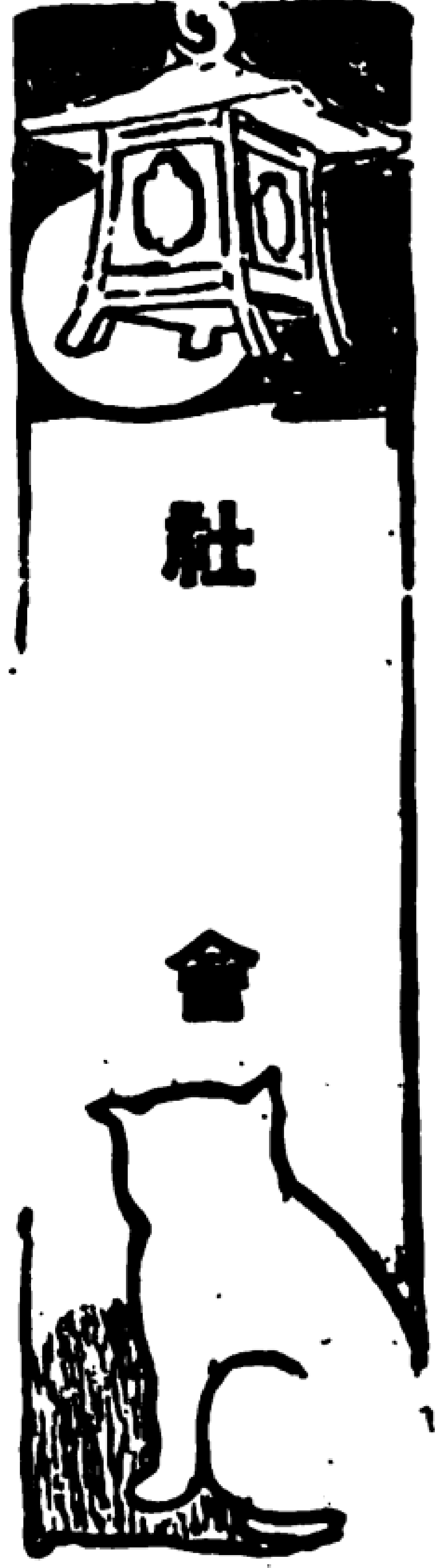
滿州の風土季候

▲春の季候　流石に亞細亞大陸の一端なれば四季々候の激變著しく就中滿州の春は期節甚だ短し寒暖計は四月に至れば僅に上騰し初む四月下旬より五月初に至れば遼東一帶の地既に植物の發生を見五月下中に至れば一轉して天氣晴朗にして温暖となり曠漠無限の沃野は一面青々たる青草を以て覆れ峻烈の酷寒ありしを忘れらるゝに至る然れども松花江の上流黑龍江省地方に於ては時に五月尚降雪を見ることあり六月初より北部滿洲に於ても氣候僅に暖く植物も俄然として發生をなす。春より夏に移る際は氣候の變化著しく北部滿洲の西方は殊に甚し然れども東部日本海附近の地方は潮流の影響を受くるを以て此の如く著しからず。

▲夏の季候　滿洲の夏は興安嶺の溪谷等を除くの外は一般に酷烈なり南部滿洲遼東地方は南方に進むに隨ひ炎熱の度も之に伴ふて熾なり其劇熱は米麻藍等の栽培に適す牛莊奉天に於ては六月末に戸内にて華氏九十度乃至百二度に達することあり而して九月に至るまで比較的高度の平均を保つ北部滿洲に於ては六月上旬より温暖を呈し初め三ヶ月間永續し七月上旬は其最も暑熱酷しき期節なりとす七月上旬より下旬に至る二十三日間は午後一時の戸内の温度列氏七十五度を示せるは只一回のみにして其餘は八十二度乃至九十度なりしと云ふ又ハルビン附近に於ては七月二十二日曇天輕風なりしに列氏九十五度四を示せりとこの時若し晴天なりしならんには疑なく百十度以上なりしならん然れども斯くの如き暑熱は大抵午前十一時より午後三時迄の間にして之を除けば俄かに涼しくなり旅行等に左迄差支を來すが如きことなしと云ふ。

▲秋の季候　北滿洲に於ては八月上中期より暑熱漸々下降し初めて秋の來るは割合に早く時として九月下旬に松花江の北方齊々哈爾近傍に於て落葉を見ることありと云ふ然れども又日中暑熱耐へ難き程なるに夜中は寒冷にして即ち九月二十五日の朝華氏四十度を示せるに正午には戸外にて百〇五度以上に上騰し同十六日に至り俄に三十五度に下降せることありと云ふ其激變想ふべし又某技師の言に據れば九月中旬に於て既に秋の天候を呈し十月中頃まで列氏の零度以下に下降せることなかりしと云ふ滿洲の秋は短期なりと雖も一般に爽快なる時期なりといふ。

▲冬の季候　遼東の牛莊溶の冬期は時として列氏零度以下十九度に達することあり遼河々口は例年十一月末を以て氷結し初め三月下旬を以て解氷す奉天より北方ハルビン向け約五十里を距つれば十一月二十九日に列氏零下二十度に達し又奉天に於ては寒氣列氏零下二十六度五に達せしことありといふ。



露國奇聞

露國の風俗習慣は歐洲の他の諸國に比して異つた點が甚だ多い。記者は自身に見て來た譯ではないが露國の事情を記した西洋の書物や雜誌から抄出して玆に其一斑を讀者諸君に紹介しやうと思ふ

左川生

一　結婚

歐米諸國では槪して自由結婚が行はれ、假令多少の拘束は受けるにしても、少くも本人同志が互ひに交際して双方の意氣相投合するに及んで結婚が成立つ風習であるが、露國の結婚は槪して代人同志の談合で纏り始め本人同志が交際すると云ふことは希れで、此邊は寧ろ日本古來の風習と似て居るところがある。

結婚するまでの順序を云つて見れば、玆に先づ壯い男子が妻を持たうとすれば、村中の娘を殘らず詮索して一番氣に適つたのを探定し、それから談判を開く爲めに其娘の兩親へ使者……これは自分の母親か、又は他の中年の婦人……を遣はす。そこで若し先方の兩親が、第一結婚の事、花嫁の持參金の高、其他結婚に關して此方から申込んだ種々の條件を悉く承諾するならば、婿殿は芽出度い通報に接するのであるが、若し娘の兩親が、其結婚に不承諾であつたならば、其場で事は終つて了ひ、娘當人は一切口を入れることは出來ない、いや實際娘へまでは知れないで濟むのである。

談判が首尾よく纏つた場合は、嫁の家から、何時何日より當方へ訪問して來て可いといふことを婿に通知する。すると婿殿は其指定の日に出來得る限り立派に服裝を飾つて訪問する、其時何か見上物を持つて行く總て許嫁中は、婿は嫁の家を音づるゝ度每何か是非見上物を持つて行かねばならぬといふことは昔からの風習で、又其見上物の中一度は必らず肩掛を持つて行か

ねばならぬことになつて居る。だから若し許嫁が極つて祝言までの間が長びけば長びく程、娘の家は貰ふ見上物が澤山出來る道理であるから、自然祝言へ急がぬが、それと反對で婿の方は成るべく早く式を擧げたがる譯になる、あまり長びくのは見上物代が嵩むからたまらない。現に祝言まであまり長びいたが爲めに、婿殿はあはれ文なしになつて、茲に結婚は破談に及んだといふ例が往々ある。尤も斯く破談になる迄に至つた場合は、婿は嫁の家に對しこれまでの贈品の返戻を請求する權利はあるが、實際取還し得ることは甚だ稀である、併し人情は世界何處も同じことで、一回でもそんな惡意で遲延して結局破談に及んだやうな家の娘は跡に結婚の申込み人がなくなることであるから、無闇に遲延するといふことは先づ稀れなことで、大概相當の時機に於て式を濟ませるのである。

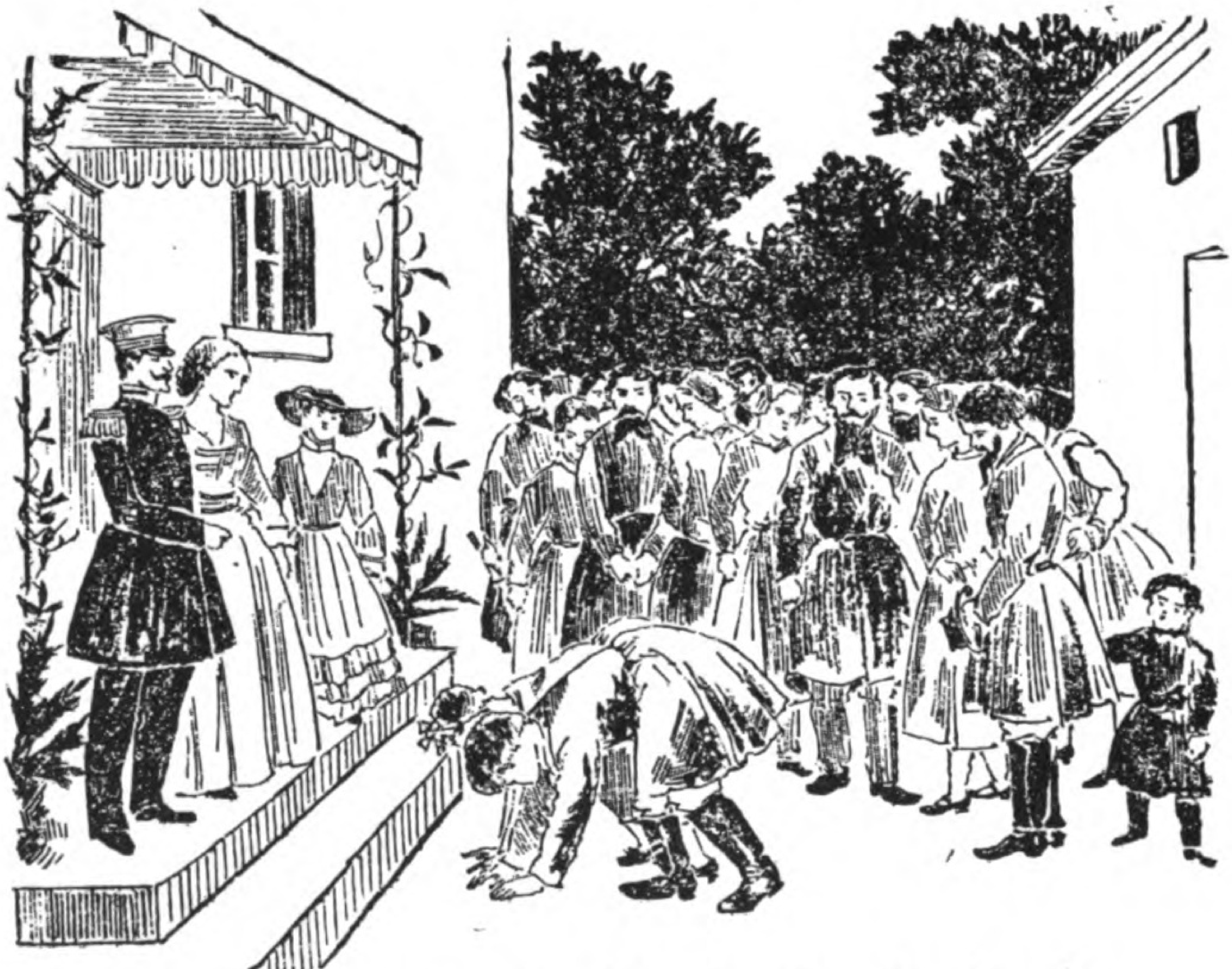
相當の時機とは先づ許嫁後一ヶ月か、遲くも二ヶ月で、吉日を撰んで先づ婚約の式がある。これは双方の家族の面前にて擧げられ、此式がもう事實上祝言と同然で、これによつて新夫婦の間は堅く結合せられてしまひ、何か餘程の重大な事情が無くては、決して離別することは出來ないことになる。婚約式は嫁の家で行はれ、其後程も無く敎會で祝言の式が擧げらるゝのである。

結婚する場合は、嫁の方は麻布と其他世帶品の或一定の量を供へ、婿の方は、第一家屋と或特殊の家具を供給する風習で、斯くして新夫婦は早速世帶を持つのであるが、中には素より其準備が充分に出來ないのが澤山ある。生計向きの好い家では、嫁が婿の襯衣一ダース、毛衣一枚、上靴一足を持つて來ることになつて居る。花嫁自身が麻を紡いで織つて其襯衣を拵へるものとしてあるが、實際は麻布を買つて縫ふのであつて中には出來上つた襯衣を買つて來るのさへ多いのである。

祝言の前一兩日の間件の花嫁の持參品は、特に其爲めに一室を取りきつて其處へ陳べ、敎會の長老はこれに神水を灑いで幸福を祈り、嫁の友達は其品を觀に

來るのである。上流、中流の社會では、祝言の前日の夕方、婿は其獨身友人を招いて饗應する、嫁の方も亦其夜友を招く、これは友達一同が花嫁御に別れの歌を歌ふのである。婿は當夜嫁の客人へ砂糖菓子、餅菓子などの類を贈るのである。

農家では嫁の方の友達等は、結婚の前夕嫁を浴湯へ同伴する風習で、其往きにも返りにも嫁は大聲を發つてさも悲しげに泣くものだと極めてある。或英國の婦人が露國に滯在中、翌日結婚すると云



新夫婦地主の家に伺候す

ふ一人の娘が、腸もちぎる丶やうにさも悲しげな聲をあげてオイ〳〵と泣いて居て、側から其友達等が歌を歌つて頻りに慰さめて居る有樣を見て可憫に堪へられずなり、通り過ぎて泣聲の聞えなくなるまで、心が落着かなかつたが、其夕間もなく件の英國婦人が其娘を慰さめてやらうと思つて一人の友達を伴れて家を訪問し、格別案内も請はずに這入つて見たところが彼の花嫁御はさも樂しさうな貌付をして居て、今の先き泣いた顏とは何う

しても見えず、あまり案に相違して蹔時は詞も出なかつたが、それでも僅かに泣いた當人に相違ないから、其事を尋ねて見ると、娘は笑ひながら

「私の泣き方は上手でせう」

との返答、玆に始めて泣くのは全く狂言的で、決して眞實悲しいのではないと云ふことが判つたとの話がある。尤も中には氣に染まぬ結婚で眞實悲しくて泣くのもないではない。

婚禮の日には、嫁と婿とは教會で相逢ふまでは互ひに顏を合さず、式が畢つて後は、列席者一同嫁の兩親の家へ行き、其處で又儀式ばつた饗應がある。それが濟むと、新夫婦は、これから二人が棲まうといふ家のある者はそれへ移る。翌朝双方の兩親はじめ眷族一同件の新家庭を訪問づれて新夫婦と共に珈琲を飲む。それから双方の兩親の家で宴會があり、其後又幾度も宴會、園遊會などが催されて、時としては婚後の饗宴が一週間以上も續くことがある。これが列席者一同に取りて一方ならぬ苦痛で、此祝ひが濟んでしまふと皆々重荷を卸した心地がするのである。

露西亞全國一般とは云へないが、少くも或地方の農家の間には、婚禮の翌日嫁が其夫に一本の鞭を贈るといふ奇風がある、此鞭は寢床の上に懸け置かれて、時時使用せられるとのこと。して又何に使用せられるかと云ふに、これは夫が妻を鞭つのである！偕老同穴の契りを結ぶと同時に、其最愛の妻君を撻つべき道具が準備せられるといふことが已に隨分不思議に考へられるに、其鞭撻の道具が妻君から御亭主に贈られるとは更に不思議で、而も猶苟くも貞操の妻と云はるべきものは、皆好んで此鞭で撻たるゝを望み、若し撻たれないならば却つて不滿足であるとは、いよ／＼以て奇妙不思議と云はざるを得ない。これも前記の英婦人の話だが、露國で雇つて居た婢婦の一人が緣付くに就て暇を取つたが、其女は婚後まだ日數も經たないに、村の保安課長の許へ行つて、亭主が自分を愛して居ないと云ふことを歎訴した。保安課長が何うしてそれを知つたかと訊くと、件の新婦は

「だつて婚禮してからまだ一度も私を鞭で打たないですもの」

と答へたとのこと。恐らくこれは何か故事因縁のある儀式的の遺習で、眞に鞭撻を加ふる譯ではあるまい。

農家では又新婚の夫婦は祝福の詞を受ける爲めに地主の家に行く風習がある。家の入口まで行くと、地主は其庭へ出て來てこれを歡迎する。此時新夫婦は頭が地に觸れるまで其前に俯伏くが儀式である。外國人から見れば頗ぶる滑稽に考へられる點が多いが、しかし儀式上の馬鹿げた遺習は何國にも多少は存して居るのである。

二　勸工場

聖彼得堡や莫斯科を始め、其他露國の少し大きな市街には、コスチンナ、ドワーと云つて、店舖と勸工場とを混じたやうなものがある。中にも聖彼得堡に在るのは殊に大きく、建物の一連續と云つて宜しいぐらゐで、數街に跨つて居る。建物はすべて二階建になつて居て、下階が販賣所で、二階は倉庫に宛てゝある玆にはありとあらゆる者を賣つて居て、凡そ露國人が日常必要の物は何品と云つてないものはない。金の澤山這入つた財布さへ一つ持つて行けば、丸裸で飛び込んでも、僅か一時間内に、望み通りの服を着、望み通りの寶石を着けて、四頭立ちの馬車に乘り、御者別當に至るまで、此建物の中で雇うて乘つて出ることが出來る、否猶此内に家屋商の出張員も居るから、それに談ずれば如何に立派な建物でも直ぐに手に入れることが出來る位ゐで、繪畫、彫刻、椅子、帳、緞通、世帶具、圖書の類は云はずもあれ其他何品にても玆で調はぬものはないのである。

何故に露國では斯かる大仕掛けの勸工場的市場で品物が賣らるゝかと云ふに、露國人は一般に、刻下の必要に迫るまで物を買はず、いざ必要となると、悠々待つて拵らへさすなどの事は出來ないので。外の國では人が立派な家でも持たうと思ふ場合には、豫め其家具を注文して造らせたり、或は意に適つた品があつた時

に、ボツ〳〵買ひ染める、これに數週乃至數ヶ月を費やすのであるが、露西亞人は、斯ういふ場合には、直ぐに右の市場へ飛び込んで、其處に有合ひの品の中で一時に買揃へてしまふ。又露國人は住宅移轉のことは他の國民より氣變りが早く、例へば富有の人にして、右の勸工場で莫大の金をかけて家具類を買調へて家を持つても、四五ヶ月の後にはもう田舍へ引移るなどのことは往々ある。此場合には家具類一切を又勸工場へ持つて行つて賣れるだけの直段に賣り飛ばす、若し其人が歸つて來るやうになると、又更に買ひかへる。這んな具合で此勸工場は絕えず繁昌するのである。

三　凍つた動物

それから此勸工場の隣りに秣市場と云ふのがある。これは廣やかな方形の場所で、夏期は枯草と家畜類を賣つて居るが、冬期になると、其他に一種の異つた賣物をする、それは凍つた動物である。凍つた動物を賣るといふことは暖國の人には一寸不思議に聞えるが、寒國なる露西亞には普通のことで、これが市內住民の重なる食物になるのである。

其市の有樣は何んなかと云ふに、先づ市場の片側に凍つた羊が積み重ねてある。丁度木で造つた玩弄物の馬かなぞのやうに、いづれも凍り固まつて、生きて居る時のやうに立つて居るのもあれば横になつて居るのもあり又机を引くりかへしたやうに四本の足を空にして仰向けになつて居るのもある。豚は前足を頭上に延べ後足を後ろへ踏み延べた儘で壁へ一列に立てかけてある。鶉、松雞、鷓鴣、其他いろ〳〵の凍つた鳥が一堆に積み上げてあつて、側には又鵞、鴕鳥などが置いてあるが、其長い頸は眞直ぐになつて而も鐵棒のやうに堅く、件の鳥の頭の處を摑まへて振り廻したら大頭棍の代りになつて敵を打倒すことが出來る位、雞は毛を捲つて水へ入れ、上を氷が張り閉ぢるやうにしてある。

又凍り魚は薪のやうに積みあげられ、凍り甘藍は砲彈のやうに轉がつて居る、牛が屠牛小屋の前に突つ立

つて居て、向うへ歩いて行きさうに見えるが、其實體は石のやうに堅く、已に數週間其處に立つて居るのである、牛乳は凍つた塊りにして賣り、其塊りの片隅へ小さな棒片又は絲が豫め凍らせつけてあるから、買手はそれを摑まへてぶら下げるか或ひは紙、手巾の類へ包んで歸るのである。露國では冬季は這んな具合に何でも嚴寒に晒して凍らすことが出來るから誠に調法で國人は之を以て保存の最良法として居る。此凍り市場の殊に奇觀と

凍つた動物の市場



すべきは仔豕を賣る巡行商人で、彼れは此仔豕數匹を、賣物といふよりは寧ろ飾り物のやうに、自分の頸や腰に括つけて場内を賣つて廻るのである

四　寒鼻を落す

寒氣の爲めに指を落すといふことは從來聞く所であるが、露國では冬季に往々鼻を落すことがあるさうな聖彼得堡や莫斯科では、棲み馴れぬ外國人等が、自身の鼻や耳の凍りかけて居るのに氣が付かないで、人から注

意せられることがあるとのこと。其時は鼻や耳の色が非常に白くなつて居るから、他から一見して、判るさうである。尤も斯く人に注意せられるといふことはあまり時々はないことで、其局部に感覺がなくなるから、大槪は自分に氣が付くのであるが、それと氣が付いたら直ぐに鼻なり耳なりを何かで劇しく摩つて血液の循環を早く恢復しないと、終に耳鼻を落すことになるのである。されば寒氣の殊に嚴しい時に外出したら、念の爲め時々鼻や耳を捻つて見るが肝心で、其時若し痛み覺えなかつたら大變、直ぐに必死となつて摩擦しなければ、軈て落ちてしまふ。寒い日の外出は隨分危險な話である。露國人は其用心に皆顏を毛皮で堅く包んで居るが、勿論それで居て時々鼻を捻つて見ねばならぬのである。

口髭のある人は寒中殊に迷惑する、息が直ぐに凍つて髭にくつつくので、時の間に氷で鼻の孔まで塞がるやうになる、頤髭も直ぐに凍り堅まるので、顏を包んだ毛皮と頤髭とが一つに凍り着いて、俄かに顏を振り向けることが出來なくなる場合は往々ある。婦人の面被が鐵網のやうに固まることは時々で、馬は黑でも栗毛でも外部へ出たが最後直ぐに頭から脚まで氷りて蔽はれて、みんな白馬に化してしまふ。馬の息は盛んに蒸發氣を生ずるから、口の邊の毛は殊に早く釘のやうに凍つてしまふのである。

（完）

支那婦人の習俗（下）

在淸國大冶　西澤好子

▲小脚の不便

支那婦人の小脚即ち纏足の衛生上に害あるは前號に記せし如くなるが、其步行の困難にして外出每に轎輿を用ふるの面倒あるのみならず、上流婦人に至ては二人の下婢に倚掛れ、辛ふじて室内を步行するものあり斯る婦人が一生涯に受くる不便不自由は決して尠少にあらざるべし。然れども支那固有の風習を根底より改

良せざる限りは到底此蠻風は止まざるべし、何となれば支那の男子は婦人の美醜を論ずるに方り、顔を先にせずして脚を先にす、若し其脚にして纖細ならんか直に美人の第一資格となすを以てなり。若し之をして心の善惡を以て婦人の美醜を論ずるものに比すれば文明の程度頗る劣るといふべし、北淸地方の一部と南淸の一半とは今日既に其脚を纏縮せずして自然に發達せしむる婦人多し、此等の婦人は自家の用を自巳に辨し得るを以て甚だ便利なるも純粹の支那男子は尙之を忌むの傾向ありといふ、近來日本に留學せし支那人は歸國の後、其妻女を勸誘して纏足を解かしむるものあり、予の交際せし支那婦人にして現に其女子を督して纏足を解けるもの一二に止まらず、日を逐ふて日本化するもの多き傾向あるは、同文同種國の爲に喜ぶべきことならずや、近日小脚に就て一話あり、予の駐在せる近隣に電報局長の住宅あり、一夜樓上の下婢誤て火を失し全家燒失せり、時恰も午前三時の深更にして偶々奧深き房室に住せる婦人一同は、辛ふじて身を免かれしも、數萬の價ある衣服、裝品は一物を止めず灰燼に歸せり、當時若し日本婦人の此家に住居したりとせんか、手近に散在せる、貴重品は大抵自巳の力を以て門外に持運しなるべし、然るに支那婦人は、步行さへ自由ならずして家中の婢僕は唯專心に主の婦人をして怪我なかなしめんことを勤め、又他の物品を救ふに遑あらざりしなり、小脚の禍以て知るべし、殊に支那人の風習として、燒出されたる者を同居せしむれば自家の運氣を害すると稱して親類親友と雖も容易に其家に入らしめざる舊習あるが故に昨日まで、房室奧深く垂れ籠めし貴夫人令孃も、忽ち靑天の下に野宿するの悲運に陷るに至る、予は此際の慘狀を見るに忍びず、主人の許可を得て同局長一家の老母、妻女等合て十四名を自宅に引取り、同居せしめたるに、當時彼等が喜悅の狀は實に言語に盡され難きほどなりし、此急場に於てすら小脚の爲に尙一同は轎子に乘りて來宅せり此一家は現時火災當時の恩誼を記臆すること深く、爾來予の談話を聞く每に直に不便なる支那風を止て、日

本風に改め來れり、數人の娘は已に纏足を解けり、火災の當時を語る每に小脚の禍を悔ひ感慨禁ずる能はざるの觀ありき、獨り此の一家のみならず、當時此の火災の慘狀を目擊せし支那婦人は兒女の脚の以後必ず天然足たらざるべからざるを說けるに至れり。

△結婚式の奇習

支那に於ける結婚の成立は一種の人身賣買に類せり、男子は先づ女子の父兄に相當の金錢を贈りて女子の結婚上必要なる裝飾品器具一切を買入れしむるものなり固より婚人の門地と容貌の如何とに依りて金額に多少の差あれども、要之男子が女子を娶り一家を成さんと欲せば、先づ多額の金員を準備せざるべからず、されば支那の商人の多くは若年にして外國に出稼ぎをなし數年の勞苦を積み其間に貯蓄せる金錢を携へ歸國の後相當なる女子を買て合巹の式を行ふを非常の名譽となせり、少くも、貯蓄金の一半は婚姻費に宛て其半額は一家を成立せる後の資に供するものなり、婚姻成立の順序は多少日本風と異なるも媒妁人相互の間を周旋し又結納の取り換はし等の風習は日本と類似する點多し扨これより婚姻祝日の儀式の大畧を述べんに、當日は早朝より爆竹花火を打揚げ、午前十一時頃に至て花嫁を乘せたる美麗なる轎子を前後に數多の花旗を樹立て前後左右より鼓笛の音樂に囃立てられ、花婿の宅に入ること恰も祭禮の花車の如し、此轎子の式場に近くや婿は轎に向て敬禮を行ひ轎戶を破りて花嫁の手を取りて席に進み、共に三拜九拜の禮を爲すなり、是れ祖先に對し又天地四方に對する敬禮なりとす、此儀式を終れば新婚の夫婦は洞房に入り、媒妁人に依て三々九度の杯を爲すものなり、此間花嫁の面上には赤布を蔽れて自分の婿は勿論何人にも其顏貌を見らるゝことなし、此式終れば更に式場に出て父母兄弟姉妹親戚緣者知己に向て二人相併んで最敬禮を行ふものとす、午後六時別室に於て宴を開き來客を饗應す、盛宴滿足に果つれば、來客一同は洞房に入りて自由勝手に新花嫁の美醜を品評す、此時は既に顏面の赤布を撤去せるを以

て、銘酊したる來客は殊更に手に燭を携へ花嫁の顔前近く接觸して或は手脚を摩し、或は面上を摩し、殆んど見るに忍びざる滑稽痴態を演して花嫁を批評す、此時若し花嫁にして眼を開き又は笑を洩す等の事あらば一生の大耻辱大瑕瑾となるといふ、實に奇習といふべし、故に唯手を垂れ眼を閉ぢ靜立して侍婢の爲すが儘になり居るを要するなり、（三日間は何人と雖とも花嫁を自由に見るを得べし、）斯くて三日を經過せば新夫人は奥深く住居して侍婢と雖とも容易にその姿を見るを得ざるものなり、新婚當時、何故に斯く來客に暴狀を恣にせしむるかと云ふに新婦は一度受けたる此苦痛を十分に記臆して二度結婚するものに在らざることを了解せしむるにありと云ふ。支那人は多く幼年の兒女をして許嫁の約束を結ぶの習慣あり結婚の當日男女始めて顔を見合し双方を認識するの風俗にして、十數年間許嫁の男女も其顔を知らざるもの多數なり、況んや其性質をや、是に至て支那婚儀は全く父兄の命令にして、厭制的に成立せるなのなるを知るべし。

▲產婦と生兒

此等に關する風俗は各地方に依て差異あるは固よりなれども、予の目擊せしもの丶大概をいはんに、支那と西洋と同じく懷妊の婦人五月に達するも、顯帶を結ぶことなし、妊娠中は生薑、芥子、蕃椒等の如き興奮質を含有するものを食ふを忌む、產後又然り、油質を嫌忌し、鯉鮒の如きものを好んで食せしむ、產時は通常二人の產婆前後を擁するを例とす、生兒には出產後一種の甘味藥、苦味藥、甘草、黃連等の液汁を飮ましむるの習慣あり、本邦のマクリを飮ますと同樣なり、三日目は出產の賀式を行ひ、命名には日限を附せす、自由に一任す、通常祖先の名に準據して一箇の名を附與し、更に父兄に依りて一個を命名す、是即呼名なるものなり、產婦は三十日に至て始て臥床を出るを得、されど日本の如き產神參り等の儀式はなし、又三月節句の雛人形、五月端午の人形、鯉幟等の式もなし、されど誕生日の祝賀は他國に比して最も鄭重なり、たと

へば一家數十人の家族を集めたる所にも、各人の誕生日には必ず相應の儀式を行ひ、客を請て宴を開き、決して等閑に附することなし。

▲醫藥の缺乏

支那に於ける醫藥の缺乏は甚しきものにて人一度病魔の襲ふ處となれば、神佛を念じ、偶像を禮拜し、卜筮呪咀等に依て病氣の平癒を得んと欲するもの多し、偶偶醫師を招くも其の醫は古書に據りて僅かに醫法の二三を暗記したる讀書人にして眞正の治療法を解するものにあらず、藥も又草根木皮にして其煎液を呑ましむるのみ、多數の人は名も知れざる地方の賣藥を服し、病若し危篤に瀕するに及んでは、忽ち狼狽し一家親族相集りて喧囂紛紜を極め、唯符咀を是事とするのみ、殊に婦人の病氣に至ては一般に醫療を受くるを嫌忌するものから、多くは治癒すべからざるに至つて死す、予の親交せる支那婦人中病めるものある毎に其病源の明瞭なるものを選んで洋藥を與ふるに効能の驚くべきものあり、是れ一は神經の作用に依ると雖ども又確かに洋藥の効力草根木皮の比にあらざる所以なるべし、遠近之を聞傳へ藥を乞ふもの前後數百人に及べり、開業醫の渡清は目下の急務なり。

▲婦人の娯樂

婦人の多くは室內に籠居するを以て、談笑の外娯樂の記すべきもの少し、稍風流の女子に至ては詩を賦し、琴を彈じ、横笛を弄するものあれども、これ極て少數なり、正月の如き期節に在ては、一家の婦人悉く一室に集り錢を賭て博奕を打つを最上の遊樂とせり、博奕の器具は種々あれども、日本の花札の如きもの廣く行はれつゝあり、骰子を投じて賭博をなすは全く我邦と同一なり、されど是れを婦人の娯樂としては驚くべし又室外の遊びとしては唯觀劇の一事あるのみ、近來支那婦人も日本化して多少野外に出るものあるに至れるは、喜ばし。

▲正月の奇觀

支那に在ては士農工商、上下を通じて元旦より十五日まで半ケ月の間は、門戸を閉て室内に遊ぶの風習あるも、十五日後に至れば、地方村落の婦女は一般に晴天を選むで各所を見物するの奇俗あり、殊に十五日一日は女子の正月と稱へ、多數の婦人盛んに裝ひ、老若一同に各官衙官宅等を見物す、此の日は如何なる嚴重の公局と雖ども、皆開放して自由に觀覧せしむるの風なり、而して縣知事の夫人などは、此の日充分粧粉盛裝し、椅子に倚りて見物の婦人より禮拜を受け、就中老年の婦人は、此の日一日は例の年長者として自由勝手を恣にするなり。或婦人の如きは、自己の身體に異狀ある時の治療法として、貴婦人の身體を摩擦し、其手を以て自己の身體中必要なる部分を摩す、又其貴婦人の小脚なるを見て娘の脚をして之に假肖しめんが爲、其脚を摩する者あり、平素官民、上下の懸隔甚しき支那人中に此習俗ある又一奇と云ふべし。（完）

東京市中 細民の生活

日露戰爭以來世上一般不景氣の歎聲を聞き隨て細民生活の困難著大なるべしとの事なりしが近者內務省地方局にて調査せし處ろによれば粗々這般の事情を悉し現下の情況憫れむべきものあり即ち左に之を記す

東京市内に於ける細民現時の狀態一般取調の爲先づ四谷、下谷、淺草の三警察署に就き其大體の狀況を聞き更に四谷區鮫ケ橋萬年町山伏町等の實地に就き調査したるに彼等細民が不景氣を嘆し生計の困難を訴ふるは今日に始まりたることにあらざるも時局の及ぼせる影響亦少しとせず其の影響を蒙れるもの獨り細民のみに止らず軍需用品に關係なき一般商工業皆不景氣を歎ぜざるはなし、細民の狀態を調査するには先づ質屋に就くを最良の方法とす蓋し質屋は細民に取りては唯一の金融機關なればなり又料理店、待合茶屋、遊覽所等の盛衰は多くの場合に於て世況調査の材料たるものなりとす。

▲細民陳述の一斑

今回實地に就き調査したるに、彼等の語る所は實に辭令に巧なるものか、或は他に意ありて之れを言ふものなるか、形容に過ぎ恰も救助を乞ふが如きの觀あるは人をして不快否寧ろ奇異の感を抱かしむ、是等は都會にして始めて之れあるべく、地方にては見る能はざる所なるべし。

▲質屋の取扱數

質屋は貧民窟の稱ある鮫ヶ橋にて大小二戸、山伏町萬年町にて各小一戸に就き調査したる昨年十月頃の取扱件數に比すれば四割乃至五割の減少なり、鮫ヶ橋にては不景氣の爲め營業停止中のものありとの事を聞き、之を調べしに實際取扱件數の著しく減少せるのみにて未だ停止するに至らざりし、何故に減少するかと問へば、何れも質草なきが爲なりと答ふ。

▲質屋と細民

質屋の繁昌するは不景氣の時にあらずして好景氣の時なりとは、奇異の現象なるが如きも、不景氣なれば第一質草即ち質入すべき物の盡くると第二一旦質入を爲すときは、他日之れを受出し得べきやとの懸念あると第三質草と爲して高利を拂はんよりも、賣却する方利益なる等の事由に依て、質物の出入減少す、之に反して好景氣なる時は、一稼すれば直に受出し得べき見込あると、職業を求むるに困難を感せざる爲め、收入を得るに從て之を飲食の費用、又は賭博の資に支消し又は衣服器具等を求め若し不足を生ずるときは直に質屋に赴く、斯かる時期には一日中同一物件の質屋に出入すること三度に及ぶは敢て珍しからず、而して彼等細民の困難とする所は一般の不景氣よりも雨天の打續くに在り、雨天は實に彼等の大打擊なり今事の序に質屋に關する事項を記さんに。

▲質屋の種類

質草は衣服に限るものと日用家具類をも質物と爲すを許したるものとあるは、一般の質屋と異なるなし、只其異なる所は其物品の劣等なるの一事なり、家具類としては土瓶、火鉢、飯櫃(たまには飯粒の殘りたるあり)ヤブタイ(之は自家用より新物多し)等より下駄傘の類亦珍しからず、道具類にては鉋、鋸、鑿鏝、鶴嘴等最も多く衣服類にては半纏、前掛、パッチズンドウ等あり、稍々高價なるものは子供又は女物の衣服なり。

▲質物出入の時期

質物の出入最も多き時期は一年の中にては一、二兩月にして、少きは夏季七八月頃なりと一ト月の中にては月初三日最も多く二十四五日頃少なく、一日中にては午前八九時午後七時乃至九時頃最も多く又雨天の日に少く晴天の日に多しと云ふ。

▲貸出件數、金額

貸出金額は平常一日五十件にて、三四十圓のもの今日にては二十七八件より三十件にて其金額二十圓内外に

過ぎざるものあり、而して貸出の多數なるは一件三四十錢より六七十錢にして、低きは三錢五錢より七八錢十錢等あり、其質草は傘一本、鉋又は鋸一挺、前掛一枚等なりし、高きは一圓五十錢より二圓に止まり一件否一度に十圓に及ぶものは一箇年一二回に止まれるもの多し、彼等は何の用途に斯かる微細の借金を爲すかと云ふに

▲借金の使途

偶には營業の資と爲すものあるべく、或は必要品購入の爲なるべく、或は家賃納附の爲なるべく、其他種々雜多の支途あるべしと雖、其多くは賭博の資に供すると、飮食費寧ろ食餌を求むるの資と爲すもの多しと云ふ、打つ飮む食ふとは彼等細民生活の狀態を言ひしものにて「宵越の金を遣はぬ」とは彼等の經濟主義(?)を言ひ表はしたるものなり、某質屋の主婦曰く、此處等の人は餘分の收入あるも貯蓄して他日の備へ爲すと云ふが如き念慮なく、金有れば有る丈け遣ひ果さねば氣の濟まざるか或は不斷不足勝なるが爲か少し、景氣よければ之れ見よがしに散財す、何時死すも思殘すことなかるべきも、若し三日も雨天續かば忽ち窮迫す、彼等は自ら求めて貧乏するものなりとは實に至言と云ふべし

▲利子

質屋の利子は組合の申合に依り、市中略一樣なれども其相互の契約に依り多少の融通を附くることゝせり、其規定は

貸出十圓以上	一ヶ月	百分の二、〇
同　十圓未滿	同	百分の二、五
同　五圓同	同	百分の三、〇
同　一圓未滿	同	百分の四、〇
同　五十錢以下	同	二錢（利子と云はずして手數料と云ふ）
同　二十五錢以下同		一錢（同）

にして金額の減少に從ひ利率は高上し、二十五錢以下は何程にても一錢、五十錢以下は何程にても二錢なり一日にても一時間にても、一ヶ月分の利子を徵するを以て一日三回出入すれば三ヶ月分を支拂はざるべからず。

▲流質の期限

質草の種類は地方に依りて異なれり、衣服類は長期にして四ヶ月、六ヶ月等あり道具類は短期にして甚しきは十五日以內としたるあり、然れども多くの質屋は期限後直に流質とせず、舊來の慣行に依り翌月三日迄の猶豫を爲す、質主此三日內に質物を受出すか又は利子を支拂ひ、新規契約と爲すべく、若し此三日を經過す

るも質屋は其目的金錢を貸與して利殖するに在れば、「跳」りとて二重の利子を支拂ふときは德義上質物の受出を承諾するの例なり、即ち月初三日は質主に取りては恩日とも稱すべき大切の時期にして質物の出入最多きは此特典あるが爲なり然れども一割乃至三割、流質となると云ふ。

▲不景氣の一現象

として一面乞食の徘徊、竊盜等の警察事項の增加したると、一面木賃宿々泊人の減少したることとなり、四谷警察署にても昨年に比して犯罪事項は增加せり、其竊盜の如きは職業的に之を行ふ者よりも掏摸、搔浚、明巢窺等の小竊盜多しと云へり、只下谷警察署にては竊盜被告の數は昨年四月に於ける一日平均八件三分のもの本年四月一日平均八件二分六厘に減少せりと云ふ。

▲軍人家族慰問

警察署にては毎月一回出征軍人家族を慰問することゝし、尉官以上の留守宅には署長又は警部往訪し下士以下には部長をして訪問せしむ、一家の柱石たるべきものが出軍したることゝて下級の社會には種々の事情を引起すあり、現に下谷にては姑嫁の間不和を來し、嫁は鐵道線路に伏して轢死を企てんとしたるものありしと云ふ。

▲大工、左官、家根屋

時局の影響を蒙れるものゝ内大工、左官、家根屋の如きは最も甚しく、隨て之に附隨する手傳人足は自然其職業を失ひたるもの少からず、鮫ヶ橋方面にては東宮御所御造營前田家建築工事緊縮の爲め其餘響を蒙れるもの少なしとせず。

▲湯屋、理髮店、

女髮結、湯屋理髮店は四谷の如き民屋を兵士の宿舍に充てられたる地方は却つて繁昌したるも、下谷の如きは大に收入を減じ殊に女髮結は最も著しく約四割の減收なりと、

▲桶屋

桶職の收入を減じたるは水道の布設と、バケツの流行に依り影響を蒙りたるものにて時局の爲めにあらず。

▲萬年町の大工、左官

萬年町にては大工にして仕事なきが爲め、土工人夫と爲りたるものあり、左官にして一月以來百餘日も仕事なく僅かに日傭稼にて生活を營めるものあり。

▲萬年町の機業工女

又た同町にては機業工女（コールテン織）にして時局

の爲め仕事なく偶々之れあるも九十錢もの卅五錢に下落し迚も生活出來ずとて休み居たるものあり。

▲洋傘張替

又或る者は洋傘張替職なるが仕事なきが爲め、新聞號外賣を始めたるも「オマワリサンガヤカマシイカラ休ンデ居ル」と語りし。

▲業務の轉換

下谷にてはコールテン其他事業不振の機業者は需用多き繃帶材料、軍國眞田織等を始めたるに依り、目下盛なるも永續すべきやは疑問なりと云へり。

▲上野近傍の不景氣

又同區にては軍隊需用品たる罐詰福神漬製造、莫大小、軍服染上等は盛況なるも、一般の商工業は何れも不景氣なり、殊に上野近傍は地方より出京者大に減少したる爲め、旅館の不景氣は一層甚しく隨つて地方向土産物商公園茶店料理店飲食店の不景氣又甚しと云へり。

▲空瓶

空瓶の減少は正しく時局の爲め世人節約の結果にして之を商ふ細民の困難を増す原因を爲せり。

▲紙屑拾、紙屑買、ボロ買、コワレ買

之等は淸潔法施行の爲一時に不用品の出物ありて一時に利得ありしも後續せざるが爲め困難すと。

▲職業紹介

下谷區役所にては軍人家族の窮困者には職業を紹介せんとて目下福神漬製造業者と交渉中なり、曾て仕事なき一人の大工を砲兵工廠に世話したるに一日僅かに十三錢しか支給せざる故生計出來ずとて歸來れり、軍人蚊帳は相當の收益あるべき見込なるを以て之に周旋せんと欲すと云へり。

▲車夫

細民中最多數なるは車夫にして人力車夫も荷車輓も共に困難せり荷車稅は時局の爲め貨物の運送減少したるに依り影響を受くること甚しく人力車夫は世人節約の結果と云はんよりも電車開通の爲めに大打擊を受けたるものなり車夫問題は電車開通前に於て解決すべきものなるが彼等は其業体が不規律なるが爲めに、身を持ち崩すのみならず、既に身を持ち崩したるもの多數なれば、他の規律的否普通の業務に移さしむるは頗る困難にして其問題の電車開通前より起れるに係はらず、今日迄適當の方法を見出さざる所以なるべし電車開通前人力車夫下等の者にて一日五十錢の收入を易しとせる

もの今は十五六錢を得るも容易ならずと云ふ、斯の如き有樣なれば此の際車夫の數を增加するは彼等をして益々困難に陷らしむるものなるを以て、下谷警察署にては、車夫の資格調査を嚴格に勵行せるに拘はらず、從前より收入甚だしく減額せるを知りつゝも、尙ほ新規出願するもの多きは一見奇異なるが如き觀あるも、事の實際は大工、左官等にして本年一月以來仕事なきが爲め手を空くして居らんよりも、車夫となりて多少の收入を得んと欲するに外ならずと云へり。

▲木賃宿　淺草區にては木賃宿四十五戶あり昨年十月には一日百二三十人の宿泊者ありしも開戰後は一日八十人に減じたり、是れ時局の關係にもよるべしと雖、不景氣の一現象なり。

●戰地へ郵便を出す心得

我出征軍人軍屬に宛ての郵便は陸軍には野戰郵便局軍艦御用船には艦船郵便局ありて夫々配達の手續あれども宛名の書方違ひ又は不足税などありては遲るゝ處あり折角の心づくしも屆かぬ事あれば戰地への手紙其他は充分左の手續に違はぬ樣注意せらる可し

▲宛名　は肝心なり左の如く陸軍ならば所屬の隊號を肩の上には步兵一等卒とか騎兵少尉とか記し海軍ならば乘組艦名御用船も同じく船名を

出征第何師團何兵何聯隊第何中隊
第何小隊
（兵種又は官名）　何　某　殿
切手
軍事郵便

冠番にし艦番は陸軍と同じ樣に記す可し、其上軍事郵便と書入れする事も切手を普通の通り貼る事も忘る可からず何方も疎にすれば遲くなるか事に依れば徒に戻つて來るかも知れねばなり▲種類　軍事郵便にて出せる物と出せぬものあり出せるものは一、書狀、二、端書（絵葉書にてもよし）三、新聞なれども軍艦御用船乘組の人又は京城仁川開城馬山釜山に駐在する人にだけは小包も書籍も寫眞も差出し得可し▲例外　朝鮮に駐在する人に宛て

軍艦何々乘組
（兵種又は官名）　何　某　殿
切手
軍事郵便

は普通郵便局の設ある處あれば內地と同じく軍事郵便となさず何種の郵便も差出し得可く爲替も組む事を得可し、去れども其宿所に受信人の不在なりし時は軍事郵便物となし得る物は移轉先へ送らる可きも其外は戻さるゝ筈なり其局名を揭ぐれば

京城、仁川、鎭南浦、平壤、木浦、群山、元山、釜山、馬山、永登浦、開城、海州、公州、江京、全州、大邱、密陽、統營、濟州島、平澤、水原、於青島、龍山、鳥致院、草梁、花開洞、鬱陵島、倭館、金泉、永同、太田

▲爲換　は當分の內は野戰郵便局にても艦船郵便局にても拂渡をなさぬ定めなれば爲換はくめず、戰地に在る人には金は送れぬ事と知る可し。

博愛丸に對する感謝

（近衛騎兵栗原定吉氏談）

近衛騎兵一等卒勳八等栗原定吉氏は栃木縣安蘇郡新合村閑馬の人、今春二月下旬後備を以て征途に上り、定州に義州に滿洲各地に斥候の任務を勤め進んで北分水嶺方面の敵狀を偵察に向ひたる途中、敵の二十騎に遭遇して之と格鬪し、爲めに打撲傷を蒙りたる名譽の負傷者なるが、博愛丸に依つて後送せられ今や東京陸軍豫備病院にあり、氏は博愛丸の看護に對して感謝の意を致すこと最も厚く、乃ち本誌の爲に乘船當時の情況を語らる、其の談左の如し。

小兵は六月十五日斥候の任務を帶びて他の二騎と共に雙馬集を出發し、北分水嶺街道の谷を越ね沼を渉ると云ふやうな惡路を前進致しましたが、本隊を距る約三里餘の地點に參りました時、不意に敵の二十敵に遭遇して之に包圍れましたので、小兵等三騎は必死の勇を揮つて敵中に切込みました、味方は日本刀、敵は長槍を扱いて向つて來る、小兵は其の眞先に進んで來た奴を美事に肩先から斬下したので御在ました、そこで無二無三に斬り捲くり、漸くの事で血路を開き、一目散に驅抜けましたが、敵は執念く追ひ來つて銃の臺尻を小兵の頭の腦天に割れよと許り撃ち下したので御在ました、其の時は氣が張つて居たものでしたから何ともありませんでしたが、本隊に歸り着いて味方の兵を見るや否や、性氣を失つて昏倒して了ひました、暫くして昏倒より蘇生するにはしましたが、何しろヒドク打撲されたので腦震盪を起し、其が爲め記臆力を喪失つて天にあるのか地にあるのかをも辨別出來ないやうに成りました、醫官の申すには二十四時間以內に常態に快復しなければ生命も覺束ない、よし生命は助かつても生涯馬鹿になると言つて殊の外心配して下すつた相です、斯ういふ譯で小兵の負傷は外から見ては何とも無いのですが打撲傷の腦震盪といへば容易ならぬ、手一本脚一本失つたにも優さる重ゝであるといふので、小生が飽くまで後送を拒んだにも拘はらず、遂に六月〇〇日博愛丸に搭乘を命ぜられて內地に送らるゝ事と成りました、で六月〇〇日宇品に着き、一と先づ廣島病院に收容され、そこ



患者に食物を運ぶ

より滊車にて東京に參り、七月九日まで澁谷の赤十字社病院に居り、九日より此の麹町の豫備病院に收容さるゝことゝ成つたので御在ます、然るに幸ひに手厚い醫療と看護を受けまして、今は既う殆ど負傷前の健康體に復し記臆力も確かになりましたから、早く醫官の證明を得て、再び戰地に赴きたいと存じ、其の日の來るを待つて居ります。

扨て小兵が今御話したいと思ひますのは、小兵が海上に於て世話に成つた日本赤十字社の病院船博愛丸の事で御在ます、博愛丸は御承知の如く、弘濟丸と相並んで我が赤十字社の海上に於ける救護機關で、北清時變の際も太沽と宇品の間を七回往復致し、内外の傷病兵二千七百人を輸送したと云ふ名譽の船でありますが、今度の戰爭にも仁川の海戰以來、ヽ絶えず戰地と内地の間を往返して傷病兵の後送に從事致して居ります、小兵等が搭乘致したのは丁度其の入航滲目でありましたが、六月〇〇日に安東縣を發して同月〇〇日宇品に着するまで、凡そ一週間許の間といふもの船内に於て小兵共傷病兵が受けた手厚い療養、殊に其の懇篤を極め親切を盡した看護婦方の介抱に對しては、小兵共一同の深く感謝する所で御在ます、因て聊か乘船中小兵の心に感じた事を御話爲やうと思ひます。

先づ博愛丸の構造を御話致すと、二本の檣と三層の甲板を有し、長さ三百十二呎の巾三十八呎、總噸數は二千六百噸からあつて、最も新しい式に據て造られたものださうです、而して船内を見ると、將校病室、下士卒病室、傳染病室、精神病室、手術室、藥劑室、顯微鏡室、X光線室屍室、製氷機械室、消毒室、看護人室、看護婦室等、苟くも手術看護に必要なる設備は悉く整つて居つて、宛かも陸上の病院を其の儘海上に浮べた觀があるのです、小兵が便乘致しました時は同乘の傷病者が三百人から收容されて居りましたが、此等に對する設備以上の如く、又た其の看護に於きましても、些の遺憾も些の不足をも感ぜしめぬまでに夫は夫は能く行渡つて居るので御在ます。

そこで此の船に乘組んで居らるゝ役員を擧げると、理事の吉川文雄氏醫長の岩井禎三氏の下に、三人の醫員、一人の調劑員、二人の調劑員補二人の書記、二人の看護人長、二十人の看護人が居り、尚ほ看護婦の方では看護婦長の

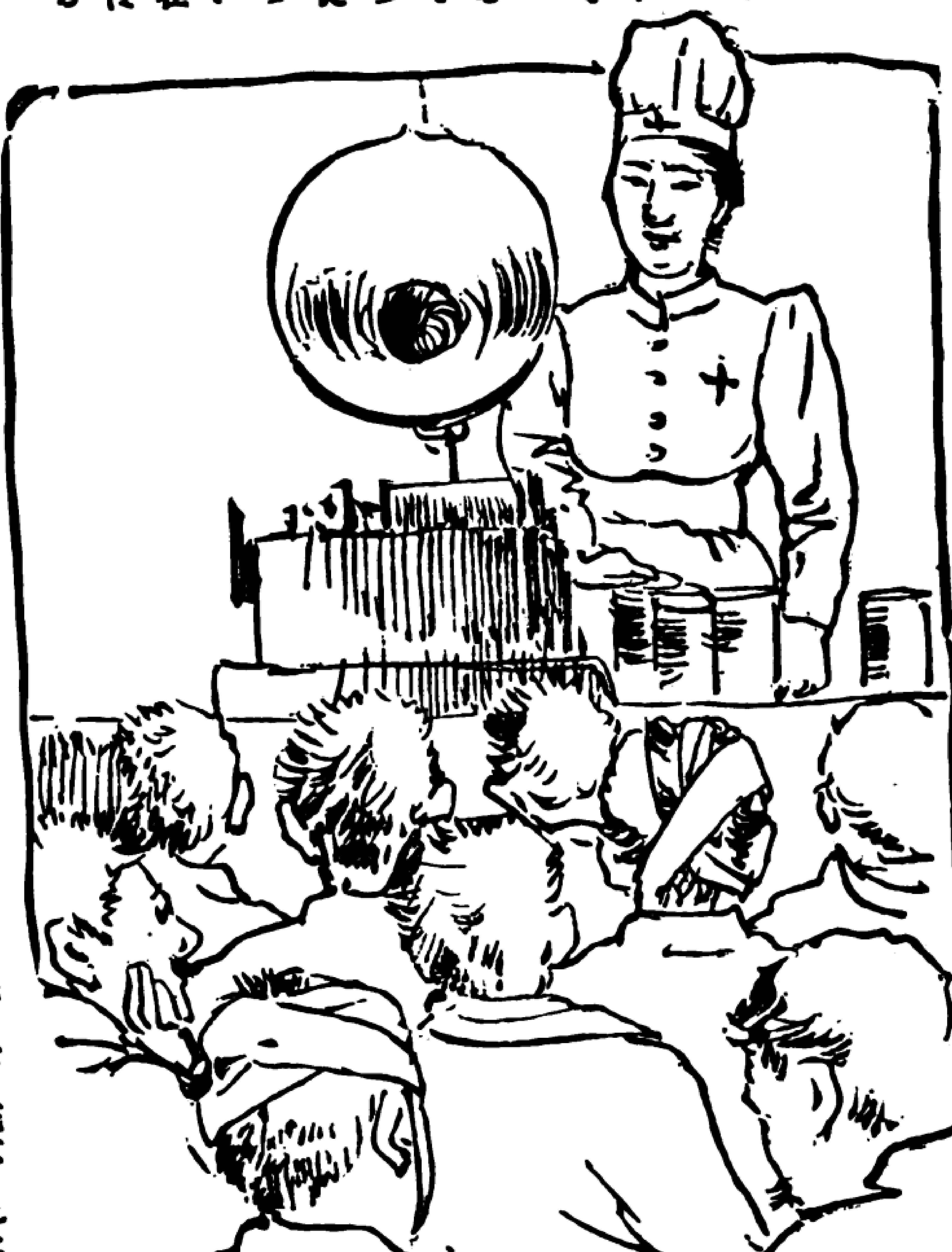
周防ちやう子　　稲田りき子

を初め、其の麾下に看護婦として、次の二十人が乘組で居られます、名前を書止めて參りましたから、御覽下さい。

村瀬露　　渡邊よし　　秋元みち
山崎きく　　石川しづ　　由真じゆ
石川たき　　田中たれ　　高木つめ
香川みどり　　大橋ゆう　　青井てつ
瀬江たか　　小原竹代　　玉木ふい
芝崎はる　　小串眞　　加藤いそ
原ひでわ　　鈴木けい

茲に一寸御話して置きたいのは、看護婦長の事で、此の周防暢子と仰言る方は、御年の頃三十六七、氣高い氣品を備へた方で、何處となく嚴しく思はるゝお人柄です、此の婦人は關西に於て有名な神戸英和女學校の出身で、廿五年より廿七年まで赤十字社に於て看護婦の教科を御修業になり、卒業后は恰も日清戰役の際とて廣島病院に在て捕虜患者の看護に從ひ、北清時變の節は博愛丸の看護婦長として戰地に赴き、麾下の看護婦と共に内外人併せて千有餘の傷病兵を看護された、其功で勳七等に敍せられ寶冠章を頂戴し、佛國政府よりも何とかいふ六ヶ敷い名の勳章を贈られたといふことです、次に最う一人の稲田のぶ子と申さるゝ方に

就ては仔細詳しい御履歴を伺はずに了ひましたが、此の方も周防さんに劣らぬ程の御經歷ある方だ相で、矢張り勳七等寶冠章を持つて被在います、聞けば婦人にして勳七等を持つて居らるゝは此の二人限だといふことですが、斯の如く堂々たる男子も容易には得られぬ名譽の勳章をかよわい婦人の胸間に佩びられるといふことは誠に類稀なる事で榮譽と言はればなりません。


患者に蓄音機を聞かす

それから陛下の看護婦方に於きましても孰れも、赤十字社に於て正則の教育を受け、三年四月間の修業年限を專心に勉強した人達のみで、而も其の内より更に優等なるものを拔擢して此の海上勤務に從事せしめた程丈あつて謂はゞ看護婦の粹と言つても宜しいのですから、彼の坊間に散在する出來星の看護婦先生とは雲泥の相違で、最も高尚なる意味に於ける看護婦として、淸く麗しき德操と理想とを持つて、最も獻身的に自己の職務を遂行して居られます、而して天使にも譬へつべき窈窕たる妙齡の身を以て、甲板に又た病室に、數多の傷病兵を介抱し、慰諭して、其の本分を遺憾なく發揮して居らるゝには、殆ど敬服の外は無いのです。

世には二百米突にも足らぬ大川の渡場を一度渡して貰ふにも眩暈を催すといふ樣な脆弱な婦人があるといふではありませぬか、然るに小兵は今ま此の博愛丸の船室に於て、怒濤に抗し狂瀾に闘つて、時に砲彈の危險を犯して數千哩外の海洋を幾度となく航海して居る所の此等勇敢なる婦人の健康を見井びに傷病患者を苦痛より救ふ慈愛の働を見て、一種言ひ知らぬ感に打たれたので御在ました、而も此の人達は眩暈は愚か頭痛一つ煩つたこともなく、航海每に益益健康の度を加へるといふことですが、唯だ御氣の毒なのは鈴木けい子と云ふ婦人で、尤も元來が餘り健康体では無かつた相ですが、二回目の航海を致す頃病氣を起して、海上勤務より退き、遂に廣島縣立病院に於て死亡されたといふことです、併し此の婦人の死は小兵共が戰場にて名譽の戰死を遂げたと等しく、天晴其の職務に殉じたのですから、同孃の名譽の爲めに特に何うか御記載を願ひます。

扨て是より此の看護婦達の働を申上ぐると、實によく行屆いたもので、寢起の世話から、病衣の着換から、食餌の給仕から、藥劑の服用から、繃帶の交換から、尿屎の世話から、女房にも出來まいと思ふ程の面倒を敢て意とせずして見て呉れるので御在ます、尙ほ又た病室內を怠らず見廻つて、枕頭の亂雜を仕末しながら、氣分を聞いて呉れたり　趣味ある書籍を讀んで呉れたり手紙の代筆をして呉れたり、又た蓄音器を聞かして呉れたり、其他種々の方法を以て精神的に慰籍して呉れますので、今まで砲煙彈雨の野に氣のみ荒立つて居た身は此時恰かも靄々たる同情の雲に包まれて、天國に遊ぶの感があるので御座ます。

小兵達の日課は、六時に目を覺まし洗面所へ參ります、尤も重傷者で手足の自由を失つた者には、寢臺の側に洗面器を持て來て丁寧に洗つて呉れます其から七時の飯時になると、米飯十人前を一つの箱に詰め、高い梯段を昇つたり降りたりして之を料理場より病室に持運んで、銘々の枕頭に分配致します、普通の患者には並の米食を給しますが、患者によつては粥を丼鉢に盛つて出します、それより服藥を勸告し、繃帶を交換し、十時に牛乳、十二時に中食を供し、三時に牛乳、五時に夕食午前の通りに濟ませ、夜涼を甲板上に納め、九時を聞いて眠に就くといふことに成て居ります、其の間醫員の來つて診斷することあれば、襟に二個の櫻の徽章ある看護婦長は病床日誌を捧ぐるやうに持ち、他の一看護婦筆硯を携へてその側に佇立し、醫員の記載に便せしめるので御在ます、此時の看護婦の態度と申すものは眞に端嚴なるもので、清爽なる容姿、清潔なる白衣、我等の眼には女神の樣に見ゆるので御在ます。



看護婦甲板を洒掃す

其柄患者が便所に立つ事あれば其の都度清水て洗ひ流して了ひますから、始終清潔を保ち、氣味氣味として居るので御在ます、而して体を便所に運べない者には便器を與へて親切に世話をして遣りま

す。船内の狹い所でよく斯う取廻されたものと、ほと〳〵感心致すので御在ます、而して又た早晩大氣の溫度の冷却する時分には、屹度病室内を見廻つて、知らずによく眠て居る患者の體に毛布を掛け與へて寢冷をせぬやうに氣を付け、或は又た重傷患者の爲めに轉寄の出來ないやうに時々躰位を換へて壓迫を受くる部分に綿を敷いて遣るなど、何から何まで至れり盡せりで、小兵は玆に始めて痒い所に手の屆くといふ言の眞意義を知つたので御座います。

其柄小兵の實に感服に堪へない事がある、其は看護婦の誰れもが看護の術に長じたる以外に、一種犯す可からさる氣品を備へて、宛ら赤子の母親に於けるが如く、傷病者が自から心服して居る事です、或患者が醫員に向つて頑强に服藥を拒んだ時でした、一人の看護婦が來て「貴郞それでは體の爲に宜くありませぬ、敵の彈丸に恐れぬ勇士が味方の藥に恐れることがありますか」と諭した所彼は此一語にいたく感動して目を塞つて呑み干して了ひました、



書を讀んで患者を慰む

それから或る二三の兵士が怪しからん噂をして居た時でした、妙齡なる看護婦が這入つて來て「そんな不潔な話を此所でなさるものではありませぬ、お止しなさいましよ」と言ふと、物に襲はれた如く彼等は素直に默して了つた、萬事が總てコンナ風で、其の唇頭より洩るゝ慰籍の語、訓戒の辭には大の男が心から服從して了ふので御在ます是れ實に人格の高い證據であります。

斯くの如く敬愛すべき看護婦に依つて手厚く看護された我等は、永く博愛丸の名を銘記して、其の厚意を深く感謝致すので御座います。

▲マツギー夫人の乘船　マツギー夫人は去月三十一日病院船弘濟丸に乘組み一二航海病院船の勤務に服するの序を以て戰地二三兵站病院及患者集合所の勤務參觀をなすことになりたりと

彙報

女子商業學校卒業式

婦人をして實際的ならしめんには實務を敎ゆるに如かじ、我國の前途を考へ、我國の將來を考ふるものは今日に於て實際に用ある、婦人を作るの急務なるを知らん。女子敎育に熱心なる嘉悦孝子氏等の創立せし女子商業學校の如き蓋しこの必要に應じて起りしもの丶一ならん。同校は目下六十餘名の生徒を敎養しつ丶あるが、敎育の方法は極めて實際的にして女子をして單に事務的の才能を練習せしむるのみならず。又居家處世の上に於て有爲る婦人を作るを以て任ずるもの丶如し、過日同校第一回の卒業生十一人を出せり、卒業式場に於て妙齡なる婦人が來賓の面前に於て銀行の半季決算報告を説明し、外國爲換表を説明せし如きは是れ他の女學校に於て見るべからざる處にして女學校卒業式のプログラムとしては破天荒の擧なりといふべし。猶同校は高田博士、和田垣博士、江原翁其他の諸氏熱心に賛助されつ丶あり。

▲浴衣地圖案懸賞募集

三井呉服店にて今回左の方法を以て浴衣地圖案を募集せり

一　中形浴衣地に應用すべき斬新なる圖案を募集す

一　應募圖案は鯨尺にて（巾九寸五分）（丈六寸乃至一尺五寸）位に畫くべし

一　應募圖案は其上下に模様の合口を附くることを要す
　但し一人數案を出案するも妨げなし

一　募集圖案は當店に於て審査をなし左記の賞金を贈與すべし

壹等	金參拾圓	壹人
貳等	金拾五圓	貳人
參等	金五圓	五人
四等	金參圓	七人
五等	金壹圓	拾人

一　應募者は其圖案を密封したる上東京市日本橋區駿河町三井呉服店内日比翁助宛に送るべし

一　締切期限は固く八月三十一日とす

一　應募圖案は一切返却せず

▲割烹講習月曜會

麹町區永田町二丁目六十八番地なる同會は、婦人の爲めに家庭專用の割烹法を最も實用的に講習せん目的を以て、近藤正一氏夫妻が去る三十六年中開設したるものなるが、爾來漸く婦人社會に厨房の技術の大切なる所以を認められ來りしより、貴婦人にして入會を申込むもの殊に多く、目下四十名の會員を有し、良好の成績を擧げ居れりといふ。同會規則の摘要を揭ぐれば左の如し。

一講習期限、速成科　和洋食共各三ヶ月　本科同各六ヶ月

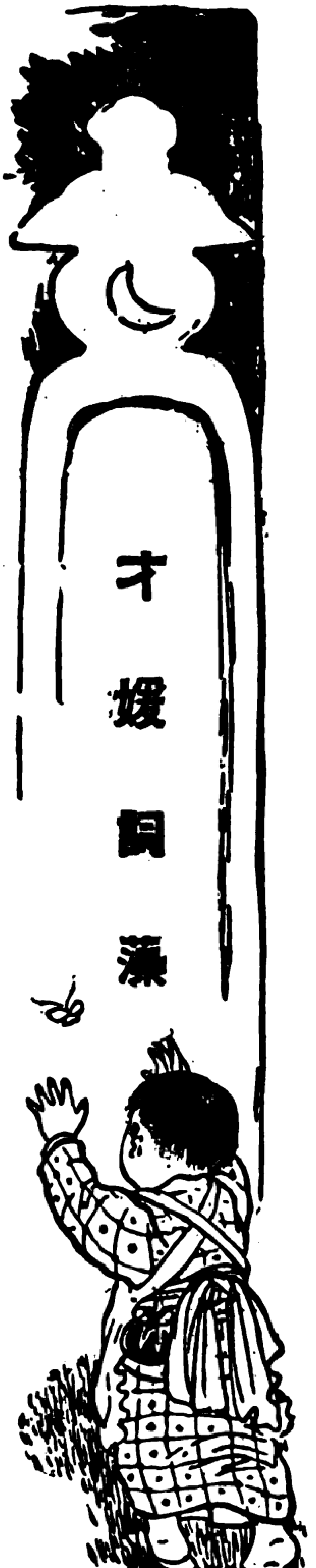
一講習日　日本食割烹　金曜日午前九時より、洋食月曜日午前九時より

一會費　和食講習　金七十五錢　洋食講習金七十五錢

一材料費　一回約金三十錢

一器具使用料　金五十錢

一講師　日本料理岩崗芳松、西洋料理加美太一



才媛詞藻

塚越停春君選

（天）世界八景（ナイヤガラ瀧）

河内北河内郡山田村　竹内敬子

天つ神あま下ります道ならむ
　雲より落つるナイヤガラの瀧

評曰。雲より落つるの偉観より、天つ神の天降ります道なるべしと云ふに想到し、言に其偉観を形示するのみならず、亦其崇高の狀態を言外に顯出せしむ。以て此の世界の偉観を歌ふに足る。好作と謂ふべし。

（地）世界八景（コビ砂漠）

秋田市保戸野中町　小堀まつ子

ゆけど〳〵ゆけど砂原眞砂原
　かくして今日も暮むとすらむ

評曰。善く「今夜不ㇾ知何處宿。平沙萬里絶二人烟一」の意を歌ひたるもの、眞に大漠行旅の光景たり。

又。疊語を以て言意を强む

（人）夕立

東京　大村二葉

樂の音を晴れ行く空に通はせつ
　露の玉しく夕顔の宿

評曰。驟雨の跡を以て飄逸の想を舒ぶ。遣言新麗、花顔昇霽の狀言外に露はる。

又。「夕顔の宿」の語ありて、全篇皆活く。

秀　逸

〇世界八景（アルプス山）

東京牛込區牛込中町十　田上小金

アルプスの峯に旭の旗立てゝ
　統べても見まし四方の國原

評。豪壯甚しけれども、何となく主權者の口氣ある如く見らる

るはふさはしからず。

〇〇夕立　　甲府愛宕町　伊藤うた子

さしかゝる峠路三里日は落ちて
　漫ろに驅する夕立の雲

評。景中情あり、情中景あり、眞に驟雨來らむと欲して雲矢の
　如きの狀を見る。
又。「漫に驅する」の一語、行雲を狀し、兼て行客を情す。

〇〇世界八景（ゴビ砂漠）　和歌山市木町五丁目　増田迷子

隊商の駱駝の一むれ見えずなりて
　萬里の砂漠日は斜なり

評。ゴビ砂漠中の景、想ふに畫に畫くの如くなるべし。

〇〇同　京都三條大橋東三丁目廿九番戸　西澤まつ子

砂捲きてゴビの砂漠を吹く風に
　おり居る雲の立騷ぐなり

評。「おり居る雲の立騷ぐ」とは何等の巧形容ぞ。

〇〇世界八景（ナイル河）　大分縣竹田町殿町觀音止方　大島きく

ナイル河の流域千里草青く
　荒廢の跡月澄み渡る

評。興亡千古の感あり。

ゝ〇世界八景（ナイヤガラ瀑）　弘前市在府町　菅なか子

ナイヤガラ雲より落ちて雲を呼び
　雲に入なり瀧津瀨の音

評。豪景壯語

〇〇夕立　石見邇摩郡静間村　宮内登美子

虹晃れと乳子はいふなり夕立は
　やめで歸らぬ舟を待つ身に

評。極めて情感深きものと謂ふべし。

ゝ〇世界八景（赤壁）　京都寺の町大宮西　三の宮つゆ

槳とりてうたひし人のおもかげも
　うきて流るゝ秋の夜の月

評。俯仰千古の感あり。

ゝ〇夕立　東京神田仲猿樂町九番地　佐藤千代能子

久方の天城の山はあらはれて
　夕立さわぐ伊豆の海原

ゝ〇同　大阪　萬子

富士の嶺はさやかに見えてうちわたす
　かたへ涼しき夕立の空

ゝ〇同　宇都宮　小林ちよ

鳴る神の音にもしるき雲見えて

夕立すらし遠の山里

評。以上三首、所謂異曲同工なるもの歟。

○○瓜　秋田市保戸野中村　小堀まつ子

父母にまゐらせむとも思ふかな
瓜はみて子を偲ぶのみかは

評。山上憶良の詠に基き、別に新意を出す。
又。一種の道歌也。

、○夕立　神戸市下山手通五丁目七十五　岸崎濤子

血に染みしかばね亂るゝ荒野原
つゝ音遠く夕立の降る

評。所謂大戰の後に大雨あることを歌ひたるもの、而して餘音遠くの句ありて、則ち全篇活く。

、○夕立　兵庫山陽社宅　柳田鶴子

かたむけるマストに怒濤ほゑ狂ひ
旅順沖すごく夕立の降る

評。何等の悽壯ぞ。

、○夕立　信濃　露子

風そり〳〵衣手涼しあしの葉に
小波きよき夕立のあと

評。風致あり。眞に雨後汀上の景。

、○同　本郷弓町二丁目廿一　三成君子

遠かたの風の名殘の涼しさも
よそに過行く夕立の雨

評。遣句巧妙、着想亦庸劣ならず。

、○世界八景（セントヘレナ島）　和泉國泉北郡在鳳村長承寺　井上登美子

月影はセントヘレナに小夜ふけて
浪の荒磯千鳥なくなり

評。感慨長し。

○○世界八景（赤壁）　栃木縣栃木萬町二丁目　山本しげ子

酒もあらず肴もあらずされど〳〵
赤壁千尺斷崖の月

評。勁拔無双。
又。「されど〳〵」の語力あり。

○夕立　河内國北河内郡交野村大字私部　大矢たね子

夕立の過し梢に蟬なきて
入日さすなりそかの松影

評。雨後の景晴るが如し。

○夕立　河内國北河内郡川越村　櫻井喜子

夕立の庭に濡れたる夕顔の
花吹き拂ふ風の凉しさ

評。面白し。

○夕立　埼玉縣南埼玉郡三箇村　小林恒子

合歡木の花薄紅かざし日に醉ひて
夕雨あらふ川添の道

評。詩味あり。

○夕立　神田區一ツ橋通廿一番地誘道園　高宮安子

里の子がせみとり袋打そぼち
夕立すなり產土神の森

評。田舍驟雨の實景此くの如し。

○夕立　河内北河内郡山田村　竹内敬子

詩の神の其囁きの聲ならむ
竹村さわぐ夕立の音

評。凡ならず。

○瓜　長門西市村　木村いく

乙女子がむかし噺の瓜姬を
ひなに聞かせて遊ぶから庭

評。可憐光景可想。

○瓜　本所區龜澤町二丁目四十七番地　田中ひさ子

瓜冷す里居の眞晝靜かにて
葉なき梢に蟬鳴きしきる

評。實景。

○瓜　筑前若松　木村こま

瓜植し君は徵されて我ひとり
初ちぎりせり晩の露

評。厭嫌の情。

○世界八景(長白山)　東京神田竹綠町九番地　佐藤千代能子

吾せこは今越ゆらむかからくにの
虎伏すといふ長白の山

評。是亦厭嫌の情。

○世界八景(セントヘレナ島)　丹波國氷上郡柏原東町小松原方　山口秦代

双の手にこの世握らん男の子あらず
セントヘレナに月白う照る

評。永く英雄の憾を留むるもの。

○世界八景(セントヘレナ島)　四谷區舟町四一山田内　外河花子

英雄の魂や何處を迷ふらむ
セントヘレナの秋の夜の月

評。不可なし。

○世界八景(ナイヤガラの瀧)　本郷　佐藤ふぢ子

とつ國のわれさへ聞けりナイヤガラ
瀧の響きの高くもあるかな

評。完作。

○世界八景(ナイヤガラの瀧)

天の川みなぎり落る水音の
世にもとゞろくナイヤガラの瀧　越後三島郡日吉村　坪井わか

評。前者と着想を同ふす。

○世界八景(コビ砂漠)　赤阪區青山南町四十五番地ノ十二號　山村くら子

日は暗く駱駝の群は見えずなりて
こびの砂原風吹きすさぶ

評。佳。

ゝ○夕立　同人

つはものが砦を抜くとひたよする
それさながらの夕立の雨

評。形容し得妙新甚し。

夕立　仙臺市元紺町三番地菊池まさ方　渡部光子

涼しさを草葉の露に殘しおきて
はやくも晴るゝ夕立の雨

夕立　山城國紀伊郡伏見砂川　今村しやう子

夕立はあしとく過ぎて露のみの
なごり涼しき那須の篠原

夕立　神戸市中山手一丁目　なつ子

夕立も晴れて涼しき若草の
露にやどれる夏の夜の月

評。以上三首共に雨後の景を歌ふて、皆見るべし。

佳調

(夕立、瓜、世界八景)

● 横日さす富士の高根は見ゆれとも夕立すなり三保の松原　静田　嵐浦子

● 夕立のはれてのどけし遠山の虹のひまより城あとの松　上野　島田廣子

● 夕立はむかひの里を過るらし秋涼しき風の吹き来る　東京　はる

● 月見にと出でにし儘の雨に濡れて歸るも憐れ宵の夕立　浅草　那須美佐保子

● 白布の末はくだけて霧まよひ絶ゑぬ響に風はそよ吹く　東京　綾子

● 砂の海を駱駝さまよふ夕まぐれこれや誠に亡國の跡　浅草　那須美佐保子

● 夕立に草つぶる露若ふして新開小路月清らけき　本郷　東むれ子

● 峠路を今か越ゆらむ早打の山駕籠二挺夕立の間　下野　花子

● 夜は更ぬ夕立や又一しきり白龍山の寂寞の夜半　長崎　児玉まさ子

伊勢　田邊ねい子

満州の露ときえにしますらをのみはかのほとり夕立のふる

●　大阪　睦　子

夕立の雨は遠わにかゝりけりいつしかきえし沖の島やま

●　紀伊　川口おとゑ

誰か男のいさかひなせし水せきも夕立過ぎてながれけるかな

●　伊豫　野田秀子

露置せる岡の笹原かぜたちてつきかきくもる夕立のそら

●　博多　太田とし子

月に嘯く骷髏の骨のみ宿としてよるべしもなきさびの沙原

●　熊本　佐山なり子

夕立の晴れし松原一里半鈴の音かすか巡禮の行く

●　佐賀　花　子

夕立はいつはれにけん夕日かげはすの浮葉の玉にきらめく

●　島根　はな子

荒神の暴雲柄に射る征矢か雄々しすさまじ夕立の雨

●　大阪　楓原英野

横さまにふる夕立の音につれ調ぶる琴の絃を絶たれつ

●　芝區　鈴木千鳥子

夕立の空晴かゝる江の村の暴輪の松に月幽なり

●　越後　小野塚とし子

沛然として夕立過ぐる湖濱に電音疾波天に轟く

●　伊賀　佐々木まさ子

漕ぎもどる漁士の小舟の數見ゑて沖のわたりに夕立のする

●　島根　操　子

夕立はいづちをさして行きぬらむ庭の青葉に名殘とどめつ

●　紀伊　川口おとゑ

一しきり夕立過ぎて庭木なる葉末のつゆに夕日かゞやく

●　甲斐　杉山すゞむ

雲晴れて松にかゝりぬ松島の浦ふりすぐる夕立の雨

●　越後　水原歌子

手づくりて夕の膳にそなへはや田舎の乳母の贈りし瓜を

●　神田　六鹿うら

なに貫る草に名殘の露置てよそに過ぎ行く夕立の雨

●　三重　神谷よし子

學びやもしばしをやすむ夏の日をあはれたれの子瓜うりの聲

●　大阪　伊藤州子

征の君かしこうつ血汗ながすらん旅順港頭夕立のあめ

●　姫路　米田たき子

降しきり跡にそよそよ風出てむしも涼し夕立の雨

●　相州　白つゆ子

夕立にすゝぎし衣ぬらさまじとこゑかしましくさわぐはした女

●　山口　東よしね

亡き母の好みし瓜の今年より目につくさへもかなしかりけり

●　大阪　立花しな子

夕立の雨音やみて日の御旗金洲山頭に輝き昇る

●　熊本　永田とし子

夕立の河を隔てゝ西東彼方は日傘此方唐傘

●　越前　林　學女

ひとしきり夕立の雲は過ぎ去りて軍隊の前進に日はなゝめなり

●　四日市　靜子

出征の留守居の嫁女たすけんと孫の手ひきて老父瓜うる
● 上野　大野柴子
入日影赤城の嶺に暉りながら夕立かゝる前橋の里
● 東京　つる子
武士の涼しかるらむみいくさに西比利亞の原夕立のする
● 芝　愛子
いにしへの夢なかたらむ音もなし月たゞさむき赤壁のほとり
● 芝　蘭
さゆり咲く草に臥しつゝ瓜わけて眞晝をいこう賤のはらから
● 長門　貞子
ひさかたの空かきくもり神なりて音も涼しき夕立のする
● 長門　美子
かきくもり市人さわぐ夕ぐれなよそになり行く鳴神の音
● 北海道　柴崎春江
畑つけし少さき神のまゞめごと夕胡瓜の里れたみあり
● 小石川　野村豐子
晴れ行きて木々のしづくは玉と散り入日涼しき夕立のあと
● 岩代　菅野和子
かしましき蟬の聲々ひたとやみて暑さを拂ふ夕立の雨
● 青森　高橋たま子
夕立の晴れて涼しき松原を牛飼一人二人行く見ゆ
● 越後　武[illegible]枝子
雷の落ちしはいづこ夕立の晴れし山邊に虹美しき
● 前橋　宮内りき子
夕すゞみあつさ忘れし手枕に見てしは夢か赤壁の月

● 兵庫　柳田俊子
すさまじき夕立あめも名殘りなくはれて涼しき夕顔のやど
● 陸奥　入戸とよ
思ひやるこびのさばくの戰の峰に夏のみ神のふみたゝすらむ
● 牛込　金田たか
たちまちに降りくる雨に川水の音さへ近くきこゆるかな
● 和歌山　郡ことふ
夕立のなごりの露を木末よりこぼしてわたる風のすゞしさ
● 大阪　岡崎[illegible]鶴子
天地も裂けむ計りにとゞろきてみなぎり落つるニヤガラの瀧
● 大阪　岡崎かつ
白雨はたゞ時の間に晴れ行きて若葉に宿る夕月の影
● 小石川　平岩しげ子
夕立に降り込められし物乞のしばし昔のゆめ語りかな
● 伊豆　飯田壽子
竹芝の沖洲ふきこす風涼しゆふたちすらし安房のとほ山
● 新潟　[illegible]
佛參の人影たえて池の面の蓮の浮葉に夕立そゝぐ
● 新潟　内藤ゆき子
夕ばねの雲いつしかとうすらぎてセントヘレナは暮にとざしぬ
● 千葉　伊藤ふく子
なすな吹く風只ならす暴ふ中に篠つく如く夕立のふる
● 越後　水原田[illegible]
木陰いてゝ名殘りの風に吹かれ〳〵歸る野の路夕立のあと
● 下野　佳久子

敵は去ぬ身は倦きてふす野辺にのんどうるほす夕立のあめ
● 相模　とも子

鳴神のとゞろき渡るほどもなくはやきほひきぬ夕立のあめ
● 越後　綾子

渡しばに行く細道にうちつゞくむぎ畑一里夕立のふる
● 四谷　杉下ふみ

英雄のなみだをのみしセントヘレナ男児いつこ天かけた地か
● 大阪　田中千枝

ときのまにけしきをかへてのこる日のよそめすゞしき夕立の雨
● 博多　石原いせ

馬ひきて帰る小川の土手の上になる神なりて夕立のふる
● 島根　初子

萬歳の一時におつる心地して寒さ身にしむナイヤガラのたき
● 東京　野中すみれ

折しもあれいみしく降りし夕立に洗ひ清めぬ戦の跡
● 下野　玖瑠子

になれしまきしべによする浪の音にいまも那須のうらみこもらむ
● 佐倉　平田すゞ子

新墾の畑に生りたる初瓜を兄弟二人かごに盛りゆく
● 本所　静林雅子

走せよりてしのぐ木陰もなき野路にきほひかゝれる夕立の雨
● 廣島　和知廣子

夕立はあとなくはれて木の間もる月の光りにつゆぞかゞやく
● 三重　中谷加代子

ものすごき峠路三里人たえていたゞきくらく夕立のふる
● 筑後　あき子

荒れはてし彼耳瀬川のはたの田に瓜の一ともと花の三つ四つ
● 筑後　松琴

あへぎ〳〵牛追ひ帰る牧童の家なほ遠し夕立の雨
● 廣島　濱口愛

鳴神も矢玉の音も過ぎ行きてかはれにすごく月てらすなり
● 熊本　きつ子

夕雨に小庭のちりも沈まりて妹がリボンのそよぐ涼しさ
● 石見　宮内登美子

名にしおふ駱駝一群過ぎ行きて萬里の砂濱月たゞ淡し
● 備後　立静みれ子

遠山は雨のしぶきにつゝまれて蛙なきさはぎ夕立のふる
● 尾道　橋本豐

汐あみし人のはせまるひまもなく沖にと走る夕立のあめ
● 秋田　竹内かれ子

あらがねもとくてふ夏も夕立てしばし涼しきみねの松風
● 和歌山　ふき子

かきくらし空もとゞろとなるかみの音きこゆるや夕立のふる
● 兵庫　柳田春枝

いにしへを語るに似たりアルプスの山路をてらす秋の夜の月
● 和歌山　ふき子

夕立のなごり涼しき庭の面やどれる露も玉と散りける
● 筑前　大坪貞子

短夜は露営にゆめも結び得でかすかに望む長白の峰
● 東筑　貞子女史

ふりしきる夕立はれて山里の柿の花散る夏の夕暮
● 駿河　山本俊子

風狂ひ波は怒つて神鳴りて越の海すごく夕立のふる
● 神奈川　和田春子

長良川鵜飼の灯ぼの見ねて月影淡し夕立のあと
● 陸前　西川はる

夕立の雲みなはれて草の上に光そへけり十六夜の月
● 岐阜　坪内清枝

降りつゞく二十日の雨に背戸畑の胡瓜はならず葉のみにして
● 滋賀　田中とみ子

やゝにたかくやゝに近づく音すごく鎮守の森に夕立の降る
● 牛込　芝やよ子

眞帆あげて歸れるふねは見ねながらゆふたちふれる浦のまつはら
● 安藝　松原梅子

流れ星三角塔にかけ落てナイルの河畔水の音高し
● 熊本　鶴子

夕立はいつしかはれて涼しげになごりのつゆをふくむ蓮葉
● 富山　大西さだ子

村人のいくさはなしの夏の夜を籬に白ろううりの花咲く
● 本郷　荻野よし

くもりぬと見るまほどなく夕立のなごりのつゆの下葉すゞしき
● 埼玉　田中靜子

松をいでゝ磯を中中のかへり見やゆふ立過ぎし富士の神山
● 宮城　石垣つろ子

よみさしの歌巻ふせて朝顔の鉢とりいるゝ夕立の庭
● 横濱　二宮千代子

日の御旗入るゝ暇なき夕立のあとにさへ〳〵又鈴の音
● 和歌山　郭千鳥

雨はれてふく風薫るこの夕べぬれしほたるの青すだれ這ふ
● 葉櫻女

言ひ出ん言の葉もなし千秋のゆきに月さすヒマラヤの山
● 秋田　佐藤一子

あて人のすゞむもみねて高とのを一村すぐるゆふ立の雨
● 本郷　とみ子

病む母の薬買ふべく峠三里中ならぬに夕立の降る
● 岡山　もと子

夕立はあとなくはれて草の上のなごりのつゆに夕日かゞやく
● 東京　濱中ひさ子

夕立のはやふりすぎて山の端に涼しく殘る虹のかけ橋
● 山城　大久保よし子

病む母を家にのこして茄子うりてかへる野道に夕立のする
● 下谷　みき子

激戦の後を洗ひし夕立はくまなく晴れて御旗きらめく
● 肥前　宏子

夕日影沖の小舟に見ねながら海士の軒端にゆふ立のふる
● 麹町　熱田達坊

御戰も此くやあるらん夕立の霽れて甦きたる民草の色
● 福岡　森滋子

金がじの古き言の葉思ひ出て晴るゝるなしばしまつの木陰に
● 岐阜　木村響子

天地を洗ふ夕立今晴れて庭の若葉に涼風の吹く
● 備後 齋藤くに子

くろがれのとけて流るゝ夏にさへ雪ふりつもるヒマラヤのみね
● 美濃 山田愛子

王維も周郎も逝きて二千年支那に人なし赤壁の月
● 伊與 高橋かめ代

露人のすげかさとりて見かへれば今出し城に夕立の雲
● 足利町 ふみ子

ナイヤガラとゞろきなつる瀧の音を玉とちらしていづる月影
● 和歌山 木本清子

山の端に虹見ゆ初めて夕立の雨心地よく晴れ渡るなり
● 本郷 砂子

一しきり降りにしあとの草村になごりの露ぞかゞやき渡る
● 尾州 吉田つう子

高根には夕日のかげのさしながらふもとのみふる夕立のあめ
● 靜岡 綾子

我が庭の暑さ洗ひて夕立のやがて晴れ行く跡の涼しさ
● 湘南 葉山しげ子

けふも來ば身の上がたりきゝて見む瓜賣るをとめよしありげなる
● 京都 織田幸子

國を出し夫がかたみに蒔おきし垣根の胡瓜花さきにけり
● 本郷 横田よしの

吹く風はたゞ時の間にすぎ行てなごり涼しき夕立のあと
● 常陸 菊子

なる神の音におどろき幼子が湯あみないそぐ夕立の雨

和歌兼題

すゝき （〆切八月十五日）

古戰場虫 （披露九月五日）

滿洲十勝

（鴨綠江、黑龍江、摩天嶺、旅順口、南山、奉天府、遼陽、大孤山、ハルピン城、松花江、）

注意（滿洲十勝は出詠者の隨意にて内一種だけ御撰みの上投ぜられたし

◎賞品天、地、人、の外秀逸二十種に呈す

▲五行文 （自然を描寫したるもの字數二十字詰五行以内に限る）

▲寫生文 （〆切八月十五日）

懸賞文規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必ず右方の上部一ヶ所を紙撚にして綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界とせらるべし▲投書原稿は一切返却せず

裁縫手引

單羽織

▲裁ち方

單羽織を裁つに先ず總丈を見て袖を取り次に衿を取る衿丈は出來上りの丈に前下り一寸と衿肩三寸と縫込一寸とを加へて此を衿丈とす殘りを身頃となし前丈は前下り寸のみにては撥襠に出來かぬる場合ある故に後丈に一寸と四寸とを加へ置くときは十分に襠袖口は取れるなり但し半身左右にては二寸に八寸合せて一尺を後丈よりも長く取る。

或は丈短きものは據なく釣襠となす。

▲標附方

第一袖　袖表を中にして二枚重て横に二ッに折りて山標を入れ兩端と眞中とに袖丈に一分を増して丈標終て袖口明の標を入れ袖丸みの所は丈より口明の方に五分幅の方に五分として其間を程能く丸く標を入置くべし

第二身頃　身頃表を中にして衿肩を左方の手前にして裾は右の方にし前を下に後を上に能く揃へて山標丈標を入れ裾折返の標を付け袖附の標を附身巾を定め後丈より前を一寸下けて斜に折返し標を附け置へべし。

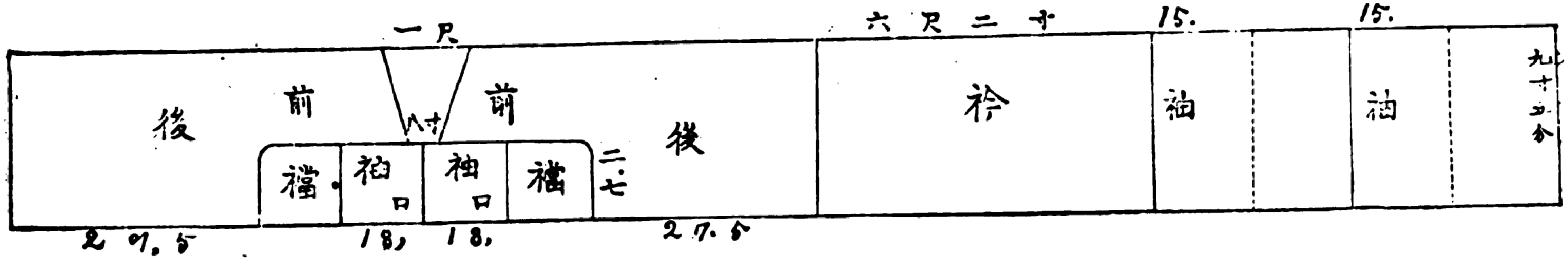
第三襠　襠二枚重て丈を定め襠裾巾を定め上は後前の二分の一よりも少し後身に附く方を淺して其標より一分離して前身頃に附く標を入れ裾は二寸の巾になし折返の標を入れるなり。

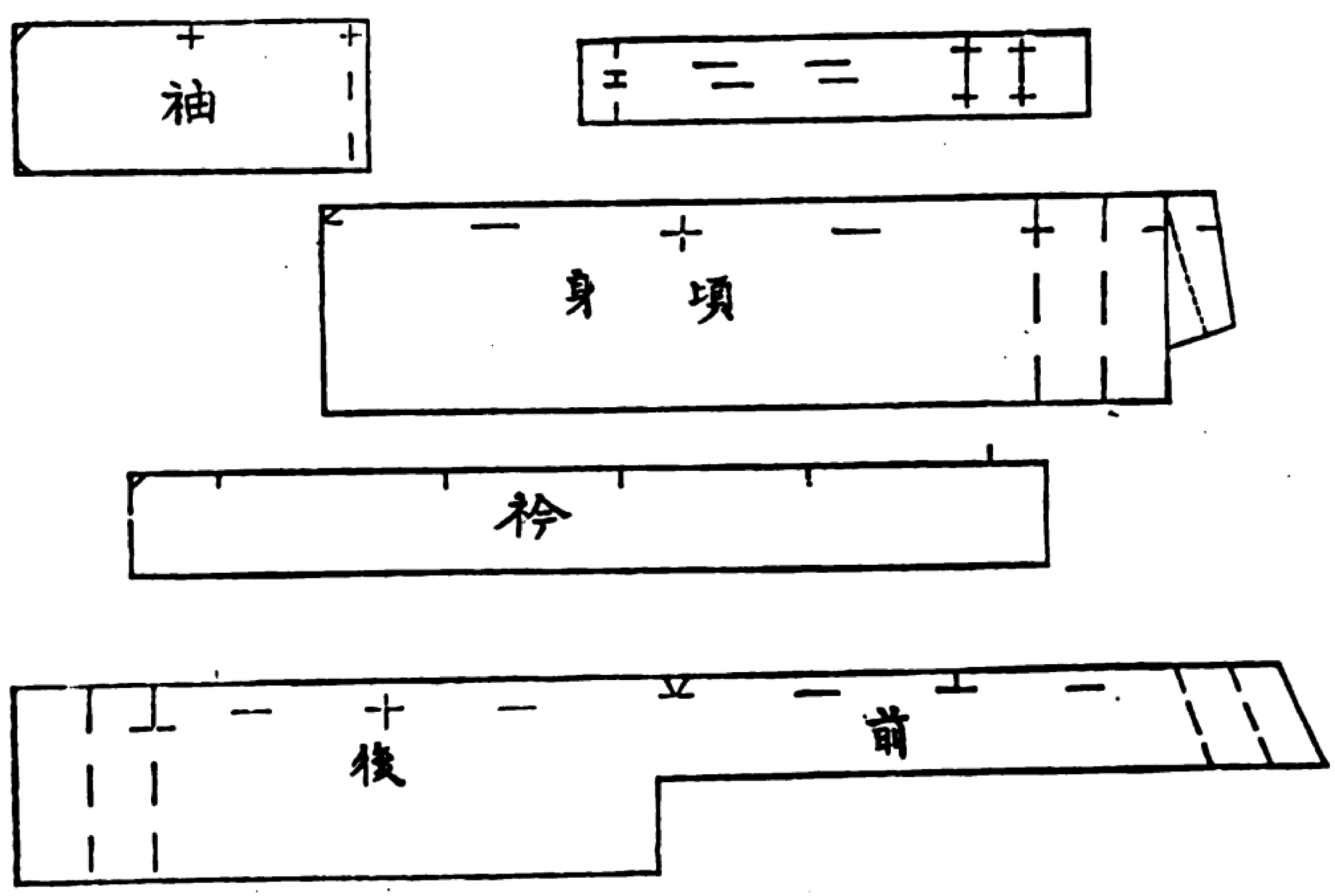
第四衿　衿は表を外にして衿巾を四寸五分になす縫込の部分の巾を衿布よりも五分巾を狹く巾を二ッ折にして後に丈の標を入れ三寸下りたる所に一ッ入れ一尺下りたる所に入れ後は前丈と衿肩とを加へた衿丈の標と外二か所程合標を入れ置くべし。

▲縫方

一、袖　袖左右に袖口を掛け表地を少し弛めに袖口明を合せ五厘の着せを掛けて表の方に返し口明の所四ッ留をなす（四ッ留は左袖は表袖より針を通し表と袖口とを斜めに折りて三筋位糸を揃ひ其儘袖口布に通し針

（丈二丈五尺の布を以て裁つ　但し捧襠）





$15 \times 4 = 60$ 袖丈

$250 - \overset{\text{袖}}{60} = 190$

$190 - \Big\{ \underbrace{\Big(\overset{\text{出來上り丈}}{27} + \overset{\text{衿肩}}{3} + \overset{\text{前下}}{1} \Big)}_{\text{衿丈}} \times 2 \Big\} = 128$

$128 - \overset{\text{前殘}}{10} \div 4 = 29.5$

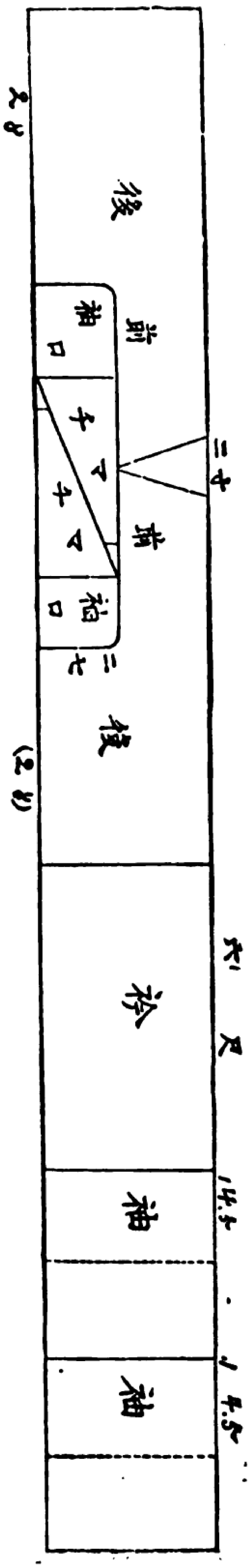
$14.5 \times 4 = 58$ 袖丈

$232 - \overset{\text{袖}}{58} \Big\{ \underbrace{\Big(\overset{\text{出來上り丈}}{26} + \overset{\text{衿肩}}{3} + \overset{\text{前下}}{1} \Big)}_{\text{衿丈}} \times 2 \Big\} = 114$

$\Big(114 - \overset{\text{前下}}{2} \Big) \div 4 = 28$ 身丈

$28 + 1 = 29$ 前

（二丈三尺二寸の布を以て裁つ　但し衽鉤裁）



を抜き前の通一針通して糸を結びて後は四ッ縫に袖口布の有る所迄四ッ縫に返針をなし其下は並に縫ひ袖下を始めに表より縫ひ裏に返して標通り縫ひ丸みの所は細針に糸を少し縮め置く而して袖下を縫ひ終り袖口奥を絎け袖を表に返して躾をかくるなり。

二、身頃　身頃脊を縫了れば耳色通りの糸にて耳縫ひをなし裾掛の標通り後前とも折を附衽の上の方を三ッ折りにして後身頃に縫ひ附け次に前巾に紐附を縫附衿附をするには衿肩脊縫と衿の山標とを合せて（くり）の所にて衿を二分位弛めて後は少し衿を弛めに附胴の縫代は脊三分衿肩一分位紐附三分裾にて五六分の縫込をなし前巾を衿の内に折り込て衿の表裏にて前身頃を狹み合標を合せて待針を打ち衿先の所三寸程の間返針になし後は一針抜きにして衿肩の處は表に附く方の衿を離して衿裏の方の衿地身頃とを縫ふ衿先は表の方即ち耳の有る方其儘で裏の方を弛めて衿先を縫ひ縫込を裏の方に返して綴ぢ附引返して衿肩を細針に絎け附け衿に躾を掛けて終る。

三、衽　衽は上の方を三ッ折になし絎け後前とも衽を縫附衽の縫込を胴の縫込に絎け附前衽は裾掛の縫込の部分は縫はずに置くべし。

四、袖　袖は標通り待針を打ち袖下を四ッ留をして袖附くりなり。

女學世界 秋季增刊
社會百生活

九月十五日發行

家庭は社會の分子なり、善良なる家庭は健全なる社會を作り、健全なる社會は偉大なる國家を作る。一國の文明は即ち個々善良なる家庭の集合に外ならざるなり。家庭は生活に由つて立つ、家庭の風儀は生活狀態に由て其根本を培養す、これを社會に及ぼし、之を國家に及ぼす、生活の輕視すべからざるや知るべきなり。本篇必らずしも社會風敎の模範たるを期せずと雖も彼の英國に所謂紳士の家風なるものありて常に社會の良風を維持し一國文明の源泉となるが如く、我國にも又この種の家風ありて以て國家の重に任ぜんとす。

こゝに獨立の人あれば爰に紳士淑女あり、こゝに健全なる家庭あれば爰に良家風あり、本篇に記するもの即ちこの良家風なり必らずしもその金衣玉食たると、麁衣粗餐たるとを問はざるなり、又必らずしもその大臣たり、貴族たると、車夫たり馬丁たるとを問はざるなり。社會各階級によりて紹介する生活の方面左の如し。

舊大名の家庭生活
貴顯の生活
富豪家の生活
商家の生活
農家の生活
寺院の家庭
細民の生活

官吏の生活
醫師の生活
辯護士の家庭
牧師の家庭
會社員の生活
漁民の生活
俳優の家庭



軍事小說

家の櫻

巖谷小波

下　未亡人の卵

躑躅に名ある大久保の里、踏切から約百米突ばかり市の方によつた、新築の平屋造、疎らな杉の生垣に、白木の小さな格子門、それに前身は菓子折かと思はれる、小さな表札の文字を見れば、行書で小さく梅田とばかり。――これぞ彼の砲兵中尉梅田薫の住居とは知られた。

此の四五日前から、人の出入漸く繁く成つて、時に差挽の俥などが、忙しさうに來て此の門に止まるのは思ふにその主人の、出發の期の近づいた故であらう。

それよりも猶、近所の評判に成つたのは、此の杉垣の、一搆の中に、同じく此の五六日前から、見慣れぬ花の咲き初めた事だ。

『御國から妹さんが入らしつたんでせう。』『いゝへあれは御許嫁ださうです。』と、井戸端に朝夕の取沙汰。中には何所で聞いたか、あれは懇意の者に賴まれて、その娘を寄宿させて居るのだと、その實を語る者があつても、生憎誰にも信じられなかつた。

さてもこの問題の種と成つた。杉垣の中の見馴れぬ花――この梅田家の客分と云ふのは、云ふまでも無く彼の平松操なのである。

操は親友の直子に、恥かしい心を打ちあけて、その

智惠を借りてから、凡そ二週間ほどの間に、話が十分進んで來て、遂に寄宿舍を引きあげ、此の大久保へ引移つた次第である。

さらでだに、人は噂をしたがるもの。まして年若な女の常、我が風よりは他の風にのみ兎角目の止まり易い、海老茶仲間の間には、忽ちこれが問題と成つて、食後の談話室、放課時間の運動場には、三々五々群を爲して、專らこの問題の解釋にのみ、頭を惱ますも多かつた。

但し操と直子との間には、互ひに堅く口を閉ぢて、噯にも例の秘密は洩らさぬのであるが、人の眼の敏く、人の耳の鋭さは、何時か眞相をも嗅ぎつけて、遂には眞相以上にも斷定を下だすに至るのである。

駒込の學校へ通ふのに、何を苦んで大久保へ轉宿、是にに何か理由が無うてはと、蓋し萬口一致の不審。それさへあるに此頃は、平松さんの歸途を急ぐ事は―今まで自分が先に立つて、人を說き勸めて居た溫習會幹事を友に讓つてしまつて、出席をさへ怠り勝なは、―何か宿に待つ者のあつて、その磁石に引かれゝばこそと、果は皮肉な穿鑿さへ出る。

それを成るべく聞かぬ風の操も、その實氣の咎めぬでも無いかして、時には人の尋ねぬ事にまで、我から心を遣うての辨解。却つて敵に付け込まれて、不覺の面を染める事さへあつた。

「操さん！何うなすつたの？」

と、輕く背を叩かれて、運動場の小高い山の上の、共同椅子に憑れたまゝ、茫然懊惱に沈んで居た操は、重い頭を擡げて見返れば其所には懷かしの友が立つて居る。

「直子さんなの？」

と、迎へはしたが、まだ面は浮かぬ氣色。

嬉しげに見れば其所から二三間隔つて、大きな椎の木の根本には、同級の誰彼三四人、意味あり氣に此方を見ながら、頸を縮めて笑を忍んで居る。

直子は大方樣子を讀んで、

「また何か云はれたのね。何うだつていゝぢやありま

せんか……貴女があんまり憤氣に成るから惡いんだワ。

　と、云ひながら側に坐を占めると、操は五月蠅さうに、鬢の毛を撫であげながら、

『なアにさうぢや無いのよ。』

と、又しても俯覗くのを見ると、今日は何時に無く色も惡し、如何も勢の無い体であるから、直子は少し摺り寄つて、

『それぢやア操さん何うなすつたの？』

と、心から案じ顔に尋ねるのである。

　此時操は、ぢろッと椎の木の方を見ると、もう先刻の連中は居ない。それにや丶安堵の色も見せたが、まだ口を開き兼ねて居る。

『ほんとに何うなすつたのよう。云つたッてい丶ぢやありませんか。』

『そりやア……貴女には、何も隱しやアしませんけども……』

『ですから仰有いな！……また皆さんが、可厭な事云つて揶揄つたんでせう。』

　操は初めて苦笑を洩らして、

『そんな事、私だつて、何も氣に仕やしませんけれども、……それよりねエ直子さん……私心配な事が出來たのよ。』

『さう？……ぢやア　いよ／＼薫さんが、御出發に成るのネ。』

『それは初から解つた事ですけども、……』

『そんなら何う爲すつたの？』

『ほんとに私……こんな苦しい事は無いのよ。』

と、今度は太息を吐くのである。

　直子は友の顏を覗き込みながら、

『何がそんなに心配なんでせう？……はやく云つたつてい丶ぢやありませんか。貴女も焦思つたい人だ事ねエ。』

と、勵ます樣に云ふと、その刺激に感じてか、操は遂に思ひ切つて、

『とう／＼あの……今夜に成つたのよ。』

「出發が？」

「出發は明日の朝早くですけども……」

「それぢやア何が？」

「あの……叔母さんが何しても、お聞きなさらないので、薫さんも親孝行な方ですから、とう〳〵今夜……」

「それぢやア御盃でもあるのネ。」

「はア……せめて約束だけでもッて……」

と、小さな聲で云つたが、その耳は眞赤に成つて居た。

直子は輕く點頭きながら、

「まア、それはお芽出度い事ねエ。ですが、そのお芽出度いのに……何故またそんな顏をしてらしやるんでせう？」

「でもねエ直子さん、それがちつともお芽出度く無いんですもの……」

「何故エ？」

「だつてねエ……薫さんは、此間中、何だか機嫌が惡い樣なのよ……さうしてあの……私があの家へ行つてから、昨日まで碌に話もなさらないんですもの……尤もそれは出發前で、忙がしいにやア相違無いんですけども、餘計な邪魔物つて云はないばかりに……ほんとに私は辛くつて仕樣が無いのよ、……それに引かへて叔母さんの方は、眞實の子も及ばない位に、私を可愛がつて下さるし私も亦、及ぶだけお世話をしてあげるのに、大變嬉しがつて下さるから、私も張合があるんですけども、何しろ肝腎の……薫さんがあの通りぢやア、私もほんとに心細くつて、……それをまた叔母さんが、氣の毒だとお思ひなさるもんだから、いろいろ執成して下だすつてとう〳〵まア出發前に、約束だけはする事に成つたんです、所が薫さんは……阿母さまの命令ですから、仕方が無しに爲さる樣なもの、御自分は飽くまでも無妻主義なんですから……」

「さう……では薫さんは無妻主義で、どうでも約束をなさるのは可厭だけども親孝行の方だから、阿母樣の手前仕方が無しに、今夜御盃丈はなさらうと云ふのですネ。けれどもまた、貴女の方から云つて見ると、何うしても氣の進まない方と、無理に御盃をなさるのが

心苦しいと仰有るんですテ。さう。それで解りました。」
と、點頭いたが、やがて自分も釣り込まれた樣に、伏目に成つて膝を見つめた。
此所で双方暫く無言
稍あつて操は、我と我身を勵ます樣に、咳拂一ツして、
「それにねエ直子さん！　實は昨夜薫さんが、私に仰有つた事があるんです。」
「えッ、薫さんが？　何て？」
「あの……貴女が母の世話をして下さるのは實に私は難有い、深く感謝する所です。ですが……私は何うしても、主義を變へて妻を迎へる事は出來んから……よし不得止盃はしても……どうかそれはあの母に、安心させるまでの方便として、直ぐと水に流がして下ださい。と、眞顔に成つて御頼みに成るんです。」
「その時貴女何と仰有つて？」
「私はほんとに、何と云つてい丶か解りませんでしたけども、默つて居る譯にもいきませんから、思ひ切つてさう云つたんです。」
「なんて？」
「ほんとに私の樣な者が來て、却つて貴君の御心配を增して、申譯がありませんて……さうしたら薫さんてば……」
「何と仰有つたの？」
「…………」
「ねエ、何と仰有いました？」
と、直子はます／＼熱心に尋ねる。何時の間にか操は坐に堪えぬほど眞赤に成つて、顔は殆んど襟に埋まつて居たが、無理に押し出す樣な聲で
「薫さんては、……仰有るのよ。……あの……私が貴女と結婚する事を、この通り謝絶するのは、畢竟貴女を厭ふ故では無く、却つて貴女を愛する故ですツて、……さうして猶私の手まで取つて、操さん！　私は貴女を……愛して居ます。愛して居ればこそ……愛する貴女を、生涯埋木にするに忍びないのです。何卒惡く思

つて下さるなつて……』と、云ふ中にその袂は、忽ちその眼を掩うて、頭にさした白のリボンは、さながら蝶の如く震ひ初めた、操はとう／＼泣き出したのである。

少からず感に打たれた直子は急いでハンケチを取り出して、まづ徐に鼻をかんだ、

『で、操さん！それから何と仰有つて？』

『私もその時は……只涙ばかり出てほんとに何



とも云へなく成つてしまつたんです。……その中に用が出來たもんですから、話はそれッきりに成つたんですけども……叔母さんはそんな事は御存じないもんですから……獨りで喜んで居らつしやるし、…薫さんはあの通り、覺悟を極めて居らつしやるし、……ほんとに私は、……直子さん、察して下さい！』と、また涙に咽んだ。

直子は慰める言葉に悶へたが

『然し操さん！

それぢやア薫さんは、戰死の御覺悟なんですの、だから貴女を愛して居ても、愛する人を自分の爲めに、一生日陰者にするのは忍びないから、それで無妻主義なのネ。」

『全くさうなの……けれども、それを聞て見ると、私は猶更…』

『猶更薫さんが慕はしいのでせう。……そりやアさう無けりやア成らないワ。けれどもねエ操さん！　よしんば方便だけにもせよ、さうして公然約束の出來る身



になれば、こんな嬉しい事は無いぢやありませんか、それをまた貴女は、なんで、そんなにお幽鬱ぎなさるの？」

『でも考へて御覧なさい！　こんな苦しい事は無いッ。」

『何故でせう？」

と、直子は不審の眼を見張つた。

『何故ッて直子さん！　私もまた、薫さんを愛すればこそ、今夜の盃は、どうも氣が進まないのです。」

『まア、何うしてでせう？』
『薫さんはあの通り、立派に覺悟をして居らつしやるんでせう。それに若し今夜、方便にもせよお盃をして公然約束をしてしまへば、……その爲めに折角の覺悟が鈍つて、十分の御働きが出來ない樣では……』
と、云ひかけるのを遮つて、
『アラ操さん！そりやア何を仰有るんです？全体貴女の梅田さんへ行つて、叔母さんの御世話を爲さらうと云ふのは、つまりあの薫さんに、御家の事の心配の無い樣、さうして十分お働きの出來る樣と、その爲めぢやア無かッたんですか。……それにまた今と成つて、貴女のある爲めに薫さんの、御覺悟が鈍るとは、何だか矛盾して居るのねエ。』
と、云ふのは別に嘲る氣では無いが、此場合これも方便。操の決心を促がさう爲めで。
すると操は、暫時ぢつと考へて居たが、何思つたか坐を立つと、長い息一ッ洩らしながら、
『ア丶、直子さん！ 私ほんとに惡かつた事！ ほんとに何と云ふ馬鹿でしたらう。……さうです、全くさうでした。』
と、俄かに悟を開いた樣に、聲音まで活々として、そのま丶直子の手を取つた。
あまりに急に樣子の變化に、直子は半ば呆れながら、自分も共に立ち上つたが、
『そんなら、いよ／＼今夜はお芽出度いのね。』
『はア……私も覺悟を極めました。』
『それはい丶事！ では……何をお祝に上げませう』
『お祝？まだ……早い事よ……』
『何ですッて？』
操はまだ涙の痕のある瞼に、少しく笑を浮べながら、
『貴女の御祝を下ださる時分……私は何樣な風俗に成つてるでせう？』
『古風の高島田？』
『……』
『そんならもう圓髷？』
『い丶え、乾度束髪にも結へないでせうよ。』
『アラ何故？』
いぶかしげに顔を見る友を、操は意味あり氣に見返へしたが、不圖氣が付くと、何時の間にやら後に人影の見えるに、急に氣を更へたと云ふ体で、
『直子さん、少し歩行うぢやありませんか。』
と、手を引いて促がすのを、直子は素直に引かれなが

ら、二步三步進む時、是も氣を紛らす心の、小聲ながらも態と冗談に、『梅田さんの奧さん！』と、呼ぶと、

『ハイ！』

と意外にも立派に答へて、そして顏を見合はせた時、言合はした樣に吹出したが、其癖直ぐに他を顧みてはつと太息を洩らす操に、直子は其と無く眼を擦つた。

* * * * * *

第〇軍の司令部が、後驅ながら〇〇〇を發したのは、〇月〇〇日であつた。

かう〇〇づくめでは、誰も要領を得兼ねるであらうが、砲兵中尉梅田薰がその一部隊の副官として、共に戰地へ向つた事はもはや、包み難い事實と成つた。

駒込の有隣女學校には、平松改め梅田操が相變らず大久保から通つて居る。

意地の惡い友逹は、時々操を捕へて、

『梅田さんはまた束髮で居らつしるの？』

と、さりとては皮肉な揶揄ひ樣、

但『未亡人の卵』と云ふ、誰やらが付た譯名丈は、頻に校內で歌はれるに似ず面と向つて云ふ勇氣は無い。

紹介

▲改訂就學案內　博文館發行

笈を負ふて都門に遊學せんとする學生諸君に對し多岐なる學界の手引たらんとする案內書の類少からざるも、學界の形勢學校の規則方針等は時に變化あるを以て往々にして舊時の規則狀況等を錄して誤謬を傳ふるものあり、此書は最近學界の趨勢に見て遊學者出京前後の注意學校の選擇入學成効の訣卒業後處世上の方針等を懇切に指導し、又遍く官私立諸學校を歷訪し各校の狀況規則學課等より入學試驗問題に至る迄、悉く最近のものを收錄したれば現下の遊學者に取りて無上の案內書たり。(定價二十五錢)

▲女夫波　田口掬汀著

筆に艷麗凄婉の氣なしと雖も、想は高尙純潔にして好個の家庭小說なり。明治の上流社會を活寫して運命と生活との關係を描ける處ろ一種出色の才にして方今稀れに見るの好小說といふべし。家庭讀むべし、良妻賢母讀むべし、父母兄妹の圍讀むべし人生平和の慰藉を得んと欲するもの大に讀むべし。金色社發行(定價六十錢)

▲決死隊　博文館發行

少年日露戰史の第二篇なり。壯烈鬼神を泣かしめ、忠勇千古に鑑たる戰決死隊の偉功を主として、之に日韓同盟の快事と定州占領の壯舉とを前後し、例の平易簡明に叙述したるもの是れ少年日露戰史の第二編とす。若夫れ附錄軍國讀本に至りては、軍國少年必讀の美談、逸話、選び得て適切、記し得て壯快(定價十二錢)

次號記事豫告

九月五日發行

▲暑中雜感　棚橋女史
▲戰爭と和歌　大隈伯爵
▲家風改良　村上辰五郎
▲新世帶の經營　寺田勇吉
▲野津大將家庭　中村鈴子
▲兒玉大將家庭　同上
▲賢母の手かゞみ　松村仙藏
▲源氏物語俗解　水原翠香
▲石炭の話　淺野松琴
▲西太后（史傳）　西村天骨
▲シャロットコルデー孃　菊地雪子
▲女先生　須藤求馬
▲顏の話（生理）　糸左近
▲果實調理法　富益農學士
▲戰場物語　記者
▲小說　幸田露伴

每月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢

内（定刊數……十二冊 增刊四回……三、六、九、十一月價格同一）

郵稅 一冊 二錢

廣告料

	二十四字詰一行	中頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引三十三圓
一等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引二十七圓
二等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引二十二圓
三等	二十九錢	九圓二十八錢	割引十八圓

▲等級の位置ハ切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅七年八月五日發行　第四卷第拾號

編輯發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

（後付の一）

（後付の二）

全書新刊

第百三十編

法學士 山内正瞭君著

世界殖民史

（全壹冊洋裝） 製本既成

本書は遠く上古に遡りて、フイニシヤ、カルセージ等の諸國より降ては、葡萄牙、西班牙、和蘭、佛蘭西、英吉利等の諸國に至る迄、各國の殖民に關する歷史を說き、盛衰興亡の跡を吊ひ、幷ひに經濟史及政治史の兩側面より觀察して政策の得失を評論し、以て一卷の史乘たると共に又將來に於ける殖民事業發展の指鍼たるを期するもの我向上國民は今後の國策上是非とも熟讀研鑽すべき要書なり。

上製 五十五錢
郵稅 十錢
並製 四十錢
郵稅 八錢

第百四十編

農學博士 大森順造君
農學士 山田玄太郎君 合著（近刊）

植物病理學

農稼、樹藝の業に從ひ、圓滿の收穫を得んとせば、須らく其植物の病因を究め之れが豫防除害の方法を講せざるべからず、近來肥培耕耘の法を說けるものあれども未だ植物病理を記述せしの書あるを見ず、著者之を遺憾とし學生教授の餘暇を以て本書を公にせり本書上篇には植物生理の違常より來れる病害に就きて詳說し下篇には主として寄生菌の害に因れる疾病を敘述し可成的本邦產植物上に就き各病害には各豫防除害の方法を併記せり盖し農稼樹藝の業に從事するもの本書を得て大に稗益する所あるべし

上製 五十五錢
郵稅 十錢
並製 四十錢
郵稅 八錢

本町三丁目 博文館

（後付の三）

井上通泰先生監修　中川恭次郎君編輯

家庭衛生叢書

全部十二冊　菊判和裝

▲毎編講話大家肖像入……紙數一册約八十頁

家庭に衛生上の智識の必要であるといふ事は今更いふ迄もないが、此衛生上の智識は實に一日でも應用せられぬといふ事はない、住居を撰ぶにしても、衣服を製るにしても、食物を調理するにしても、之に衛生上の智識を應用したなれば、家庭がどの位幸福になるか、殆んど測り知ることが出來ないと思ふ。

其他小供を育てるにも、傳染病の流行時にも、病人の出來た時にも、婦人の姙娠時にも凡て吾々の家庭に衛生上の智識の必要であるといふを證據立てる機會は日常甚だ多いのである。

家庭衛生叢書は各專門の大家が特に衛生上注意すべき事項に就て、講話せられたる所を成るべく平易に寫し出して一般人が衛生上の智識を開發するといふを目的として發行せられたのであつて、讀者は必ず得る所が多いと思ふ、尙此叢書に講話を承諾せられたる大家は左の諸先生である。

醫學博士　吳秀三先生　　醫學博士　中濱東一郎先生
醫學博士　入澤達吉先生　醫學博士　北里柴三郎先生

醫學博士 岡田和一郎先生
醫學博士 長與稱吉先生
醫學博士 木下正中先生
醫學博士 森林太郎先生
醫學博士 金杉英五郎先生
醫學博士 緒方正規先生
醫學博士 土肥慶藏先生

第壹編

八月中旬出版

口繪 北里博士、長與博士（肖像）

講話 傳染病の話　北里柴三郎先生
胃の攝生法　長與稱吉先生
眼科衛生談（第一）　井上通泰先生

雜錄 患者を生したる時の注意（第一數次）

醫學博士 弘田長先生
醫學博士 近藤次繁先生
醫學博士 佐々木政吉先生
醫學博士 桐谷鏡治先生
ドクトル 富士川游先生
醫學士 賀古鶴所先生
醫學士 宮本叔先生

第貳編

九月中旬出版

口繪 金杉博士、土肥博士（肖像）

講話 血族結婚と聾啞との關係　金杉英五郎先生
淋病と家庭　土肥慶藏先生
眼科衛生談（第二）　井上通泰先生

雜錄 患者を生したる時の注意（第二數次）

發兌元
東京市日本橋區本町三丁目
博文館

（後付の六）

新刊廣告

工學士 石井棣太郎君著
橋梁學
（近刊）

第一章●總論
第二章●荷重
第三章●應用
第四章●桁構一斑說明
第五章●プレートガーダー
第六章●三角桁構
第七章●梯形桁構

第八章●ハウ桁構
第九章●プラット桁構
第十章●カンバー及伸縮裝置
第十一章●ワーレン、ガーダー
第十二章●風力防禦水平桁構
第十三章●桁構の適當なる高さ
其他

人世至る所河川あらざるなし、河川あれば橋梁あり、橋梁の用豈大ならずや、而して其橋梁たる種類頗る多く從て之を研究するに範圍廣大にして小册の能く記盡せらる所にあらず然るに著者の該博なる學力と實地の經驗とにより極めて平易に記述せり橋梁學は由來六ヶ數ものなれども本書に由て容易に其要を知了せらる、而して本書は鐵道橋と人道橋の二大別をなし尚鐵道橋の内にも木、鐵兩橋を詳述せり、殊に卷中精密の圖ありて讀者の便益を得るところ鮮少ならざるなり

全壹册
洋裝總クロース製
正價金
郵稅金

工學士 野津正之助君著
計算尺原理及使用法
（近刊）

人智の發達に伴ひ、生存競爭愈々劇甚となり、短少の時間を以て多大の事業をなさんとするの傾向を來し、生活の百方面に向て續々勞力節減、機械の發明表はるゝに至れり、Slide Rule 即ち計算尺も其一にして尺度の組合せにより種々の計算を容易に遂行し得べし計算尺輓近本邦に輸入せられし以來、其構造の簡短にして實用の諸計算を爲すに當りて頗る迅速に且つ其使用に熟達するに隨て益々其妙味を感せしむるを以て漸く世に知らるゝに至れり然れども未だ廣く用ゐらるゝに至らず是れ大に遺憾とする所なり、著者茲に見るあり本書に於て詳細に且つ平易に其基礎原理を述ぶることに勉めたり、且つ學術上の諸例題として計算尺の應用を示し殊に多くの例を工學上の計算に取りたるを以て工業上の諸計算を爲すに當り最も便益を得らるゝなり

全壹册
洋裝總クロース製
正價金
郵稅金

本町三丁目 博文館

（後付の七）

水哉
坪谷善四郎君著

日本漫遊案内

上卷

東半部 府縣廳所在市街銅版廿二圖、風景寫眞八十二圖、全國東半部大地圖

裝幀總クロース美本　正價壹圓　郵稅十二錢

- **東京市内** ・東京の沿革、東京の地理、東京市内外の交通機關、各名所
- **房總半島** 大綱及其附近、市川及船橋附近、千葉及其附近、佐倉及其附近、印旛沼畔手賀沼附近、成田及其附近、佐原及其附近、銚子及其附近、大原及其附近、房總内海岸、房總外海岸
- **常陸地方** 相馬附近、土浦及霞浦、鹿島附近、筑波山及其附近、九戸附近
- **埼玉地方** 利根川上流附近、久喜より千住間、東京大宮河越間、熊谷近傍、秩父近傍
- **兩毛地方** 高崎及前橋附近、妙義及碓氷、吾妻郡の諸温泉、上野の東部、宇都宮附近、鹽原と那須、栃木足利附近、日光附近、
- **信越と佐渡** 中仙道と信越街道の分岐點、小諸及長野間、長野近傍、高田近傍、直江津、柏崎近傍、新潟長岡間、三國峠清水峠、會津街道、羽前街道、佐渡
- **奥羽地方** 白河附近、郡山二本松附近、福島近傍、東南の諸温泉、仙臺附近、松島、玉置郡の諸温泉、一ノ關、平泉、黒澤尻、盛岡、青森、勿來關、會津近傍、兩羽街道
- **中央鐵道附近** 甲州街道、松本街道、木曾街道、中央西濃近傍、東濃中仙道、飛驒街道
- **東海道附近** 品川、目黒、大森、川崎、神奈川、横濱、杉田、鎌倉、江の島、三浦半島、大磯、箱根、熱海、修善寺温泉、下田、伊豆の西海岸、富士山登臨、沼津附近、興津、靜岡、濱松、豐橋、岡崎、知多半島、名古屋、岐阜、大垣、琵琶湖
- **北陸道鐵道附近** 長濱、敦賀、若狹、福井、大聖寺、小松、白山登臨、金澤、能登半島、高岡、富山市、立山、其他
- **三重地方** 舊東海道、上野近傍、津市、兩宮參拜、志摩沿岸

報知新聞評 [illegible]

二六新聞評 [illegible]

（後付の八）

博文館發

紅葉全集

十千萬堂――出版部藏版

巻の一
(既刊)

●二人比丘尼色懺悔　●巴波川　●[illegible]の說　●關東五郎　●旅枕　●二人むく助　●風雅娘

●南無阿彌陀佛　●此ぬし　●新色懺悔　●わかれ蚊帳　●二人女房　●新花桃扇　●拈華微笑　●夏痩　●文ながし　●七十二文命の安賣

巻の二
(既刊)

伽羅枕　おぼろ舟
むき玉子　紙きぬた
夏小袖　戀の病

巻の三
(既刊)

三人妻
俠黑兒　男ごゝろ
心の闇　むらさき

巻の四
(既刊)

隣の女　不言不語
鷹料理　三個條
冷熱　浮木丸
青葡萄　八重襷

新刊 巻の五

多情多恨
安知歇貌林
千箱の玉章
寒牡丹

以上四編

續刊 巻の六

煙霞療養
金色夜叉

以上二編

全部六巻 菊判總クロース表紙 上製金刷毎巻八百余頁

正價 一冊壹圓八拾錢 全部拾圓八拾錢 小包一冊拾五錢宛

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

女學世界
第四卷第拾號
（明治卅參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可）
（明治卅七年八月五日發行 毎月一回五日發行）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㉙
明治37年7月（第4巻第9号）、8月（第4巻第10号）

2007年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　有限会社オンデマンドジャパン
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3145-7　C3321